クレヨンしんちゃん　絆－NEXUS－

青い果実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クレヨンしんちゃん　絆－ＮＥＸＵＳ－

【Ｎコード】
Ｎ８６３０Ｐ

【作者名】
青い果実

【あらすじ】
日常の裏側に潜む、得体の知れない脅威…。今、１２年後の未来を舞台に、
「光」を得たかつての嵐を呼ぶ園児の「絆」の物語が幕を開ける…。

この物語は１９９２年、ＴＶアニメ放送開始の年に
しんのすけが誕生し、「クレヨンしんちゃん」のキャラが
そこから1年ごとに歳を取っていったとして、
アニメから１２年後を舞台とした、「ウルトラマンネクサス」のス

トーリー展開を踏襲しつつ、
オリジナル要素あり、本来「ネクサス」で描かれる予定だった部分の
独自解釈による補完もありで、
クレしん映画のノリで2つの物語をクロスオーバーさせた作品です。

プロローグ（前書き）

この作品は既に作者があるクレヨンしんちゃんのファンサイトに投稿しているものを、
一部変更して投稿しています。
物語は「ネクサス」のそれを踏襲しているため、シリアスなストーリーであり、
その物語の進行、及びテーマ上、どうしても必要なため、
あるクレしんキャラの死が描かれています。
また、「ネクサス」とは違い、主人公が最初からウルトラマンに変身します。

プロローグ

ある街中の公園。
薄い雲に覆われた空の下、一人の少年が道行く人々を眺めながら物思いにふけっていた。
『オラ達は生きている。平和な日々を、ごく当たり前のものとして。
もし、その日常の裏に得体の知れない不気味な何かがあったとしても、
多くの人は自分とは関係ないと思うんじゃないかな？
でも、目の前にある現実が全て嘘だったとしたら…。
今まで自分が過ごしてきた平和な記憶が全て嘘だったとしたら…。』
彼の名は野原しんのすけ。今から語られる物語の語り部である。

登場人物紹介（前書き）

一応、「クレしん」と「ネクサス」。そのどちらか片方を知らない人、
あるいは両方とも知らない人のためにこの小説の登場人物等を紹介しておきます。
一部、先の展開のネタバレありなので、そういうのが嫌な人は飛ばしてね。

登場人物紹介

◎野原家

●野原しんのすけ
主人公。埼玉県春日部市在住。１９９２年、５月５日生まれ。１７歳。
かつて、５歳の頃に家族と共に様々な事件に関わり、
その時の活躍が多くの人々に影響を与えたこともある。
正義感が強く、お調子者、ナンパ好きなのは昔から変わっておらず、
謎の遺跡の夢を見たことにより、“２番目の適能者（デュナミスト）”として光を得た。
ビーストとの戦いの中で時に悩み、
傷付きながらもその中で様々な人達と出会い、成長していく。

●野原みさえ
しんのすけの母親。熊本県アソ市出身。パーマヘア。
かつてよりも少し小太り気味になって気にしている。
相変わらず短気・ケチ・見栄っ張りの三拍子が揃った粗雑で気が強い性格。
しんのすけやひまわりという2人の子供に深い愛情を注いでおり、
我が子を馬鹿にする者であれば、どんな相手であろうとも毅然とした態度で接する。
（戦闘能力は何人もの男を素手で打倒する程で怒った時はそれ以上。）

しんのすけがウルトラマンであること、
ビーストやＴＬＴのことについては他の一般の人々と同じく知らない。

●野原ひろし
しんのすけの父親。秋田県大仙市出身。
かつてと同じく結構損な役回りが多く、足の臭さは以前にも増して強烈。
（しんのすけの言葉によると「殺人兵器」とのこと。）
みさえと同じく、我が子のことを誰よりも愛しており、「オトナ帝国事件」の時は、
家族と共に未来を生きる決意を敵の目の前で語って見せた。

●野原ひまわり
しんのすけの妹。１１歳。かつてのしんのすけのように、
ふたば幼稚園で「嵐を呼ぶ園児」としての日々を過ごした後、
しんのすけも通ったアクション小学校に入学。
様々なトラブルを起こしながらも、５年生となる。
かつてと同じく若くてイケメンの男性に弱く、
最近では「アクション仮面Ｗ」に出ていた桐野連と菅原将浩に夢中。

●シロ
野原家の飼い犬。かつてしんのすけに教え込まれた「わたあめ」などの技は健在。

◎ＴＬＴ（ティルト）（ナイトレイダー）

●和倉英輔
ナイトレイダーＡユニット隊長。３４歳。かつては航空自衛隊に所属していた。
強い責任感と冷静な判断力を併せ持っており、
人命救助を第一に考えて行動する。

●西条凪
ナイトレイダーＡユニット副隊長。２５歳。戦士としては非常に有能であるが、
ビーストに対して異常とも言える憎しみを抱いており、
人命救助よりもビースト殲滅を優先し、
冷静さを失って周りが見えなくなることが多いなど、
副隊長としてまだまだ問題のある部分が多い。
しんのすけをビーストだと認識し、彼と敵対するが…。

●平木詩織
ナイトレイダーＡユニット隊員。２３歳。
元は一般の警察官であったため、射撃に優れており、
チェスターでの戦闘時もバニッシャーでの攻撃を担当することが多い。
いつも明るいチームのムードメーカー的存在で、
ネイルアートにかなりのこだわりを持っている。石堀隊員とは結構気が合う。

●石堀光彦
ナイトレイダーＡユニット隊員。２９歳。
アナライズ担当であり、ビーストの弱点や特性などを分析する。
パソコンが趣味で自身のブログを開設しており、
４月１日には必ず何かしらのエイプリルフールネタを載せるなど、
お茶目な部分もある。

◎ＴＬＴ（ティルト）（その他）

●イラストレーター
ＴＬＴ－Ｊ作戦参謀。しんのすけと同じ１７歳の少年。

基地の最深部「ＳＥＣＴＩＯＮ－０」の近くにある、
ＣＩＣと呼ばれる場所からナイトレイダーに指示を送る。
ビースト殲滅より人命救助を優先した作戦を立てることが多く、
本人も人命救助を第一に考えているようだが、
一度、ビースト殲滅のために犠牲を無視した指示を出すなど、矛盾した部分がある。
ウルトラマンのこととその正体について何かを知っているようだが…。

●松永要一郎
ＴＬＴ－Ｊの管理官。元々は内閣情報調査室の次長補佐だった。
一見穏やかそうな人物であるが、何か裏のありそうな笑みを浮かべていることが多い。
敵か味方か分からないウルトラマンの存在を慎重に見極めようとしている。

この他にもＴＬＴには“Ｍ・Ｐ”と呼ばれるセクションが存在するようだが…。

●ウルトラマンネクサス●
胸にＹ字状の深紅のエナジーコアが輝く光の巨人。
登場人物達からは“銀色の巨人”や“ウルトラマン”などと呼称される。
最初はアンファンスと呼ばれる銀色の姿で活動し、
ジュネッスと呼ばれる姿に変身することで
戦闘用亜空間・メタフィールドを3分間だけ展開することができるようになり、
オーバーレイ・シュトロームなどの数多くの必殺技を持っている。

●スペースビースト●

宇宙から地球に降り注ぐXニュートリノ（カイ）が、
地球の生物に影響を及ぼすことによって誕生する宇宙生物。
人間を捕食対象としており、その出現ポイントは何故か日本の関東周辺、
しかも、人口の多い都会ではなく、森林地帯や山中など人気の少ない場所が多い。
物語開始の5年前からその存在が確認され始めたと言われている。

登場人物紹介（後書き）

一応、登場人物紹介に見えるようにしてみました。
一部、裏設定的なものも載ってます。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０１　夜襲　－ナイトレイド－

地球とは違う、人間が見慣れた世界とは違うどこか。
辺り一面ジャングルと光の空に覆われた世界。
そこには巨大な遺跡があった。その中心に聳え立つ巨大な塔。
その深奥には、一人の少年が立っていた。
目の前には不思議な光の鼓動を発する石柩が安置されており、
少年は一人の少女の頷きを受けて、目の前の石柩に手を触れ、
それと同時に大量の光が少年に流れ込み、
少年は光となって石柩の中へと入っていった。

「ちょっと、しんのすけ！　起きなさい！　しんのすけ！！」
「うーん…。」
１年前のある日。
朝。月日が流れ、１７歳となった野原しんのすけは
自分の部屋の中で眠そうに目を覚ました。
「もう少し寝かせてよ…。わがままだなぁ…。」
「わがままなのはあんたよ！
時計見てみなさい！　今、何時だと思ってるの！！」
自分を起こした母、野原みさえに促されてあくびをしながら、
目覚まし時計を見ると、既に７時をまわっていた。
「あらー。」
「あらー、じゃないわよ！　ほら、早く準備して！」
みさえはしんのすけに学校の制服を投げ渡すと慌てて１階に降り、
しんのすけは渋々着替え始める。
その際に鞄と枕元に置いてあるペンライト程の大きさの謎の道具も
手に取った。
１階でも父、野原ひろしが慌てて会社の支度をしていた。
「ヤベぇ、このままじゃ遅刻だぜ！　今日、会社で大事な会議があ

るんだ！」
「ほら、ひまちゃん！　起きて！　学校に遅れるわよ！」
みさえによって、最後にしんのすけの妹の野原ひまわりも起き上がる。
一方、支度を終えたしんのすけはあくびをしながら2階から降りて、その目の前を朝食を食べ終えたひろしが通り過ぎ、
その直後、急いでやって来たみさえにおにぎりを手渡され、
しんのすけは玄関から出て駅に向かっていった。
それからしばらく経って、ひまわりも自分の通う小学校へと向かっていった。

皆を見送った後、みさえは家事を済ませて買い物に行こうとしていた。
「さて…、今日の晩ご飯は何がいいかしら…。
…ま、いっか！　後で考えよっと！」
みさえは今日の献立をロクに考えずに買い物に出かけていった。

辺りを夕暮れの光が覆った頃、しんのすけが帰ってきた。
「おかえりー。」
「それを言うならただいまでしょ。」
昔と変わらないやり取りをした後、
しんのすけは2階にある自分の部屋へと向かっていった。
「まったく…、なんで私が…。」
昼頃に小学校から帰ってきていたひまわりは愚痴を言いながらテーブルを拭いていた。
そこにみさえがやってきて、出来た料理をテーブルに置いた。
「なんだ、また残り物か…。手を抜いたなみさえ。」
「ち、違うわよ。偶然残ってたから使おうと思ったのよ！
あと、あんたパパの真似しないの！」
みさえが持ってきた料理を見てひまわりが呟き、それを聞いたみさ

えが言い訳を言う。
それと同時にしんのすけが2階から降りてくる。
「なんだ、また残り物か…。」
と先程のひまわりと同じことを言うしんのすけ。
みさえはまたも言い訳するが、しんのすけとひまわりはそれを冷やかな目で見ていた。
その後、ひろしが帰ってきて4人揃って夕食を食べ終えると、
ひろしとみさえ、ひまわりがTVの漫才を見て笑い、
飼い犬のシロはエサを食べ終えて満腹になって眠り、
しんのすけは部屋に戻って携帯電話でメールを打ち、
そして、のんびりと平和に一日が終わって、家族全員が床に就いた。
彼らは以前と全く変わることのない平和な日常を送っていた。

しかし、その日常の裏では彼らの知らない恐るべき現実が繰り広げられていた。

深夜、埼玉県境にあるガソリンスタンド。
夜中なので客も少なく、二人の店員が雑誌を読んだりTVを見たりと、ダラダラと過ごしていた。
そこに赤いトラックが入ってきてクラクションを鳴らす。
二人の店員は黙って顔を見合わせるとジャンケンを始め、
負けた方はため息を吐きながらダルそうに客の応対へと出て行った。
その間、トラックの運転手はクラクションを鳴らし続けてイラつきを訴えていた。
「そんなに鳴らさなくても分かってるって…。」
「何か言ったか?」
「いらっしゃいませ!」
給油をしている間に店員がトラックの窓を拭いていると、

トラックの運転手が怒り顔で文句を言いにきた。
「兄ちゃんふざけてるのか？」
「？」
「もうとっくに満タンになってるだろーが！」
店員がメーターを見ると既にメーターが満タンを示す位置を通り越していた。
「おっかしいな…。」
ガソリンが漏れているかどうか確認すると、
トラックからガソリンではない得体の知れない何かが垂れていた。
次の瞬間。
「うぁぁぁ！？」
「「！？」」
運転手はタバコを吸っていたが、店員の悲鳴を聞いてトラックの近くにきた。
地面を見ると、店員がいた場所には毒々しい色をした液体が広がっていた。
店員の悲鳴を聞き、運転手より少し遅れて店の中からもう一人の店員が出てくると、
そこでは恐ろしい光景が繰り広げられていた。
得体の知れない液体が、突如５ｍほどのナメクジともウミウシとも付かない不定形の化け物となって、触手で運転手を捕らえ、その巨大な口で丸呑みしようとしていた。
「あっ、あっ、あっ…。」
あまりの光景に店員は恐怖で頭が真っ白になってしまい、
腰が抜けてその場に座り込んでしまう。
一方、化け物は運転手を呑み込み、
店員の方に不気味な声を上げながらゆっくりと近づいていく。
その時。
「！？」
突如、化け物と店員の間の地面が破壊された。

その衝撃で店員はその場に倒れ込んでしまう。
謎の地面破壊は徐々に化け物の方へと近づいていき、
その破壊から逃げるように化け物はガソリンスタンドから去り、
破壊も後を追っていった。やがて辺りに夜の静寂が戻り、
店員は興奮したまま化け物と破壊が去って行った方向を見つめていたが、
そこに黒のワゴン車がやってきて、
中から一人の女性とそれに従う二人の男性が降りてきた。
店員は客だと思いつつも立ち上がることが出来なかった。

破壊に追われた化け物は先にあるトンネルへと逃げ込んだ。
「予定通りターゲットをキルポイントに誘導。」
「エリア内に有人反応なし。第二種警戒解除。」
「了解。これより最終行動に入る。」
突如、何も見えなかった夜空から謎の戦闘機二機が姿を現した。
着陸した二機の戦闘機から青と黒の戦闘服に
身を包んだ４人の人間が大地に降り立ち、
巨大な武器を手に、迷うことなくトンネルの中に入っていった。
４人は化け物を発見し武器を構える。
「掃討せよ!」
４人の内の一人、指揮官の言葉と共に巨大武器が化け物に向かって
一斉に放たれ、
攻撃を受けた化け物は醜く膨れ上がって砕け散り、辺りに化け物の
破片が飛び散った。
「ターゲット消滅。」
指揮官の言葉を聞き、バイザーを上げる４人。
指揮官は腕につけた通信装置で本部に報告を入れる。
「状況終了。」
それを受け、本部から少年の声が答える。
「確認しました、３９秒後に処理班が到着します。」

「イラストレーター、ビーストによる人的被害は？」
「…残念ですが、既に2名犠牲となっています。
生存者についてはすべてM・Pが処理しますのでご心配なく。」
「…了解。」
イラストレーターと呼ばれる本部の少年の言葉を聞くと、
指揮官はヘルメットを外して一息つく。
そこに数台の車がやって来て、
中から白い防護服に身を包んだ人々と、背広を着た初老の男が降りてきた。
「お疲れ様です。和倉隊長。さすがはナイトレイダー、お見事です。」
「いえ。それよりもどうして現場へ？　松永管理官。」
ナイトレイダーと呼ばれる4人の内の一人、指揮官・和倉英輔隊長の問いに
初老の男、松永要一郎管理官は人当たりの良い、
しかし、何かを含んだ笑みを浮かべて答えた。
「たまには私も現場を知っておかなければならないと思いましてね。」
白い防疫服に身を包んだ人々、ホワイトスイーパーが
化け物のサンプルを回収している傍ら、4人の内の一人、石堀光彦隊員が
通信・分析・索敵が可能な万能ツール、パルスブレイガーで化け物の残骸を調べていた。
「新種のビーストか。体内の95%が水分でエタノールが大好物らしい。」
「エタノールってお酒の主成分だよね？　私、酔っ払いって大嫌い！」
そこに4人のうちの一人、平木詩織隊員が口を挟む。
平木隊員の言葉にフッと笑って石堀隊員は説明を続ける。
「エタノールはガソリンや軽油等にも含まれている。

だからガソリンスタンドを襲い…。」
「人間を喰った。」
淡々としたどこか冷たい声、その声の主の方に目を向ける二人。
そこには４人のうちの一人、西条凪副隊長が立っていた。
西条副隊長はパルスブレイガーを１８０度回転させた
アタックモードにして化け物の残骸に向ける。
石堀隊員と平木隊員が戸惑いながらも急いでその場から離れると、
パルスブレイガーから光弾が発射され、化け物の残骸は跡形も無く
砕け散った。
「化け物は化け物。私達人間の敵、どれも同じよ。」
無表情のまま、その場を去っていく西条副隊長。
それを黙って見送る石堀隊員と平木隊員。
「？」
ふと、西条副隊長の目の前、トンネルの入り口近くに人影があった。
しかし、目を凝らしてもう一度見ると既にそこには何も無かった。
「……。」

翌日、ＴＶのニュースでは
ガソリンスタンドの店員とトラックの運転手が行方不明になってい
ることが告げられていたが、
化け物とナイトレイダーに関しては何も報道されていなかった。
野原家は珍しく居間でそのニュースを見ながら朝食を食べていた。
「へぇ、店員と運転手が行方不明か…。最近こういう事件多いよな
～。」
「本当ね…。都会に近いところでは何も起こってないみたいだけど
ね。」
「へぇ…。」
みさえと話をしつつ、ひろしは何も考えずにニュースを見ながら朝
食を食べていた。
そして、ひろしとしんのすけは家を出て会社、学校へと向かい、

しばらくしてからひまわりも学校へ向かった。
みさえは3人を見送った後、家に入り、掃除、洗濯など日々の家事をこなし、
寝転んでＴＶを見たりといつもと変わらぬ日々を送り、
ひろしやしんのすけも学校、会社でいつもと変わらぬ日々を送っていた。

そして、夕方になり、みさえは夕食の準備を始めた。
ひまわりが帰ってきて、しばらくしてからしんのすけも帰ってきた。
一方、ひろしは仕事を終え、後輩の川口と一緒に
春日部山にある居酒屋に行くことにした。
川口に言わせれば料理がおいしいらしいのだ。

その頃、春日部山の峠道を一台のマイクロバスが走っていた。
社員旅行で中は既に宴会状態になっていて、一人の酔っ払いが運転手に絡む。
「どうだい？　運転手さんも一曲やるかい？」
「は、はぁ…。」
運転手は困ったように曖昧な返事を返すが、
その時、バスの前に５ｍ程の大きさの飛行する化け物が現れた。
その化け物はマイクロバスに向かって口からガソリンを吐きかけた。

「遅いわね…。また、飲んでるのねあの人…。」
野原家ではみさえがひろしの帰りを待っていた。
そのひろしは居酒屋で飲んだ後川口と別れ、
家路についていたが、何かに気づいて足を止めた。
見ると、道端に1台のマイクロバスが道路を塞ぐような不自然な形で停まっていた。
「…なんだ？」
不思議に思ってひろしはマイクロバスの中に入るが、バスの中には

人っ子一人いなかった。
ひろしが車内を見回すと宴の後のように散らかっており、
つい先程まで人間がいた事を感じさせるが、
どこを見回しても、その人間が見当たらなかった。
「!?」
その時、ひろしの足元にあったビールの空き缶から得体の知れない液体が滲み出て、
驚いたひろしは空き缶から離れるが、
謎の液体は空き缶を完全に飲み込んで大きく膨れ上がっていき、
ひろしはその光景をただ呆然と見つめた。

「エリア3、ポイント247にビースト振動波確認。
ナイトレイダーにスクランブル要請。
パルスパターンから昨日現れたコードネーム・ペドレオンと思われます。」
辺り一面をコンピューター画面に覆われた部屋、
CIC（Conbat Information Center）の中、
イラストレーターと呼ばれる本部の少年が状況を分析してナイトレイダーに指示を送る。
第二種警戒が発令され、スクランブルのサイレンが鳴り、
コマンドルームで待機していたナイトレイダーが一斉に動き出した。
装具ロッカーから各プロテクターを取り出して装着し、
ガンキャビネットから巨大武器ディバイトランチャーを手に取って、
4つのシューターを備えたブースに駆け込む。
ブースは左端から和倉隊長、西条副隊長、石堀隊員、平木隊員が入り、
隊員が全員入ったことを確認した和倉隊長が声を上げる。
「出動!」
その言葉と同時に4つのシューターが遥か上階へと射出されていっ

た。
ナイトレイダー出動を確認したイラストレーターは、
画面の一つに新たな反応を見つけた。
「エリア付近に別の振動波？　この反応は…。間違いない。アレが目覚めたのか？」

「うわぁあぁわぁー！！？」
その頃、ひろしは恐怖に慄きながら峠道を逃げるが、
化け物、ペドレオンが発する触手に捕らわれてしまった。
ガードレールを掴み必死に抵抗するものの、触手の力はどんどん強くなっていき、
逆にひろしの腕は痛みでどんどん力が失われていく。
自分の死を感じたひろしの脳裏に今までのことが走馬灯のように浮かぶ。
その時、脳裏にしんのすけやひまわり、みさえのことが思い浮かび、
ひろしは再び力強くガードレールを掴んだ。
「俺は…、俺はまだ死ぬわけには行かないんだぁぁ！！」
ひろしが心の底から叫んだその時、強く優しい光が遥か上空から迫ってきた。
「うわあっ…。」
辺りを衝撃が襲い、ひろしは思い切り吹き飛ばされた。
全身をアスファルトに打ちつけ、激しい痛みが襲う。
「ぐ…。」
痛みに顔を歪ませながらひろしはペドレオンがいた場所に目をやるが、
そこにペドレオンはおらず、代わりに銀と赤の壁があった。
「…？」
不思議に思ったひろしは立ち上がって壁を凝視した。
壁は遥か上空に向かって伸びており、
ひろしもそれを追ってゆっくりと視点を上げていくと、今までにな

い衝撃を受けた。
「……。」
ひろしが壁だと思ったもの、それは遥か巨大な５０ｍもの銀色の巨人の左腕で
地面にめり込んだ巨人の左拳はペドレオンを殴り潰していた。
あまりに常識はずれな巨人の大きさにひろしは驚きを通り越して思考停止に陥る。
満月を背景に静かにひろしを見下ろす巨人。
ひろしは呆然と巨人を見上げるが、ハッと我に返ると、家に向かって走り出し、
それと同時に巨人は光に包まれて消えた。
そして、しばらくしてから上空にナイトレイダーの二機の戦闘機、
クロムチェスターαとβが現れ、中から隊員４人が降りてきた。
「振動波レベル低下。」
「ターゲットは？」
「既に消失。」
石堀隊員の報告を聞いた和倉隊長は
目の前の地面にできた巨大なクレーターを見つめた。
「これは…一体？」
一方、ひろしは家に帰っており、得体の知れない化け物に襲われたことと、
謎の銀色の巨人に助けられたことをみさえに話した。
「はぁ！？　そんな夢みたいなことあるわけないじゃない。
こんな時間まで飲んでたことに対する下手な言い訳でしょ！」
そう言うと、みさえは帰りが遅かったため、ひろしに殴り掛かった。
それを見てひまわりがやれやれといった感じでため息をつく。
一方、２階にある自分の部屋で布団に転んでいるしんのすけは一息吐くと、
ズボンのポケットから朝、枕元にあった
ペンライト程の大きさの謎の道具を取り出して見つめた。

『あの遺跡の夢を見てから、今まであったオラの日常は呆気なく崩れ去って、
全く知らなかった現実を知った。でも、オラはこの一年が自分にとって
どんなものになるのかを、まだ何も知らなかったんだ…。』…野原しんのすけ

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０１　夜襲　－ナイトレイド－（後書き）

ナイトレイダーのメンバーは名前が原作と同じですが、
一部、性格、設定などが変わっているところがあります。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０２　異生獣　－スペースビースト－

今、この地球を覆っている化け物、スペースビーストの恐怖から、
人々を解放する特務機関として国家レベルを超えて設立された、
地球解放機構Ｔｅｒｒｅｓｔｒｉａｌ　Ｌｉｂｅｒａｔｉｏｎ　Ｔｒｕｓｔ、ＴＬＴ（ティルト）。
その日本支部第３基地、フォートレスフリーダムと呼ばれる
神奈川県内にあるダムに偽装した巨大基地の中、
対ビースト迎撃チーム・ナイトレイダーのコマンドルームでは
ナイトレイダーが昨日のバス事件のニュースを見ていた。
事件は運転手の操作ミスによる転落事故として報道されていた。
「被害者数１３名。今までで最悪の数字だな…。」
唇をかみ締め、ニュースを聞く和倉隊長。
西条副隊長が口を挟む。
「しかも、肝心のターゲットは既に消失…。
後には直径５ｍ程の巨大なクレーターが残されていただけだった…。」
その隣で石堀隊員が昨日の事件のデータを見返していた。
「ターゲットが消失し、現場に巨大なクレーターが残っていたことから
あそこにターゲット以外のビーストがいたことは間違いないだろうけどな。」
ネイルケアを行いながら、平木隊員も口を挟む。
「でも、それって変じゃない？
もし、現場にターゲット以外のビーストがいたとしても、
ビーストがビーストを喰うなんて考えられないし、
それに、ビーストがいくら大きいって言っても５ｍか１０ｍくらいなのに、
いきなりあんな大きなクレーターを残すほどのが出てくるっていう

のも…ちょっとね…。」
平木隊員の言葉を聞き、石堀隊員がパソコンを打つ手を止め、
和倉隊長は眉を動かし、西条副隊長も険しい表情となった。
「あれ…？　私…何かまずいこと言った？」
場の空気の変化を感じ取ったのか、平木隊員は少ししまったといった表情で尋ね、
それを見て石堀隊員は少し何かを考えて答えた。
「それは…、平木がここに配属されてからそんな大きさのを見ていないだけで、
今までにも…そう、５０ｍくらいの大きさの奴も
過去に一度だけ出現したことがあるんだ。」
「え？　昔にもいたの？　そんな大きいのが！」
「あぁ…。その時は…チェスターからの攻撃で何とか殲滅したんだけどな…。」
「そうだったんだ…。私が来る前にそんな大きいのが…。」
一人素直に驚く平木隊員を見て石堀隊員と和倉隊長は少し複雑な表情となる。
一方、西条副隊長はガンキャビネットにある
自分のディバイトランチャーをじっと見つめ続けていた。
それを何か思う顔で見る和倉隊長と石堀隊員。

一方、みさえは買い物に出かけたついでに近所の人達とおしゃべりをしていた。
「…あ、そういえば最近変な事故や事件って多くない？」
話の途中、みさえの隣にいる若い女性が思い出したように話す。
「そうそう、物騒よね。」
その女性の隣にいる年配の女性も口を開く。
「本当ね…。昨日もガソリンスタンドの店員とトラックの運転手が行方不明になったってニュースで言ってたわよ。」

話を聞いてみさえが口を開く。
「怖いわね…。あ、そういえばさ…。」
年配の女性が再び口を開いて、話題は切り替わった。

同じ頃、ひろしは会社の社員食堂で昨日の出来事に思いを馳せていた。
「一体、何だったんだ…。昨日のあれは…。
酔っ払って見た俺の夢か…？　いやそんなはずは…。」
「アッ！　先輩！　ソースかけすぎですよ！」
ひろしが川口の声にハッとすると、
自分が目の前の定食のトンカツにソースを必要以上にかけていることに気がついた。
「アッ！　ヤベぇ！　かけ過ぎた！」
「もう…、ボーっとしてるからですよ先輩。
ここのトンカツ二度揚げしていておいしいのに…。」
川口の呟きにひろしは少しムッとした感じで答える。
「少し考え事してたんだよ…。しょうがねぇだろ。」
「え？　考え事ですか？」
「あぁ。ま、お前に話してもどうせ信用してもらえないだろうけどな…。」
そう言うと、ひろしはソースをかけ過ぎたトンカツを置いて席を立った。
「ちょっと先輩！　どうするんですか、これ！」

しんのすけの通っている高校。桜の花びらが舞い散る中、
何人かの生徒が携帯電話のニュースを見ながら話していた。
「ねぇ、最近、行方不明事件って多くない？」
「うん、今日も４人のキャンパーが行方不明になったんだって。」
その会話を聞いてベンチに座っているしんのすけの顔が一瞬曇るが、
目の前に駆けてきた少女を見て、すぐにその顔は晴れた。

その17歳の少女、酢乙女あいは笑顔でしんのすけの顔を見ると、しんのすけの横に座った。
幼稚園の頃はしんのすけはあいをなんとも思っていなかった。
しかし、月日が経つに連れてあい自身が変わっていき、しんのすけも次第に彼女に惹かれるようになっていった。
かつてしんのすけが出会った、「つばき」という少女に惚れたように…。
あいは幼稚園の頃からしんのすけへの一途な想いは全く変わっておらず、
2人は楽しそうに話していた。
ふと、しんのすけはあいがいつも持っているスケッチブックに目が行った。
「部活であいが描いた絵、ちょっと見てもいい？」
「え？　…えぇ、いいわよ。」
あいからスケッチブックを受け取ったしんのすけがページを捲ると、そこには多くの人や動物の家族の絵があった。
「人や動物の家族…か。」
「えぇ、今度美術部の展覧会に出展する作品のテーマなの。家族の肖像。」
「ふーん…、家族の肖像…か。」
スケッチブックを返すと、今度はあいが制服のポケットの中からあるもの、
翼の生えた、千歳飴を持ったブタの粘土細工を取り出してしんのすけに手渡した。
「これ、ぶりぶりざえもんじゃん！　あいが作ったの？」
「えぇ。部室に余っていた粘土で作ったの。
しん様、昔そのキャラクター好きだったでしょ？」
「おぉ！　サンキュー！　あい。大切にするゾ！」
翼の生えたぶりぶりざえもんを受け取り、しんのすけは笑顔でお礼を言った。

「ビースト振動波。…しかも反応数値が大きい?」
深夜。フォートレスフリーダムではイラストレーターがビースト振動波を感知していた。
「第三種警戒発令。ナイトレイダースクランブル。ナイトレイダースクランブル。」
それと同時に第三種警戒が発令され、スクランブルのサイレンが鳴る。
プロテクターを装着し、ディバイトランチャーを手に、ブースに駆け込む隊員達。
左端から和倉隊長、西条副隊長、石堀隊員、平木隊員が入る。
隊員が全員入ったことを和倉隊長が確認し、
シューターがクロムチェスター搭乗口に射出されていく。
スペシャルマルチロールファイターである二機のクロムチェスターαには
西条副隊長が搭乗し、もう一機には石堀隊員と平木隊員が搭乗。
クロムチェスターβには和倉隊長が搭乗する。
満月の下、ダムに偽装された発進ゲートが開いて、3機のクロムチェスターが発進。
ゲートを出るとオプチカモフラージュシステムによってその姿は消された。
ナイトレイダー発進を確認しつつも別の画面に目を向けるイラストレーター。
すると画面に新しい反応が出る。
「近くに別の振動波…。やっぱり来たんだ…。」

夜のビール工場。
そこにしんのすけが現れ、それと同時にクロムチェスターが姿を現した。
「あれって…、もしかして地球防衛軍みたいな奴!?」

少し興奮気味に呟くしんのすけ。
一方、ナイトレイダーはクロムチェスターから降り、ターゲットの位置へ向かう。
その時、建物の影から２０ｍはあろうかというペドレオンが現れた。
「大きい…。」
今までよりも巨大なビーストを目にして、
流石のナイトレイダーも少し戸惑い気味であった。
「イラストレーターの言った通りだな。今までよりも巨大なビースト…。」
「おそらく複数のビーストが融合したんでしょう。何かに対抗するために…。」
石堀隊員の説明を聞いた和倉隊長はすぐさま第一戦闘隊形を指示する。
「奴の体液はガソリンと同じで起爆性が高い。一発命中させれば…。」
「木っ端微塵に吹き飛ぶ！」
石堀隊員の説明を聞いてナイトレイダーは一斉にディバイトランチャーを向けるが、
ペドレオンは近くの工場に逃げ込んでいた工場員二人を触手で捕らえて盾にした。
「！　撃つな！」
それを見て和倉隊長はすぐさま攻撃中止を指示。
「人質なんてずる賢いじゃない！」
ディバイトランチャーを下げて平木隊員が憤り、
和倉隊長はイラストレーターに指示を仰いだ。
「イラストレーター、不測事態が発生。指示を。」
しかし、イラストレーターは和倉隊長も予想していなかった指示を出した。
「…確実に撃破しなければ被害は拡大します。
ですから…多少の犠牲は仕方ありません…。」

イラストレーターの指示を聞いて和倉隊長は我が耳を疑った。
「そんな…！？　イラストレーター！」
しかし、イラストレーターは通信を切ってしまう。
和倉隊長は苦悩の表情を浮かべるが、
西条副隊長は先陣を切ってペドレオンに銃口を向けた。
「西条！」
和倉隊長が西条副隊長に向かって叫ぶが、
その時、ペドレオンの横にあるビルの屋上にいた
しんのすけが西条副隊長の視界に入った。
「あの男は…。」
驚き、ディバイトランチャーを下ろす西条副隊長。
一方、しんのすけはペドレオンを見ると、ペンライト程の大きさをした
謎の道具、エボルトラスターをポケットから取り出して、鞘から抜き、天に掲げた。
エボルトラスターから光が溢れ、上空から巨大な光が地上に降り立つと、
眩い光は次第に具体的な姿を成していき、
やがてひろしを助けた銀色の巨人となった。
「…巨人！？」
銀色の巨人の出現に驚くナイトレイダー。
銀色の巨人は自分の腰ほどの大きさのペドレオンと対峙する。
ペドレオンの触手に捕らわれていた工場員は既にグッタリしていた。
それを見た銀色の巨人は右手で左腕に備えてあるアームドネクサスに触れると、
次の瞬間、右手から光の帯・セービングビュートを発し、
触手に捕らわれていた二人に巻き付けてペドレオンから救出、地上に降ろした。
事態の展開に戸惑いながらもナイトレイダーは
地上に降ろされた二人の救助に向かう。

二人の無事を確認した後、銀色の巨人は再びペドレオンと対峙し、
自分の腰ほどの大きさのペドレオンに飛び蹴りを浴びせた。
蹴り飛ばされたペドレオンも反撃するが体格の違いから圧倒的に押
される。
倒れるペドレオンを見て銀色の巨人は止めを刺そうと右手に力を込
める。
しかしその時、銀色の巨人の肩に火花が散る。
見ると、西条副隊長がディバイトランチャーで巨人を撃っていた。
その事態に銀色の巨人は戸惑う。
その時、ペドレオンの背中の穴からガスが勢いよく噴射され、
銀色の巨人は苦しんでペドレオンから離れた。
「まずい…、可燃性ガスだ。」
パルスブレイガーでガスを分析した石堀隊員の言葉を聞いて、
西条副隊長は苛立たしげに唇を噛んだ。
閃光がいくつか発せられたあと、飛翔体に変形したペドレオンが飛
び立ち、
それを追って銀色の巨人も空へ飛び立った。
それを見てすぐさま一人クロムチェスターαに搭乗する西条副隊長。
飛び去るペドレオン飛翔体、銀色の巨人、
クロムチェスターαを見て石堀隊員が呟く。
「飛翔体…。クロムチェスターに対抗するためか…。」
一方、イラストレーターも指示を送って来る。
「追跡してください。ビーストの進行方向に人口密集地があります。
」
街へ向かうペドレオン飛翔体と、それを追う銀色の巨人。
さらに西条副隊長のクロムチェスターαも両者を追うが、
飛行速度の圧倒的な差で追いつく事が出来ない。
その時、銀色の巨人が左手を胸のエナジーコアに当てると、
銀色の姿が光と共に赤い姿へと変化した。
続けて赤い巨人は右手を左腕のアームドネクサスに当て、

光を得た右手を前方を飛行するペドレオンの方へと向けると、
右手から光が発せられ、ペドレオンはその光に包みこまれた。
赤い巨人はそのまま光の中に入っていき、
やがて光共々ペドレオンと赤い巨人も姿を消した。
目の前で両者が姿を消した事に西条副隊長は驚き、
他のクロムチェスターに乗って、
遅れてやって来た他のナイトレイダーも辺りを見渡す。
その時、辺りの夜空に謎の爆音が響き、やがて花火のような光の爆発が起こると、
その中から赤い巨人が姿を現した。
赤い巨人は地上に降り立つと、光に包まれてそのまま姿を消した。
事態を把握できずに戸惑うナイトレイダーに対し、
イラストレーターが冷静に指示を送ってくる。
「ターゲットは消失しました。帰還してください。」
イラストレーターの指示を受け、ナイトレイダーは帰還する。
地上では黒服の女性一人と男性二人が工場員二人を保護し、
ホワイトスイーパーが現場を分析していた。
帰還途中、クロムチェスターβで和倉隊長が呟く。
「あの巨人がビーストを倒したのか…あの巨人は一体…。」
その時、和倉隊長の脳裏にある言葉が浮かんだ。
「巨人…ウルトラマン…？」
一方、イラストレーターはペドレオンと赤い巨人が
光の中に消えた現象を分析していた。
「位相の褶曲か…。凄いな。」
そして地上では変身したしんのすけが疲れ果て、地面に手をついていた。
『これがオラとナイトレイダーとの初めての出会いだった…。
そして、この出会いが自分の運命に何をもたらすのかを、
オラはまだ知らなかったんだ…。』…野原しんのすけ

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０２　異生獣　－スペースビースト－（後書き）

うーん…。原作だと2話目は孤門の入隊訓練が多かったので、
主人公がウルトラマンに変身して、ＴＬＴに所属していないとなると、
どうしてもこの話は書く要素が少なくなるなぁ…。
日常シーンについても後に控えている話と
重ならないようにする必要があるし。
一応、冒頭のナイトレイダーの会話シーンは伏線です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０３　亜空間　－メタフィールド－

ビール工場で起きたビーストとの戦いは放火の疑いがある謎の火災として報道されていた。
朝の野原家。しんのすけ達は居間で朝食を食べながらそのニュースを見ていた。
「完全に倒せなかった…。」
「ん？　どうしたの？」
ニュースを見ながら呟くしんのすけにみさえが問うが、しんのすけは
「なんでもないゾ。」
と答えると、鞄を取りに自分の部屋へと向かった。
それを見送るひろし、みさえ、ひまわり。
自分の部屋に入ったしんのすけは鞄を手に取って、下に下りようとするが、
その時、机の上に置いてあったエボルトラスターが目に止まる。
「やっぱまだ完全に力を使いこなせてないのかな…。
昨日、あいつを光の中に捕らえたまでは良かったんだけど…。」
エボルトラスターを手に取って呟いた後、
しんのすけはエボルトラスターを制服の上着のポケットの中に入れた。

一方、フォートレスフリーダムでは和倉隊長がＴＬＴの査問会にかけられていた。
「どうかね。和倉隊長。巨人は我々の味方となりうるか、それとも敵となるか？
そのことについて君の考えを聞かせてもらいたい。」
正面にいる３人のＴＬＴ幹部の中、
中央に座っていた東郷の質問に和倉隊長は少し間を置いて答えた。
「正直…、分かりません。

ただ、もしあの巨人が我々の敵となるならば、更なる調査・分析が必要かと…。」
和倉隊長の答えを聞いた東郷は少し間を置いた後、
ややためらいつつも質問を再開する。
「和倉隊長。君は巨人を見て『ウルトラマン』と口走ったそうだが、その名前は一体どこから出てきたのかね?」
「いえ…、フッと頭に浮かんだという感じで…。」

査問会が終了し、廊下を歩く和倉隊長は巨人、ウルトラマンについて考えていた。
「あの巨人が、“例の巨人”と関係がある可能性は高い…。
しかし、奴がビーストから人々を助け出したのも事実だ…。」
「単に餌を奪っただけかも知れません。」
後ろから聞こえてきた声に振り向く和倉隊長。そこには西条副隊長がいた。
「いかに人型であっても、奴は人ならざる存在、化け物。ビーストです。
ビーストは私達人間の敵。それが人間を助けるなんてありえません。」
そう強く言い残し、西条副隊長は頭を下げて去っていった。
それを不安げな表情で見送る和倉隊長の所に松永管理官が話しかけてきた。
「あの巨人を見て、和倉隊長。例のあの男を思い出しますか?」
その言葉に和倉隊長は少し眉を動かすが、松永管理官は構わず話を続ける。
「そういえば、あの男も西条副隊長のように人一倍強い意志を持っていましたね。
結果的には“例の巨人”と関わり、その意志の強さが災いして…。」
和倉隊長は松永管理官の話を切るように話し出す。
「チームに大切なのは信頼感です。

だからこそ西条にはあの男のようになって欲しくない。私はそう思っています。」

「それは、私も同じですよ。…それでは。」

そう言って去っていく松永管理官を和倉隊長は黙って見送った。

その頃、しんのすけは学校で休み時間に

幼稚園の頃からの友人である佐藤マサオと話していた。

「で、しんちゃん。僕、2学期からこの遊園地でアルバイトしようと思ってるんだけど。」

マサオは「アルバイト募集中！」と書かれた遊園地の広告を見せた。

「ふーん。でも、マサオ君こういう仕事できるの？お客さん前にしてガッチガチに緊張しちゃったりするかもよ～。」

いたずらそうに話すしんのすけにマサオは胸を張って答えた。

「あのねぇ、今の僕は幼稚園の頃とは違うんだよ。何がどう変わったかというと…。」

しかし、しんのすけはマサオの話をロクに聞かずに、あくびをして戦いの疲れから眠ってしまった。

「ちょっと、しんちゃん！　まだ話の途中なんだよ？　ねぇ！」

しかし、何度呼びかけてもしんのすけは起きず、仕方なくマサオは諦めたかのように自分の席に戻った。

その頃、ひろしは会社でインターネットを使ってこの前のバスの転落事故のことを調べていたが、ペドレオンに関する情報は全く拾えなかった。

「おっかしいな…。あんな化け物がいたら必ずどこかで話題になってるはずなんだけどな…。ニュースでも全く報じられてないし…。」

「何してるんですか？　先輩。」

後ろから声がかけられ、ひろしが振り返るとそこには川口がいた。

「別に…。ただ、昼休みで暇だからネット使ってるだけだよ。」

「へぇ…。珍しいですね…。あ、これってこの前起こった事故じゃないですか。」
画面に表示されているネットニュースの記事を見て川口が呟く。
「なんか最近多いですよね、こういうの。
ネットにある噂とかだと、こういう事件や事故って
本当は化け物が人間を襲っているんだ、なんてのがあるみたいですけどね。」
川口のその言葉にひろしの眉が動く。
「まぁ、都市伝説って奴ですね。都市伝説。」
しかし、ひろしは川口の言葉に
何も答えずパソコン画面の記事をじっと見つめていた。

一方、フォートレスフリーダムのコマンドルームでは
和倉隊長が新型高速機のクロムチェスターγの説明をしていた。
「本機から新たに開発された高出力のメタルジェネレーターが搭載されることになった。
操縦方法は従来のタイプと変わらないが、
機動性が上がった分、やや扱い辛いかもしれん。」
その説明を満足そうに聞く西条副隊長。
そんな西条副隊長を和倉隊長は少し複雑な目で見ていた。

夕方。しんのすけは学校の帰りに本屋で立ち読みをしようと、
幼稚園の頃によく入ったカスカベ書店に入った。
見ると、あの店長はおらず、代わりに女性店員であった中村が店長となっていた。
少し寂しさを感じつつもしんのすけは写真集コーナーに入ろうとしたが、
その時、制服の上着のポケットに入っているエボルトラスターがビースト出現を告げる明滅を始め、それを知ったしんのすけは急いで店から出た。

一方、フォートレスフリーダムのコマンドルームでは
全身白ずくめで、やや猫背気味の、
左手中指に「Ｐｙｒ」と刻印された銀の指輪をはめている
しんのすけと同じ１７歳の少年、
ＴＬＴ－Ｊ作戦参謀・イラストレーターがペドレオン殲滅作戦の説明をしていた。
机の上に現れているホログラムのトンネルの両サイドに
チェスターβとγが着陸する。
「奴の体液は起爆性が高い。つまり火薬庫と同じです。
ターゲットが潜伏するトンネルの両サイドから
チェスターβ、γによる同時攻撃を仕掛けてください。」
イラストレーターの説明と共に
ホログラム上のチェスターβとγがトンネル内へ向けて同時攻撃、
トンネル内の巨大ペドレオンを殲滅する。
説明を終えて、イラストレーターは最後にナイトレイダー全員を見渡して告げた。
「今度こそ確実にお願いします。また、あの巨人が現れるとは限りませんから。」
その言葉に西条副隊長は眉をピクリと動かす。
そして、イラストレーターは説明を終えて姿を消す。
彼はホログラムでここに現れたのだ。
その後、水槽のクラゲが不思議に漂う部屋、
ＣＩＣでイラストレーターは一人、手を組んで俯(うつむ)いていた。

ある部屋、松永管理官が黒服の女性一人と男性二人と話をしていた。
「大原リーダー。既にご存知の通り、ここ数週間状況に微妙な変化が生じています。」
松永管理官の言葉に答えるかつてしんのすけの
憧れの人であった女性、大原ななこ・現Ｍ・Ｐリーダー。

「例の巨人。トップシークレット扱いだそうですね。」
「はい。正直、敵か味方か分からない…。巨人が事件に関与することで、
あなた方の職務にも少なからず影響が及ぶと懸念されます。」
しかし、大原リーダーは表情一つ変えずに答えた。
「ご心配なく、今まで通り完璧にこなします。それが私達の仕事ですからね。」
話が終わり、部屋を出る松永管理官。
それを見て黒服の男性の一人、三沢広之が口を開く。
「巨人か…。そういえば、松永管理官はレーテの事を知りませんでしたね。」
「三沢君。来訪者についての情報は最重要機密。軽々しく口にするものじゃないわ。」
大原リーダーが三沢を注意するが、
ドアの向こう側では松永管理官が2人の会話を全て立ち聞きしていた。

「時間だ！」
夜。和倉隊長の言葉と共にナイトレイダーが一斉に動き出す。
ブースに左端から和倉隊長、西条副隊長、石堀隊員、平木隊員が入る。
隊員が全員入ったことを和倉隊長が確認し、
シューターがクロムチェスター搭乗口に射出される。
発進ゲートから3機のクロムチェスターが発進し、
それぞれの待機場所へと向かった。
「こちら和倉、各機、状況を報告せよ。」
「こちら平木。作戦ポイントで待機。ノープロブレム！」
「こちら石堀。作戦ポイントで待機。問題無し。」
3機全て待機場所に到着し、石堀隊員が分析を始める。
「前方トンネル内にターゲットを確認。」

それを受けてイラストレーターが指示を出す。
「了解しました。攻撃レベルＡ－３ＭＡＸ。作戦スタート。」
その命令と共にクロムチェスターβがメガレーザーを
クロムチェスターγがメタルレーザーを発射する。

「あの、何でこの一帯を封鎖することになったんでしょう?」
「う～んと、上が言うには確かトンネルに崩落の危険性が出たとか
言ってたな…。」
真実を知らずにミッションエリアを封鎖していた地元の警官達。
その一人がもう一人の警官とのんきに話をしていると、突然爆音と
地響きがした。
「な、何だ!?」
一方、ナイトレイダーの攻撃により、トンネル内を大爆発が覆って
いた。
勝利を確信するナイトレイダーだったが、分析していた石堀隊員が
叫ぶ。
「ターゲット、健在!?　熱源上昇!」
トンネル内の巨大ペドレオンは
頭部の触角の間に火球を作りだして外に向けて発射した。
急いで待避する二機のクロムチェスターだがβは被弾し、不時着す
る。
それを見てイラストレーターが驚く。
「体内の可燃性ガスを火球として発射したのか?
奴は僕達の攻撃を学習し、戦闘能力を進化させたんだ…。」
トンネルをぶち破り、ペドレオンは５０ｍはあろうかという巨体を
現し、
続けて火球を発射して、クロムチェスターγを撃墜した。
「新型機が…。」
和倉隊長はモニターでその様子を見ていたが、
その時、機体の警告サイレンが鳴り響く。

見ると、飛翔体のペドレオンが和倉隊長の乗るクロムチェスターαに迫ってきていた。
「ここから先へは行かせない！」
そう言って和倉隊長はバニッシャーレーザーキャノンを撃った。
ペドレオンは避けるものの、
続けて放たれたスパイダーミサイルを受けて動きが弱まる。

一方、しんのすけはエボルトラスターの明滅を見ながら森を駆けていた。
辺りに爆音が響き、しんのすけが上空を見ると、
空中戦を繰り広げているクロムチェスターαとペドレオンが目に入り、
しんのすけはエボルトラスターを鞘から抜き、天に掲げる。
地上から光となったしんのすけが上空目掛けて飛び立つ。
それはペドレオンの眼前に現れ、銀色の巨人、ウルトラマンの姿となった。
「ウルトラマン…？」
チェスターαから現れたウルトラマンを見る和倉隊長。
ウルトラマンは突っ込んでくるペドレオンに蹴りを浴びせて地上に蹴り落とした。
蹴り落されたペドレオンは再び歩行形態となった。
ウルトラマンは地上に降り立つと、アームドネクサスを使って、
銀色のアンファンスから赤い姿・ジュネッスへとスタイルチェンジした。
さらに右手を左腕のアームドネクサスに当て、
光を得た右手をゆっくりと辺りに回し、そのまま光を遥か天に向かって放つと、
天で広がった光がまるでシャワーのように地上に降り注いでいった。
ウルトラマンとペドレオンの周りを水のように光が包んでいく。
ペドレオンは火球を発射するが光に掻き消されてしまった。

「!?」
クロムチェスターαもその光に包まれていく。

「巨人とビーストが…消えた?」
不時着したクロムチェスターから降りたナイトレイダーは
目の前の展開にただ、呆然とするだけだった。

「ここは…?」
和倉隊長が気づいた時、辺り一面は赤茶色の地面と
光の空に覆われた世界になっていた。
和倉隊長のクロムチェスターαは赤茶色の崖に突き刺さっていた。
その時、爆音と共に凄まじい地響きが起こり、
和倉隊長が見るとウルトラマンとペドレオンが激しい肉弾戦を展開していた。
押すウルトラマンだったが、
ペドレオンの口から発する衝撃波によって吹き飛ばされ形勢は逆転。
前回とは違い、ウルトラマンとほぼ同じ大きさになっているペドレオンは触手を巻きつけ、
電流を流してウルトラマンを追い詰める。
しかし、ウルトラマンは全身に力を込め、力任せに触手を引きちぎると、
そのままペドレオンを蹴り飛ばして、
竜巻状のエネルギー波・ネクサスハリケーンを放ち、
それに吹き飛ばされたペドレオンが地面に突き刺さり、
身動きがとれなくなった機を逃さず、
ウルトラマンは腕を下方に組んで、胸の前で開き、エネルギーを溜めると、
それを天高く広げ、両腕をL字に組み、
光をスパークさせた必殺技・オーバーレイ・シュトロームを放った。
それを受けてペドレオンは光の粒となって消滅した。

「凄い…。」
思わず感嘆の声を上げる和倉隊長。
やがて光の世界が消え去ると、和倉隊長のクロムチェスターαも元の場所に戻り、
ウルトラマンは光と共に消え去った。
「ターゲットは消滅しました。帰還してください。」
イラストレーターの指示が飛ぶ。戦いが終わり、ナイトレイダーは街の方を見る。
ＣＩＣでは、イラストレーターが今回の戦いのデータを分析していた。
ウルトラマンが展開した光の世界の分析を終えて一人呟く。
「巨人が作りだす戦闘用亜空間、メタフィールド、か…。」

一方、ミッションエリアを封鎖していた警官達の所にＭ・Ｐの車がやって来た。
車から降りる大原リーダーと三沢。一人の警官が事情を説明する。
「引き返してください。ここは危険です！」
「危険？」
「巨大な化け物が出たんですよ！　それに見た事もない戦闘機も！」
それを聞いた大原リーダーは呟いた。
「あなた達の任務は終わりました。あなた達は何も見なかった。」
「え？」
「あなた達は何も見なかった。それが現実よ。」
そう言って大原リーダーは携帯電話型の機械、メモレイサーを掲げ、
その瞬間、メモレイサーの画面から眩い光が発せられた。
一方、しんのすけは家に戻る道を歩きながら、
ポケットからあいに貰った翼の生えたぶりぶりざえもんとエボルトラスターを取り出し、見つめていた。
しばらく見つめた後、しんのすけはそれらをしまい、再び歩き出した。

『自分に与えられたこの光で、皆を、人々を守るために戦おう…。
オラはこの時、そうはっきりと心に決めたんだ…。』…野原しんのすけ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０３　亜空間　－メタフィールド－（後書き）

今回は日常シーンと非日常シーンの構成がバランスよくできた感じ。
Ｍ・Ｐのリーダーに意外な人物を出してみました。
戦闘シーンでは原作だとウルトラマンが「オーラミラージュ」という、
相手の動きを止めるチート技を出していたんですが、
ペドレオン戦以降の話で全然使っていなかったので省きました。
（「ネクサスハリケーン」も同じくペドレオン戦以降使ってませんでしたが、
面白い技なのでそのままにしています。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０４　巨人　－ウルトラマン－

「で、マサオ君はその遊園地でアルバイトする気なんだって。」
「へぇ…、マサオ君がね…。昔とは随分変わったもんだなぁ…。」
「この前もマサオ君、自分でそんな事言ってたけど、
気が弱いところは相変わらずだゾ。」
朝の野原家。しんのすけはひろし達と話しながら、朝食を食べていた。
「あ。あなた。新聞に埼玉県境のトンネルで
謎の崩落事故があったって載ってるわよ。」
みさえの言葉を聞いて、しんのすけの顔が曇る。
「おっ、サンキュー。」
新聞を受け取って一面を見るひろし。そんなひろしを見るしんのすけ。
「…やっぱ、載ってねぇや…。」
ひろしが肩透かしを受けた感じで答える。
「ねぇ、本当に見たの？　そんな化け物。酔っぱらって見た夢とかじゃない？」
みさえの問いにひろしがムッとして答える。
「あのな。あれは夢なんかじゃない。俺はハッキリとこの目で見たんだ！」
「ホントに～？」
「あぁ、間違いない。」
そんな二人の会話をしんのすけは黙って複雑な顔で聞いていた。

しんのすけは朝食を食べ終わると外に出かけた。今日は休日である。
「最近、原因不明の事故や事件が多すぎるとは思わんか？　お前。」
自分にいきなりかけられた声にしんのすけは驚いて立ち止まり、
振り返るが、そこには何も無かった。

不思議に思いつつもしんのすけは再び歩き始める。
しかし、電柱の影からはしんのすけを眼鏡をかけた中年の男性、
根来甚蔵（じんぞう）が見つめていた。

「コードネームは…ウルトラマン。今後この巨人をウルトラマンと呼称する。」
フォートレスフリーダムのコマンドルームでは
和倉隊長と松永管理官がウルトラマンの説明をしていた。
「上はこの、ウルトラマンという名前をコードネームにするのにあまり好意的ではありませんでしたが、私はこの名前が一番しっくり来るような気がしましてね。」
松永管理官は笑みを浮かべて語り、
続いて画面に映し出された映像をバックに和倉隊長が話し始める。
「私の乗っていたクロムチェスターαが捉えたメタフィールド内の映像だ。」
「メタフィールド？」
尋ねる平木隊員。それを受けて石堀隊員が説明する。
「メタフィールドは位相の褶曲によって、生じる不連続時空間の結界で、巨人が…。
いや、ウルトラマンが作り出す一種の戦闘用亜空間です。」
「そ、そう…。」
明らかに理解してなさそうな平木隊員。和倉隊長が主張する。
「戦闘による被害を最小限に食い止めるためにウルトラマンはビーストをその空間に引き込んだ…。俺にはそう見えた。」
「つまり、隊長はウルトラマンが人類の味方であると言いたい訳ですか？」
和倉隊長は質問してきた西条副隊長の顔を見る。
「そうとは言ってない。我々にとってウルトラマンは未知の存在だ…。

だが、先の戦闘でウルトラマンが戦闘用亜空間を展開したという事実を考慮すればそう考えることも出来る！」

「ですが、奴は自分にとって有利な戦闘用亜空間に敵を誘い込んだだけ…そう考えることも出来るんではないでしょうか？」

反論する西条副隊長に和倉隊長は更に反論する。

「なら、どうしてウルトラマンはビーストと戦う！？　危険を冒してまで！」

「和倉隊長。あなたらしくありませんね。少し落ち着いたほうがいいですよ。」

松永管理官が注意をする。

「すみません…。」

他のナイトレイダーが和倉隊長を不思議そうに見つめる中、松永管理官が口を開く。

「ウルトラマンについては現時点では未解明の部分が多い状態です。ただ、ウルトラマンは人類の味方であってほしいと私は思いますね。」

そう言い残して松永管理官はコマンドルームを後にした。

その頃、しんのすけはマサオと一緒にマサオの見せた広告の遊園地に来ていた。

「ねぇ、しんちゃん。どう？　なかなかよさそうな遊園地じゃない？」

「ふーん…。いいんじゃないの？」

「でしょ？　ねぇ、しんちゃんもこの遊園地で…。」

その時、しんのすけのポケットに入れてあったエボルトラスターが明滅を始め、

それを知ったしんのすけは遊園地から走り去っていった。

「あ、ちょっとしんちゃん！　また話の途中で…。」

そして、それを見ていた根来もしんのすけの後を追った。

あるカップルが車の中で音楽を大音量で鳴らして熱唱していると、
女性が何かを耳にした。
「ねぇ、何か聞こえない？」
「え？」
彼女の疑問に彼氏は耳を貸さずに熱唱し続けるが、
音楽が邪魔で何も聞き取れない彼女は音楽を止めてもう一度聞こう
とした。
「何すんだよ！」
「ねぇ、やっぱり何か聞こえない？」
「え？」
二人が耳を澄ませると虫の羽音みたいなものが聞こえてくる。
バックミラーで羽音の聞こえてくる方、車の後を見ると、
巨大な鉤爪が迫ってきていた。

ある山頂の駐車場。今日は休日なのもあって家族連れが多くいた。
そこに空から巨大な羽音が聞こえてきて、巨大な影が辺りを覆いつ
くした。

一方、ナイトレイダーも出動準備を始めていた。
「夜間ではないので、ミッションエリアの封鎖を
５ｋｍに拡大して徹底してください。特に上空の航空管制を強化。」
イラストレーターが指示を出す中、３機のクロムチェスター、西条
副隊長が乗るα、
和倉隊長が乗るβ、石堀隊員と平木隊員が乗るγが出撃する。

根来を乗せたタクシーはある山道にやって来るが、
崖崩れがあった為、通行止めとなっていた。
根来は、規制をしていた警察に高校生くらいの少年が
ここを通らなかったか聞くが通らなかったらしい。

「見失ったか…戻ってください。」
渋々タクシーを引き返す根来。前を見ると一台の黒い車が近づいてきた。
黒い車の助手席に座る女性、大原リーダーをカメラに収める根来。
「何が崖崩れだよ…。これも奴らの情報操作か…。」
一方、黒い車の中。三沢が大原リーダーに話しかける。
「大原リーダー、あのカメラマン。よろしいのですか?」
「えぇ、たった一人でどうにかなる事態じゃないわ。泳がせておきましょう。」

「別の特殊振動波。やっぱり来たか…。」
ＣＩＣ。画面に現れた反応をイラストレーターが見つめる。
その反応地点をしんのすけが駆けていた。
しんのすけが森を抜けると、空から車の残骸が降ってきた。
見上げると、甲虫の様な堅い体表と鋭い鉤爪を有する、
カブトムシの幼虫とイナゴが融合したかのような
ビースト・バグバズンが口から車を吐き捨てていた。
車を吐き出した後、鉤爪で牙にへばりついている肉片をほじくるバグバズン。
それが意味することに怒りが湧き上がったしんのすけはエボルトラスターを掲げた。
しんのすけは光となってバグバズンにぶつかり、
そのままアンファンスの姿となって地上に降り立った。
激突するウルトラマンとバグバズン。
組んだウルトラマンは力任せにバグバズンを投げ飛ばし、
続いてキックやパンチを繰り出していく。
ウルトラマンの攻撃には以前見られなかった、
ヒットの瞬間に光がスパークする現象が見られた。
攻撃に倒れ込んだバグバズンは尻尾にあるもう一つの口で
ウルトラマンの足首を噛もうとするが、それに気づいたウルトラマ

ンは、
超高速移動・マッハムーブで回避、バグバズンの死角に入って攻撃を続けた。
戦闘を分析していたイラストレーターが驚く。
「バトルアビリティ７０００から８０００。パワー、スピード、攻撃力。
全てにおいて以前より遥かに強くなってる。
このままじゃ…、このビーストを倒すのに1分もかからない…。」
そこにやって来た3機のクロムチェスター。
それを確認したイラストレーターは、
しばらく目をつむって俯いた後、意外な指示を出した。
「作戦を一部変更します。チェスターβ、γは予定通りビーストを攻撃。
チェスターαは…ウルトラマンを攻撃してください…。」
「何だって…？」
和倉隊長が驚く。
「了解、ウルトラマンを攻撃します。」
西条副隊長はすぐさま了解。クロムチェスターは二手に別れる。
一方、ウルトラマンは倒れるバグバズンに止めを刺そうとするが、
そこにチェスターβとγがやってきて、
メガレーザーと、メタルレーザーでバグバズンを攻撃する。
それを見たウルトラマンがただならぬ気配を感じ、振り返ると、
背後にチェスターαが迫っていた。
西条副隊長はクロムチェスターαのバニッシャーレーザーキャノンを撃つが、
ウルトラマンはギリギリ回避。驚き、再びクロムチェスターαを見るが、
その瞬間、バニッシャーレーザーキャノンを受けて、地面に倒れ込んでしまった。
ウルトラマンは何とか体を起こし、呆然とクロムチェスターαを見

る。
そんなウルトラマンを心苦しい表情で見る和倉隊長。
「そんな簡単にビーストを倒されると困るんだ…。」
ウルトラマンに攻撃するナイトレイダーを見てイラストレーターは一人呟く。
しかし、その眼は少し悲しげで拳を強く握り締めていた。
ウルトラマンは立ち上がってジュネッスにスタイルチェンジしようとするが、
クロムチェスターαに阻止され、再び立ち上がろうとすると、全身に衝撃が走った。
見るとバグバズンが右足を鉤爪で突き刺していた。
苦しみの声を上げるウルトラマンの傷口から、血の代わりに大量の光が噴き出し、
今度はバクバズンが止めを刺そうとするがチェスターβとγに阻止される。
ウルトラマンの圧勝かと思われた戦いはナイトレイダーの参入によって、
先の見えない三つ巴の戦いとなった。
攻撃に耐え切れなくなったバグバズンが羽根を広げて飛び立つ。
「ビースト離脱！」
叫ぶ平木隊員。イラストレーターが指示を出す。
「チェスターβとγはビーストの追跡、
チェスターαはウルトラマンの攻撃を…。」
指示を受けて展開するクロムチェスター。
西条副隊長の操縦するチェスターαが容赦なくウルトラマンを攻撃する中、
ウルトラマンは逃げ去ろうとするバグバズンを見て、
両腕をクロスし、アームドネクサスを合わせて、
光をスパークさせた必殺技・クロスレイ・シュトロームを放った。
クロスレイ・シュトロームはチェスターβとγの間を抜け、

バグバズンの羽根の付け根に命中する。
羽根がもげたバグバズンは地上に墜落し、
力尽きたウルトラマンも光に包まれて姿を消した。
「消えた…。」
和倉隊長が少しホッとした感じで呟く。
「付近にまだウルトラマンの特殊振動波を感知しています。
チェスターβ、γはビーストを追跡。チェスターαは着陸して、
ウルトラマンの特殊振動波を追跡してください…。」
「了解。」
「……。」
隊員達が答えていく中、和倉隊長は少し不満げな表情を浮かべていた。

「何なんだ…、あいつらは…？　どうして…オラを…。」
森の中、しんのすけは傷付いた右足を引きずって歩いていた。
「止まりなさい！」
背後から聞こえてきた声にしんのすけが振り返ると、
西条副隊長がディバイトガンナーを構えていた。
「あんた…。」
しんのすけの脳裏にペドレオンとの戦いで自分を撃った人物が思い浮かぶ。
「あの時の…。」
しかし、西条副隊長はしんのすけの呟きに耳を貸さずに見ると、
しんのすけの血を流している部分が、ウルトラマンの傷の部分と同じ事に気づいた。
「やはり…ウルトラマンはあなたのようね。」
ディバイトガンナーを構えながら、西条副隊長はしんのすけに近づいていく。
近づいてくる西条副隊長に警戒するしんのすけ。
「一つ聞きたいことがあるわ…。あなたは溝…。」

「今だ！」
しんのすけはその隙を突いて、
上空に向けて小型の専用銃・ブラストショットを放ち、
それを見た西条副隊長はすぐさましんのすけにディバイトガンナーを撃った。
しかし、
「え…？」
事態に驚く西条副隊長。
見ると、ディバイトガンナーの弾がしんのすけの周りに現れた光の幕によって消し去られてしまった。
やがて上空から光の石柩・ストーンフリューゲルが降臨する。
「な、何なの、一体…？」
ストーンフリューゲルからものすごい振動が放たれ、
振動の凄まじさに西条副隊長は頭を押さえて地面に倒れ込んでしまった。
「じゃ、そういうことで。」
しんのすけが光となってストーンフリューゲルに入ると辺りを覆っていた振動が止み、
西条副隊長はなんとか立ち上がるとディバイトガンナーをディバイトランチャーに換装させて、
ストーンフリューゲルに向けて撃つが、傷一つ付けられなかった。
「そんな…、傷一つ無いなんて…。」
唖然とする西条副隊長がふいにストーンフリューゲルに手を触れた瞬間、
イエスタディ・ワンスモア。東京タワーのようなタワー。
トッペマ・マペット。ブタのヒヅメ。ジャングル。
倒れる一人の侍。一人の少女の悲しい顔…。
ストーンフリューゲルから大量の光とイメージが
西条副隊長の脳裏に流れ込んでいき、
そのまま西条副隊長は衝撃に吹き飛ばされてしまった。

その時、再びストーンフリューゲルが振動を放ち、上空へと浮かび、フライングモジュールとなって、凄まじい速度で空の彼方へ飛び去っていった。
それと同時に振動も止み、西条副隊長はストーンフリューゲルが飛び去った方向を見つめて憎しみを滲ませて呟いた。
「この化け物が…！」

一方、バグバズンを追跡していたクロムチェスターγは地上に巨大な穴を見つけていた。
「ビーストの反応が消えた…。」
「逃げられたな。ビーストの奴、地中に潜ったようだ。」
その時クロムチェスターγのシステムにノイズが走る。
「何あれ？」
「ん？」
平木隊員に言われて石堀隊員は前方から迫り来る謎の物体を覗き込んだ。
その物体、ストーンフリューゲルは物凄い速度でクロムチェスターγの横を飛び抜けていき、
それと同時にクロムチェスターγのシステムが一瞬ダウンした。
「な、何だったの、今の？」
驚く平木隊員。
石堀隊員も驚きながら、ストーンフリューゲルの去った方向を見つめる。
そのストーンフリューゲルの中では、
しんのすけが光の水に包まれて横になっていた…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０４　巨人　－ウルトラマン－（後書き）

「ネクサス」で個人的に印象に残ったキャラクター、根来登場。
原作だと姫矢の先輩ジャーナリストでしたが、
この小説では「クレしん」での“ある出来事”によって、
しんのすけや野原家の存在を知ったという設定です。
あと、今回の話で和倉隊長が原作の孤門のようにやたらとウルトラマンに
肩入れしていますが、これは一応伏線です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０５　適能者　－デュナミスト－

ストーンフリューゲルの中、光の水に包まれてしんのすけは体を癒されていた。
その頃、フォートレスフリーダムのコマンドルームではナイトレイダーが先の戦闘の報告をしていた。
「西条、報告を。」
「はい。私はイラストレーターの感知した通り、確かにウルトラマンと思われる特殊振動波を捉え、追跡。結果、山中で正体不明の飛行物体を発見しました。」
「飛行物体？」
「はい。石柩のようなその物体は強烈な振動波を発し、その為、一時的に体の自由が利きませんでした。」
「石堀、平木。君達のチェスターγが遭遇した飛行物体と…。」
「おそらく同じ物体です。やはり凄い振動波でした。」
平木隊員に続けて、石堀隊員が答える。
「その上、物体が通過した瞬間、チェスターの電気系統がダウンしてあやうく失速するところでした。大きさは人一人乗れるくらいの小さなものだったのですが…。」
和倉隊長は２人の言葉を聞いて頷き、改めて西条副隊長に話を促した。
「危険を感じたため物体に対し、ディバイトランチャーを使用したのですが破壊は不可能でした。」
少し間を置いて、和倉隊長はある事を尋ねた。
「その他に、ウルトラマンと思われる生命体の痕跡は？」
「ありません。生命体の痕跡は一切。」
すぐさま答えた西条副隊長だったが、
和倉隊長に無言で見つめられてつい目が泳いでしまった。
「…分かった。」

そう言って和倉隊長は全員に報告書を提出するように告げて解散させた。
敬礼して部屋を出て行く石堀隊員と平木隊員。
西条副隊長も出ようとするが、和倉隊長が背を向けたまま話しかける。
「西条。」
「はい。」
西条副隊長は振り向いて答え、和倉隊長は振り返らずそのまま話しかける。
「君は優秀なＴＬＴの隊員であり、私の右腕だ。」
何か思い当たる節があり西条副隊長は黙って聞く。
「期待を裏切らないでもらいたい。…間違っても前任者の時のようにな。」
そう言って、和倉隊長は西条副隊長の方を向き、西条副隊長は目を逸らさずに答えた。
「私は…、あの男とは違います。」
そう言い残して西条副隊長は部屋を出た。

「私は…あの男とは違う。」
フォートレスフリーダムの外観。西条副隊長は思いを馳せるように呟いた。
そして脳裏に浮かぶストーンフリューゲルに触れたときに流れ込んできたイメージ。
「あのイメージ…。どこかで…。」
そんな彼女を赤い視線が遠くからじっと見ていた。

その後のコマンドルーム。
西条副隊長は一人、パソコンを操作して、ストーンフリューゲルに触れた時に見た、
東京タワーのようなタワーのことについて調べていた。

膨大なネット上の情報の中から、やがて一つの情報に辿り着いた西条副隊長は、
その情報を閲覧。遂にその写真、
正面に「２０世紀博」と書かれた東京タワーの写った写真が、
かつて東都日報に載ったものだという事を突き止めたのだった。
「これね…。」
記事を見ていく西条副隊長の目に、その中のある家族の紹介が止まる。
「野原家…、『オトナ帝国事件』から日本を救った家族…。」
その家族、野原一家の写真を順番に見ていく
西条副隊長の目にある少年の写真が映った。
「野原しんのすけ…。」

一方、しんのすけは家に戻る道を歩いていた。辺りは既に暗くなっていた。
「お前、野原しんのすけだろ。」
その時、昼間聞いた声が聞こえ、
しんのすけがすぐさまブラストショットを取り出して、
振り向くと、そこには根来が立っていた。
「あんた…、どうしてオラの名前を…。」
しかし、根来はしんのすけの問いかけに直接答えず、自己紹介をした。
「俺は東都日報の根来ってもんだ。お前のことは前から知っている。
以前、うちの新聞社がお前達家族のことを取り上げたからな。」
根来の言葉にある事を思いだすしんのすけ。

「野原さんですね。野原さんなら僕達の家の隣ですよ。」
野原家のすぐ隣のアパート。西条副隊長が
そこの住人の鳩ヶ谷ミッチー、ヨシリンに野原家の住所を聞いていた。

「ありがとうございます。」
「でも、どうして野原さん達のことを知りたいんですか?」
「この記事の『オトナ帝国事件』という事件に関わった家族って知って…。」
「失礼ですが。」
呼びかけられて西条副隊長が振り向くと、そこにはひろしがいた。

「粗茶ですが…どうぞ。」
野原家。
西条副隊長とひろしとみさえがテーブル越しに向かい合っていた。
「確か…、この事件と私達のことについて知りたいんでしたね?」
みさえの問いに西条副隊長はお茶を飲む手を止めて頷き、
それを受けてひろしとみさえは「オトナ帝国事件」のことについて話を始める。

「オトナ帝国事件…。かつてイエスタディ・ワンスモアという組織が、
21世紀という新しい時代を20世紀の頃に戻そうとした事件だ…。」
家に帰る道の途中、しんのすけは話し始めた根来の方を見る。
「奴らは懐かしいニオイとやらで日本中の大人達を懐かしさの虜にさせて、
子供達の生きる21世紀を、未来を閉ざそうとしていた…。
だが、お前達家族のとった行動は俺達に未来を生きる希望を教えてくれた。
その後、お前達家族は俺達各マスコミ、各メディアに取り上げられた…。」
「……。」
根来は鞄の中からある新聞を取り出し、しんのすけに渡した。
その新聞の一面には「新宿大災害」と書かれていた。

「あれからもう5年になるか？
あの巨大な力が本格的に動き出したのは…。
俺達の見えない所で何か巨大な力が動いている…。
不気味な…死の匂いさえ感じさせる力だ…。
俺はその力の正体を突き止めようと、独自に調査を始めた。
だが、その現場には何故かいつもお前がいたんだ！」
「…偶然だゾ。」
根来から顔を背けてしんのすけは答えるが、
しんのすけの言葉に根来は怒りを露にした。
「何が偶然だ！　今日、お前を尾行していて、
また情報操作の壁にぶつかったんだ！」
今度は先の戦いで撮った大原リーダーの写真をしんのすけの前に突きつけた。
目の前に突きつけられた写真から顔を逸らすしんのすけ。
「素性は明らかじゃないが、この女が情報操作に絡んでいるのは間違いない。」
しんのすけに顔を近づけ、呟く根来。
「俺達の知らない所で一体何が起きているんだ？」
しかし、しんのすけは根来の問いに目を合わせずに一言答えた。
「話すことは…何もありません。」

一方、野原家ではひろしとみさえが自分たちのこと、
そしてしんのすけのことについて話をしていた。
「本当に色々あったわよね～、昔は。」
「そうそう。」
ひろし達の口から語られる自分達の過去を懐かしむ話を聞いて、
西条副隊長は自分がビーストだと認識している存在が
温かい家庭で様々なトラブルを起こしながらも、
深い愛情に包まれて育った少年であることに少し戸惑いを覚えていた。

（彼は…普通の人間なの…？　幸せな家庭の中で育った普通の人間…？
いえ、そんなはずがないわ…。私が見た彼は…人ならざる存在…、ビーストなのよ…。…そう、あの男や…あいつと同じ…。）
心の中でそう自分に言い聞かせるかのように呟く西条副隊長の脳裏に自分の幼少期の忌まわしい記憶が思い浮かんだ。
『ママはどこ？』

そして、西条副隊長が帰った後、しんのすけは家に帰ってきた。
家族全員が床に就き、ひろし達に叱られた後、
しんのすけも自分の部屋の布団に寝転んだ。
しんのすけはふと、エボルトラスターを取り出し、それをじっと見つめる。
「あの夢を見たのは3月だったから…もう一ヶ月経ったのか…。」
呟くしんのすけの脳裏に、一ヶ月前に見た遺跡の夢が思い浮かぶ。

「ここは…？」
しんのすけは密林の中を歩いていき、自分を呼ぶ声に導かれて、
夢の中に現れた遺跡の中心に聳え立つ巨大な塔へと入っていった。
そしてその深奥、光の石柩、ストーンフリューゲルが安置されている回廊へと至った。
「これが…オラを…。」
不思議な光の鼓動を発するストーンフリューゲルを見つめていると、
そこに女の子の笑い声が聞こえてきた。
その声が聞こえた方にしんのすけが振り向くと、そこにはかつてしんのすけ達が
映画の中に入った時に出会った少女・つばきが笑顔で立っていた。
「つばきちゃん…！」
あのつばきが目の前にいることに驚くしんのすけだったが、
つばきは何も言わずにしんのすけに頷き、それを受けてしんのすけ

も頷く。
そして、しんのすけはストーンフリューゲルに手を触れ、
それと同時に大量の光がしんのすけに流れ込み、
しんのすけは光となってストーンフリューゲルの中へと入っていった。
ストーンフリューゲルの中、光の水を漂うしんのすけの前には、
銀色の巨人・ウルトラマンがおぼろげな姿で存在していた。
「でっけぇ…。」
ウルトラマンの顔をまじまじと見つめるしんのすけ。
「あんたが…。」
しんのすけの言葉を受け、ウルトラマンはしんのすけを見つめる。
「あんたがオラのこと呼んだの？」
しんのすけが尋ねた時、後方から不気味な唸り声が聞こえてきた。
遺跡の向こう側に真っ黒な闇が広がり、
闇の中から片目が潰れた獣の顔を両肩に持ち、
中央に異形の顔を持つビースト・ガルベロスとなった。
遺跡へとゆっくりと歩を進めるガルベロス。
それに対し、遺跡の中心の塔から巨大な光が飛び出し、
その光の中からウルトラマンが地上に降り立った。
ウルトラマンはアンファンスからジュネッスとは違う、
青い姿にスタイルチェンジし、メタフィールドを展開。
光がシャワーのように地上に降り注ぎ、戦いの場所はメタフィールドへと移行した。
「おぉ！？」
その光景に驚くしんのすけ。
光の水の中、しんのすけはウルトラマンとガルベロスの戦いを見ていた。
ゆっくりと間合いを取る両者。ガルベロスは両肩の顔の口から火炎弾を発し、
それを見たウルトラマンはマッハムーブでガルベロスの後ろに回り

こみ、
外れた火炎弾は赤茶色の崖を破壊した。
しかし、ガルベロスの両肩の顔もすぐさま後ろを向き、再び火炎弾を発するが、
ウルトラマンは今度は上空に飛んで回避。飛び蹴りを浴びせて、
それを受けたガルベロスが倒れた隙を突き、
ウルトラマンは胸の前で両腕のアームドネクサスでゆっくりと円を描き、
胸のエナジーコアから強力な光線・コアインパルスを放った。
コアインパルスを受けて、ガルベロスは光の粒となって消え去った。
「すっげぇ…！」
しんのすけは興奮気味に光の水の中でその戦いを見ていたが、
気がつくと、手にエボルトラスターが握られていた。
「…なんだ夢か。変な夢…。」
夢から目覚めたしんのすけは2階の自分の部屋にいた。
全てが夢の中での出来事かと思い、再び眠ろうとするが、
「！　これって…！？」
その手にはエボルトラスターがしっかりと握られていた。

そして現在、フォートレスフリーダムのＣＩＣでは、
イラストレーターがパソコン画面に西条副隊長が使用していたパソコンから
引き出したしんのすけのデータを開いていた。
データの中にあるしんのすけの写真を見てイラストレーターが一言呟く。
「やっぱりお前が…。二番目の適能者（デュナミスト）か…。」

その頃、しんのすけはエボルトラスターを見つめ続けていた。
『何が夢で、何が現実なのか、全てが曖昧だった。
でも、信じなくちゃいけない現実は一つ。オラは自分にそう言い聞

かせてた…。』

その頃、あいは部屋で熊の親子の温かい絵を描いていた。
その時、近くの棚に置いてあった、幼稚園の頃のあいが
同じく幼稚園の頃のしんのすけと一緒に写っている写真が入った写
真立てにヒビが入った。
その様子を遠くから見る赤い視線。
『そして、本当に恐ろしい現実が待ち受けていることに、
オラはなんにも気づいてなかったんだ…。』…野原しんのすけ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０５　適能者　－デュナミスト－（後書き）

「オトナ帝国事件」は名前の通り、劇場版クレしんの「モーレツ！　オトナ帝国の逆襲」で起きた事件のことです。
つばきは劇場版「夕陽のカスカベボーイズ」からのキャラで、その正体について様々な憶測が流れているというどこか神秘性を感じさせるキャラなので、しんのすけがウルトラマンの光を得た、遺跡の夢のシーンに登場させました。
あと、ジュネッス形態の設定については、原作と少し変えています。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０６　魔人　－ファウスト－

朝。しんのすけは家の自分の部屋で布団から起き上がった。
周りを見て、枕元に置かれているエボルトラスターとブラストショットを手に取る。
そんなしんのすけの脳裏にペドレオン戦の時と昨日、
密かに味方だと思っていたナイトレイダーに攻撃されたことが浮かぶ。
「あいつら…オラを敵だって思ってるのかな…？」
エボルトラスターを見つめ、しんのすけが呟く。
『オラは勝手にナイトレイダーを自分の味方、一緒に戦う仲間だって思い込んでた。
でも、それは違ってて、ナイトレイダーはオラを敵だって思ってたんだ。
…ビーストだけじゃなく、ナイトレイダーも敵の状態…。
そんな状態でオラはこれからも戦えるのか…。
この時、オラの頭の中にそんな疑問が浮かんだんだ。』

「なぁ、そろそろ帰らね？」
ある廃工場にスケボーを持った男、
絵を描いている男、カメラでその様子を撮っている男がいた。
スケボー男が絵描き男に話しかける。
「俺、もう飽きちゃって。」
「待ってろって！　もう少しで完成なんだから！」
「さっきからずっとそう言ってんじゃん…。」
スケボー男はぶつくさと文句を漏らすが、
絵描き男とカメラ男は意に介さずに黙々と絵を描き続ける。
「よし！　完成！」
絵描き男はそう言ってカメラに向かって笑顔でポーズを決めるが、

スケボー男がいなくなった事に気づいて途端に不機嫌になった。
「あいつ、マジで帰っちまいやんの。」
その言葉を聞いてカメラ男がスケボー男のいた所に目をやると、
巨大な穴が広がっていた。
「何だこれ？　こんなのあった？」
カメラ男がカメラを覗き込みつつ穴に近づくと、突然、足下が崩れた。

「さようなら…。」
子犬を抱えて廃工場にやって来た少女、杉山里奈は近くにある
「オスです。かわいがってね」と書かれた箱に子犬を入れようとしていた。
しかし、
「やっぱりやだ…。この子を捨てるなんてやだ…。」
と子犬を箱に入れようとした手を止めて子犬を強く抱きしめた。
その時。
「うわぁぁぁっ…！！　た、助けてくれぇ！！」
叫び声を聞いて里奈は振り返り、子犬を抱えて急いで叫び声がした方に向かった。
「だ、誰かー！！」
やって来た里奈が見たものは、巨大な穴に飲み込まれていく絵描き男の姿であった。
絵描き男が穴の中に消えると、
絵描き男の持っていたスプレー缶がペッと放り出される。
目の前に落ちたスプレー缶を呆然と見る里奈。
そして穴から里奈の方へ、地面の下を何かがゆっくりと近づいて来た。

その頃、しんのすけは居間でみさえと昼食を食べながらＴＶを見ていた。

その時、ＴＶのニュースに速報が入ってきた。
「越谷市の廃工場で有毒ガスが発生したという情報が入ってきました。
現場には7歳の女の子が取り残されているという未確認情報があるとのことです。
繰り返します、越谷市の廃工場で有毒ガスが発生した模様です。
現場には未確認情報として7歳の女の子が取り残されているとのことです。」
そのニュースが流れたのと同時にしんのすけのエボルトラスターが明滅。
しんのすけはみさえに約束を思い出したと言い残して、急いで家を後にした。

「こちらナイトレイダー、作戦ポイントに到着。」
一方、ＴＶで有毒ガスが発生したと報道されていた現場にナイトレイダーが到着していた。
和倉隊長の言葉を受け、イラストレーターが改めて指示を出す。
「ターゲットは廃工場内に潜伏。
パルスパターンから以前現れたコードネーム・バグバズンだと思われます。
ただし、反応数値から見て今回は地中に潜っている。
おそらく先の戦いでウルトラマンに羽根をもがれ、
空から地中へ活動の場を移したのでしょう。
組成データから判断して、ターゲットの体表は固い。
まず冷却弾で凍結してから強化装甲弾で破壊してください。」
その指示を受けてナイトレイダーはパルスブレイガーに冷却弾をセットする。
「それから…、工場内に7歳の女の子が取り残されている可能性があります。」
イラストレーターの言葉を受けて、驚くナイトレイダー。

「確かですか？」
「封鎖エリアからの未確認情報ですが…、念のため、視野に入れて行動してください。」
「了解…。」
そして、和倉隊長、石堀隊員のA班は正面、
西条副隊長と平木隊員のB班は裏から回り込む事になった。

廃工場から少し離れた荒野に到着したしんのすけはエボルトラスターを握り、目を閉じた。
脳裏に廃工場の隅で子犬と一緒に縮こまっている里奈の姿が映る。
しんのすけは目を開き、エボルトラスターを構えようとするが、
その瞬間、どこかから闇の光弾が撃ち込まれてきた。
「うわっ！？」
撃ち込まれた闇の光弾をなんとかかわすしんのすけ。
そこに女性のような、それでありながら異様に低い笑い声が聞こえてきた。
「誰だ！？」
しんのすけの問いに答えるかのように、赤と黒が混じりあった、
頭に2本の角が生えたピエロを思わせる存在が姿を現した。
死人のように光を宿していない目が赤く光る。
「ファウスト…。」

その頃、ナイトレイダーはパルスブレイガーで
ビースト振動波を探りながら工場内を進んでいった。
やがてB班は先程、若者達が絵を描いていた場所にやって来た。
西条副隊長が壁に描かれた絵を手で触って塗料がまだ乾ききっていない事を確認すると、
平木隊員が地面に落ちていたカメラを再生して、若者達が穴に引きずり込まれる場面を見た。
それを見て険しい顔になる西条副隊長と平木隊員。

しんのすけはブラストショットを赤き死の魔人・ファウストに向けて撃つが、
ファウストは腕でそれをいなすと、逆に腕から闇の光弾・ダークフェザーを撃った。
避けるしんのすけだったが、避けた先には既にファウストが待ち構えていた。
再びファウストの目が赤く光ると、言葉が発せられた。
「逃げても無駄だ…。何故なら私は、お前の影なのだから…。」
「影？」
「光と影…。お前の手にした光が私という影を作り出した…。」
「意味分かんないゾ。」
「いずれ分かる…。」
しんのすけはその言葉を聞くと、エボルトラスターを掲げて等身大のウルトラマンに変身。
それを見て、ファウストはウルトラマンに向けて構えを取った。
荒野に人間大のウルトラマンとファウストが対峙する。
一方、イラストレーターはＣＩＣでその状況を察知した。
「特殊振動波が二つ？　しかもこれは…。」

廃工場内を進むＢ班。
壁に立てかけられていたパイプが倒れ、
２人はその方向にディバイトランチャーを向ける。
「もう、脅かさないでよ！」
しかし、何も現れず平木隊員は文句を言って、
西条副隊長は一息ついて、それぞれディバイトランチャーを降ろすが、
その時、地面から不気味な音が迫ってきた。
急いで２人がディバイトランチャーを地面に撃ち込むと、
地面が陥没して巨大な穴が現れ、

その中からちらりとバグバズンの管状の舌が現れたが、
すぐさま穴の奥へと消えていってしまった。
後を追う2人だったが、平木隊員はふと横を見た時に
里奈と子犬を見つけ、それに気をとられて立ち止まってしまった。
「詩織、どうしたの？」
「今、子犬を抱えた女の子が…。」
2人は先程、平木隊員が里奈と子犬を見た場所に戻るが、
そこには既に誰もいなかった。
「そんな…、確かにここに…。」
平木隊員の呟きを受けて、西条副隊長は和倉隊長に指示を仰ごうとしたが、
パルスブレイガーはノイズが走り、通信できない状態になっていた。
「強力な電波障害だわ…。これもビーストの影響？」

荒野で繰り広げられるウルトラマンとファウストの戦いはファウスト優勢に進んでいた。
ウルトラマンは巨大化して、
人間大のままのファウストを見下ろすとそのまま殴り潰そうとするが、
ファウストはそれを両手で受け止め、そのまま自分も巨大化してウルトラマンを弾き飛ばした。
続いてウルトラマンはジュネッスにスタイルチェンジして、
メタフィールドを展開するが、目が赤く光ったファウストは不気味に笑う。
「お前に有利な空間にはさせない…。」
そして、ファウストが光の無いコアゲージの前に両手を出して、
闇の塊を作り、両腕を掲げると、
天から舞い降りるメタフィールドの光に対抗するように闇が大地から湧き上がってきた。
「闇に染まれ…！」

そしてウルトラマンは剥き出しの岩盤が広がり、
絵の具で塗りこまれたような闇の空に覆われた世界に立ち尽くした。
空間そのものから不気味な声が響いてくる。
「ここは無限の闇、ダークフィールド。光の存在であるお前に…勝ち目は無い。」

ウルトラマンはダークフィールドを見渡すが、
その時、背後にファウストが突如出現。
発せられた衝撃弾・ダークフラッシャーをウルトラマンはなんとかかわすが、
すぐさまファウストは無数の闇の光弾・ダーククラスターで頭上からウルトラマンを攻撃した。
「脆すぎる…。正直、期待外れだな…。」
ファウストはダメージを受けて倒れ込んだウルトラマンの首根っこを掴んで持ち上げた。
「この闇の中で息絶え、消え去るがいい…！」
笑うファウストだったが、ウルトラマンは力を振り絞り、
ファウストを蹴り飛ばすと、クロスレイ・シュトロームを放って、
ファウストを吹き飛ばした。
ウルトラマンはそのまま止めを刺そうとするが、
ダークフィールド内で長く戦い過ぎた為、これ以上戦い続ける力が残っていなかった。
一方、ファウストはよろよろと立ち上がりながらも不気味な笑い声を上げた。
「それでこそ戦う意味がある…。また楽しませてくれよ…。」
そう言い残してファウストは闇に溶けて消え、ダークフィールドも消え去った。
元の荒野に戻ったしんのすけはそのまま力尽きて地面へと倒れ込む。
「ファウスト…。あいつ何者なんだ…？」
そう呟くと、しんのすけは立ち上がり、廃工場に向かってよろよろ

と歩き始めた。

「どこ行ったんだろう…。」

廃工場の中を探し回るしんのすけだったが、里奈と子犬は見つからない。

周りを見回し、半開きのシャッターを見つけると中に入っていった。

その時、足下が崩れ、しんのすけは体勢を崩して倒れ込んでしまう。

急いで立ち上がったしんのすけは

穴の中にバグバズンの姿を見るとブラストショットを撃ち、

ブラストショットを受けたバグバズンは撤退した。

当面の危機を乗り越え、しんのすけはホッと一息つくが、

背後から物音がして、再びブラストショットを構える。

見るとそこには子犬を抱く里奈がいて、

しんのすけは再びホッと一息つくとブラストショットを降ろして里奈に話しかけた。

「名前は？」

「杉山里奈…。」

怯え震えながらも何とか答える里奈にしんのすけは頷く。

「そう、とにかくここから逃げよう。」

頷く里奈の手をとって走り出そうとするしんのすけだったが、

里奈の足は震えてもつれ、転んでしまった。

「大丈夫？」

しんのすけは里奈を抱き起こした時、体の震えが想像以上だった事に気づき、

まず里奈の気持ちを少しでも落ち着かせる事にした。

腰を屈めて里奈の目線まで下がり、子犬を指差して話しかける。

「その子犬、何て名前？」

「まだ付けてない…。」

震えながらも答える里奈。

「どうして？」

「ママが拾った子犬は元の場所に返しなさいって、名前を付けたらもっとお別れが寂しいから…。…でも、やっぱり捨てられなくて…。」
それを聞いてしんのすけは声を張り上げて答える。
「大丈夫！　もしママが飼っちゃダメって言っても、オラがなんとか説得するって！」
「え？　ほんと？」
「ほんと、ほんと。で、名前なんだけど、ジョンなんていいんじゃない？」
「ジョン？」
「うん。オラが昔見ていたロボットアニメの主人公の名前。カンタムロボっていうロボットと一緒に悪いロボットと戦うんだゾ。」
「ふーん…。」
しんのすけの会話に付き合っているうち、里奈は少しずつ落ち着きを取り戻していく。
「オラがついてるから大丈夫！　怖がらなくていいゾ。」
「お兄ちゃん、私を助けに来てくれたの？」
里奈の問いにしんのすけは少し胸を張って答える。
「うん。必ず里奈ちゃんとジョンをおうちに帰してあげる！　男の約束だゾ！」
「良かった…。」
里奈の顔に笑顔が戻り、それを見てしんのすけも少し笑顔になるが、その時、壁を突き破って巨大なイナゴ、
バグバズンの尾部の顔がしんのすけと里奈の前に現れた。
しんのすけは里奈を後ろに下げてブラストショットをバグバズンに向けて撃つが、
先程とは違い、バグバズンはダメージに耐え、しんのすけと里奈に近づいていった。
「くっそ…！」

その時、冷却弾を受けてバグバズンが凍結する。
冷却弾が撃ち込まれた方向を見ると西条副隊長と平木隊員がいた。
「早くこっちに！」
西条副隊長がバグバズンをひきつけているうちに
しんのすけは子犬を抱えて里奈と平木隊員と共に走り出した。

廃工場の中からしんのすけ達が走り出ると、
次の瞬間、建物が崩れ去ってバグバズンがその巨体を現した。辺りは既に夜になっていた。
そこにやって来た和倉隊長達がバグバズンに向けて冷却弾を一斉に発射。
冷却弾を受けたバグバズンは凍結しながらも動こうと必死にもがくが、
この期を逃すまいと西条副隊長達はディバイトランチャーを、
しんのすけはブラストショットを撃ち、苦しみ暴れる中、
バグバズンは凍結した体表を破壊され、遂に完全に崩壊して光の粒となった。
「よっしゃあ！」
勝利に思わずガッツポーズをするしんのすけ。

一方、ノイズが走った画面を前にイラストレーターが手を組んで俯いていると、
和倉隊長からミッション終了の報告が入った。
「こちらナイトレイダー。ターゲットを撃破。」
「こちらＣＩＣ。強力な電波障害で交信不能でしたが、状況は把握しています。」

現場ではホワイトスイーパーがバグバズンのサンプルを回収する傍ら、
里奈が子犬を抱いて立っていた。

西条副隊長はそんな里奈に近づいて笑顔で話しかけた。
「怖かったわね。でも、もうおうちに帰れるから安心して。」
「うん。」
西条副隊長に里奈は笑顔で答え、西条副隊長も笑顔で頷いた。
少し離れた所でしんのすけはそれを見ていたが、
その時、Ｍ・Ｐの車がやって来て、中から大原リーダーと三沢が降りてきた。
「ご苦労様です。」
「お願いします。」
和倉隊長と短い言葉を交わすと大原リーダーは西条副隊長に尋ねる。
「生存者はこの子だけ?」
「いえ、後…、あそこにいる…。」
西条副隊長は大原リーダーに答えて、しんのすけの方を見るが、
既にしんのすけがいた場所には何もなく、西条副隊長は驚いて周りを見回す。
大原リーダーはそんな西条副隊長を見て、状況を悟ると、
屈んで里奈と同じ目線に下がって笑顔で話しかけた。
「今からママの所に帰りましょう。」
「あ、うん…、でも…。」
里奈は子犬を見て不安な顔をのぞかせるが、大原リーダーは笑顔で答える。
「大丈夫。その子犬を飼う事、
ママはきっと許してくれるわ。私が話してあげるから。」
「本当?」
里奈の問いに大原リーダーは笑顔で頷く。
（あの人、どっかで見たような…。）
暗くて見えにくい中、物陰から大原リーダーを見て、そう思うしんのすけ。
「さぁ、行きましょう。」
そう言って大原リーダーは里奈を車に乗せ、

扉が閉ざされ、しんのすけの前から去っていった。
「…良かった。」
里奈を見送ったしんのすけは
ナイトレイダーに気づかれないように、その場を立ち去った。

翌日、フォートレスフリーダムのコマンドルーム。
石堀隊員が資料を持って和倉隊長に歩み寄ってきた。
「隊長。昨日の妨害電波の正体が分かりました。」
「やはり、ビーストが関係していたのか？」
「というより、例の巨人、ウルトラマンが関係しているようです。」
「ウルトラマンが？」
驚く和倉隊長に向かって石堀隊員は画面にある波形のデータを映した。
「過去にウルトラマンが現れた時に確認された波形です。そしてこれが今回。」
画面に新たに映し出される波形を見て和倉隊長が呟く。
「この特殊振動波が電波障害を招いていたのか。」
「えぇ。ですが…。」
石堀隊員は画面の二つの波形を合わせた。
「これは…。」
呟く和倉隊長に石堀隊員が答える。
「基本パターンは同じなんですが、正反対の波形。
つまり、表裏一体の関係というわけです。光と影みたいに。」
「光と…影？」
その時、西条副隊長と平木隊員がＴＬＴの査問会から帰って来た。
先の戦闘で2人と一緒に現場にいた少年、しんのすけが問題になったのだった。
「また昔みたいに始末書書かなきゃなんないのか…。やんなっちゃうな…。」
愚痴を言う平木隊員。

「昔みたいにって、昔も始末書書いてたのか？」
「えぇ…。婦人警官だった頃に、色々あってさ…。」
「へぇ…。銃を乱射したりとか？　ほら、昔のギャグ漫画であったみたいに…。」
からかう石堀隊員だったが、平木隊員はそんな石堀隊員を睨み付けた。
「お、おい…。本気にするなよ。冗談だって…。」
そんなやりとりから一人離れて、
西条副隊長は画面に表示されている特殊振動波を見る。

「大原リーダー。どうしてあの時、あの少年の存在を黙認したのですか？
我々はあの時、あの少年が物陰に隠れていたことを認識していたはずですが。」
ある部屋。三沢が大原リーダーに物陰にいたしんのすけの存在を黙認した理由を尋ねていた。
大原リーダーが三沢を見て答える。
「上から泳がしておくようにという命令が出たの。」
「はぁ…、それで…。しかし、どうして上はそんな命令を…。」
「私にも上の考えていることは分かりませんが、
あなたたちは今まで通り職務を遂行してください。」
大原リーダーと三沢が声のした方向に振り向くと、そこには松永管理官がいた。
「松永管理官…。」
「ここ最近の状況の変化。巨大ビーストに、銀色の巨人、ウルトラマンの出現。
これらの状況は全て、来訪者の予言した通り…なのでしょうか？」
松永管理官の言葉に、大原リーダーと三沢が反応を示す。
「そうそう。確か来訪者に関することは、
トップシークレット扱いでしたね。迂闊でした。」

そう言うと、松永管理官はＭ・Ｐ室から出て行った。

「ファウスト…か。あいつ何者なんだろう…。」
しんのすけは自分の部屋で、ファウストのことについてしばし考え込んでいたが、
考えても思い当たる節がなく、１階に降りて居間に入ると、
みさえがせんべいを頬張りながら寝転んでＴＶを見ていた。
ＴＶでは廃工場で有毒ガスが発生したと伝えられた、
先の事件の奇跡の生還者として里奈が取り上げられていた。

しんのすけが里奈が保護された病院にやって来ると、
里奈は子犬と一緒に元気に遊んでいた。
「そっか…。今日、退院だったんだ…。」
自分が助けた命、里奈の笑顔を見るしんのすけ。
すると、子犬がしんのすけの所に駆け寄って来た。
しんのすけが子犬を抱きかかえると里奈もやって来た。
「ほい。」
子犬を里奈に返すしんのすけ。
「ありがとう！」
笑顔で受け取る里奈。
「良かったじゃん。ジョンを飼っても良いってママが許してくれて。」
「ジョン？　この子はらんまる。ママが付けたの。」
「え？」
里奈の返答にしんのすけは驚くが、驚いているのは里奈も同じだった。
「お兄ちゃん…、誰？」
「誰って…、オラだゾ、里奈ちゃん。」
「どうして里奈の名前を…？」
戸惑うしんのすけの脳裏に昨日見た黒服の集団、Ｍ・Ｐの存在が浮

かぶ。
「そんな…？　そんな！？」
必死の形相で自分の腕を掴んで問い質すしんのすけに里奈は明らかな恐怖を示した。
「やぁ、こんな所にいたのかい？」
その言葉にしんのすけが振り向くと三沢がいた。
「あんたは…。」
しかし、三沢はしんのすけの呟きを無視して里奈に話しかけた。
「ごめんね。このお兄ちゃん、君と他の子を間違えたみたいなんだ。」
三沢が優しい口調で里奈に説明すると、
里奈はしんのすけに向かってにっこりと微笑んだ。
それを見てその場から立ち去る三沢をしんのすけが追う。
そこに大原リーダーと数人のＭ・Ｐがやって来た。
「お前達は、昨日の…。」
その瞬間、大原リーダーの顔を見たしんのすけに衝撃が走った。
「ななこおねいさん…。ななこおねいさんだよね？」
しんのすけは大原リーダーに近づこうとするが、その隣にいた三沢に止められる。
そんなしんのすけを見て、大原リーダーが呟く。
「やっぱり…。あの少年…。あなただったのね。…しんちゃん。」
「大原リーダー。知っているんですか？　この少年を…。」
「えぇ…。」
三沢の問いに答える大原リーダー。
しかし、その目はかつてと違い、冷たいものとなっていた。
「ななこおねいさん…。里奈ちゃんに何をしたの？」
「余計な記憶を消したのよ。」
しんのすけの問いに淡々と答える大原リーダー。
「え…？」
しんのすけの疑問に大原リーダーがさらりと答える。

「あなたもニュースなどを見て気づいているとは思うけど、ビーストによる事件は全て事実が隠蔽されているのよ。事件に遭遇した生存者は全てＴＬＴにある私達メモリーポリス、Ｍ・Ｐによって、ビースト事件に関する記憶を消去されてから普通の生活に戻ることになるの。」

「人の記憶を勝手に消すなんて！　ななこおねいさん…、どうしてそんな…！」

大原リーダーに詰め寄るしんのすけだが、再び三沢に止められる。

「どうしてそんなことを…。そんなこと…、そんなこと許されるの！？」

「許すとか許さないとかより、優先すべきはまず秩序なの。…それにこの世界には知らない方が幸せな事もあるのよ。」

「だけど…！」

しんのすけは大原リーダーのかつてと正反対と言える、変わりように驚き、戸惑う。

会話の後、大原リーダーはしんのすけをある場所に連れて行く事にした。

「あなたにだけは特別に教えてあげるわ。私達の仕事がどんなものかをね。」

「うわぁぁぁぁぁっ！！」

山中のある病院。しんのすけ達が中に入ると、奥から助けを呼ぶ叫び声が響いてきた。

驚くしんのすけに対して、大原リーダーが無表情のまま説明を始める。

「この病室にはビースト事件に遭遇した一人の男性が隔離されているの。」

大原リーダーはある病室に入り、招かれたしんのすけも少し迷った末に中に入った。

部屋はガラス戸によって二つに仕切られていて、
向こう側には怯えた一人の男性が縮こまって震えていた。
「し、信じてくれ！　俺は見たんだ！　本当に化け物を見たんだ！！
化け物が俺のかぞ…、！？　く、来るなー！！」
恐怖で半狂乱になった男性を正視できないしんのすけに対し、
大原リーダーは男性から視線を外す事無く説明を続けた。
「昨日、ナイトレイダーが殲滅したビースト・バグバズンは
一週間前に山中で多数の人間を殺害した。彼は家族と共にその場に居合わせて、
ただ一人生き残ったの。」
「ただ一人って…。」
「家族は全員殺されたわ。妻も、子供も、おそらく彼の目の前でね。
今朝、この病院に収容されるまで、彼は独りきりで怯え続けていたの。
恐ろしい、忌まわしい記憶にね。」
「そんな…。」
衝撃を隠せないしんのすけを見て大原リーダーは一言呟く。
「大丈夫よ。彼は救われる。」
そして大原リーダーはガラス戸の中に入っていき、その奥で強烈な光が発せられた。

「あの子も目撃したのよ。人がビーストに喰い殺される瞬間を。」
「里奈ちゃんが…！？」
「そんな記憶、消えてしまうに越した事はない。それがあの子の為なのよ。違う？」

「どうして、ななこおねいさんが…。どうして…。」
家に帰ったしんのすけは、様変わりしてしまった大原リーダーを思い出し、

そして、彼女の言った言葉に悩んでいた。
あいの携帯電話に電話をかけるが何故かあいは出ず、
メールを送っても返事が無かった。
「この世界には…知らない方が幸せな事もある…か。」
しんのすけの脳裏に浮かぶ、記憶を消されたが故に存在する、里奈
の笑顔。
『ビーストに襲われた記憶なんて消えてしまった方がいい…。
オラは…自分自身を無理やり納得させた…。』…野原しんのすけ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０６　魔人　－ファウスト－（後書き）

闇の巨人・ファウスト登場。
テンポを優先して要素を詰め込んだため少し長くなってます。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０７　警告　－ワーニング－

朝、しんのすけは自分の部屋で悩んでいた。
脳裏に思い浮かぶ自分を攻撃するクロムチェスター。
かつてと大きく変わってしまった大原ななこ。
そして、彼女の言った言葉。それらが、しんのすけの心を苦しめていた。
『何が正しくて、何が間違っているのか…。
この時、オラは誰かにその答えを教えてほしかった…。』

「戦略情報部及び開発部から、
クロムチェスターの新たな強化案が提示されました。」
フォートレスフリーダムのコマンドルーム。
松永管理官がナイトレイダーを前に説明をしていた。
画面にクロムチェスターの映像が映し出される。
「ストライク・フォーメーション。スピード、パワー、機動性。
３機の特性を一つに繋げる事で高機動力を維持しながらも、
今までとは全く異なる能力を発揮できるようになりました。
ウルトラマンが作り出す特殊戦闘用亜空間、メタフィールドへの突入です。」
その言葉に和倉隊長はメタフィールドの光景を思い返した。
「あの空間の中へ…。」
「はい。和倉隊長。かつてあなたのα号が
メタフィールドに侵入できたのはあくまで偶発的現象でしたが、その偶然が本来、
ウルトラマンとビーストだけを取り込む特殊空間の科学的データを
私達にもたらしたのです。
そのデータを基に、石堀隊員らの協力も得て、
私達はメタフィールド境界面との位相同期を行えるようになりまし

た。」
その説明の後、松永管理官はナイトレイダーにストライク・フォーメーション訓練マニュアルを配布して、コマンドルームを後にし、その後、西条副隊長は射撃場に向かった。

射撃場。
無言でディバイトシューターを撃ち続ける西条副隊長の脳裏に先日のひろし達との会話が思い浮かぶ。その事を思い出した瞬間、西条副隊長の撃ったディバイトシューターは的から外れてしまった。動揺する西条副隊長だったが、次の一撃を的の中心に撃ち込んだ。
「ウルトラマンは人ではない…。
ビーストと同じ…。命令があれば奴を攻撃する。
命令が無くても、私は躊躇無く奴を撃つ！　…それだけよ！」

その頃、学校が休みのしんのすけは、
春日部森林公園であいと待ち合わせをしていた。
まだあいは来ておらず、しんのすけは近くにあったベンチに腰掛けた。
あいを待っている間、
しんのすけはあいから貰った翼の生えたぶりぶりざえもんを取り出した。
「しん様ー。」
翼の生えたぶりぶりざえもんを見つめるしんのすけが
遠くから聞こえるあいの声に振り向くと、あいが笑顔で駆け寄ってきた。
しんのすけはそれを見て、立ち上がると、
あいと会話をしながら公園内を歩き始めた。会話が弾み、笑いがこぼれる。
屋台で焼きそばを買って、２人で食べたり、
公園内の池に架かっている橋の上で話したり、ボートに乗ったりし

て楽しんだ後、
やがて、自分達の通っていたふたば幼稚園の前までやって来た。
幼稚園の頃の自分達に思いを馳せて、しんのすけとあいは楽しそうに話す。
『あいと過ごすかけがえのない日々…。
それがビーストとの戦いの中にいるオラの心を支えていた…。
あいはオラにとって本当な大切な存在になってたんだ…。』

『不法投棄は犯罪です』
そんな看板を無視し、秩父地方のある山中で、
ドラム缶に入った産業廃棄物を崖底に蹴飛ばす男達がいた。
妙にテンションが上がってきたのか、
凝ったポーズの蹴りをしたり、掛け声をかけて蹴ったりしていた。
「もっと静かにやれよ。…誰か来るとヤバいだろ。」
運転席に残っていた男が外にいる男達のテンションに乗れずにぶつくさと文句を言っていると、
トラックを大きく揺らす衝撃が走り、呻き声のような声が響き渡った。
「おい！　何ふざけてんだ!」
さすがに我慢できなくなり、男は運転席から降りて注意しに行くが、
トラックの周りは黄色いガスに覆われ、
先程、ドラム缶を蹴り飛ばしていた男達は喉を押さえて苦しんでいた。
その光景に男は唖然とし、思わず後ずさったが、
男達は死に瀕した凄まじい形相で男に迫ってくる。
やがて男も喉を押さえ、苦しみ始めた。
一方、ＣＩＣではイラストレーターがビースト出現を探知していた。
「エリア５、ポイント５６４にビースト振動波確認。
ナイトレイダーにスクランブル要請。」

デートを終え、ＣＤショップに寄った後の帰り道。
しんのすけとあいは楽しそうに話していた。
「あいって、そのアーティストの曲が本当に好きだよね～。」
あいの買ったＣＤを見てしんのすけが呟く。
「えぇ。聞いていて共感できたり、
歌詞に込められた思いが強く感じられる曲が本当に多いの。
関西の出身で、他のＢｅｉｎｇ系のアーティストと同じように、自分で作詞もしていて、
あの『名探偵コモン』のＯＰ曲とかも歌っていらっしゃるの。」
「ふーん。」
そんな会話をしていると、上空からあい目掛けて窓ガラスが降って来た。
「あい！！」
しんのすけは急いであいと共にその場から離れ、
窓ガラスはあいのいた場所に落下。割れたガラスが辺りに散らばった。
「あい！　大丈夫！？」
「大丈夫…。」
そう答えたあいであったが、ショックで半ば放心状態になっていた。
しんのすけは辺りを見渡し、マンションを見つけるが、
とても上空から窓ガラスが落ちてくるような距離ではなかった。
「痛い…！」
激痛に顔を歪め、あいは怪我をした右足首を手で押さえた。
それを見たしんのすけはハンカチを取り出して傷の手当てをする。
自分の傷の手当てをするしんのすけの姿を見てあいは少し嬉しくなった。
「ありがとう…、しん様。」
しんのすけはあいの傷の手当てを終えた。
「一応、病院に行こう。」
「大丈夫よ。私は平気。」

立ち上がり、あいは笑顔で答えた。
その時、ズボンのポケットに入れていた
しんのすけのエボルトラスターが明滅を始めた。
それを知って、しんのすけの表情が暗くなる。
「どうしたの？　しん様。」
あいを気にしつつもしんのすけはあいに見えないようにエボルトラスターを取り出した。
迷った末、しんのすけはエボルトラスターをしまい、
申し訳無さそうにあいの顔を見た。
「ごめん、オラ…。今、ちょっと急用を思い出しちゃって…。」
「え？」
「本当にごめん！」
そう言い残してしんのすけは走り出した。
「しん様…。」
走り去って行ったしんのすけをあいは寂しそうな顔で見送った。

「今回のビースト…。かなりヤバそう…。」
現場に着いたしんのすけ。
目の前には不法投棄をしていた男達が作業着を残して炭化していた。
辺りは既に夜になっていて、空には満月が不気味に輝いている。
その時、背後に気配を感じたしんのすけは振り向き様、
空に輝く満月目掛けてブラストショットを撃った。
放たれた光弾は空中で止まり、不気味な笑い声が聞こえ、
やがて光弾を受け止めた巨大な手が現れ、
その巨大な手の主、ファウストがその姿を現した。
「ファウスト…。どうしてオラにつきまとうんだ？」
その疑問に答える為、ファウストの目が赤く光る。
「その姿のままでは、私と戦えまい…。纏え光を！」
ファウストを睨むしんのすけ。
次の瞬間、ファウストがダークフェザーを撃ってきた。

その一撃を避け、しんのすけはブラストショットを撃つが、
ファウストの拳に弾かれてしまう。
「どうしてそんなにオラと戦いたいんだ？　オラの持つ光と！」
ファウストに向かって叫ぶしんのすけだったが、
ファウストはそれとは別の返事を返した。
「いつまでその姿でいる？　あの警告が、そんなに気になるのか？」
「警告…？」
すぐさまあい目掛けて窓ガラスが降ってきたことを考えるしんのすけ。
そんなしんのすけにファウストは再びダークフェザーを撃ち、
それを避けたしんのすけに向けて続けざま第二撃を放った。
それを見たしんのすけはエボルトラスターを鞘から抜き、
エボルトラスターから発せられた光はダークフェザーを弾き、
しんのすけはウルトラマンに変身した。
「それでいい…。さぁ、楽しませてくれ…。」
不気味に笑いながら呟くファウスト。
ファウストに向けて構えを取るウルトラマン。
深夜の森林にウルトラマンとファウスト。２人の巨人が対峙する。

そこにナイトレイダーのチェスターが到着し、ファウストの存在に
驚く。
「ウルトラマンが…２人？」
平木隊員が驚く一方、
和倉隊長と石堀隊員、西条副隊長はまた違った反応をしていた。
（あの巨人は…。まさか…。）
「角のある方が以前正反対の波形を出した奴…。闇の巨人か…。」
（あいつが…。）
事態に戸惑うチェスターはウルトラマンとファウストの周りを距離
をとって旋回し、
以前に攻撃を受けたウルトラマンはチェスターに対して警戒してい

た。
一方、ファウストは空間に溶け込むようにして消えた。
驚くウルトラマンだったが、その時、地響きが起こり、
地面から毒々しい色彩の巨大な花びらを有するビースト・ラフレイアが姿を現した。
ラフレイアが巨大な花びらを開いて黄色い花粉を噴射し、石堀隊員が分析を始める。
「奴の吐く花粉は可燃性だ。下手に攻撃すると誘爆を引き起こす。」
「ビーストの進行方向約８ｋｍに人口密集地があります。」
「そんな！？」
イラストレーターの言葉に平木隊員が焦る。
その時、ウルトラマンはジュネッスにスタイルチェンジしてメタフィールドを展開。
ウルトラマンとラフレイア、そして花粉がメタフィールドによって地上から隔離される。
「花粉ごと消えた…。」
「メタフィールド…か。」
現状の戦力ではメタフィールドに突入することの出来ないナイトレイダーは
ただそれを見送ることしかできなかった。

メタフィールド内部では、ウルトラマンとラフレイアの戦いが続いていた。
ウルトラマンはラフレイアと組合い、力任せに放り投げる。
倒れ込んだラフレイアに近づこうとした時、ラフレイアが突如花粉を発し、
ウルトラマンは花粉をもろに浴びてしまった。
それと同時に空が歪んでファウストが姿を現し、
以前と同じようにメタフィールドをダークフィールドに書き換えてしまう。

その隙にウルトラマンはラフレイアの蔦に捕らえられて引き寄せられ、
身動きできないウルトラマンにファウストが容赦なく攻撃を浴びせる。
迫るファウストに対し、ウルトラマンはパーティクル・フェザーを放つが、
ファウストは苦も無く拳で弾くと、ダークフィールド内の闇を吸収し、
両腕を合わせて必殺光線、ダークレイ・ジャビロームを放った。
ウルトラマンは全身に力を込めて何とか体を動かし、ギリギリ避け、
避けられたダークレイ・ジャビロームはラフレイアの蔦を切断してしまった。
体が自由になったウルトラマンはファウストに飛び蹴りを浴びせる。
飛び蹴りを受けたファウストは体勢を崩しながらもダークフェザーを放って反撃するが、
ウルトラマンはそれをかわしてパーティクル・フェザーを放ち、
ファウストの右足首をかすめた。
ただかすめただけであったが、ファウストは異常に苦しみ、
ウルトラマンは不思議に思いながらも好機を逃すまいとクロスレイ・シュトロームの構えを取るが、
ファウストは空間に溶け込むように姿を消し、
ラフレイアもそれと同時に姿を消してしまった。
やがてダークフィールドも消え去り、
朝焼けの中、元の森林にウルトラマンが戻ってきた。
一方、チェスターはそれぞれ着陸していて、
チェスターαの西条副隊長はウルトラマンの姿を複雑な眼差しで見つめた。
やがてウルトラマンが光となって消えると、
少し考えた後、チェスターから出て行ってしまった。

しんのすけは光となって地上に降りると、苦痛に顔を歪ませつつもブラストショットを上空に撃って、ストーンフリューゲルを呼ぼうとするが、
前方の水辺に人間、それも見覚えのある人間を見つけて驚いた。
急いでその人間に駆け寄って抱き起こす。
「そんな…、どうして？」
しんのすけが抱きかかえた人物、それはあいだった。
『どうしてあいがこんなところにいるのか。その時のオラには、目の前で起きてる事がまるで理解できなかった。』…野原しんのすけ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０７　警告　－ワーニング－（後書き）

たった一つの真実見抜く、見た目は普通、中身は適能者（デュナミスト）。
その名は名探偵コモン！！

…って感じで今回は「ネクサス」主人公、孤門にちなんだネタを入れてみました。
ちなみにあいが好きなＢｅｉｎｇ系アーティストは「名探偵コナン」や、
「ウルトラマンネクサス」にも関係のある愛内里菜です。
（復帰してほしいな。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０８　突入　－ストライクフォーメーション－

先程までビーストとナイトレイダー、ウルトラマンの戦闘が行われていた森林。
そんなありえない場所であいを見つけたしんのすけは戸惑いを隠せなかった。
『どうしてあいがこんなとこに？　目の前の出来事に驚きながらも、この時、オラは薄々と不安を感じてたんだ…。
オラ達の世界をじわじわと壊そうとする何かを…。』

「あい！」
しんのすけが水辺に倒れるあいを抱き起こして呼びかけると、やがてあいの目がゆっくりと開かれた。
「しん…様？」
「あい…大丈夫？」
「…えぇ。」
しんのすけの手から離れ、あいは水と泥に濡れた体を起こした。
「良かった…。でも、どうしてこんなとこに？」
あいの無事にしんのすけは胸を撫で下ろすが、あい自身は自分の置かれている状況を理解できず、呆然と辺りを見渡す。
ふと手を開くとそこには“ＮＡＧＩ　ＳＡＩＪＹＯ”と書かれたドッグタグが握られていた。
「なぎ…さいじょう…？」
その時、しんのすけの背後に
西条副隊長が現れてしんのすけとあいの存在に驚きを見せた。
「また、あんたか…！」
西条副隊長を見たしんのすけは驚き、あいを抱いて立たせると、警戒を示した。

西条副隊長はそんなしんのすけをしばらく黙って見ていたが、
あいの持っているドックタグを見て表情が一変した。
「それは…！」
あいの手から西条副隊長はドックタグを受け取る。
しんのすけは警戒しつつも西条副隊長に尋ねた。
「それ、あんたのなのか？　あい…彼女が持っていたゾ…。
もしかして知っているのか？　あいがこんなとこにいたわけを…。」
「どこで手に入れたの！」
西条副隊長の強い語気にしんのすけは驚き、あいは怯えた。
「言いなさい！　これをどうして持っていたの！」
しかし、あいは事情を飲み込めなくて答えられず、
それを知った西条副隊長は深呼吸をして落ち着いた後、
ドッグタグを握り締めてあいを見ながら呟いた。
「会ったのね…。あの男…溝呂木に…！」

「あのビースト…ラフレイアがまだ生きている？」
その後のフォートレスフリーダムのコマンドルーム。
和倉隊長が石堀隊員の報告に驚く。
「イラストレーターが振動波を確認しています。
ウルトラマンがメタフィールドで仕留めそこなったようですね。
おそらく、あの黒い巨人もまだ…。」
石堀隊員の言葉に和倉隊長の顔が曇る。

一方、しんのすけはあいが保護された病院に見舞いにやって来ていた。
そして、あいを保護した西条副隊長も病院にいた。
「西条副隊長。」
後ろから聞こえてきた声に振り向いた西条副隊長はその声の主、
大原リーダーの所に向かった。
「もう記憶処理を？」

「その必要は無かったわ。」
「必要無い？」
「彼女、何も覚えていないわ。」
「…嘘を付いている可能性は？」
「私達に対してそれができると思う？」
自嘲するかの様な笑みを浮かべる大原リーダーに
西条副隊長は腕を組んで諦めたように呟く。
「そうでしょうね…。」
そんな西条副隊長の様子を見て大原リーダーが尋ねる。
「何か隠しているわね？」
しばし沈黙した後、西条副隊長が重い口を開く。
「…あの男と接触した可能性があります。」
その言葉に大原リーダーの顔に驚きの色が現れる。
「あの男…。溝呂木？」
その時、西条副隊長と大原リーダーの目にしんのすけの姿が入った。
「必ず何かを仕掛けてくる。奴は…そういう男です！」
「そう…。どちらにせよ、
彼女はしばらく私達の監視下に置く事になったわ。気になる事もあるしね。」
大原リーダーの言葉を受けて、
近くにいた三沢が西条副隊長に向かって無言で会釈をした。

外のベンチに腰掛けるしんのすけとあい。
「色々な事聞かれたけれど…、しん様と別れた後の事…、
何も覚えてないの…。どうして、私はあんな所にいたの？」
あいの言葉にしんのすけは前回の戦いでファウストに言われた、
「あの警告」という言葉を思い出した。
「しん様…。私…。」
震えるあいの手をしんのすけが優しく握る。
「大丈夫！　オラが付いてるって！　あと…、あい。昨日のことだ

けど…。」
しんのすけが昨日のことを改めてあいに謝ろうとすると、あいは首を横に振った。
「そんなこと…。しん様は私の傷の手当てをしてくれたんですもの。全然気にしていないわ。」
「そっか…、良かった～。気にしてたらどうしようかって思ったゾ。」
しんのすけは安堵の息を吐き、そんなしんのすけを見てあいは少し笑顔になり、
2人は再び手をしっかりと握りなおした。
その様子を西条副隊長と大原リーダーが病院の中から見つめる。
「なかなか、いい関係じゃない。」
少し微笑む大原リーダーに対し、
西条副隊長は無言でしんのすけを見つめ続けていた。
それらの様子を赤い視界が覗いていた事に気づく者は誰一人いなかった。

その後、フォートレスフリーダムのコマンドルーム。
ラフレイアへの対策が話し合われていた。
「殲滅は不可能？」
和倉隊長が驚き、ラフレイアの映像を前に石堀隊員が説明を始める。
「はい。もし仮に殲滅に成功した場合、ラフレイアが含有している相当量の花粉が拡散するのは間違いありません。」
「こいつの花粉ってそんなにヤバいの？　可燃性だっけ？」
平木隊員の質問に石堀隊員が答える。
「それだけじゃなかったんだ。
付着する事で瞬時に気化し超高熱を発する。結果はこれだ。」
石堀隊員が画面を切り替えると、炭化した人間の映像が映し出された。

「それが風に乗りにでもすると…。」
和倉隊長の言葉を受け、石堀隊員は今度は地図の映像を出した。
「密度は水素並みだ。拡散速度を考えると風化だけで済むはずがない。」
「ウルトラマンの力を借りるしかなさそうですね。」
ナイトレイダーが振り向いた先にイラストレーターのホログラムが立っていた。
「ストライクチェスターに合体。メタフィールド内で殲滅…。という事ですね。」
無言で頷くイラストレーターに和倉隊長はしばし考えるが、
西条副隊長はその作戦に反発を示した。
「ですが、奴がまた都合よく現れるとは限りません！
それに、ストライク・フォーメーションの訓練もまだ不十分です！」
そんな西条副隊長を他のナイトレイダーが見つめる。
和倉隊長はそんな西条副隊長を見て、作戦を指示した。
「フォーメーションの訓練は作戦開始までの限られた時間で間に合わせてくれ。
西条、お前が合体管制を務めろ。俺がガンナーを務める。」
「隊長！」
再び反論しようとする西条副隊長に和倉隊長が話しかける。
「確かに、ウルトラマンがまた現れるとは限らない。
だが…、可能性に賭けてみる価値はあると思う。俺は…彼を信じる。」
「ですが、隊長…。」
しかし、西条副隊長が全て言い終わる前に西条副隊長以外の隊員達は、
さっそく作戦に向けての準備を始めていた。
そんな隊員達を見て、西条副隊長は悔しげに唇を噛んだ。
「お嬢様がしんのすけ君に惚れた理由がなんとなく分かりました。」

病院では黒磯があいに話しかけていた。
あいは少し嬉しそうに、しかし、少し黒磯への呆れを持って答えた。
「やっと分かったの？　黒磯は本当に鈍いのね。」
「はぁ…。でも、あのしんのすけ君が本気でお嬢様のことを好きになるとは…。
幼少期の頃のお嬢様の願いがやっと叶ったということですね。」
「えぇ。」
あいは笑顔で答えた。
その会話の後、黒磯は一礼し部屋から出て行った。
独りになった瞬間、あいの表情が突然暗くなった。
「やっぱりそうよ…。どうしちゃったんだろう、私…。
しん様と出会った時の事を思い出せない…。どうして…？」
悩み、恐怖するあい。
その時、突如、全身から力が抜け落ちると、
視点が定まらなくなり、赤い視界があいの視界と同化した。

その夜、地面から黄色い花粉が噴出し、ラフレイアが姿を現した。
「コードネーム・ラフレイアが活動を再開。ナイトレイダーにスクランブル要請。」
イラストレーターの指示を受けてナイトレイダーが出撃し、
ラフレイア出現地点にはストーンフリューゲルが降臨、しんのすけが地面に降り立った。
「またファウストが現れるかも…。今度もあの闇に飲まれたら…。」
しんのすけの脳裏に自分のエネルギーを著しく消耗するメタフィールド、
自分の力を抑え、相手の力を解放するダークフィールドの事がよぎるが、
次の瞬間、脳裏に笑顔のあいが思い浮かび、
しんのすけはエボルトラスターを力強く握り締め、天高く掲げた。
夜の森にウルトラマンがその巨体を現し、そこにチェスターが到着

する。
「来たか…。ウルトラマン…。」
和倉隊長が呟き、イラストレーターが指示を送ってくる。
「ウルトラマンがメタフィールド展開後、
ストライク・フォーメーションに移行。殲滅作戦を開始してください。」
ウルトラマンはすぐさまジュネッスにスタイルチェンジしてメタフィールドを展開。
ウルトラマンとラフレイアがメタフィールドの中に姿を消すのを見て、
ナイトレイダーはストライク・フォーメーションを開始した。
「管制プログラムＳＴ。キャンディデイト2。ヴァージョン5。レベル6。」
チェスターαの西条副隊長、βの和倉隊長、γの石堀隊員がそれぞれ合体管制プログラムを進めていく。
「セルフチェッククリア。ロード完了！」
「プログラムタイマー、同期信号受信確認。対衛星マスク継続中。」
石堀隊員と平木隊員の最後の操作を受けて、
画面に“ＳＴＡＮＤ　ＢＹ　ＯＫ”の文字が表示される。
それを確認して西条副隊長が叫ぶ。
「セット！　イントゥ・ストライクチェスター！」
チェスターα、β、γがそれぞれ合体。ストライクチェスターが完成。
西条副隊長の操縦により、
ストライクチェスターは一気に加速を始め、凄まじいＧが搭乗者を襲う。
「メタルジェネレーター、臨界まで８９％。９５…。臨界到達！」
「メタフィールド境界との位相同期開始を確認。」
平木隊員と石堀隊員の報告を受け、ストライクチェスターは空間に突入、

光の中を進み、メタフィールドへと辿り着くと、
既にウルトラマンとラフレイアの戦いが始まっていた。
「これが…メタフィールド…。」
初めて来た異世界に驚きを隠せないナイトレイダー。
一方、ウルトラマンもナイトレイダーがメタフィールド内までやって来た事に驚いていた。

「ダメージの残る体で、自らの墓場を作り出したか…。」
気がつくと、いつの間にかウルトラマンの横に目を赤く光らせたファウストが姿を現していた。
ファウストはストライクチェスターを見て笑うと、ダークフィールドを展開し、
ウルトラマンが作り出した光の世界を自ら作り出した闇の世界で侵食していった。
「黒いウルトラマンまで現れた！　一体何してるの？」
驚く平木隊員に石堀隊員が説明する。
「別の位相に変化している。」
「分かるように説明して。」
西条副隊長の注文を受けて石堀隊員が説明し直す。
「メタフィールドをプラスの褶曲とするならば、ここはマイナスの褶曲。
黒いウルトラマンが正と負の符号を転換して自分に有利な空間に作り変えたんだ。」
石堀隊員の説明を聞いた和倉隊長が結論を下す。
「長居は無用だな…。殲滅作戦開始！」
「了解！」
ウルトラマンがラフレイアの蔦に絡みとられないようにしながら、
ファウストの攻撃を防いでいる隙に、
ストライクチェスターはラフレイアの背後に回り込んだ。
「ターゲット、ロックオン。スパイダーミサイル、ファイア！」

和倉隊長はスパイダーミサイルの照準をラフレイアに合わせ、スイッチを押す。
しかし、何故かミサイルが発射されない。スイッチを何度押しても無駄であった。
「何？」
その時、ストライクチェスター全体を大きな衝撃が襲った。
「右ギバンドランブ接合部に異常加熱！　冷却が追いつきません！」
大声を上げる平木隊員。石堀隊員も声を張り上げて機体異常の原因を説明する。
「位相変化の影響だ！　このままじゃ位相同期可能範囲から離脱する！」
事態を理解した和倉隊長はすぐさま武装をスパイダーミサイルからストライクバニッシャーに切り替える。
しかし、それと同時に平木隊員が更なる状況悪化を報告する。
「転換効率低下！　臨界を維持できません！」
それを聞いた和倉隊長が平木隊員に指示を送る。
「バニッシャー用のパワーをバイパスしてメインに回せ！」
「了解！」
西条副隊長が和倉隊長に尋ねる。
「撃たないんですか？」
「チャンバーに一発分だけ残す。」
目の前で戦いを繰り広げているウルトラマンを見ながら、和倉隊長はトリガーを強く握り締めて答えた。

一方、ウルトラマンはラフレイアとファウストに挟まれ、容赦なく攻撃を浴びせられる。
それを見た和倉隊長は西条副隊長に頼んだ。
「西条。ウルトラマンとラフレイアの間を抜けて上昇してくれ！」
指示を受け、西条副隊長はストライクチェスターをウルトラマンとラフレイアの間に飛ばす。

その途中、和倉隊長はウルトラマンの方を見て、ウルトラマンも和倉隊長の方を見る。
何かを伝えるようにゆっくりと頷く和倉隊長と、
何かを受け取ったようにゆっくりと頷くウルトラマン。
西条副隊長の操縦するストライクチェスターはそこから急上昇し、
そのまま今度は急降下した。
凄まじいGが襲う中、和倉隊長はラフレイアの花粉袋に照準を合わせて叫んだ。
「ストライクバニッシャー、シュート！」
それに合わせてウルトラマンは肘打ちをしてファウストから逃れ、
急いでそこから距離をとった。
次の瞬間、ストライクバニッシャーがラフレイアの花粉袋に命中。
苦しむラフレイアは花粉を辺りに撒き散らし、
近くにいたファウストを巻き込んで大爆発を起こした。
「粉塵爆発か…。」
呟く石堀隊員。
ラフレイアは光の粒となり、さらに広がる爆発はダークフィールド全てを飲み込まんとした。
ファウストは爆発に巻き込まれて姿を消し、ウルトラマンは空へと逃れた。
「メタルジェネレーター臨界を割りました！」
「メタフィールドとの位相同期喪失！　空間位相、復元していきます！」
平木隊員と石堀隊員の報告の通り、
ストライクチェスターはもはやダークフィールドに留まる事が不可能になっていた。
「位相軸元点まで、4、3、2、1…！」
石堀隊員のカウントダウンに合わせ、
ストライクチェスターはやって来た時と同じように
今度はダークフィールド内の空間に突入し、光の中を進み、元の世

界に戻ってきた。
しかし、無事に元の世界に戻って来れたと思いきや、
ダークフィールド転換の影響でストライクチェスターには
既に飛行するだけの力が残っておらず、失速し急降下していった。

西条副隊長が何とか持ち直そうとするも、
どうにもならずそのまま地面に向かって墜落していく。
皆が諦めかけた瞬間、機体に大きな衝撃が走った。
「何？」
西条副隊長は驚き、平木隊員は外を見て、自分達が墜落を免れた事
を知った。
和倉隊長が見るとウルトラマンがストライクチェスターを受け止め
ていた。
「ウルトラマン…！」
和倉隊長はウルトラマンを見上げ、
西条副隊長は己の表情を見られないように顔を逸らした。
ウルトラマンはストライクチェスターを静かに地上に降ろすと光と
なって消え、
ナイトレイダーはストライクチェスターから降りてそれを見送った。
「ウルトラマーン！　ありがとぉー！」
と平木隊員はウルトラマンの消えた場所に向けて大声で呼びかけた。
「ま、ウルトラマンが助けてくれなかったら、俺達は死んでたわけ
だからな…。」
ウルトラマンに助けられたことに思いを馳せて石堀隊員が呟く。
「そうよ。助けてくれたら『ありがとう』って言わないと！」
「そうだな…。」
そのやりとりを見て和倉隊長が微笑んでいると、
平木隊員が手を高く上げ、石堀隊員とハイタッチを交わした。
「イェイ！」
笑顔でじゃれあう石堀隊員と平木隊員。

戦いを終えたしんのすけはそんなナイトレイダーを遠くから見て、
「ありがとう…か。」
と呟くと、少し嬉しそうにその場を立ち去った。
一方、和倉隊長も勝利に喜ぶ二人を見て笑顔を漏らすが、
西条副隊長の方を見てすぐにその笑顔は消えた。
その西条副隊長は皆から距離を置き、自分の力だけで墜落を阻止できず、
ウルトラマンに助けられた事に思いを馳せて深いため息を吐くと、
胸元から二つのドッグタグ、自分のドッグタグともう一人の物を見て静かに呟いた。
「溝呂木…眞也…。」

「もうこんな時間か…。」
あいの入院している病院では、監視兼保護として残った三沢が携帯電話で時刻を見ていた。
携帯電話をしまった後、あいの病室から大きな物音がして、
気になった三沢が病室に入るとあいが床に倒れていた。

翌日、あいは昨日と同じベンチに腰掛けていたが、
その表情は暗く、体が小刻みに震えていた。
そこに何も知らないしんのすけがやって来る。
「ごめん！　遅れて…。」
しかし、しんのすけの言葉に答えず、あいはいきなり立ち上がる。
「って、どしたの？」
「…来て。」
戸惑うしんのすけの手を握り、あいは何かから逃げるように走り出した。
やがてあいとしんのすけは誰もいない、
明るく優しい木漏れ日が差す林の中にやって来た。
しんのすけに表情を見せないあい。走ってきたので息を切らし、汗

をかいていた。
そのただならぬ雰囲気にしんのすけは何も話しかけられなかったが、
やがて振り向いたあいはしんのすけの顔を見て一言告げた。
「キス…して…。」
突然の申し出に驚くしんのすけ。
しかし、あいは少し震えながらもゆっくりとしんのすけに近づいていった。
しんのすけはあいの肩に手をかけ、
あいは瞳を閉じてしんのすけの顔に近づいていく。
そして二人の唇が触れ合った。しばし口付けを交わす2人。
やがて二人は離れ、あいは自分の唇に手を当てると、
そこに何かを感じ、確信して、笑顔を取り戻した。
愛する人に抱きしめられるあいと愛する人を抱きしめるしんのすけ。
その時、2人は確かにお互いの存在を感じ取っていた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０８　突入　―ストライクフォーメーション―（後書き）

今回は少しご都合主義的展開が入ってしまったなぁ…。
さて、次の話からは原作での“あの展開”に入ります。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０９　人形　－マリオネット－

『あいといる時のオラは幸せでいっぱいだった。
あいとの時間はずっと続くものだと信じて、
オラは２人の未来に、ただ光だけを見つめてた…。でも、本当は…。
』
あいは病院から家に電話をかけ、家族に自分の無事を知らせていた。
「えぇ、大丈夫。もうすぐ退院できると思うから。え？　その日は退院祝いで
高級レストランのシェフを呼ぶですって？　ちょっと、おおげさですわ…。」
しかし、あいが手にしている受話器からはツー、ツー、ツーと無機質な機械音が響いていた。

しんのすけの通っているアクション高校。
翼の生えたぶりぶりざえもんを手にするしんのすけの脳裏に先日のあいとのキスが蘇る。
その時、脳裏に男の声が響く。
「お前は、大切なものを失う…。」
「え？」
声が聞こえて周りを見回すしんのすけ。しかし、周りに声の主はいない。
その時、しんのすけの脳裏にあい目掛けて窓ガラスが降ってきたことが思い浮かんだ。
「あい…！？」

その頃、あいの病室を赤い光が覆っていた。
その赤い光によって本を読むのを止めたあいはベッドから立ち上がると、

ゆっくりと窓へと向かい、ブラインドを開けた。
どこからか脳裏に男の声が聞こえてくる。
「お前は…人形…。」
「誰？」
脳裏に聞こえてくる声にあいが不安げな声で尋ねる。
「俺が作った…美しい人形だ…。」
「誰なの？」
あいが窓の外に目をやると、窓ガラスに映るあいの顔にファウストの顔が重なって浮かび上がってきた。

再びアクション高校。
職員室から帰ってきたしんのすけは教科書等を急いで鞄に詰め込み始めた。
「あれ？　しんちゃん。早退するの？」
「うん。ちょっと…行ってくるゾ！」
マサオの質問にロクに答えず、しんのすけは鞄を背負って、急いで教室を後にした。

あいの病院にやって来た大原リーダーを三沢が出迎える。
「わざわざ申し訳ありません。保護した少女ですが、少し気になる結果が…。」
「酢乙女あい？　彼女が？」
「検査結果の数値なんですが…。」
大原リーダーは三沢から受け取ったデータを見る。
「R7性因子、免疫判定プラス92。これならナイトレイダーにも十分入隊できるレベルね…。」
「いえ、気になる数値はそこではなく…。」
三沢に指摘された数値を見た大原リーダーは思わず驚きの声を上げた。
「この結果は…！　そんな！　この数値が正しければ彼女は…！」

大原リーダーの驚きに三沢は無言で頷く。
「…あの情報は本当だったの？　彼女とその家族はもう…。」
そこにあいの病室を監視していたM・Pが慌ててやって来た。
「酢乙女あいが病室から消えました！」
「え！？」
戸惑う大原リーダー達。
その横を白い寝巻き姿のあいが通り過ぎていくのに気づく者は誰一人いなかった。
一方、あいのことを心配するしんのすけはストーンフリューゲルで病院に向かっていた。

「ただいま…。」
酢乙女邸。自分の家に帰って来たあいは
小さく呟いて門を開けるが、家の中は暗く、誰も出てこなかった。
あいが食堂に通じる扉に視線を向けて、扉に向かうと、向こう側から扉が開けられた。
「あいお嬢様。」
扉を開けて黒磯があいを出迎えた。
「ご主人様、あいお嬢様が帰って来ました。」
黒磯に呼ばれて父と母も出てくる。
「お帰り、あい。」
「思ったより早く退院できたじゃないか。」
「えぇ…。」
あいが涙ぐみながら部屋に入っていくと、その中は明るく温かい光に満ち溢れていた。
「どうしたの？　何かあったの？」
「ちょっと…、怖い事が…。」
涙を拭うあいの体を母が優しく抱きしめる。
「可哀相に。」
「大丈夫、もう何も怖い事なんて無いよ。」

「そうですよ、お嬢様には私達がいるんですから。」
家族の優しい言葉にあいは笑顔を取り戻していく。
「そうよね。私にはこんな素敵な家族がいるんですもの…。」
優しい家族に囲まれ、明るく温かい部屋の中、あいは幸せな一時を過ごしていた。
「そう言えば、あいが話してくれる彼は元気？」
母が尋ね、
「えぇ、この頃あまり会えないけど、元気だと思う。」
あいが答える。
「確か、野原しんのすけ君って言ったね。
あいが幼稚園の頃からずっと想いを抱いていたっていう子だね。」
父が尋ね、
「そうです。ご主人様。あいお嬢様がずっと想いを抱いてた人です。」
あいの代わりに黒磯が答える。
「えぇ。しん様と過ごしている時が一番心が安らぐの。」
あいが答える。あまりにも幸せな一時。
「そうだ…、しん様に連絡しないと…。退院したってこと伝えないと…、でも…。」
あいの顔から笑みが消える。
「しん様って…誰だっけ…？　私は…。」
あいが気づくと、周りには父も母も黒磯もおらず、
テーブルの食器の上に料理も載っていない、ガランとした暗く寒々しい部屋になっていた。
光は消え、部屋の中、家全体を影が支配していた。
「私…、どうして独りぼっちなの？」
周りを見渡すあい。家族は誰もいない。
「お母様はどこ？」
いない。

「お父様は…どこ？」
いない。
「皆、私だけ置いてどこ行っちゃったの…。」
部屋の中、独り、震え、身をすくめるあい。でも、誰もいない。いや、一人だけいた。
あいは背後の鏡から気配を感じ、振り返る。
鏡の前に立つと自分の姿が映る。はずだが、そこにはファウストの姿が映っていた。
「化け物…。」
鏡の中から自分を見つめてくる赤と黒の異形の存在。
あいは後ずさりし、鏡から離れようとするが、
次の瞬間、暗く寒い部屋の中、鏡の前にファウストが立っていた。
そして鏡にはファウストではなく、あいの姿が映っていた。
「化け物…。」
そう呟きながらファウストはあいに向かってゆっくりと近づいていった。

しんのすけはあいが入院していた病院に到着し、
急いで病室に向かおうとしたが、大原リーダーに呼び止められた。
「あいちゃんならいないわ。誰かに連れ出されたか、
自分の意思で抜け出したか、何にしても、病室から消えたわ。」
それを聞いてしんのすけは焦りを募らせる。
「あいは誰かに狙われてるんだ！」
そう言って急いで走ろうとするしんのすけを大原リーダーが再び呼び止める。
「ちょっと、どこへ行くつもり？」
「あいを捜す！」
「家なら行っても無駄よ。一度戻った形跡はあったけど、
今はもういないと報告があったわ。」
「信用できない！　自分の目で確めるゾ！」

きっぱりと言い放ったしんのすけは病院から走り去っていった。
それを見送る大原リーダーに三沢が話しかける。
「大原リーダー、このまま行かせてよろしいのですか？」
「…彼には真実を知る権利があるわ。」

しんのすけはストーンフリューゲルであいの家を目指すが、
突如、黒い光弾がストーンフリューゲルをかすめ、
ストーンフリューゲルは高架下に着陸した。
「ファウスト…。」
しんのすけの目の前には５ｍ程の大きさのファウストが立ち塞がっていた。
「生きてたのか…。」
ストーンフリューゲルから降りたしんのすけはファウストに向けてブラストショットを構えた。
「そこをどけ…。どけぇ！！」
しんのすけを見て、ファウストの目が赤く光る。
「これは運命…。」
「え？」
「私と戦え…。これは運命なのだ。」
目が赤く光り、自分と戦うよう促すファウストに向かってしんのすけが叫ぶ。
「黙れッ！！　お前があいをどっかに…。あいをどこにやったんだ！！」
しんのすけがブラストショットを撃つが、ファウストはそれを手で軽く弾く。
「あい…？　その女はもうじき消える…。」
「え？」
「お前も私の出す無限の闇に飲み込まれ、共に…。」
「黙れッ！　ファウスト、お前はオラが倒す！」
そう言ってしんのすけはエボルトラスターを掲げ、

ファウストと同じ５ｍ程の大きさのウルトラマンに変身した。
ファウストはウルトラマンに向けてダークフラッシャーを撃つが、
ウルトラマンはそれをかわすと、
ジュネッスにスタイルチェンジして巨大化しつつメタフィールドを展開。
ウルトラマンとファウストがメタフィールドに消える直前、
ファウストも巨大化しつつ、ダークフィールドへの書き換えを行った。

ダークフィールドの中。
ウルトラマンは姿の見えないファウストを捜すが、
突如、上空からダーククラスターが降り注いできた。
ウルトラマンは素早くその場から逃げ、上空に飛ぶが、
それを待ち構えていたファウストが隙を捕えて地面に押し倒した。
「私は影…。お前という存在がある限り、私が消えることはない…！」
押し組まれたウルトラマンは力を振り絞ってファウストを蹴り飛ばし、立ち上がろうとするが、
ファウストはそんなウルトラマンに向けて、ダークレイ・ジャビロームを撃ち、
コアゲージに受けて爆発に包まれるウルトラマンを見て笑い声を上げた。
「他愛無い…。」
そう呟くとファウストは立ち去ろうとするが、
ウルトラマンを覆っていた爆発が急速に収束していくのを見て、すぐに立ち止まった。
すぐさま勝負を付けるため、
ウルトラマンはダークレイ・ジャビロームのエネルギーを吸収し、
光に変換して浄化、
そのエネルギーをスピルレイ・ジェネレードとしてファウストに撃

ち返した。
それを左肩に受けたファウストは吹き飛ばされ、
ウルトラマンは止めを刺そうするがダメージが酷く、その場に倒れこんでしまった。
両者共に苦しい状況に陥り、攻撃できないまましばらく睨み合っていると、
先にファウストが姿を消し、続いてダークフィールドも消え、
最後にしんのすけは元の高架下に戻ってきた。
「くそっ！　ファウスト、お前は必ず倒すゾ…！」
そう言うとしんのすけはブラストショットを上空に撃ち、
ストーンフリューゲルを呼び寄せ、再びあいの家に向かった。

「あい！！」
あいの家に辿り着いたしんのすけは
すぐさま近くにあった扉、あいのアトリエへと続く扉を開けた。
「…あい？」
しんのすけの目の前に広がる景色。
それはしんのすけが想像していた優しく明るく温かいものとは程遠い、
異常と恐怖、混沌と破滅と絶望、そして死が溢れ出ていた絵の数々であった。
「これが…あいの絵？」
しんのすけは部屋一面に張られている醜悪な絵に恐怖した。
心臓が激しく脈打ち、汗が吹き出て流れ落ちる。
『人や動物の家族…か。』
『うん、今度美術部の展覧会に出品する作品のテーマなの。家族の肖像。』
しんのすけの脳裏にかつて楽しく語り合っていた、
あいとの幸せだった時の思い出が空しく蘇ってくる。

その頃、森の中をあいが涙ながらに歩いていた。
ファウストがスピルレイ・ジェネレードを受けた部分と同じ、
左肩から大量の血が流れ出て白い素足を赤く塗りこめる。
「教えて…、私は…？」
「お前は…、お前ではない…。」
再び男の声が聞こえてきた。
「そう、お前はただの道具、俺の人形だ。
何故なら、お前という存在はとっくの昔に死んでいるからだ。」
「私が…死んでる？」
衝撃の宣告を受けるあいの脳裏に忌まわしい記憶が蘇った。
急停止するリムジン。運転していたＳＰに文句を言う家族。
車の前に立ちはだかる巨大な化け物。急いで車から降りる家族。
逃げ遅れた母を起こそうとするＳＰ。化け物の爪で殺される母とＳＰ。
駆け寄る父。車が弾かれ、その下敷きになる父。
それを見て絶叫する娘。
そこにやって来た、ナイトレイダーの隊服を着てヘルメットを被った男。
恐怖で喋られなくなった娘は男にしがみつき、震える指で化け物を指差す。
男は娘を後ろに下げ、化け物にディバイトランチャーを構える。
しかし、次の瞬間、男は娘にディバイトランチャーを向けると、
そのまま娘、あいを撃ち抜いた。
それら忌まわしい記憶を思い出したあいは震える指で自分の左肩を触り、
血で真っ赤になった指を見ると、そのままその場に倒れ込んだ。
「そんな…嘘…、こんなの…嘘よ…。助けて…助けて、しん様…。」
一方、しんのすけは部屋の中で呆然と立ち尽くしていた。
『全ての歯車がおかしくなり始めてた…。
まるで、真っ黒な闇がオラ達の世界を覆いつくしていったみたいに

…。』…野原しんのすけ

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　０９　人形　－マリオネット－（後書き）

「ネクサス」本編であらゆる意味で強烈な印象を残したと思われる、“あの展開”にあたる部分に遂に突入しました。
…「ネクサス」をリアルタイムで見ていた人は、朝からあの展開はかなりキツかったんじゃないでしょうか。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１０　別離　ー ロストソウル ー

『まるで…悪い夢の中にでもいるような気分だった。
でも、朝になったら、どんな恐ろしい夢もあっけなく忘れてしまって、
またいつもと変わらない毎日が始まる。
だから早く目覚めてくれ…。オラは心の中で何度も繰り返し叫んでた。』
あいの部屋の中で呆然と座り込むしんのすけ。
その視線の先には、幼稚園の頃の自分とあいが一緒に楽しそうに写っている写真があった。
しんのすけは力無く立ち上がると、すがるようにヒビの入った写真立てを手に取るが、
その瞬間、全身を言いようの無い苦痛が走り、
脳裏にあいと家族が化け物に襲われる瞬間が映し出された。

一方、あいは森の中で倒れていたが、
その様子を覗き込んでいた赤い視界があいの視界と同化し、
表情が一変したあいはゆっくりと立ち上がった。
辺りは薄暗い雲に覆われ、太陽の光を完全に隠してしまっていた。

あいの家にいたしんのすけのエボルトラスターが明滅を始める。
ビースト出現を知ったしんのすけの脳裏に先程見せつけられた、
あいと家族を襲ったビーストが思い浮かんだ。
「もしかして…！？」
しんのすけが部屋を出て扉を閉めた瞬間、部屋一面を覆っていた絵の数々は消え去り、
ガランとした暗く寒々しい部屋にひび割れた写真立てがあるだけであった。

「エリア7、ポイント２９０にビースト振動波確認。ターゲットの反応はビルの地下一階にあります。」
一方、現場には既にナイトレイダーが到着しており、イラストレーターの指示を受けて、ビルの地下を進んでいた。
「ターゲットはこの中です。」
ある扉の前に着いた石堀隊員がパルスブレイガーを見ながら報告する。
「副隊長。行きますよ。」
「えぇ。」
平木隊員と西条副隊長が突入の準備をし、和倉隊長は突入の指示を送った。
ナイトレイダーが扉を開け、武器を構えながら中へと慎重に進んでいく。
その瞬間、部屋の片隅から物音が起きて一斉にディバイトランチャーが向けられた。
しかし、
「撃つな！」
その物音を発した存在を見て和倉隊長は急いで攻撃中止を指示した。

「う、撃たないで！　撃たないでください…。」
「何？　何よこのおっさん！」
ビルの地下でナイトレイダーが見つけた相手、それはひろしの部下の川口であった。
「ぼ、僕、昨日、お酒飲みすぎて…、気がついたらこんな場所で寝てて…。ほ、本当です。本当ですよ！」
状況をいまいち飲み込めずとも、川口は自分に銃を向ける人々に向かって必死の弁明をした。
「酔っ払いぃ～？　いい迷惑…。だから私、酔っ払いって大っ嫌いなのよ！」

平木隊員がディバイトランチャーを下ろしてため息交じりに吐き捨てる。
「でも、どうして彼から反応が？」
石堀隊員の疑問を聞いた西条副隊長は川口を見回し、首からさげているペンダントに手を伸ばした。
「ダミー発信機！」
それを見て石堀隊員が呟く。
「…一杯食わされたって事か。」
「どうやら、そのようです。」
イラストレーターがナイトレイダーに話しかける。
「擬似振動波を見抜けなかった僕のミスです。
彼に関してはＭ・Ｐが対処します。撤収してください。」
「了解…。」
静かに答えた後、和倉隊長は厳しい口調で川口を問いただした。
「…記憶のあるうちに聞いておく。誰に頼まれた？」
凄みをきかせた和倉隊長の言葉に川口はすっかり怯えあがってしまう。
「だ、だから、僕はただ…。」
「あの装置を誰に渡された！！　答えろぉ！！」
突如、和倉隊長は怒りと共に川口の胸倉を掴んで抱え上げた。
突然の行動に他のナイトレイダーは驚きを隠せなかったが、抱え上げられた当の川口は何故か余裕の笑みを浮かべていた。
「騙されてマジギレか？　和倉隊長？」
ゆっくりと和倉隊長を見下ろす川口の目には赤い光が宿っていた。
「そんなに俺が怖いかい？」
和倉隊長が聞いたことのある声で不気味な笑みを浮かべる川口。
その挑発に和倉隊長は怒りを露にした。
「溝呂木ぃ！！」
和倉隊長はさらに強い力で締め上げるが、川口はそれを両手であっさりと振りほどき、

人間とは思えない跳躍力で部屋の反対側へと跳んでいった。
次の瞬間、川口の目から赤い光が消え、
それと同時に物陰から黒いコートを身に纏った一人の男が現れた。
「やっぱり戻ってきたのね…。溝呂木…眞也…！」
西条副隊長の言葉を聞いてその男、溝呂木眞也はゆっくりと顔を上げる。
「1年振りだな、凪。そして、ナイトレイダー。
またこうして会える時をずっと楽しみにしていた。」
「ふざけないで！」
現れた男、溝呂木は笑顔で語りかけてきたが、
西条副隊長はディバイトランチャーを構えて、怒りの顔でそれに答えた。
「怖い目だな。あの野原しんのすけとかいう奴を見る時と同じ目だ。
俺と奴を一緒にするな。」
「溝呂木。…一体どうしてこんな手の込んだいたずらを?」
西条副隊長の問いに溝呂木は手にしていた道具、ダークエボルバーを掲げる。
「…ゲームだよ。」
「ゲーム?」
意外な答えに西条副隊長と他のナイトレイダーは戸惑うが、
溝呂木はさも当然のように話し続ける。
「あぁ、俺は今、黙示録という名の楽しい遊びをしている最中なのさ。」
溝呂木の言葉にナイトレイダーは戸惑い、
それを見て溝呂木はフッと笑って、ダークエボルバーをしまった。
「どうした? 撃たないのか? なら行くぜ。」
そう言って、溝呂木はナイトレイダーの前から立ち去った。
そんな溝呂木をナイトレイダーはただ呆然と見送る事しか出来なかった。

ナイトレイダーの目の前から溝呂木が立ち去った直後、
ＣＩＣでイラストレーターが特殊振動波を感知した。
「エリア３、ポイント２５４に特殊振動波を確認しました。
現場に向かってください。黒いウルトラマンです。」
指示を受けて、ナイトレイダーは急いでクロムチェスターに乗り、
現場に向かった。
現場に向かうチェスターの中、西条副隊長は溝呂木のことを考えた。

一方、しんのすけはストーンフリューゲルに乗って、
エボルトラスターがビースト出現を感知した現場、
イラストレーターが特殊振動波を確認した地点へと到着していた。
「あい！　…あいっ！！」
あいの家で見せつけられたビーストのことを考え、しんのすけは必
死にあいを捜すが、
その時、背後から足音が聞こえ、
しんのすけが振り向くとそこには現場に到着したナイトレイダーが
いた。
「君は…。」
現場に到着したナイトレイダーはしんのすけの存在に驚くが、
その時、辺りを霧が覆うと同時に、か細い女性の声が聞こえてきた。
「しん様…。」
その声を聞いたしんのすけは霧の中に左肩から血を流しているあい
を見つけた。
「あい！」
急いであいに駆け寄るしんのすけ。
「良かったゾ…。あいが無事で…。」
しんのすけはあいが生きていた事に安堵するが、
あいは冷たい表情でしんのすけの手を振り解くと突き放すように答
えた。
「いいえ…。殺されたわ…。」

「え？」
「私も…私の家族も…、しん様のせいで殺されたの…。」
「オラの…せい？」
驚くしんのすけ。あいの声は異様に低いものへと変わっていき、
それに伴い、瞳に赤い光が宿っていった。
「そう…。あなたが私を好きになった為に
私は殺されたの…。道具として、利用されるために…。」
そして、あいの顔に別の顔が重なり、
あいはその重なった顔、ファウストの顔へと変わっていった。
「私はファウスト…。赤き死の魔人、光を飲み込む無限の闇だ。」
完全にファウストに変身したあいの姿にしんのすけは思わず後ずさり、離れていく。
そんなしんのすけの脳裏にファウストとの激戦が蘇る。
（そんな…、オラは…オラは…今まであいと戦っていたのか…。
知らなかったっていっても、あいを傷付けていたなんて…そんな…。）
次の瞬間、ファウストが巨人となり、しんのすけに向けてダークフェザーを撃った。
それを見たしんのすけはウルトラマンに変身。
ダークフェザーの爆発に阻まれて、ナイトレイダーにそれは見えなかった。
森の中、対峙する2体の巨人をナイトレイダーは呆然と見上げる。
そして、別の場所で溝呂木もその光景を見ていた。
「始めようぜ…。死のゲームを…。」

ファウストはウルトラマンに向けて構えを取り、ウルトラマンもファウストに向けて構えを取るが、脳裏にあいのことがよぎって攻撃できずにいた。
そんなウルトラマンをファウストは一方的に攻撃する。
防戦のウルトラマンはナイトレイダーを戦闘に巻き込まないように

ジュネッスにスタイルチェンジしてメタフィールドを展開するが、
それを見たファウストはすぐさまダークフィールドを展開。
広がる闇にナイトレイダーも覆われ、ウルトラマンとファウスト、
ナイトレイダーはダークフィールドの中へと消えてしまった。

ダークフィールド内。
ファウストはウルトラマンを殴り飛ばし、
ウルトラマンに一方的に打撃を加え続ける。
そしてそんなウルトラマンを見てファウストが呟く。
「やはり脆弱(ぜいじゃく)…。」
ファウストはダークフラッシャーを放ち、
それを受けてウルトラマンは吹き飛ばされ、
ファウストは倒れるウルトラマンを背後から羽交い絞めにした。
「今日こそ…、お前を倒して私の一部として取り込む。さらに無敵の存在になる為に…！」
そう言うと、ファウストはウルトラマンのコアゲージに手を当て、
コアゲージから光がファウストへと流れ込んでいった。
光を吸い取られ、苦しむウルトラマン。
その時、近くにいたナイトレイダーがディバイトガンナーでファウストを攻撃。
それに反応したファウストはもう片方の手でナイトレイダーに向けてダークフェザーを撃ち、
攻撃に翻弄されるナイトレイダーを見て、高笑いを上げた。
（止めろ…。）
そんなファウストを見て、コアゲージが点滅を始めたウルトラマンが思う。
（あい…。）
そして、しんのすけの脳裏にかつてあった、あいとの楽しい思い出が蘇っていく。

『今度美術部の展覧会に出展する作品のテーマなの。家族の肖像。』

『ありがとう…、しん様。』

『キス…して…。』

「…止めろぉ！！」
ウルトラマンはファウストの肩に向けてパーティクル・フェザーを撃ち、
それを受けたファウストは動きを止め、ゆっくりとウルトラマンの顔を見る。
ウルトラマンの顔を見たファウストの脳裏に目に涙を浮かべているしんのすけが映り、
ファウストはウルトラマンを離し、その顔をまじまじと見つめて呟いた。
「しん…様？」
それはファウストとは違う、いつものあいの声であった。
ファウストを見つめるウルトラマン。ファウストもウルトラマンを見つめる。
そんなファウストの目からは赤い光が消え、
ウルトラマンと同じ白い光が宿っていた。
そして胸のコアゲージがウルトラマンと同じく、赤い点滅を始める。
その点滅と連動してダークフィールドも歪み、存在が不安定になっていく。

一方、その様子を見ていた溝呂木は事態打開の行動を起こしていた。
「微かに意識が…。野原しんのすけ。ならこうするまでだ。」
溝呂木が頭に指を当てると、ダークフィールドに一体の化け物が姿を現した。

それはかつてあいと家族を襲ったネズミ型のビースト・ノスフェルであった。
「あれは…。」
ノスフェルを見てナイトレイダーが驚く。
「1年前に溝呂木が引き連れていたビーストか…。」
一方、驚くウルトラマンに向かってノスフェルがゆっくりと近づいていき、
溝呂木が冷徹に指示を下す。
「そいつはもういい。…消せ。」
その言葉を受け、ノスフェルは鉤爪を広げる。
ウルトラマンは立ち上がろうとするが、力尽きその場に倒れ込んでしまう。
ノスフェルはそんなウルトラマンのコアゲージ目掛けて鉤爪を振りかぶり、
ウルトラマンは顔を逸らした。
その時、
「何…?」
辺りに鈍い音が響く。ウルトラマンが見ると、
ファウストがウルトラマンを庇ってノスフェルの鉤爪に体を引き裂かれていた。
「バカな…。」
ファウストの行動にさすがの溝呂木も驚きを隠せなかった。
ノスフェルはファウストから鉤爪を引き抜き、
地面に倒れ込んだファウストの体から光が血のように吹き出す。
それを見たウルトラマンは残された力を振り絞って再び立ち上がると、
ノスフェルに掴みかかって投げ飛ばし、
立ち上がろうとするところをクロスレイ・シュトロームで爆破した。
戦いに勝利したものの残された力を完全に使い果たしたウルトラマンは

光となってしんのすけの姿に戻った。
一方、倒れていたファウストの体が徐々に縮まっていき、やがてあいの姿となった。
しんのすけがよろよろと駆け寄り、あいを抱きかかえる。
「あい…、あい！！」
あいを抱え、必死に名を呼び続けるしんのすけ。
やがてダークフィールドは完全に消え去った。

「溝呂木眞也が帰って来た？」
報告を受けてＴＬＴ幹部はどよめきたち、
それと同時にＣＩＣではイラストレーターが手を組み、一言呟いた。
「…第一幕の扉が閉ざされた。」
しかし、そんなイラストレーターの頬を涙が伝っていった。

森の中、しんのすけはあいを抱き抱えて必死にその名を叫ぶ。
溝呂木はいつの間にか姿を消していて、
ナイトレイダーだけが残って二人を見届けていた。
「あい…、あい…！　あい…、あい…！　…あい！！」
しんのすけの必死の呼びかけにあいはゆっくりと目を開け、
弱々しいながらも笑顔を向けた。
「私…後悔なんてしていないわ…。
しん様が…私のことを真剣に見てくれるようになってから…、
私…、ずっと幸せだった…。だから…、後悔なんてしていない…。」
震える手を伸ばすあい。しんのすけはその手を掴んで力強く握り締める。
「もっと…、たくさんのこと…、話したかったな…。」
「オラも…、まだ話してない…。大事な事…、まだなんにも…。」
涙を流すしんのすけの顔を見てあいが一言呟く。
「ごめん…なさい…。」
そう言い残してあいはゆっくりと目を閉じていった。

「…あい？　あい！　あいっ！！」
しかし、しんのすけの呼びかけ空しく、あいの全身が光に包まれていく。
そして、あいは光となって、空へと消えていった。
あいが消えた空を見上げるしんのすけ。
自分の両手を見るが、そこにあいはもういない。
「あいーーーーーっ！！」
しんのすけの絶叫が世界を駆け抜け、
それに呼応するかのように辺りを覆っていた雲から大粒の雨が降り注いだ…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１０　別離　－ロストソウル－（後書き）

「ネクサス」で多くの視聴者に強烈な印象を残したであろうキャラ、溝呂木眞也登場。
溝呂木に操られた川口は一応無事です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１１　予知者　－イラストレーター－

フォートレスフリーダムの最深部に位置するＳＥＣＴＩＯＮ－０。
イラストレーターが何かの声に耳を傾けるように下に広がる巨大水槽を見下ろす。
水槽の中では、時折、小さな光が瞬いていた。

その頃、しんのすけはふたば幼稚園に来ていた。
あいとの別れという残酷な現実に打ちのめされたしんのすけの表情は暗く、
気が晴れる事が無く、ただあいとの楽しかった思い出を思い返し門の外を歩く。
しかし、そんなしんのすけを見て、影から溝呂木が不気味な笑みを浮かべている事に
今のしんのすけが気づく事は無かった。

再びフォートレスフリーダム、コマンドルームでは
和倉隊長と松永管理官がクロムチェスターの新たな強化案について説明していた。
「これが新たに開発された対ビースト用の新兵器ですか？」
画面に映し出されたクロムチェスターの映像を見て平木隊員が質問する。
「はい。チェスターの新フォーメーション、メガキャノンチェスターです。
チェスターβのメガキャノンにチェスターγのメタルジェネレーターを接続する事によって、
ストライクチェスターに比べてバニッシャーの威力を２５％アップさせました。」
松永管理官の説明を聞き、平木隊員はさらに質問を続ける。

「でも、戦車タイプだと機動力が落ちますよね。」
その質問にパソコンを開いている石堀隊員が代わりに答える。
「ようは使い分けだな。ビーストの進化に対して色々な対応が必要になってきてるんだ。
実際、ビーストは強力になっていってるし、今までの戦力では殲滅が困難になってきている。
ここで切り札ともなる力は欲しいところだからな。」
「ふ～ん、なるほどねぇ。」
そんな二人の隣、西条副隊長は何かを考え込んでおり、
和倉隊長はそんな西条副隊長を見つめていた。

「西条。」
メガキャノンチェスターの説明が終わったコマンドルームで
和倉隊長が西条副隊長に話しかけた。
「どうした？　先程の説明の時、どこか上の空といった感じだったが…。」
和倉隊長の言葉に平木隊員と石堀隊員が反応し、
西条副隊長は少し間を置いて答えた。
「実は…。先日の…あの少年のことがずっと頭に引っ掛かっていて…。」
「野原しんのすけ…か。」
西条副隊長はそれを聞くと表情を少し変え、無言で頷いた。
「あの子が恋人を失ったこと…ですね。しかも普通の状態じゃなく…。」
会話を聞いた平木隊員が口を挟み、
パソコンでしんのすけの資料を調べていた石堀隊員も続けて口を挟む。
「…ある意味、ビーストに喰い殺されるよりもおぞましい体験だったのかもな。」
和倉隊長が平木隊員と石堀隊員に続ける。

「西条…。あの時の状況から考えて、
彼がウルトラマンの正体である可能性が非常に高い。
だが、例えそうだったとしても、決して完全無欠というわけじゃない。
悲しみの淵から抜け出すのに時間がいることもあるだろう…。」
しかし、西条副隊長は反論する。
「溝呂木はそんな弱い心に付け込むんです！
…それに、大切な人を失った時の悲しみは…私だって分かっているつもりです。」
そう答えた後、西条副隊長はコマンドルームから出ていった。
「弱い心か…。…西条。」
そんな西条副隊長を見送った和倉隊長は一人、彼女の言った言葉に思いを馳せた。

イラストレーターが巨大水槽を眺めていると、そこに扉を開けて近づく者があった。
それに気づいたイラストレーターが独り言のようにその者に話しかける。
「この光を見ていると、何故か、心が落ち着くんです。
微粒子の囁きを聞いているような、穏やかな気持ちになれる。」
イラストレーターの話にその者、松永管理官が答える。
「この光が地球の運命を大きく変えようとしているなんて、誰が信じられるでしょうね。」
松永管理官はイラストレーターの横にやって来て、同じように巨大水槽を眺めた。
一方のイラストレーターが話を再開する。
「全てはこの光が降り注いできた時、始まったんですよね…。」
「２万８千光年彼方のＭ８０さそり座球状星団で起こった超新星爆発。
その光の到達と共にビーストが現れた。

ビーストの体がアクティブになった時に発せられる振動波は
超新星の残骸から今も降り注ぐこの特殊なニュートリノ、
Xニュートリノに反応しているんでしたね。」
話を終えた松永管理官はイラストレーターの顔を見て不敵な笑みを
浮かべ、
イラストレーターも松永管理官の顔を見返す。
「にしても、ここは表向きはフォートレスフリーダムのエネルギー
施設があって、
ナイトレイダーですら近づけない危険区域だというのに、よく入れ
ましたね。」
「進入禁止と書いてあっても、ここを管理する人はいます。
誰か人がいる限り、何とでもなりますよ。」
笑顔とは裏腹に二人の間には微妙な距離が存在していた。

あいと過ごした春日部森林公園。
しんのすけはあいがいつも座っていたベンチに腰掛け、
翼の生えたぶりぶりざえもんを見つめる。
ぶりぶりざえもんを見つめ、しんのすけが小さく呟く。
「あい…。」
「愛ー！」
突然聞こえてきたその名前にしんのすけは驚いて顔を上げる。
目の前を駆ける少女。それを追いかける父と母、そして弟。幸せな
家族。
父は家族を噴水の前に並ばせて写真を撮ると、
しんのすけに写真を撮って欲しいと頼んできた。
しんのすけは快く引き受け、家族４人の幸せな写真を撮った。
写真を撮る時に何やらポーズを取る弟。
姉がそれを注意するが弟は格好良いからと譲らない。
それはしんのすけが５歳の時に見ていた、アクション仮面の決めポ
ーズだった。

弟はアクション仮面がプリントされた服を着ていて、
アクション仮面のフィギュアを持っていた。
写真を撮ったしんのすけはカメラを父に返し、
家族はしんのすけにお礼を述べて去っていった。
そんな家族を見てしんのすけはかつてあいと交わした話を思い出す。
『人や動物の家族…か。』
『うん、今度美術部の展覧会に出品する作品のテーマなの。家族の肖像。』
『ふーん…、家族の肖像…か。』
「私の家族はね…。」
突如、しんのすけの頭に声が割り込んできた。驚いてその声の主を探す。
「しん様のせいで皆死んじゃったの…。」
見ると、木陰にあいが立っていた。
しかし、その表情に生気は無く、目も虚ろであった。
「あい？」
しんのすけの呼びかけにあいは反応するが、
黙ってそこから立ち去ってしまった。急いで後を追うしんのすけ。
あいは一本の木の前で止まり、追いかけてきたしんのすけの方にゆっくりと振り向いた。
「半年前のあの日よ…。私達家族が殺されたのは…。
ここでしん様と話したその夜、私達はビーストに襲われて死んだの…。
道具として、利用されるために…。全部、しん様のせい…。」
話が終わるとあいは木の向こう側に姿を消した。
「あい！」
「野原しんのすけ。」
あいを追いかけようとするしんのすけだったが、
背後から声がかけられ、振り返ると、そこには溝呂木が立っていた。
「あんたは…。」

警戒するしんのすけに溝呂木は不敵に笑って自己紹介をした。
「俺は溝呂木眞也。以前、ナイトレイダーの副隊長をしていた。
それから…お前の仇だよ。」
それを感じてか、イラストレーターが呟く。
「どうやら…、第二幕の幕開けみたいだ…。」
「第二幕…。」
松永管理官の呟きにイラストレーターが頷き、質問をした。
「ところで…。どうして…酢乙女あいがファウストにされたと思いますか？」
その質問に松永管理官は少し戸惑い、やがて間を置いてから答えた。
「溝呂木眞也は野原しんのすけがいずれウルトラマンの光を手にする事まで知っていたと…。」
それを聞き、イラストレーターは静かに頷く。

「酢乙女あいは俺の道具、操り人形だったのさ。」
溝呂木の挑発を受けたしんのすけに激しい怒りと憎しみが湧き上がる。
「お前があいを…！」
「面白かったぞ。お前達の恋人ごっこを見ているのも…。」
「ふざけるな！」
しんのすけは溝呂木に殴りかかるが、あっけなく避けられてしまう。
苛立つしんのすけはブラストショットを取り出し、溝呂木に向けて撃つが、
溝呂木のダークエボルバーから撃たれた闇の光弾によって相殺される。
その隙を突かれ、しんのすけは溝呂木に殴り飛ばされてしまった。
「いくら光を得たとはいえ、所詮お前自身は戦いは素人。
それで俺に勝とうなんて甘すぎるな。」
地面に倒れ伏すしんのすけを見下ろす溝呂木。
「くっそ…！」

何とか立ち上がるしんのすけの目には憎しみしか宿っていなかった。
しんのすけは再び溝呂木の服を掴むが、
溝呂木は満足げな笑みを浮かべてしんのすけの顔を見た。
その時、溝呂木の目が赤く光り、それを見たしんのすけの全身から
力が抜けていった。
それを見て溝呂木はニヤリと笑みを浮かべると、
しんのすけを連れて時空の歪みの中に消えてしまった。

「サイクロプスの哀しみって…知っていますか?」
しばらく黙って眼下の巨大水槽を見ていたイラストレーターは突然、
思い立ったかのように松永管理官に話しかけた。
「古い神話の怪物ですね。」
松永管理官の答えにイラストレーターが頷き、話し始める。
「サイクロプス…。ギリシャ神話に登場する単眼の巨人。
彼らは予知能力を授かって、自分達の死期さえも知り、
未来に対する希望を失ったという哀れな存在…。
…時々、思うんです。僕も彼らと同じような存在なんだなって…。」
その話を聞いた松永管理官はイラストレーターの横顔を見て話しか
けた。
「あなたは自分の未来を知る事によって、未来に対する希望を失っ
たと?」
イラストレーターは少し黙った後、笑って答えた。
「どうでしょうね。」

時空の歪みからどこかに一人落とされたしんのすけ。
立ち上がって周りを見ると、そこは何も無い寒々しい空間だった。
「ここは…?」
「しん様ー。」
辺りを見渡していたしんのすけに聞こえてきた声。
振り返るとあいが笑顔で駆け寄ってきた。

「あい！？」
驚くしんのすけに対して、あいは笑顔で話しかけてくる。
「しん様、来てくださったのね。感激ですわ。」
「え？」
戸惑い、ふと周りを見回すしんのすけ。
すると、いつの間にかあいの家の前に居た。
「ここは…？」
「私の家ですわ。しん様が私の家に来てくださるのって何年ぶりかしら。」
「…？」
「先程からどうなさったの？　しん様。悪い夢でも見たんじゃない？」
「夢？」
「そう、夢。」
あいの言葉を戸惑いながら聞くしんのすけ。
「夢…。そんな…、だって、あいはもう…。」
そんなしんのすけにあいは笑みを消して告げる。
「そうよね…、しん様は私が死ぬ原因になったんですものね…。」
その瞬間、あいは顔の無いマネキンとなって崩れ落ちた。
「あ、あい…？」
しんのすけが気づくと、周りはあいが死んだ森の中になっていた。
「どういうこと？　これ…。」
バラバラの人形となったあいを見ながら呟くしんのすけ。
その時、人形の顔にファウストの顔が浮かび上がり、
そこからあいの声が響いてくる。
「全部、しん様のせい…。しん様のせいで私はこんな姿にさせられた…。」
「あい？　オラのせい…オラが…！？」

一方、西条副隊長は春日部森林公園にやって来ていた。

「やぁ、凪。」
自分を呼びかける声に立ち止まる西条副隊長。
周りを見渡すが、溝呂木の姿は見えない。
「よく来てくれたな。人間が壊れていく様を見るのは楽しいぞ。」
西条副隊長は姿を見せない溝呂木に話しかける。
「どうして彼を？」
「俺は力を得た…。悪魔、メフィストの力を…。
この力でお前達人間どもの心をズタズタにしてやるよ。」
「一体…、何故？」
「お前の為だ、凪。」
「私の為？」
「そうだ。お前も早くこっちに来い。素晴らしいぞ。」
「ふざけないで！」
「ふざけてなんてない。お前にはその資格がある。
奴はお前にそれを気づかせる為の道具だ。
ま、思っていたよりもしぶとく、扱いづらいがな。」
溝呂木の言葉に西条副隊長の顔が険しくなっていく。

「オラのせいであいは…。オラのせいで…。」
ダークフィールドの中、しんのすけはうずくまり自分を責めていた。
その時、エボルトラスターが光を発し、天よりしんのすけを照らす光が現れた。
見上げると、そこには神のごとく光り輝くウルトラマンがいた。
光り輝くウルトラマンから発せられた光はしんのすけを包み込み、しんのすけはその光と共にダークフィールドから抜け出した。

時空の歪みからしんのすけは落とされ、そんなしんのすけの所に西条副隊長が駆け寄る。
「大丈夫？」
しんのすけを抱え、西条副隊長はしんのすけの顔を見た。

「あんたは…。」
抱えられたしんのすけは西条副隊長の顔を見て呟き、
西条副隊長はそんなしんのすけの腕を掴んで話しかけた。
「あなたの悲しみは分かるけれど、いつまでもそこに留まっていちゃ駄目！
彼女だって、きっとそんな事望んでないと思うわ。」
今まで自分を敵だと認識していた西条副隊長の励ましにしんのすけは戸惑う。
「彼女の事を思うのなら、ビーストを憎むのよ。」
「え？」
「その憎しみを力に変えるの。私達を信用して。
…私は西条凪。ナイトレイダーの副隊長よ。」
そして西条副隊長は立ち上がり、
いまだうずくまっているしんのすけに手を差し伸べた。
「あなたはまだ戦える。諦めるな！」
その言葉にしんのすけは西条副隊長を見上げ、
その差し伸べられた手を握り、立ち上がった。

「あ、さっきのお兄ちゃんだ。写真ありがとー！」
帰り道、しんのすけと西条副隊長は先程しんのすけが写真を撮った家族と出会った。
「バイバーイ！」
笑顔でしんのすけに手を振る少女と弟。笑顔で挨拶をする父と母。
それを見てしんのすけに少しだが、笑みが戻る。
隣にいた西条副隊長は事情が分からず思わず首をかしげた。

「当時、内閣情報調査室次長補佐だった私は命を受け、ＴＬＴ－Ｊの管理官となった。
だが…、その私でさえ、真実をどれほど知っているのか…。例えば、来訪者の事も…。」

松永管理官の話を聞いたイラストレーターは一つの疑問をぶつける。
「管理官は全てを知りたいんですか?」
松永管理官は笑顔で首を横に振って否定する。
「いいえ、知ったところで、すぐ消されるだけですから。
ただ、私は自分の使命をキチンと果たしたい。
それに、このままではいずれ誰かが忘却の海を知り、辿り着くでしょう。」
「レーテの開放…。それが正しいのかどうか…。僕も分かりません。」
そう言ってイラストレーターは再び巨大水槽を見下ろす。
ＣＩＣの水槽の中ではクラゲが漂っていた。

その夜、少女の家族が車で家路についていた。
後部座席で眠る娘と息子を見て微笑む母親。
その時、父親が慌てて急ブレーキを踏む。
車の前に巨大な化け物が立ちはだかり、
その巨大な爪を車に乗る家族目掛けて振り下ろした。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１１　予知者　－イラストレーター－（後書き）

イラストレーターについて今後の展開の伏線を張っておきました。
今回の話は基本的には本編の展開に忠実ですけど、
しんのすけが溝呂木に見せられる幻を少し減らしました。
やっぱり、“あの”しんのすけが溝呂木の幻に惑わされるというのは、
ちょっと考えられないと思ったので。
（あいの幻影に騙されていないのもそのため。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１２　悪魔　－メフィスト－

しんのすけは今日見たものがすべて幻であったことを知って、家に戻る道を歩いていた。
脳裏に西条副隊長の語った言葉が蘇る。
『本当に彼女の事を思うのなら、ビーストを憎むのよ。その憎しみを力に変えるの。』
「憎しみを力に…。」
呟きながらしんのすけはポケットからエボルトラスターを取り出す。
その時、エボルトラスターが明滅を始め、
しんのすけは急いでビースト出現場所へと向かった。
『絶望から立ち上がるのに、オラは憎しみを力に変えようとしてた。…でも。』

「エリア６、ポイント２２１にてビースト振動波を確認しましたが、一瞬だったので追尾できませんでした。
現場には既に処理班が到着しているので、和倉隊長の方で状況の確認をお願いします。」
一方、ナイトレイダーも行動を開始していた。
ホログラムのイラストレーターはコマンドルームから姿を消し、和倉隊長はすかさず指示を出した。
「石堀、Ｍ・Ｐに連絡だ。平木、マップデータを出してくれ。」
「はい！」
返事をし、二人もすぐさま行動を開始する。
「こちらナイトレイダー、Ｍ・Ｐ応答願います。」
「マップデータ出ました！」
Ｍ・Ｐからの連絡を受けた石堀隊員が報告する。
「Ｍ・Ｐからの報告です。どうやら被害があったようですね。
目撃者が一名、前を走る乗用車に何か怪物のようなものが襲いかか

ったのを見たようです。
襲われた車に落ちていたデジカメの写真です。」
「これって…！」
石堀隊員が出した写真を見て西条副隊長は驚いた。
「この家族を知っているのか？」
和倉隊長の質問に西条副隊長が答える。
「偶然、森林公園で会ったんです。」
そこに石堀隊員がＭ・Ｐからの報告を伝える。
「目撃者によると、ビーストは両親を殺害後、
その死体と子供を生きたまま連れ去ったみたいです。」
「何で子供は生きたまま？」
平木隊員の疑問に西条副隊長が答える。
「おそらく…人質。」

「ねぇ、薫。薫！」
しんのすけが春日部森林公園で写真を撮った家族、山邑（やまむら）一家の別荘。
二階の寝室で姉・愛が弟・薫を起こそうとしていた。
「うーん…、んん…。」
愛の呼びかけに目覚めた薫は周りを見渡し、
自分が寝ている間に別荘に着いた事を知った。
「あれ…。別荘に着いたんだ…。パパとママは…？」
眠そうに目を擦る薫に愛が答えた。
「下にいるけど…、何か様子が変なの…。…一緒に来て。」
その言葉を受けて薫は下に降り、愛もそれを追って下に降りた。
一階の居間では父親がＴＶを見ていて、台所では母親がカレーを作っていた。
「お、起きたか？」
「ちょうどいい時間ね。今起こそうと思っていたんだけど。」
降りてきた愛と薫に話しかける父親と母親。
その様子に愛は戸惑い、薫は笑顔で答える。

「何だ。全然変じゃないじゃん。」
「でも…、さっきは本当に…！」
「寝ぼけて見た夢とかじゃないの？　姉ちゃんも怖がりだなぁ。」
そう言って、薫はテーブルに着き、
愛も不安そうに父親と母親をちらりと見ると、席に着いた。
そんな家族を、別荘の外から溝呂木が不敵な笑みを浮かべて見つめていた。

「ポイント２７４に微弱ですが先程のビーストと同じ振動波を確認。
状況を確認する為、まずはチェスターα一機で向かってください。」
イラストレーターの指示を受け、
西条副隊長がチェスターαに乗り込み、チェスターαは発進した。

一方、現場に到着したチェスターαから西条副隊長が降りる。
「ポイント２７４。あれね。」
別荘の中では山邑一家が幸せな食事をしていた。
その時、ストーンフリューゲルが降臨し、
しんのすけがストーンフリューゲルから降りた。
しんのすけは近くにいた西条副隊長に気づくと、
昼間の西条副隊長の言葉を思い出す。
『私達を信用して。…私は西条凪。ナイトレイダーの副隊長よ。』
その言葉を思い出したしんのすけは西条副隊長のほうに向かった。
「西条副隊長！」
「…しんのすけ君。」
そして、しんのすけは西条副隊長と共に別荘の外で待機した。
しんのすけは自分と共に待機する西条副隊長を見て、ある事を尋ねる。
「西条副隊長…。どうしてオラのことを…。」
しんのすけの質問に西条副隊長は少し沈黙する。
霧の中、ぬいぐるみを持って走る少女時代の自分。

『ママはどこ？』
目の前に現れ、咆哮と共に肩から角を生やす男。
脳裏に蘇る幼少期の忌まわしい記憶。やがて長い沈黙を破って口を開く。
「同じだから…。」
「え？」
「愛する人達をビーストに奪われたから…。
だから…。自分でも不思議なくらい、あなたをようやく信用する気になったの…。」
再び流れる沈黙。
しかし、西条副隊長は別荘の外から
パルスブレイガーで中を調べ、沈黙を振り払うように叫んだ。
「二つの光点は人間じゃない。ビーストよ！」
「行くゾ！」
「えぇ！」
しんのすけと西条副隊長が駆け込もうとした時、
近くの森の上空に闇の光弾が撃たれた。
「この振動波は…。」
その地点をパルスブレイガーで調べた西条副隊長はその光弾の撃たれた場所に向かった。
「あの男が…いる！」

「ビースト！」
山邑一家の別荘。
突如、幸せな食卓にブラストショットを構えたしんのすけが乱入してきた。
「な、何です？」
突然の事態にうろたえる父親。母親は素早く愛と薫を手元に抱き寄せる。
あまりに普通な家族の姿にしんのすけは一瞬戸惑い、

エボルトラスターを家族に向けるが、
結果、激しく明滅し、父親と母親にビースト振動波を感知した。
「ビースト！　人間の振りなんかしても無駄だゾ！」
いきなり父親に向けてブラストショットを撃つしんのすけ。
しかし、父親は腕でブラストショットの光弾を弾いた。
「くっそ…！」
「止めろ！」
苛立ち、更にブラストショットを撃とうとするしんのすけに薫が飛びかかる。
「薫！」
しんのすけに飛びかかった薫に愛が叫ぶ。
「離せ！　あいつは君のパパじゃない！　パパとママはもう死んでるんだ！」
「嘘付くな！　そんな事あるわけないだろ！」
「薫！　薫！！」
その時、父親と母親が笑い声を上げて愛を外に連れ去った。
「待て！」
薫を振りほどき、二人を追うしんのすけ。

一方、西条副隊長は上空に光弾の撃たれた森の中を歩いていた。
そんな彼女の脳裏に再び蘇る忌まわしい記憶。その時、目の前に男が現れた。
急いで西条副隊長はその男、溝呂木にディバイトランチャーを向ける。
「やぁ、凪。夜道に一人は危険だぜ。」
「溝呂木…。」
構える西条副隊長に溝呂木はダークエボルバーを見せる。
「怖い目だな。まぁいい…。よく見ておけ…。凪、これが俺の今の姿、今の力だ。」
そう言って溝呂木はダークエボルバーを左右に引き抜いた。

闇が溝呂木を覆い、溝呂木という存在を打ち破って、
骸骨を思わせる黒い悪魔・メフィストが姿を現す。
「黒い…ウルトラマン…。」
目の前に立つ５ｍ程の大きさのメフィストを西条副隊長は恐怖の眼差しで見つめる。
「さぁ、来い。凪。」
メフィストは溝呂木の声で西条副隊長を覗き込み、
恐怖で西条副隊長は思わず後ずさる。

愛を連れ去った父親と母親を追っていたしんのすけは
エボルトラスターの明滅を見て、目を閉じる。
次の瞬間、しんのすけの脳裏に西条副隊長を覗き込むメフィストが浮かんだ。
メフィストの姿に溝呂木の姿が重なる。
「あいつが…昼間の…！」
しんのすけはメフィストが溝呂木であることを知ると、
エボルトラスターを鞘から引き抜き、
光と共に大量の闇も溢れ出したそれを掲げ、ウルトラマンに変身した。
メフィストはそれを見るとフッと笑って、５０ｍの大きさに巨大化。
ＣＩＣのイラストレーターもモニター越しにその光景を見ていた。
「例の山中にウルトラマンと闇の巨人が現れました。全員出動願います。」
フォートレスフリーダムからチェスターβとγが発進し、
それと同時に、ウルトラマンとメフィストの戦いが始まった。

西条副隊長は一瞬、ウルトラマンのほうを見るとチェスターに戻った。
そこにチェスターβとγが到着し、メフィストを見て平木隊員が驚く。

「何でまたあの赤と黒のウルトラマンがいるわけ？　前に倒されたんじゃ…。」
石堀隊員が答える。
「よく見ろ。前とは体の模様が違う。」
一方、和倉隊長の乗るチェスターβに西条副隊長の乗るチェスターαからの通信が入る。
「隊長。あの黒い巨人は…溝呂木眞也です…。」
「そうか…。やはり…1年前のあの巨人か…。」
通信を聞いた和倉隊長は複雑な目でメフィストを見た。

ウルトラマンは怒りに任せてメフィストに殴りかかろうとするが、メフィストはそれを軽く避け、右腕にあるアームドメフィストを2本の鉤爪状の武器・メフィストクローに変形させて、逆にウルトラマンを切り刻んだ。攻撃を受けたウルトラマンは地面に倒れ込む。
「ノスフェル！」
メフィストの言葉と共に地面が割れ、中からノスフェルが姿を見せる。
ノスフェルの目の前には愛を連れ去った愛の父親と母親がいた。
「パ、パパッ！？　ママ！！」
目の前にノスフェルが現れ、驚いた愛は父親と母親のほうを向くが、父親と母親は不気味な笑みを浮かべて愛を見下ろした。
愛はその場から逃げ出そうとするが、
父親と母親に押さえつけられて逃げられなかった。
そして、そのまま愛はノスフェルの額に吸い込まれてしまった。
愛を額に吸い込んだノスフェルが地面から這い出て地上にその姿を現す。
「あれは…ノスフェル？」
「生きていたのか！」
前回の戦いでウルトラマンがノスフェルを倒したことを思い出し、

石堀隊員が呟く。
「細胞が生き残って再生したのか…。」
一方、別荘から家族を追ってきた薫もノスフェルを見る。
「怪獣!?　パパ!　ママ!　姉ちゃん!!」

容赦無くメフィストに攻められるウルトラマンに
ノスフェルがゆっくりと迫ってくる。
ノスフェルを見たウルトラマンは拳を強く握り締め、怒りと憎しみを露にし、
それを見たメフィストが再びバカにしたように笑う。
ウルトラマンは憎しみを露にしながらクロスレイ・シュトロームの構えを取り、
それを見てメフィストは額に指を当て、その指を薫に向ける。
その瞬間、薫にノスフェルの額のコブの中にいる愛、
そして、それを撃とうとするウルトラマンになっているしんのすけの姿が見えた。
「止めろ!　姉ちゃんが、姉ちゃんがその中にいるんだ!!」
しんのすけはノスフェルに襲われたあいと家族、
ノスフェルから自分を庇って倒されたファウストの姿を思い出し、
怒りと憎しみを募らせていった。
それとは別に脳裏に子供の声が響くが、
しんのすけはその声を必死に振り切ろうとする。
「止めろぉ!　姉ちゃんが…!!」
しかし、薫の叫びも空しくクロスレイ・シュトロームは発射される。
その瞬間、ノスフェルは避けようと身をよじるが、
クロスレイ・シュトロームはそのまま貫通し、
ノスフェルはその場に倒れ込んで爆発を起こした。
「うわぁぁぁぁぁっ!!」
その光景を見て薫は絶叫し、
ウルトラマンは歓喜して西条副隊長に向けてサムズアップをし、

西条副隊長はそれを見て、少し戸惑いながらもサムズアップを返す。
その光景を見てメフィストは満足げに笑って姿を消した。
しんのすけはどこか陰っている光となって地上に降り、
そこにナイトレイダーがやって来て、
その中、パルスブレイガーでＭ・Ｐと連絡を取っていた石堀隊員が
口を開く。
「子供達が発見されたそうです。
男の子は無事ですが、女の子の方は…一命は取り留めましたが重症
です。」
「え？」
石堀隊員の報告を聞いて固まるしんのすけ。石堀隊員が報告を続け
る。
「ノスフェルの眉間のコブに捕らわれていたようです。」
「そんな…。そんな！」
しんのすけはそれを聞くと急いで走り出し、
西条副隊長はそんなしんのすけを黙って見送る。
ノスフェルの爆発地点では既に処理班が活動を開始していて、
しんのすけの前をタンカで愛が運ばれていく。
「愛姉ちゃん！　姉ちゃん！！」
そんな愛に泣いてしがみついていた薫は
しんのすけを見つけて顔色を変えると、しんのすけに飛びかかって、
殴りつけた。
「こいつ！　どうして姉ちゃんを撃ったんだ！
中に姉ちゃんがいるって言ったじゃないか！！」
「あの声が…。」
「僕はお前を許さない！　お前を一生許さないからな！！」
しんのすけは自分がしでかした事に恐怖し、ただ呆然と薫の責めを
受け続ける。
「落ち着け！」
そこに三沢がやって来て薫を取り押さえ、薫に話しかける。

「一緒に病院に行こう。」
「離せ！　離せよぉー！！」
三沢は抵抗する薫を無理やり救急車へと連れて行く。
薫はしんのすけに対する怒りと憎しみをぶちまけ、
「何が皆を守るだ！　こんなもの！！」
と今まで大事に持っていたアクション仮面のフィギュアを地面に投げつけた。
薫と愛を乗せた救急車を見送るしんのすけに大原リーダーが話しかけてくる。
「大丈夫…。明日には全部忘れているから…。」
しかし、しんのすけはアクション仮面のフィギュアを拾って思う。
『オラは…、憎しみのあまり大切な事を忘れてた…。
オラは、何かを倒す為じゃなくて、アクション仮面のように
何かを守る為に戦わなくちゃいけないって事を…。』…野原しんのすけ

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１２　悪魔　－メフィスト－（後書き）

第二の闇の巨人・メフィスト登場。
今回の話の投稿と合わせて、Ｅｐｉｓｏｄｅ　１１に西条副隊長が自分の名を名乗るシーンを入れました。
（といっても少しだけですけどね。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１３　悪夢　－ナイトメア－

憎しみで戦い、愛と薫の心と体に大きな傷を付けてしまったしんのすけは落ち込んでいた。
『オラは、憎しみの激しさから女の子を傷付けてしまった。
オラの憎しみはまた誰かを、そしてオラの心までも傷付けていってしまう…。』
しんのすけは近くの河原の土手で、俯いて力無く川の水面を眺めていた。
傷だらけで運ばれた愛、自分に憎しみをぶつける薫の事を思う。
その時、しんのすけの耳に足音が聞こえ、振り向くとそこには和倉隊長がいた。
「あんたは…。」
和倉隊長を見つめるしんのすけ。和倉隊長も感慨深そうにしんのすけを見つめる。
（野原しんのすけ…。彼が…ウルトラマン…。）

「明日からしんのすけ、学校だけどどうする？」
野原家。ひろしとみさえが話していた。
「しばらく、休ませてあげましょう。あんなことがあったばかりだし…。」
「そうだな…。」
「あと、あの子…、私達に何か隠している気がするのよ。」
「え？」
ひろしの疑問にみさえが答える。
「あの子、変な夢を見るって言っていた時があったでしょ？
あの後…、そう三ヶ月くらい前からそんな感じなのよ。」
みさえの言葉にひろしはしばし考え込み、あることに気づいた。
「そういえば…、確か三ヶ月くらい前からだったよな、

あいつが一度出て行ったきり遅くまで帰ってこないようになったの。」

「あと、原因不明の事件や事故とかがよく起きるようになったのもそのくらいからよね。」

みさえの言葉のあと、しばし流れる沈黙。

それを振り切るように、ひろしは声を張り上げて答えた。

「偶然だよ！　第一、なんであいつがそんな事件に関わらないといけないんだよ！」

「私もそう思いたいけど！　でも…、偶然にしては何か出来すぎてるとは思わない？

それに…あなたが以前見たっていう化け物のことも何か引っかかるし…。」

みさえの言葉にひろしはかつて襲われたペドレオンのことを思い出した。

「まぁ…、確かに…な。もし、俺達の知らないところで実際に何かが起こっていて、

それにしんのすけが関わっているんだとしたら…。」

そう答えて、ひろしはテーブルの上にある、

別荘地で一家４人謎の遭難という見出しの新聞記事を手に取った。

「オラ、今までなんのために戦っていたんだろう…って思ってたんだ…。」

その頃、河原では、話し始めたしんのすけの言葉を和倉隊長が黙って聞いていた。

「オラは、今までただガムシャラに戦ってたけど…。

でも…、あんなことになって…。オラ、怖いんだ…。

このまま、憎しみを持ったまま戦って…、

これ以上誰かを傷付けてしまったりするのが…怖いんです…。」

しんのすけの話を聞き、和倉隊長はしばし考えた後、口を開いた。

「俺も昔…、お前と同じだった…。」

「え？」
和倉隊長の答えにしんのすけが反応する。
「俺も昔、お前と同じく自分にとって大切な者を失った…。
俺は…昔、家族を…ビーストに殺されたんだ…。」
和倉隊長の過去の話を聞き、驚くしんのすけ。
一方、和倉隊長は自分の過去を語りだした。
「俺はナイトレイダーに入り、ビーストと戦うことになった…。人々を守るために…。
だが、俺は次第にビーストへの憎しみに取り付かれ、
段々と自分がどうして戦っているのかが分からなくなっていった…。
どうして俺がナイトレイダーに入ったのか…。
記憶消去や真実の隠蔽までしている組織に属してまで俺が戦っているのは何故なのか…。
そして、自らの進む道を完全に見失いかけた時、俺はある一つの答えに辿り着いたんだ。」
「…答え？」
しんのすけの疑問に和倉隊長が答える。
「…憎しみじゃ何も変えられない…。ビーストへの憎しみを晴らすために
俺はナイトレイダーに入ったんじゃない…。それが俺の出した答えだった…。
その答えを得た俺は迷いを捨て、組織がどうあろうとも、
自分の信じるものを貫くため…、人々を守るために戦おうと決意した。」
「憎しみじゃ…何も…。」
しんのすけは和倉隊長の言葉を呟き、
和倉隊長は自分のパルスブレイガーを見つめて続ける。
「ビースト事件に巻き込まれた人々を助けて、俺は感じたんだ…。
過去は変えられないが、未来なら変える事が出来るかもしれない…と。」

しんのすけはエボルトラスターとあいからもらった、
翼の生えたぶりぶりざえもんを取り出し、あいのことを思った。
「無理だゾ…。」
しんのすけがぶりぶりざえもんを見て呟く。
「オラ…あいつが…どうしても許せない…。
どうしてもあいの仇を討たないと気がすまないんだ…。
憎しみを捨てて未来を変えるなんて…、そんなの絶対に無理だゾ…。
」
「しんのすけ君…。」
立ち去るしんのすけの後ろ姿を見て、
和倉隊長が思った時、パルスブレイガーに出動命令が入った。

「ん?」
ある工場。作業員の一人が手を止め、機械の方を見る。
「どうした?」
「いや…、今なんかちっこいのがいて機械の方に…。」
「ネズミかな?」
「さぁ?」
作業員達が機械の方を見ると、体長５ｃｍ程の小ささのノスフェルが姿を現した。
「何こいつ?　ネズミ?」
「毛無いんじゃないのか?」
「何か血管浮き出ていて気持ちわりぃ…。」
ノスフェルを見て作業員達が感想を述べ、
小さい口を大きく開き、ノスフェルは一つ咆哮を上げた。

スクランブルのサイレンが鳴り、ホログラムのイラストレーターが現れる。
スクランブルを聞いた和倉隊長がコマンドルームに戻って来ると、
既にイラストレーターの説明が始まっていた。

「ノスフェルが生きている？」
西条副隊長の言葉を聞いて和倉隊長が驚く。
「はい。しかし、振動波は微弱でおそらく弱体化しています。奴が完全に回復する前に、このミッションで殲滅してください。」
ホログラムのイラストレーターは消え、すぐさまナイトレイダーは出撃準備を始めた。
チェスターβに乗り、出撃準備を進める和倉隊長が思う。
「しんのすけ君、憎しみを捨てろ！　憎しみじゃ何も変えられない！」
一方、しんのすけはストーンフリューゲルを呼び寄せ、ノスフェル出現場所へと向かった。
ストーンフリューゲルに乗り、拳を強く握り締めるしんのすけが思う。
「奴らがあいを殺した…。奴らが…！」
ナイトレイダーが現場に到着し、和倉隊長が指示を送る。
「ポイント２４７にターゲットを追い込む。石堀は待機してノスフェルを迎え撃て。」
「了解。」
そして石堀隊員を残して和倉隊長と西条副隊長が先に進み、平木隊員も石堀隊員の肩を叩いた後、和倉隊長の後についていった。
工場内を進むナイトレイダー。辺りに霧が出てきて、視界が悪くなる中、
和倉隊長のパルスブレイガーにビースト振動波が感知される。
「西条、平木、後ろだ！」
和倉隊長が叫び、
それと同時に西条副隊長と平木隊員の後方に体長１０ｍ程のノスフェルが姿を現した。
「いきなり来てビックリするじゃない！　このぉ！！」

振り向き様に平木隊員と西条副隊長がディバイトランチャーを撃ち、ノスフェルは霧の中に姿をくらます。
和倉隊長からノスフェル出現を聞き、
石堀隊員がパルスブレイガーに目をやるとビースト振動波が現れた。
しかし、次の瞬間、パルスブレイガーからビースト振動波が消えた。
「…ロストした？」
すると、石堀隊員のパルスブレイガーに再びビースト振動波が現れる。
「え？」
その瞬間、上空からノスフェルが鉤爪で石堀隊員を弾き飛ばした。
壁に激突して石堀隊員は気を失う。
その時、その場にストーンフリューゲルが現れ、しんのすけが降りてきた。
そしてノスフェルがゆっくりとしんのすけの方に振り向く。
しんのすけは石堀隊員が倒れているのを見ると、
光と共に闇も溢れ出したエボルトラスターを掲げて、ウルトラマンに変身した。
「ウルトラマン…。」
西条副隊長が呟き、他のナイトレイダーもウルトラマンを見る。
ウルトラマンはセービングビュートで石堀隊員を安全な場所に運び、ノスフェルに向けてクロスレイ・シュトロームの構えを取るが、その手が震え出す。
脳裏に蘇る憎しみによって戦った結果、
愛を傷付けてしまったこと。薫の心に傷を負わせてしまったこと。
「オラは…オラは…！」
様々な考えが浮かび、しんのすけはクロスレイ・シュトロームを撃てなくなってしまった。
「しんのすけ君！」
その時、石堀隊員がしんのすけに呼びかける。
「しんのすけ君！　撃つんだ、しんのすけ君！」

しかし、今のしんのすけに石堀隊員の声も姿も入らない。
一方、ノスフェルは今度は石堀隊員のいる場所にゆっくりと近づき、
遂に石堀隊員に向けて鉤爪を振りかぶった瞬間、
ディバイトランチャーの弾がノスフェルに当たった。
振り返るノスフェル。そこには駆けつけた和倉隊長、西条副隊長、
平木隊員がいた。
またもや逃走するノスフェル。平木隊員は石堀隊員に駆け寄り、
西条副隊長は構えたまま固まっているウルトラマンを見上げた。
「どうして撃たなかったの？」
西条副隊長が問うがしんのすけは何も反応できない。
「どうして撃たなかったの！」
西条副隊長は声を荒げ、ウルトラマンの肩に向けてディバイトラン
チャーを撃った。
しかし、それを受けてもウルトラマンはただ呆然と立ち尽くしてい
た。
やがて、ウルトラマンは逃げるように光となって消え、
西条副隊長はそんなウルトラマンがいた場所を睨んだ。
そんな西条副隊長を無言で見つめている和倉隊長に、
平木隊員が石堀隊員の状態を報告する。
「隊長！　石堀隊員は無事です。」
「そうか…。良かった。…しんのすけ君…。」
和倉隊長が呟いた時、遠くからノスフェルの叫び声が響いてきた。
それを聞いて和倉隊長は急いで指示を送る。
「ビーストを追跡する！」
「了解！」
和倉隊長、石堀隊員、平木隊員はノスフェルの後を追い、
西条副隊長は少しウルトラマンがいた場所を見ながらノスフェルの
後を追った。
そして、皆がいなくなった後、しんのすけが現れ、力尽き、その場
に座り込んだ。

脳裏にあいの死、傷だらけの愛、自分に憎しみをぶつける薫、
自分の目の前で殺されそうになった石堀隊員の姿が思い浮かぶ。
『和倉隊長…。和倉隊長の言った通り…、憎しみじゃ何も変えられなかった…。
オラはあいの仇を取らなきゃいけない…。
でも、憎しみじゃ…何も守れない…。…じゃあ、どうしたらいいんだ…。
オラはもう…何をしたらいいのか…なんにも…なんにも分かんないゾ…。』…野原しんのすけ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１３　悪夢　－ナイトメア－（後書き）

次回、遂にしんのすけが闇を乗り越えます。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１４　閃光　－ライトニング－

現場の近くの川にかかっている橋の上。
しんのすけはポケットから翼の生えたぶりぶりざえもんを取り出して見つめていた。
「あい…。」
『オラはもう何をすればいいのか分からない…。
自分がなんのために戦っているのかも分からなくなりかけてる…。
誰かに答えを教えてほしい…。オラはこれから…どうしたらいいんだ…。』
空は青空だったが、今のしんのすけに空の青さ、そしてその広さを感じることはできなかった。

フォートレスフリーダムのコマンドルームでは平木隊員が石堀隊員の傷の手当てをしていた。
「本当に大丈夫ぅ？」
平木隊員がペチンと傷の部分を叩き、痛みで石堀隊員が飛び上がる。
「いってぇ！　…もうちょっとさ、優しくしてよ。」
「甘えんじゃないわよ。」
そんな二人を見て松永管理官が和倉隊長に話しかける。
「幸い、石堀隊員は軽傷でしたが、ビーストを取り逃がしてしまうとは…。
いくらウルトラマンの正体が分かったとはいえ、
彼に協力を仰ぐことは無理な話だったというところですね…。」
「松永管理官…。」
何か言おうとする和倉隊長に松永管理官は少し目をやって答えた。
「現在Ｍ・Ｐが彼の行方を捜索中です。
もし、ＴＬＴやビーストのことを家族などに話されたりでもしたら困りますからね…。

結局、彼には戦う資格がなかったということですね…。」
「ですが…。ですが私は、しんのすけ君が苦悩に打ち勝ち、必ず這い上がってくる事を、信じています！」
そう和倉隊長は真っ直ぐな眼差しと口調ではっきりと答えた。

「私です。」
コマンドルームを出た松永管理官は三沢の携帯電話に電話をかけた。
「松永管理官…。現在、自分は任務中なので用件は手短にお願いします。」
電話に出た三沢の答えを聞いて松永管理官の目が笑う。
「そうですか。野原しんのすけの確保に向かっているのですね？では、あなた方はそのまま任務を遂行してください。」
そう言って、松永管理官が電話を切ろうとすると、
電話口から再び三沢の声が聞こえた。
「待ってください。教えていただけませんか？
どうしてあなたが私に直接このような指示をお与えになったのかを。」
「あなたが知る必要はありません。」
松永管理官は再び電話を切ろうとするが三沢は引き下がらない。
「それでは困ります。部下というものは、上司の命令を忠実にこなすもの。
ならば上司の的確な指示が必要だと思いますので…。」
「どうしても…ですか？」
「上司…ですから…。」
そんな三沢に対し、松永管理官はため息をついて答える。
「野原しんのすけの記憶を処理した後、彼を私の手元に置きたいのでお願いします。」
「…上の指示に背いて大丈夫でしょうか？」
「上は無能です。自分達では何も考えずに、
ただ、来訪者やイラストレーターの指示に従っているだけ。

ウルトラマンについても恐れて触れようともしない。
ですが、私はどんな手を使ってでもこの世界を守ります。
ウルトラマンの光。それを我々ＴＬＴの重要な戦力とすることこそが必要なのです。」
その答えを聞いて少し考えた後、三沢は松永管理官に答えた。
「…分かりました。私、三沢にお任せください。」

しんのすけは力無く道を歩いていく。
ふと前を見ると三沢を始めとするＭ・Ｐが立ち塞がり、後ろを振り返っても別のＭ・Ｐが既に後を追ってきていた。
三沢がしんのすけに呼びかける。
「おとなしく我々に捕まったらどうだ？」
「オラの記憶を…消すつもりだな…。」
「君にとってはその方が楽かもしれないな…。」
しんのすけの言葉に答えながらゆっくりと三沢はしんのすけに歩み寄っていく。
その時、横道からゆっくりと一台のタクシーが出てくるのを見た一人のＭ・Ｐが三沢に話しかける。
「三沢チーフ。例のカメラマンです。」
「よし、野原しんのすけと共にあの男も確保する。」
「え？　でもいいのですか？　確か以前、大原リーダーは放っておけと…。」
「部下というものは上司の指示に従うだけではなく、例え上司の的確な指示がなくとも、自分で判断して行動できなければいけないものなんだ。」
一方、そのタクシーはしんのすけの隣に停まり、窓を開けて乗客が言った。
「乗れ。」
タクシーの中の乗客と自分に近づいてくるＭ・Ｐを見たしんのすけはタクシーに乗り、

それを見た三沢は他のM・Pに確保の指示を出すが、それを知った根来は運転手に頼んだ。
「運ちゃん！　頼んだぜ！」
「あぁ！　任せときな！
かつて榛名山の悪魔と呼ばれた俺の腕を見せてやる！　…振り切るぜ！」
そう言って運転手は勢い良くタクシーを発進させ、
指示を受けたM・Pが追跡しようとするも、振り切られてしまった。
「根来さん…。」
タクシーの中。しんのすけは乗客、根来を見て呟いた。
「よう、久しぶり。案の定、お前も連中に追われてるみたいだな。
とりあえず、今はあいつらを何とか振り切らねぇとな。」
「……。」
一方、完全に追跡を振り切られたM・Pのうち、
数人がタクシーの去っていった方向を見て話していた。
「あのタクシー…、ものすごいスピードで走っていったな…。」
「あぁ…。あんな運転する奴見たことねぇぜ…。」
そんなM・Pの中、三沢が悔しさから叫んだ。
「くそぉ！！」

コマンドルームではイラストレーターと石堀隊員がノスフェルの映像を前に説明を行っていた。
「ノスフェルの再生能力の謎が判明しました。」
「この口の中にある臓器です。
本体が活動を停止するとこの臓器が活発化し、急速にクローン再生を行うんです。」
「納得！　だから何度倒しても生き返ったわけね。」
平木隊員が手をポンと叩いて答えた。
「この臓器を破壊すれば今度こそ…。」
ノスフェルの映像を見て、和倉隊長は静かに呟いた。

「一家四人…謎の遭難…。」
その頃、ひろし達は記事に載っていた山邑家の元別荘に来ていた。
既に警察による捜査は終わっていて、ひろし達は別荘の周りを調べていた。
「ねぇ、やっぱ考えすぎじゃない？
お兄ちゃんがこんな事件に関わっているなんて。」
持っている記事を見て、ひまわりが呟く。
「でも、そう考えたら色々と辻褄が合うのよ。」
別荘の周りを調べながらみさえが答える。
一方、ひろしは皆から離れて近くの森の中を調べていた。
「何かあるんじゃないかって思ったけど…。やっぱ、何もないな…。」
そう思って、ひろしが別荘に戻ろうとした時、彼方から不気味な声が聞こえた。
「まさか…。」
かつてのペドレオンのことを思い出し、ひろしはすぐさま別荘に戻った。
「みさえ！　早くここから逃げるぞ！」
「え？　いきなりどうしたの？」
「いいから、早く！」
首をかしげるみさえに対し、ひろしは強引にみさえとひまわりの手をとって、
自分達が乗ってきた車に向かって走り出した。
「ちょっと、一体どうしたのよ？」
「化け物がいる！」
「はぁ？」
エンジンをかけ、車を走らせるひろしの言葉の意味を理解できないみさえは
間の抜けた声を出すが、後部座席のひまわりが後ろを振り返ると、

森の影から、体長３０m程のノスフェルの体の一部が見えた。
「これ、マジ…？」

森林の中、タクシーを降りたしんのすけと根来。
「う～ん…。空気がうめぇぜ。ここまで来れば、あいつらも追ってこねぇだろう。」
伸びをして森林の空気を味わう根来にしんのすけが尋ねた。
「根来さん…。どうしてオラを…？」
しんのすけの疑問に根来が答える。
「あぁ、実はな。俺もお前と同じく連中に追われているのさ。前にも言っただろう。独自に調査してるって。それに、お前からまだ奴らの情報を聞き出してないしな。だからだよ。」
そう言って根来はタバコをくわえて、ライターを取りだす。
「なんでそこまでして…。捕まれば…記憶を消されるのに…。」
「記憶を？」
しんのすけの言葉に根来は衝撃を受け、タバコに火をつけようとする手を止めた。
「奴らそんな事まで…。」
怒りに声を震わせて根来が呟く中、しんのすけは訴える。
「でも…、放っといてほしかったかも…。」
「何？」
しんのすけの言葉に根来は声を変えるが、しんのすけはそれに気づかず話し続ける。
「あのまま記憶を消されてしまった方が…、あんな苦しみ、忘れてしまった方がオラはずっと楽だったのに…。」
「ふざけるな！」
いきなりの怒声にしんのすけは驚き、根来はそんなしんのすけに対して怒りをぶちまけた。
「おい！　記憶を消されてしまうって事がどういう事か分かるか！？

自分が今まで生きてきた証を全て失ってしまうんだぞ！！」
「生きてきた…証？」
根来の言葉にしんのすけは反応するが、根来は止まらずに怒鳴り続ける。
「誰にも！　他人の人生を奪う権利なんか無いんだ！！」
そのまま根来は力任せにしんのすけを突き飛ばし、
地面に倒れ伏すしんのすけに向かってさらに続けた。
「昔にお前達が未来を取り戻そうとした時に、
お前は俺達に未来を生きる希望を教えてくれたんじゃないのか？
過去と向き合って未来を生きるってことを！」
「過去と向き合って…、未来を…生きる…。」
「あぁ、そうだ！　それがどんな記憶であってもな、
それはそいつが生きた証なんだ！　ましてや！
真実を隠蔽するようなあの連中に！　それを消すなんてことは絶対に…。」
と、その瞬間、いきなり根来は気を失ってしんのすけの前に倒れた。
その背後には笑みを浮かべた溝呂木がいて、気絶した根来を見下ろして呟いた。
「熱弁、ご苦労さん。なかなか面白かったぜ。」
そしてしんのすけの方に目をやる。
「よう、野原しんのすけ。」
「溝呂木…。」

黒雲に覆われた空の下、溝呂木を前にしてしんのすけは力無く座り込んでいた。
「可哀相に。よほど酷い目に遭ったんだな。」
他人事のように言い放つ溝呂木をしんのすけは憎しみを含んだ目で睨みつける。
「全部…、お前のせいだゾ…。」
「俺の？」

しんのすけの言葉に溝呂木は両手を広げて冗談っぽく答える。
「お前があいを殺した…。だからオラは…。」
「会わせてやるよ。」
「え？」
「あいに俺が会わせてやる。そう言ったのさ。」
耳元で囁く溝呂木の言葉にしんのすけは驚きを隠せなかった。
溝呂木が姿を消すと、そこには笑顔のあいが立っていた。
「あい…。」
立ち上がってしんのすけが呼びかけるが、
あいは笑顔のまま無言でその場から駆け出していった。
「あい！」
そしてしんのすけも駆け出してあいの後を追った。
一方、ノスフェル出現を知ったナイトレイダーも出撃準備を進めていた。

あいを追いかけていたしんのすけの前に扉が現れ、
扉を開けると向こう側にあいの部屋があり、あいが微笑んで待っていた。
「しん様。ここで私と暮らしましょう。」
「……。」
「何もかも忘れて幸せに…。いいでしょう？」
「……。」
しばらく考えた末、しんのすけはあいの言葉に答えた。
「うん、そうしよう…。」
ゆっくりと扉に向かって歩み出すしんのすけ。
「しんのすけ君！」
そこに現場に到着した和倉隊長が現れるが、
そこに闇の光弾が撃ち込まれ、溝呂木が現れる。
「邪魔するなって。野暮な奴だ。」
「溝呂木…！」

溝呂木は高くジャンプし和倉隊長の背後に回りこんで殴り掛かってきたが、和倉隊長はそれに反応して攻撃を受け止めた。
「ほぉ。やはりナイトレイダーの隊長なだけあるな。」
溝呂木は余裕の笑みを浮かべ、
和倉隊長は溝呂木を気にしつつも、しんのすけの方に目を向ける。
しんのすけは扉の前までやって来たところで歩みを止めていた。
「どうしたの？　しん様。」
「だって…、あいは…。」
「言ったでしょう。もう何もかも忘れていいって。だから…、早く、来て…。」
あいの優しい言葉にしんのすけは笑顔で頷き、再び扉へと歩んでいった。
そんなしんのすけに向かって和倉隊長が叫ぶ。
「駄目だ、しんのすけ君！　闇に囚われるな！」
しかし、溝呂木がそんな和倉隊長の言葉を遮る。
「もう奴を楽にしてやれ。」
「何？」
和倉隊長の問いに溝呂木はダークエボルバーの闇の光弾で答える。
ダークエボルバーで撃たれ、
吹き飛ばされる和倉隊長に向かって、溝呂木が語りかける。
「お前は奴の中に昔の自分の姿を見てたんだろうが…。
いいかげん奴は苦しみから開放されたいんだ。
過去の世界で愛する者の思い出に浸って生きる方が奴には幸せなのさ。」
和倉隊長は立ち上がり、溝呂木の言葉に反論する。
「そんなのは…生きている意味が無い！」
「心配するな。後に残った抜け殻は俺が面倒見てやるよ。
忠実な操り人形、道具としてな。」
「貴様ぁーっ！！」
ディバイトランチャーを撃つ和倉隊長とそれをダークエボルバーで

迎撃する溝呂木。
両者の攻撃が中央で激突する。
一方、しんのすけはいよいよ扉を越えてあいの部屋の中に入ろうとするが、
その時、足下から音がした。しんのすけが足をどけるとそこにはぶりぶりざえもんがいた。
翼が折れたぶりぶりざえもんを拾うしんのすけにあいとの様々な思い出が巡る。
『しん様、昔そのキャラクター好きだったでしょ？』
「しん様？」
ぶりぶりざえもんをじっと見つめるしんのすけをあいは不思議そうに見つめる。

『俺達に未来を生きる希望を教えてくれたんじゃないのか？
過去と向き合って未来を生きるってことを！』
『過去は変えられないが、未来なら変える事が出来るかもしれない。』
ウルトラマンと出会い、適能者（デュナミスト）となってからの様々な出来事。
そして、しんのすけの脳裏によぎるかつての自分の言葉。
『お前…逃げるのか？　逃げるなんて許さないゾ！』
「何を迷っているの？　全てを忘れ…楽になりなさい。」
あいが冷たい声と眼差しで呼びかけるが、しんのすけはゆっくりと顔を上げた。
脳裏に蘇るあいの最期。
『私…後悔なんてしていないわ…。
しん様が…私のことを真剣に見てくれるようになってから…、
私…、ずっと幸せだった…。だから…、後悔なんてしていない…。』
「あいは…死んだんだゾ…。」
その瞬間、ぶりぶりざえもんの翼の折れた部分に小さな光が灯る。
「今のお前はあいの姿をマネしただけ…。

オラがあいと過ごした思い出を…お前は持ってない！」
やがてその光はどんどん大きくなっていき、和倉隊長と溝呂木にも及んだ。
「あいの家族とあいが溝呂木に利用されて殺された時の悲しみをお前は持ってない！」
戸惑うあいに対し、ぶりぶりざえもんを手にしんのすけは立ち上がり叫んだ。
「オラは…ただあいの姿だけを愛してたんじゃない…。あいのすべてを…オラは愛していたんだ！」
その瞬間、眩い光があいとあいの部屋を掻き消し、
しんのすけは一人現実の森の中に帰ってきた。
しんのすけは自分の手の中のぶりぶりざえもんを見て、
和倉隊長が語った言葉を噛み締める。
『過去は変えられないが、未来なら変える事が出来るかもしれない。』
その時、森の向こう側からノスフェルの声が響いてきた。

体長５０ｍの大きさに戻ったノスフェルの鉤爪に石堀隊員と平木隊員が弾き飛ばされる。
「平木！　大丈夫か！！」
倒れる平木隊員に石堀隊員が慌てて駆け寄る。
西条副隊長がディバイトランチャーを撃つが、ノスフェルはそれを避けて、
逆に鉤爪で西条副隊長も弾き飛ばしてしまった。
その時、しんのすけが駆け寄り、西条副隊長を助け出した。
「西条副隊長！」
「し、しんのすけ君…。」
助けに来たしんのすけの姿に驚く西条副隊長。
しんのすけは周りを見渡し、和倉隊長がいない事に気づく。
「和倉隊長は？」

「あなたを助けに行くって言って…。」
そこにノスフェルがしんのすけと西条副隊長に向けて再び鉤爪を振り下ろすが、
向こう側からディバイトランチャーの弾が放たれた。
それを見てしんのすけは和倉隊長のいる場所に向かって駆け出した。

近づいてくるノスフェルに向けて、
溝呂木のところから戻ってきた和倉隊長がディバイトランチャーを構える。
「開けろ…、開けろ、開けろ！」
口を開けて叫び声を上げるノスフェル。
その機を逃さず和倉隊長はすぐさまディバイトランチャーを撃つが、
弾は惜しくも外れてしまった。
逆にノスフェルの鉤爪が和倉隊長に迫るが、
そこにしんのすけが駆け寄り、和倉隊長を助け出した。
「和倉隊長！」
「しんのすけ君…！」
しんのすけと和倉隊長は立ち上がりノスフェルを見る。
「しんのすけ君。奴の弱点は口だ。」
「口？」
「奴の口を狙え。再生システムを破壊しない限り、
奴は何度でも蘇る。…また同じ惨劇が繰り返される…。」
和倉隊長はしんのすけの目を真っ直ぐ見て告げ、その言葉を聞いたしんのすけは
エボルトラスターを取り出し、見て、少し考えて答えた。
「了解…！」
しんのすけは和倉隊長から少し離れ、そこでエボルトラスターを鞘から抜き、
エボルトラスターから眩い光が溢れると、それを掲げた。
しんのすけは巨大な光となって地上に降り立ち、

和倉隊長が見守る中、ウルトラマンがノスフェルと対峙。
ジュネッスにスタイルチェンジして、
ノスフェルに向けて決意と共にクロスレイ・シュトロームの構えをとった。
「オラはもう逃げたりなんかしない！　もう誰かを不幸にしないために、
憎しみも、悲しみも、全部背負ってく。…それが、オラの出した答えだゾ！」
決意と共に撃たれたクロスレイ・シュトロームはノスフェルの口の中へと撃ち込まれ、
再生システムを破壊されたノスフェルは全身に痙攣が起き、血管が破裂していった。
続けてウルトラマンはノスフェルに向けてオーバーレイ・シュトロームを放ち、
それを受けてノスフェルは光の粒となった。
ウルトラマンは和倉隊長を見つめ、それに気づいた和倉隊長もウルトラマンを見つめる。
二人はしばらく黙って見つめ合っていたが、
やがて和倉隊長が立ち去り、ウルトラマンは光と共に消え、
しんのすけは眩い光となって地上に降りると、それを見送った。
雲はいつの間にか晴れていて、夕暮れの光が辺りを優しく包み込んでいた。

数日後、しんのすけはあいや皆との思い出が詰まったふたば幼稚園にやって来ていた。
折れた翼を直したぶりぶりざえもんを手にしんのすけは思う。
「この苦しみは…あいと生きた証なんだ…。オラはもう迷ったりなんかしない…。」
ふと、しんのすけが隣に目をやると、
そこにはあいがいて、しんのすけに向けて微笑みかけ、力強く頷い

ていた。
ように見えたが次の瞬間、そこにあいの姿は無かった。
しかし、しんのすけの顔は晴れ晴れとしていた。
『過去を変える事は出来ないけど…、
未来は…変える事が出来るかもしれないから…。』…野原しんのすけ
広がる青空を仰ぎ、しんのすけは青空の下を歩いていった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１４　閃光　－ライトニング－（後書き）

やっと、「ネクサス」での“あの展開”にあたる部分が終了。
今回は、サブタイを原作とは違うオリジナルのものに変更しました。
原作での話だと、Ｍ・Ｐが根来と孤門が乗ったタクシーを追跡する時に、
普通に発進したタクシーに追跡を振り切られてしまうという、不自然な部分があったので、
クレしんっぽく、“かつて峠で悪魔と恐れられたタクシー運転手”を登場させて、
その運転手がタクシーを勢い良く発進させるという展開にしました。
（ちなみに運転手の話に出てくる「榛名山（はるな）」は、
某走り屋漫画の主人公のホームコースのモデルとなった山です。）
あと、運転手は「振り切るぜ」と言ってますけど、あの“死なない男”とは関係ありませんｗ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１５　闇　－ダークネス－

「エリア１１、ポイント４３４にビースト振動波確認。
ナイトレイダーにスクランブル要請。」
イラストレーターの指示を受けてナイトレイダーが出撃準備を進める。
同じ頃、しんのすけもエボルトラスターの明滅を見て、家を静かに抜け出し、
ストーンフリューゲルを呼び寄せて現場へと向かっていた。
「オラは迷いを捨てて、ウルトラマンとして戦い続けることを決めた。
誰かを守るために…ビーストと戦い続けるってことを…。」
そう心の中で呟くしんのすけの顔には確かな覚悟と決意があった。

満月が怪しく照らす森の中、ナイトレイダーが現場に到着する。
「なんか嫌な感じがするわね…。」
「しっ。…何か聞こえるわ。」
西条副隊長の言葉を受けてナイトレイダーは耳を澄まして周りを見渡す。
風が森の木々を揺らす中、何か苦しんでいるような呻き声が響いてきた。
その頃、同じく現場に到着していたしんのすけもその呻き声を聞いていた。
「ビースト？」
しんのすけが呟いた時、木の上から何者かが襲い掛かってきた。
急いでしんのすけは襲い掛かってきた存在を振り払って、
ブラストショットを向けるが、
「え…！？」
自分に襲い掛かってきた存在が人間の女性だった事に驚く。

一方、ナイトレイダーも数人の男性に取り囲まれていた。
「人間…？」
事態に戸惑うしんのすけに女性が飛びかかってブラストショットを奪い、
ニヤリと不気味な笑みを浮かべて引き金に指をかけるが光弾は発射されなかった。
その瞬間、その女性は地面に倒れた。
しんのすけが見ると、
倒れた女性の背後で西条副隊長がパルスブレイガーを構えていた。
「西条副隊長！」
「無防備に見える相手でも決して油断するな…。」
西条副隊長は女性からブラストショットを奪い返し、しんのすけに渡した。
「それがこの世界で生き残るための鉄則よ。」
しんのすけは倒れた女性に目をやる。女性は倒れたままピクリとも動かなかった。
「って、もしかして…！」
「麻酔弾よ。」
「だよね…。」
西条副隊長の答えにしんのすけはホッとする。
そこに和倉隊長達がやって来る。
「二人とも無事か？」
「はい。そちらは？」
「襲撃者は3名。何とか全員眠らせた。」
和倉隊長の言葉を受けて、眠ったままの女性を見てしんのすけが呟く。
「でも彼女達、どうしてオラ達を襲ったんだろう？」
翌朝、しんのすけ達を襲った者達は全員タンカに乗せられて運ばれていった。

「彼女達、まだ眠ったままね。」
平木隊員の言葉に石堀隊員が続ける。
「でも目覚めた時には全て忘れている。」
「それがせめてもの救いね…。」
「残念だけど二度と目覚める事は無いわ。」
その言葉にナイトレイダーとしんのすけが振り返ると、
大原リーダーと三沢がやって来ていた。
「大原リーダー、二度と目覚める事が無いってどういう…。」
「４人全員死亡を確認したわ…。」
「そんな…。」
「…死亡時刻の特定は？」
和倉隊長が大原リーダーに問う。
「昨夜の１０時から１１時までの１時間よ。」
大原リーダーの答えに和倉隊長が驚く。
「間違いありませんか？　それが確かなら…。」
「えぇ…。彼らはあなた達を襲撃した時には既に死んでいたことになるわ。」
「既に死んでた…？」
大原リーダーの言葉にしんのすけはあいの事を思い出す。
「溝呂木…。奴だ！　奴が４人を殺して操り人形にしたんだゾ！」
怒りに体を震わせるしんのすけに対し、西条副隊長は醒めた感じで答えた。
「そうでしょうね…。ただ…、全ては１年前に始まっていたのよ。」
「１年前？」
しんのすけが呟いた時、イラストレーターから新たな指示が入った。
「ＣＩＣです。昨夜から確認されたビースト振動波ですが、今も、その周辺で確認されています。
様子を見るため、しばらく現場で待機していてくれませんか？
ただ溝呂木が一体何を考えているか分からないので、
何かあっても無闇に行動しないようにしてください。」

「了解しました。」
「今の人って…？」
しんのすけの疑問に石堀隊員が答える。
「イラストレーターさ。俺達に作戦の指示を送ってくる作戦参謀だよ。」
続いて平木隊員が説明する。
「普段はＣＩＣって場所にいて、基地だと私達の前にホログラムで現れて、
作戦内容の説明とかをしてくれるの。」
「ふーん…。」
２人の説明を受けたしんのすけは先程の通信の声を思い返す。
（あの声…。前にどっかで聞いた気がする…。）
そして、ナイトレイダーとしんのすけはキャンプを張って現場に待機する事になった。

「でも俺達も人の事を言えるのかな。」
「え？」
Ｍ・Ｐが現場から引き上げる途中、三沢が醒めた感じで大原リーダーに呟く。
「記憶を勝手に処理する俺達も人の人生を弄（もてあそ）んでいると言えますからね…。」
「でも…、私達は被害者のことを思って…記憶処理をしている…。
自分の野望のために人を殺して操っている溝呂木とは…違うわ…。」
大原リーダーは迷いながらも答え、そんな大原リーダーに三沢は何も答えなかった。

一方、ナイトレイダーとしんのすけはキャンプで休憩を取っていた。
「うん。だから、今日はボーちゃんの家に泊まるから。
うん。ほーい。じゃ、そういうことで。」
みさえにウソの電話をした後、しんのすけは携帯電話を閉じて一息

つく。
すると、西条副隊長がどこかに出かけ、
それを見たしんのすけは、座って本を読んでいる和倉隊長に話しかけた。
「和倉隊長。」
「何だ？」
「朝、西条副隊長が言っていた事…。」
「あぁ…。」
「全ては1年前に始まっていたって…、
元々溝呂木ってナイトレイダーの副隊長だったんだよね？
…その頃のあいつってどんな奴だったの？」
2人のやり取りを聞いた石堀隊員は平木隊員に少し席を外すように促すと、
一緒に外に出て行ってしまった。
「ねぇ、どうしたの？　石堀隊員？」
平木隊員の問いに石堀隊員は少し重い口調で答えた。
「隊長はあまり話したくないんだ。1年前の出来事を。」
「そうなの？　でも、どうして彼には…。」
「知っておく必要があると思ったんじゃないのかな。いずれ戦うことになるだろう敵だからな。」
石堀隊員の答えを聞いて平木隊員は頷く。
「なるほどねぇ…。ねぇ、石堀隊員。私にも教えてくれない？　溝呂木のこと。」
一方、和倉隊長はしんのすけの質問にしばらく黙っていたが、
やがて本を閉じて静かに語り出した。
「溝呂木眞也…。優秀だったさ…。
ビーストハンターとしての実力は正直俺より上だった。
これから先も溝呂木を上回るビーストハンターが存在するかどうか…。」
しんのすけは和倉隊長の話を黙って聞き、

和倉隊長はそんなしんのすけを見ながら話を続けた。
「俺は溝呂木を信用していた…。そして西条も…。」

「西条凪です！　本日付でナイトレイダーＡユニットに着任しました。」
やや緊張した面持ちで挨拶をする西条隊員。和倉隊長が立ち上がって挨拶をする。
「隊長の和倉だ。チームメンバーを紹介する。」
そして西条隊員を椅子に座っている２人の隊員の方に向ける。
「まず彼が副隊長の…。」
「溝呂木眞也だ。」
溝呂木副隊長は和倉隊長の言葉を遮って自己紹介をし、西条隊員の顔を見てニヤリと笑う。
「いい目をしているな。次のミッションが楽しみだ。」
溝呂木副隊長が発する何とも言えない雰囲気に西条隊員は少し気圧された。

和倉隊長はコーヒーを二人分入れてその一つをしんのすけに渡した。
コーヒーを飲みながら話をする和倉隊長と話を聞くしんのすけ。
「溝呂木が西条に何を感じたのか分からない…。
とにかく我々４人はその夜、現場に出撃した。それが西条にとって初めての実戦だった。」

「掃討せよ！」
廃工場。和倉隊長の指示で、ナイトレイダーは
前方のビーストに向けてディバイトランチャーを一斉に放った。
全長５ｍ程の大きさのビースト・アラクネアが倒されて光の粒となる。
「ターゲット消滅。第一攻撃態勢解除。ＣＩＣ、状況終了しました。」

戦い終わって和倉隊長と石堀隊員はホッと一息吐いたが、
「待ってください！」
西条隊員だけはいまだ緊張を解かずにディバイトランチャーを構えていた。
「どうした？」
「もう1体…、近くにいます。」
「何？」
辺りを警戒する西条隊員に対し石堀隊員はフッと笑って答えた。
「初めての実戦だからな、現場には独特の雰囲気ってのがあって…。」
という石堀隊員の言葉に聞く耳持たず、西条隊員はゆっくりと端の暗闇へと近づいていった。
「おい、既にビースト振動波の数値は低下しているはず…。」
とその時、いきなり暗闇の中から2匹目のアラクネアが現れ、西条隊員のディバイトランチャーを叩き落した。
「ビースト！？」
和倉隊長と石堀隊員は急いでディバイトランチャーを構えるが、別方向から撃たれた弾で2匹目のアラクネアは倒され、光の粒となった。
西条隊員が見上げると、階段の上に溝呂木副隊長がいた。
「溝呂木…。」
驚く和倉隊長に向かって溝呂木副隊長が笑って答えた。
「俺ももう1体ビーストが隠れている気がしてな。」
そして西条隊員の方を見て尋ねる。
「大丈夫か？」
溝呂木副隊長の言葉に西条隊員は少し間を置くが、やがて笑顔で答えた。
「はい！」
和倉隊長はコーヒーを飲むのを途中で止めて話し続け、

しんのすけはコーヒーを飲みながら話を聞いた。
「あの初めての実戦で俺は実感した。
溝呂木と西条、二人には同じ何かがある事を…。
技術とか経験とかを超えた…、もっと根源的な…、戦場での資質のようなものを…。」

「迂闊に接近できないな…。」
地下通路。全長１０m程の大きさのビースト、フログロスが連続して発する火球の前に、
ナイトレイダーは柱の影に隠れて防戦するしかなかった。
やがて溝呂木副隊長が決断する。
「俺が行く…。隊長、バックアップを頼む。」
溝呂木副隊長の頷きに和倉隊長も頷く。
「分かった。」
次の瞬間、溝呂木副隊長は柱から出てディバイトランチャーを撃ち、
フログロスがよろめいたのを見て一気に駆け出した。
体勢を立て直したフログロスは
近くまで接近した溝呂木副隊長を見て火球を撃とうとしたが、
その隙を見て他のナイトレイダーも柱から出てきて一斉攻撃。
西条隊員の放ったディバイトランチャーを頭に受けてフログロスは苦しみ、
溝呂木副隊長が至近距離から放った止めのディバイトランチャーを受けて光の粒となった。
「抜群の射撃だったぜ。」
戦い終わって、溝呂木副隊長の言葉に西条隊員は少し照れる。
「お前には戦士としての才能がある。いずれチームを引っ張れるだけの実力がな…。」

和倉隊長は冷めたコーヒーをテーブルの上に置き、
しんのすけは飲み干したコップをテーブルの上に置いた。

「溝呂木の厳しい指導に応え、
西条はビーストハンターとして着実に成長していった。
だが俺は…、そんな二人の姿に漠然とした不安を感じ始めていた…。
そして運命の日が来た…。あれは去年のちょうど今頃…。」

「凪。思う存分ビーストどもを蹴散らしてやれ。」
スクランブルのサイレンが鳴り、出動準備を進めるナイトレイダーの中、
溝呂木副隊長の言葉に西条隊員が黙って頷く。
「出動！」
和倉隊長の号令と共にシューターが射出され、ナイトレイダーが出撃した。
「闇の中で何かうごめいているぜ。それも一つや二つじゃない。」
現場である倉庫。溝呂木の報告を聞いて和倉隊長が尋ねる。
「生存者か？」
「違います。生体反応は０。倉庫内の人間は既に全滅しているはず…。」
石堀隊員が答えた時、倉庫の中から何か苦しんでいるような呻き声が響いてきた。
「ビースト…？」
西条隊員が呟く。
ナイトレイダーの視線は倉庫の扉、そこから垣間見える闇の世界へと注がれた。
皆が緊張する中、溝呂木副隊長が冗談っぽく呟く。
「面白えじゃねぇか。…ワクワクするぜ。」
ニヤリと笑う溝呂木副隊長に対し、和倉隊長が無表情で話しかける。
「怪物と戦う者は気をつけるがいい…。」
いきなり話し出した和倉隊長の方を皆振り向くが、和倉隊長は構わず話し続けた。
「深き闇を覗き込むと…、闇もまた…お前を覗き込む…。」

話し終わり、和倉隊長は溝呂木副隊長の顔を無言で見つめた。
しばらく黙った後、溝呂木副隊長が口を開いた。
「まず、俺と西条の二人で突入させてくれ。」
その申し出を和倉隊長は許さなかった。
「駄目だ。ＣＩＣの作戦は全員で突入するとなっている。」
「ＣＩＣ？　あいつの作戦なんて関係無い。」
「何？」
今度は溝呂木副隊長の方を皆振り向くが、溝呂木副隊長は構わず話し続けた。
「イラストレーター…。未来を予知できるとか何とか言っているが、俺は信用できない。前から思っていたんだ。現場に来ない、机上で展開を描く奴の作戦なんて聞けないとな。」
「溝呂木…。」
「まず、俺と西条とで中の様子を見る。
ここに隊長達がいる限り、あの闇の中で何があっても全滅は免れる。
それがあいつとは違い、実際に現場を知っている俺自身の考えた作戦だ。」
話し終えて、溝呂木副隊長は和倉隊長の顔を無言で見つめた。
和倉隊長が西条隊員を見ると、西条隊員は無言で力強く頷いた。
しばらく悩んだ末、和倉隊長は溝呂木副隊長と西条隊員の二人を闇の中に行かせた。

和倉隊長の顔には深い後悔の念が表れていた。
「何故あの時、許可したのか今でも分からない…。
ただ…俺の心も…、あの深い闇を覗いていたのかもしれない…。」
苦悶する和倉隊長をしんのすけは何も答えず見る。
「突入から数分後…。二人から連絡が途絶え…、
大きな爆発が起きて溝呂木はその紅蓮の炎の中に消え、
西条一人だけが生還した…。それが１年前の事件…。
そしてその夜、恐ろしい悪魔が生れ落ちた…。」

和倉隊長の話にしんのすけがようやく口を開く。
「悪魔…メフィスト…。」

「溝呂木…！？」
フォートレスフリーダム。
溝呂木失踪について査問会を受けていた和倉隊長と松永管理官は
画面に映し出された溝呂木の姿に驚愕した。
ナイトレイダーの隊服を身に付け、ディバイトランチャーを手に持ち、
基地内の通路を歩く溝呂木の後には全長１０m程の大きさのノスフェルが控えていた。
そして溝呂木のディバイトランチャーとノスフェルの鉤爪によって、
ナイトレイダーのBユニットとCユニットの隊員が次々と殺されていった。
かつての仲間達を手にかけながら不気味な笑みを浮かべる溝呂木はフッと笑い、
胸元からダークエボルバーを誇示するかのように取り出して左右に引き抜いた。
溝呂木を闇が覆い、溝呂木という存在を打ち破って、
骸骨を思わせる悪魔・メフィストが姿を現す。
その瞬間、和倉隊長が見ていた画面にノイズが走った。

「じゃあ、ナイトレイダーB、Cユニットって溝呂木の手によって壊滅させられたの！？」
石堀隊員の話に平木隊員が驚いた表情で尋ねた。
「…あぁ。以前話した過去に一度だけ出現した巨大ビーストというのも、
溝呂木が変身したあの闇の巨人・メフィストだったんだ…。」
「そうだったんだ…。でも、なんでもっと早く話してくれなかったの？」

「さっきも言っただろ。隊長はあまり1年前の出来事を話したくないんだ。
それに…、同じナイトレイダーの仲間が他の仲間を襲うなんて、ショックが大きい話だからな…。」
「そんな…。」
石堀隊員の説明に平木隊員は戸惑う。

一方、その頃、西条副隊長は一人川のほとりで溝呂木から貰ったドッグタグを見つめ、
1年前の事を思い出していた。

「凪…。これをお前に渡す。次に会う時まで交換だ。いいな。」
西条隊員は少し迷った末、自分のドッグタグをちぎって答えた。
「…はい。」

「凪。俺はもうとっくに返したぜ。」
西条副隊長が声のした方に振り向くと、そこには溝呂木が立っていた。
「早く俺のも返しに来いよ。」
急いで西条副隊長はパルスブレイガーを向けるが、既にそこには何も無かった。
その時、森の上空を巨大な漆黒の翼を持った、
カラス型ビースト・カラドリアスが飛び抜けた。
「ビースト!」
それを見た和倉隊長は話を中断して戦闘準備を始め、
しんのすけも近くにおいてあったエボルトラスターとブラストショットを手に取った。
石堀隊員と平木隊員もキャンプ場所へと急いで戻ってきた。
そして西条副隊長も溝呂木を探すのを一旦止めてキャンプ場所に向かった。

カラドリアスの翼の羽ばたきによって辺りに衝撃波が巻き起こり、ナイトレイダーを巻き込む。
その様子を溝呂木が遠くから眺めていた。
「よぉ。」
しんのすけの背後に溝呂木が現れ、しんのすけが振り返る。
「溝呂木…！」
溝呂木は笑みを浮かべてしんのすけに語りかける。
「さっき1年前の出来事を和倉に聞いていただろ？　お前も野暮な奴だな。
他人の愛する者との楽しい思い出を聞いてどうしようってんだ？
人の恋路を邪魔する奴はロクな死に方しないぜ。」
「愛する者？　溝呂木、お前がその言葉を言う資格はないゾ！」
「ほぉ、なかなか言ってくれるじゃないか。」
そう言って、溝呂木はダークエボルバーから闇の光弾を連続して放ち、
しんのすけはエボルトラスターでバリアを張ってそれらを全て受け止めた。
対峙する二人。
「どうする？　もっと俺と遊ぶか？　それともあの連中に加勢するか？」
溝呂木の問いにしんのすけは迷う事無く答える。
「溝呂木。お前はいつか必ず倒すゾ！」
「やれよ坊や。俺も、お前は必ず倒す。
覚えておくんだな。さぁ行けよ…正義の味方。」
溝呂木の挑発に答えず、しんのすけはエボルトラスターを掲げてウルトラマンに変身。
上空からナイトレイダーを翻弄するカラドリアスに、
ウルトラマンは飛び蹴りをして地上に蹴り落とした。
「ウルトラマン…。」
和倉隊長が呟く。

カラドリアスはすぐさま上空に飛び立ち、
それを見たウルトラマンはジュネッスにスタイルチェンジして、メタフィールドを展開した。
「位相の褶曲を確認。メタフィールドです。」
石堀隊員の報告を受けて和倉隊長が指示を出す。
「各員、直ちにクロムチェスターに搭乗！」
「ストライク・フォーメーションですね！」
平木隊員の言葉に和倉隊長が続ける。
「そうだ。メタフィールドに突入し、ウルトラマンを援護する！」
「了解！」
石堀隊員、平木隊員は和倉隊長の指示に従ったが、
一人、西条副隊長だけ疑問を訴えた。
「待ってください！　ＣＩＣへの確認は？」
その疑問に和倉隊長は少し間を置いてから答える。
「…現場指揮官としての判断だ。…急げ！」
「了解。」
西条副隊長も指示に従い、ナイトレイダーはチェスターに乗り込んだ。
「あの男が何も仕掛けてこなければ良いけど…。」
ＣＩＣでイラストレーターは画面を見て一人呟いた。

「セット！　イントゥ・ストライクチェスター！」
西条副隊長の号令と共にチェスターが合体してストライクチェスターになり、
メタフィールドに突入。
メタフィールド内ではウルトラマンとカラドリアスの戦いが続いていた。
空中を飛び抜けるカラドリアスを追って、ウルトラマンは
パーティクル・フェザーの強化版・ボードレイ・フェザーを連続で放つが、

カラドリアスはそれらを全て避け、さらに高く飛んで、
上空からウルトラマンに体当たりして地上に叩き落すと、
倒れたウルトラマンの上に乗り、踏みつけて痛めつけた。
ウルトラマンは力任せにカラドリアスを蹴り飛ばし、
何とか逃れるがコアゲージが点滅を始めていた。
ウルトラマンが点滅するコアゲージを見た隙を突いて、
カラドリアスはその鋭いクチバシでウルトラマンのコアゲージを突き刺した。
胸に激痛が走り、ウルトラマンは衝撃で後ろに吹き飛ばされ、
コアゲージにはヒビが入っていた。
西条副隊長はスパイダーミサイルをカラドリアスに向けて撃つが、
カラドリアスは素早く急上昇して避け、
ミサイルは倒れていたウルトラマンに当たってしまった。
「しまった！」
「ナイスショット。」
溝呂木が笑う。
カラドリアスが上空を旋回して、
ストライクチェスターやウルトラマンに対して攻撃のチャンスを窺う中、
西条副隊長はフラフラになりながらも立ち上がるウルトラマンを見て、
何かを思い立ったようにストライクチェスターの速度を上げてカラドリアスに向かっていった。
カラドリアスも速度を上げてストライクチェスターに向かい、ぶつかる直前に急下降したが、
西条副隊長はそれを逃さず追って急下降、カラドリアスに照準を合わせた。
「スパイダーミサイル、ファイア！」
スパイダーミサイルを受けてカラドリアスはそのまま地上に落下。
それを見たウルトラマンはカラドリアスに向けて、

クロスレイ・シュトロームを撃った。
しかし、そこにメフィストが現れ、
左腕のアームドメフィストでクロスレイ・シュトロームを受け止めた。
メフィストの出現に驚くウルトラマン。
一方、メフィストはストライクチェスターをチラリと見た後、
カラドリアスと共に無言で姿を消した。
そしてコアゲージが傷付いたウルトラマンも膝をつき、
メタフィールドと共に姿を消した。

フォートレスフリーダムに帰還したナイトレイダー。
和倉隊長は廊下を歩いていたが、そこに石堀隊員がやって来る。
「隊長！」
「どうした？」
「副隊長の姿が…どこにも見えません！」
「…何？」
驚いて顔を上げる和倉隊長。
その頃、西条副隊長は一人ディバイトランチャーを助手席に置き、
1年前の事件の起きた工場へ車を走らせていた…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１５　闇　－ダークネス－（後書き）

今回は、原作で未登場に終わったカラス型ビーストを登場させました。
名前についてはカラスの「カラ」と「ウルトラマンコスモス」の「リドリアス」の名前を合わせました。
（リドリアスは凶暴な怪獣じゃないんですけどねｗ）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１６　黙示録　－アポカリプス－

アクション高校。しんのすけのいるクラスは一学期最後の国語の授業をしていた。
しんのすけは時折ノートを取りつつも、
戦いによる疲れからほとんど居眠りしていた。
しかし、その時、一瞬胸を激痛が走り、思わず胸を押さえるしんのすけ。
「野原君？　どうしたの？」
先生がしんのすけに問うが、しんのすけは
「大丈夫だゾ…。」
と答えると机の上に転がっているペンを手に取った。
そんなしんのすけをマサオは心配そうに見る。
一方、しんのすけの脳裏に今朝のカラドリアスとの戦いで、
コアゲージをその鋭いクチバシで突き刺されたことが思い浮かんだ。
（もしかして…、あの時の傷が…。）

「現在、西条副隊長の所在は不明。
Ｍ・Ｐの監視を明確な意思で振り切ったと報告がありました。もし、逃亡罪に問われれば…。」
その頃、フォートレスフリーダムでは、
ある部屋で和倉隊長が松永管理官の報告を受けていた。
松永管理官の報告に和倉隊長の顔が曇る。
「記憶消去もありうると？」
「おそらく。」
「残された時間は？」
「多く見積もって…。５時間程度と言ったところでしょうか。」
「…分かりました。」
そう言って立ち上がった和倉隊長に松永管理官が問いかける。

「どうするおつもりですか？」
松永管理官の問いに部屋を出ようとした和倉隊長が答える。
「私が直接連れ戻します。」
「和倉隊長。立場上、それが出来ない事はあなたが一番理解しているはずですが。」
「西条は溝呂木に会いに行ったんです。あの闇と…再び向き合う為に…。」
「闇？」
「管理官。西条凪は私にとって大切な副官です。失うわけにはいきません。」
松永管理官に向かって頭を下げた後、和倉隊長は退室した。

「で、さぁ。どうして私達だけ居残りなわけよ？」
コマンドルームでは平木隊員がネイルケアをしながら愚痴をこぼしていた。
パソコンで近々配備される新型機のデータを見ていた石堀隊員が答える。
「色々理由はあるだろ。」
「色々って？　何？」
「ビースト事件が発生すれば出動しなければならない。」
「二人っきりで？　隊長も副隊長もいないのに？」
平木隊員の問いに石堀隊員は手を止めて顔を上げる。
「まぁ、常識的に考えて…無理だよな。」
「でしょう？　ＢユニットもＣユニットもいなくて、私達だけで全てのビースト事件に対応してんのよ。それに、ウルトラマンが現れてから何か事件が立て続けに起きてない？」
「それを知ってか知らずか、現在、Ｂユニットが設立に向けて動き出しているみたいだぞ。」
「へぇ。じゃあ、Ｂユニットに対応できる免疫判定を持つ人が見つ

かったの？」
「あぁ。ただ、現時点でまだ二人くらいしか集まっていないらしい。でも、Ａユニットだけではいつか対応できなくなるからな。」
「なるほどねぇ…。」
話が一段落つき、石堀隊員は再びパソコンを覗き込み、
平木隊員は塗り終わった爪を見る。
「ま、いいか。ねぇ、どうこの色？」
「…あぁ。」

西条副隊長は１年前の事件が起きた工場にやって来ていた。
工場はあの後、何も異変が無いと判断され、そのまま普通に再建されて、
現在はＴＬＴの監視も無くなっていた。
ディバイトランチャーを構えて工場の中を進む西条副隊長の脳裏に、
かつての溝呂木との会話が蘇る。

「凪。お前は何故この仕事を続けている？」
フォートレスフリーダムのダムの上、
満月の下で西条隊員と溝呂木副隊長が並んでいた。
溝呂木副隊長の問いに西条隊員が強張った顔で答える。
「ビーストが…憎いから…。奴らを一匹残らずこの地上から抹殺したいから…。」
「つまりは復讐か。」
溝呂木副隊長の言葉に西条隊員は頷く。
「私が子供の頃、ビーストによって母を殺され、
父も犠牲になった…。私は…ビーストを決して許さない…！」
「…そうか、ビーストの最初の犠牲者になったというのはお前の…。」
溝呂木副隊長が見ると、西条隊員は唇を強く噛み締め、目にはうっすらと涙が滲んでいた。

しばらくして今度は西条隊員が溝呂木副隊長に尋ねる。
「副隊長は？　どうしてビーストと戦うんですか？」
西条隊員の問いに溝呂木副隊長が強張った顔で答える。
「俺か？　俺は…死にたくないからだ。」
「え？」
意外な答えに西条隊員は思わず溝呂木副隊長の方を見た。
溝呂木副隊長は西条隊員から目を逸らし、じっとダムの下を見ていた。
「俺は死ぬのが怖い…。
だから俺はガキの頃から恐怖に対抗するための力を求めていた…。
イジメに対抗するために格闘術を、犯罪行為に対抗するために警察の力を…。
あらゆる恐怖を拭い去るために、俺は力を求め続けた…。
それでも安心できず、俺は更なる力を求め続けて、ナイトレイダーに入ったんだ…。
未知の化け物と戦うことで、恐怖を完全に拭い去るために…。」
その話に西条隊員は少し押し黙るが、
溝呂木副隊長はそんな西条隊員を見ながら話を続けた。
「…最近よく変な夢を見る…。」
「夢？」
「あぁ…、密林の中を歩いていくと、
やがてその先のジャングルの中に謎の遺跡とそこに聳える塔が現れる…。」
「遺跡に…塔…ですか？」
「あぁ…、しかし俺はそこには行けなかった。行く勇気が無かった…。
そうこうしていると、背後にもう一つ同じ遺跡が現れるんだ…。
俺はそっちの方に心惹かれる感じがした…。そして、夢の最後…、
背後に現れた遺跡の彼方から真っ黒な闇が広がり、俺を飲み込もうとする…。」

話し終えた溝呂木副隊長の手が震えているのを見た
西条隊員は自分の手をそっと重ねて語りかけた。
「恐れる事なんて無いわ…。」
溝呂木副隊長の目を見る西条隊員。
溝呂木副隊長も西条隊員の目を見る。
「だって…、副隊長は誰より強い人間だから…。」
そう言うと西条隊員は優しく微笑んだ。

現在。工場の中を進む西条副隊長の前、闇の中から溝呂木が姿を現す。
「やっと来てくれたか…。」
嬉しそうに微笑む溝呂木に対し、西条副隊長はディバイトランチャーを構える。
「凪。お前だけが俺を理解できる…。
俺達は特別な存在だ。それはお前もとっくに気づいているはずだ。」
溝呂木の言葉に西条副隊長はディバイトランチャーを下ろす。
その手には溝呂木のドッグタグが握られていた。
「1年前の再会の証…。それを持ってこっちに来い。」
西条副隊長はドッグタグを見つめ、続いて溝呂木を睨みつける。
「一つ…、聞いていい?」
「何だ?」
「1年前のあの夜、一体何があったの?
私を残し…、この奥の闇であなたは何を見たの?」
西条副隊長の問いに溝呂木は少し間を置いた後、答える。
「真実さ。」
「真実?」
「そう、俺はあの夜、本当の自分と出会ったのさ…。」

1年前、先に突入した溝呂木副隊長と西条隊員は
工場がゾンビのような異様な動きをする集団に占拠されていた事を

知った。
二人はその集団に取り囲まれたが格闘で何とか窮地を脱し、
さらに溝呂木副隊長がパルスブレイガーのアタックモードで周囲を
撃ちつくして全て倒した。
倒れた人々を見て西条隊員が尋ねる。
「まさか…？」
「最初から死んでるぜ。見ろ。」
溝呂木副隊長に促されて西条隊員は倒れた人々の顔を見る。
「殺した人間を…人形のように操るビースト…。」
「今までにない能力だな…。」
その時、溝呂木副隊長の脳裏にジャングルの中の遺跡と
そこに聳え立つ塔のイメージが浮かび上がった。
「何故あの夢が…。」
「どうしたんですか？」
尋ねる西条隊員に、溝呂木副隊長は声をかけようとしたが、
その時、工場の奥の方から不気味な呻き声が響いてきた。
それを聞いた溝呂木副隊長は西条隊員を物陰に移動させて指示を言
う。
「俺が先に突入する。」
「え？」
「二人同時に操られたら隊長達と相打ちになる。
だが一人残れば最悪の状況だけは回避できる。」
「なら私が先に！」
「駄目だ！」
溝呂木副隊長の一喝に西条隊員は押し黙る。
しばらく無言になった後、溝呂木副隊長が口を開いた。
「俺がビーストに操られたら迷わず撃て…。
凪、俺はお前の手で殺されるのなら本望だ。」
そして、溝呂木副隊長はドッグタグを取り出し、西条隊員に見せた。
「凪…。これをお前に渡す。次に会う時まで交換だ。いいな。」

西条隊員は少し迷った末、自分のドッグタグをちぎって答えた。
「…はい。」

「あの時、もし二人同時に突入していたら、俺がお前を殺していただろう…。」
現在。溝呂木の言葉に西条副隊長の表情が微かに動いたが、
溝呂木は気づきながらも気にせず話し続けた。
「それほどあの体験は素晴らしいものだった。」

1年前。西条隊員と別れた溝呂木副隊長は、
ディバイトランチャーを手に工場の奥へと進んでいった。
そして行き止まりまでやって来た時、自分の背後で重い足音がするのを耳にした。
溝呂木副隊長がゆっくりと振り向くと、背後にいた巨人もゆっくりと振り向いた。
「誰だ?」
「メフィスト…。」
その巨人、メフィストは溝呂木副隊長にとても耳馴染みな、
しかし、どこか違う声で答えた。
溝呂木副隊長はその名前を聞くと自分の好きなヨハネの黙示録や、
聖書といったものの中に登場する黒い悪魔の名前もメフィストであることを思い出し、
目の前のメフィストを見上げた。
「砕け散れ…!」
溝呂木副隊長は震える声でディバイトランチャーを撃つが、
メフィストには何のダメージも与えられなかった。
ディバイトランチャーを撃ち終わった溝呂木副隊長に
メフィストがゆっくりと身を屈めて覗き込んできた。
「お前は、ビーストを殺す事を楽しんでいる…。」
「何?」

「ビーストが人間を襲うのも、人間がビーストを倒すのも、全く同じだ…。
弱肉強食の世界では正義も善悪も無い…。
あるのは、強きものだけが生き残るという結果だけ…。
人間の起こすイジメ、犯罪、戦争だってそうだ。
人間同士が争って強き人間が生き残り、弱き人間が滅びるというのなら、
人間とビーストの争いでも強きものが生き残るだけの事。
それが人間かビーストかは関係無い。
力こそ、この世界で最も公平で平等な全てに優先される真実だ…。」
考え込む溝呂木副隊長に向かってメフィストはゆっくりと語り続ける。
「戸惑う事は無い。素直に自分の心を開放しろ。そしてもっと強くなるがいい…。」
今まで黙って話を聞いていた溝呂木副隊長はメフィストを睨みつけて一つ尋ねた。
「貴様…何者だ?」
その問いに答えるメフィストの声はとても耳馴染みな声、
溝呂木の声そのものとなっていた。
「俺は…お前の影…。溝呂木眞也…。お前が望む、お前自身の姿だ…。」
メフィストは闇となって辺りに広がり、溝呂木副隊長からも闇が発せられた。
やがて溝呂木副隊長が発した闇とメフィストの闇とが混ざり合い、
溝呂木副隊長の中へと入っていった。
そこに操られた人々がよろめきながらやって来る。
「力こそ真実…。確かにそうかも知れねぇな…。」
呟きながら溝呂木副隊長は人々に向かってディバイトランチャーを構える。
「あばよ…脆弱(ぜいじゃく)な人間ども…。」

ニヤリと不気味な笑みを浮かべ、
溝呂木副隊長はディバイトランチャーのトリガーを引いた。

現在。長い話を終えた溝呂木が西条副隊長に手を差し出す。
「凪、こっちに来い。そうすれば、お前はもっと強くなれる…。
また一緒に戦おう。お前を理解できるのは俺だけだ。」
溝呂木の言葉に西条副隊長はしばらく考え、
やがて無言で歩き出した。その時、
「溝呂木！」
和倉隊長が駆け込んで来て、溝呂木に向けてディバイトランチャーを構えた。
「隊長！」
和倉隊長が来た事に西条副隊長は驚き、その歩みを止める。
それを見て溝呂木は少し不機嫌になった。
「よぉ、和倉。こんな所まで来るとはな。」
「何がお前をそんな姿に変えたかは分からない。
だが西条を！　お前と同じ闇の中へ行かせはしない！」
和倉隊長の決意を聞いた溝呂木はフッとバカにした笑いを浮かべた。
「だったら力ずくで止めてみろよ。止められるものならな。」
和倉隊長は溝呂木に向けてディバイトランチャーを放つが、
ディバイトランチャーの光弾は溝呂木の前に現れたバリアに防がれてしまった。
和倉隊長は再びディバイトランチャーを撃つが全て防がれてしまう。
「残念だったな。悪いが俺はお前ごときに殺されるつもりは無い。
お前は所詮ただの人間。俺や凪とは違い、
いずれ淘汰される卑しい存在でしかない。」
そこに学校の制服を着たしんのすけが現れ、
ブラストショットで溝呂木のバリアを掻き消した。
「溝呂木！　人の心を踏みにじって…、何がそんなに楽しいんだ！
！」

しんのすけを見て、溝呂木は不敵な笑みを浮かべた。
「ほぉ、ヒーローのお出ましってところか。」
「しんのすけ君！」
和倉隊長が驚く。

溝呂木は天を仰ぐと両手を広げ、全身に力を入れた。
溝呂木から闇が広がり、辺りをダークフィールドへ変えていく。
溝呂木の発したダークフィールドはファウストのそれとは違い、辺りに廃墟が点在していた。
「ここって…ダークフィールド？」
驚くしんのすけを溝呂木が笑う。
「ようこそ、ダークフィールドへ。驚いたか？　所詮、ただの人間であるお前とは違い、
闇の力を得て人間でなくなった俺はこの姿でも位相を自由に操作できる。さらに…。」
と言って溝呂木が指を鳴らすと、その背後にカラドリアスが姿を現した。
次々と人間離れした能力を見せつける溝呂木の姿を西条副隊長は複雑な思いで見ていた。
そんな西条副隊長の視線に気づかず、溝呂木はしんのすけを挑発し続ける。
「どうする？　ここは光を飲み込む闇…。お前の不利な空間で戦うか？」
溝呂木の挑発にしんのすけは制服のズボンのポケットからエボルトラスターを取り出して答え、
しんのすけはエボルトラスターを掲げてウルトラマンに変身。
しんのすけの変身を初めて見た西条副隊長が驚く。
「変身した…。」
ウルトラマンはジュネッスにスタイルチェンジしてカラドリアスに立ち向かう。

そんなしんのすけの姿を見て溝呂木は一言吐き捨てた。
「バカめ…。」
カラドリアスは低空を猛スピードで飛行してウルトラマンを翻弄すると、
一瞬の隙を突いて、前回の戦いで傷付けたコアゲージに執拗な攻撃を加えていった。
苦しむウルトラマンを見て和倉隊長が叫ぶ。
「西条！　ウルトラマンを援護する！」
「了解！」
和倉隊長はすぐさまカラドリアスに向けてディバイトランチャーを放ったが、
溝呂木の時と同じバリアに防がれた。
ダークエボルバーを掲げて溝呂木が笑う。
「驚く事は無いさ。ここは俺が作り出した闇。お前達に手出しは…。」
その時、鈍い衝撃が溝呂木の体を貫いた。
驚いた溝呂木が振り返ると、
そこにはディバイトランチャーを構えた西条副隊長がいた。
「凪…、何故？」
溝呂木の問いに西条副隊長は無表情で答える。
「何故？　決まっているでしょう。」
西条副隊長は1年前の再会の証であるドッグタグを溝呂木に向けて放り投げた。
「私は人間…。そしてビーストは全て私の敵だからよ！」
そう言って西条副隊長は再び溝呂木に向けてディバイトランチャーを構え、
溝呂木がドッグタグを受け取った瞬間、再び溝呂木の体を衝撃が貫いた。
「最高だぜ、凪…。」

ドッグタグを手に溝呂木は微笑み、そのまま後ろに倒れて消えた。
西条副隊長は溝呂木が消えた場所をじっと無言で見つめるが、
溝呂木を撃った手が震えていた。
それを和倉隊長は呆然と見つめ、ウルトラマンも胸を押さえながら
それを見る。
次の瞬間、西条副隊長はウルトラマンとカラドリアスを見て叫んだ。
「今よ！」
西条副隊長はディバイトランチャーを撃ち、続けて和倉隊長も撃つ。
溝呂木がいなくなった為か、バリアに防がれずカラドリアスに命中
した。
苦しむカラドリアスを見てウルトラマンは全身に力を込めて、
廃墟点在するダークフィールドを光溢れるメタフィールドへと塗り
変えていった。
カラドリアスは再び猛スピードで飛行し、ウルトラマンのコアゲー
ジ目掛け突撃。
しかし、それを予想していたウルトラマンはオーバーレイ・シュト
ロームで
カラドリアスを迎撃、カラドリアスはそれを受けて光の粒となった。

フォートレスフリーダム。
松永管理官の隣にイラストレーターのホログラムが現れる。
「どうやら…、終わったようです。」
イラストレーターの言葉に松永管理官が尋ねる。
「そうですか…。で、彼は？」
「…無事です。今回は…。」

そして、工場の外。
しんのすけが胸を押さえて苦しみながら一人歩いて出てくる。
「待って。」
呼びかける声にしんのすけが振り返ると、

西条副隊長が自分に向けてディバイトランチャーを構えていた。
「…！？」
ディバイトランチャーを向けられたしんのすけと
そこにやって来た和倉隊長が事態に驚く。
しかし、西条副隊長の決意は変わらなかった。
（私は大事な事を忘れていた…。
彼も…溝呂木と同じ人ならざる存在…、化け物…、ビーストだということを…。
それがどんな奴であろうとも…私は人ならざる存在なら…容赦はしない…！）

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１６　黙示録　－アポカリプス－（後書き）

今回は基本的に原作と同じですが、
西条副隊長と溝呂木の回想シーンに少し手を加えています。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１７　要撃戦　－クロスフェーズトラップ－

しんのすけにディバイトランチャーを向ける西条副隊長。
そこに和倉隊長がやって来た。
「西条…。銃を降ろせ。」
「やはり彼はビーストです。溝呂木と同じ…。そしてあいつと…。」
反発する西条副隊長に和倉隊長は静かに答えた。
「西条、しんのすけ君はビーストではない。…溝呂木とは違う。」
和倉隊長の言葉に西条副隊長は無言で従った。
一方、その様子を見るしんのすけは苦しそうに胸を押さえていて、
西条副隊長はそれをじっと見つめるが、
その時、和倉隊長のパルスブレイガーに石堀隊員からの通信が入る。
「ＣＩＣが新たなビースト振動波を捉えました。」
「了解。平木と先発してくれ。我々もすぐに行く。」
「はい。」
和倉隊長は石堀隊員との通信を切り、
それを見た後、しんのすけは苦しそうに胸を押さえながら歩きはじめるが、
次の瞬間、胸を押さえてその場にうずくまってしまった。
「しんのすけ君！」
和倉隊長と西条副隊長は急いで駆け寄るが、
しんのすけは二人の手を借りずに立ち上がった。
立ち上がったしんのすけは和倉隊長達の方を見て答えた。
「ありがとう…。でも…、オラ、行かないと…。
オラがやらなくて…誰がやるんですか…？」
「しんのすけ君…。」
返答に驚く和倉隊長達の方を振り返らず、
しんのすけはストーンフリューゲルで一人飛び去っていった。
「あれが彼の…。我々も急ぐぞ！」

「了解！」
和倉隊長は急いでチェスターに戻り、西条副隊長もストーンフリューゲルが飛び去った方向をしばらく見続けながらチェスターに乗った。

「あ。来た。」
現場の岩山、日本二百名山に登録されていて、上毛三山と呼ばれる山のうちの一つである、群馬県の妙義山では一足先に到着していた石堀隊員と平木隊員が調査を始めていた。
そこに和倉隊長達の乗ったチェスターが到着する。
「ビーストは？」
和倉隊長の質問に石堀隊員が答える。
「振動波は健在です。ただ…過去に無い波形を示しています。」
「どういう事？」
西条副隊長が疑問を呟いたその時、不気味な声が辺りに鳴り響いた。
全員がすぐさまディバイトランチャーを構えると、霧の中に光る結晶体が現れ、
続いて岩と溶岩がねじれて交じり合ったかのようなビースト・ゴルゴレムが姿を現した。
「各員、チェスターに搭乗！」
「了解！」
その時、ナイトレイダーの前に光が現れ、ウルトラマンが現れた。

肉弾戦を繰り広げるウルトラマンとゴルゴレム。
ウルトラマンはゴルゴレムを押さえつけるが、ゴルゴレムの口吻（こうふん）が管のように伸び、
無数の牙でウルトラマンの胸に噛み付いてきた。
胸を攻撃されて苦しむウルトラマンを見て、西条副隊長が気づく。
「傷が癒えてないの？」

胸を押さえ、ウルトラマンは苦戦を強いられる。
迫るゴルゴレムに蹴りを食らわせ、何とか窮地を脱するが、
ゴルゴレムの背中の結晶体が光ると、
ウルトラマンの攻撃が全てすり抜けてしまった。
「存在するのに攻撃できない。それがこの波形の正体か…。」
パルスブレイガーでゴルゴレムを分析する石堀隊員。
ウルトラマンはジュネッスにスタイルチェンジしてメタフィールドを展開。
戦いはメタフィールドに場所を移して続けられる。
ウルトラマンはゴルゴレムに飛び蹴りを浴びせると、
距離をとって倒れたゴルゴレムにオーバーレイ・シュトロームを撃とうと構えた。
しかし、その時、コアゲージにヒビが入り、
ウルトラマンは苦しみ、倒れ込んでしまった。
その隙を逃さずゴルゴレムは反撃に転向。
ゴルゴレムの背中の結晶体が光り、同時にウルトラマンのコアゲージが点滅する。
そして、それらに連動してメタフィールドの至る所で泡が吹き上がりだした。
「セット！　イントゥ・ストライクチェスター！」
メタフィールドに突入するため、チェスターを合体させていたナイトレイダーの前に
メタフィールドの光が現れ、その光を破ってウルトラマンとゴルゴレムが現れ、
そのままメタフィールドは消滅してしまった。
「メタフィールドが…消滅した…。」
まさかの事態に石堀隊員が驚く。
ゴルゴレムに突き倒されたウルトラマンは立ち上がろうとするが、
胸の痛みで立ち上がれず、
ゴルゴレムはそのまま霧の中に消えようとしていった。

ナイトレイダーはすぐさまスパイダーミサイルを撃ったが、
背中の結晶体が光って全ての攻撃がすり抜け、
ゴルゴレムはそのまま姿を消してしまった。
そしてウルトラマンも力尽きたように倒れ、そのまま姿を消した。
そんなウルトラマンを見つめる西条副隊長。
一方、戦い終えたしんのすけはストーンフリューゲルで傷を癒していたが、
ストーンフリューゲルは不安定に揺れ、
内部の光の水がその揺れに合わせて激しく波打っていた。
「傷が治りにくくなってる…。オラの体に何が…。」
苦しむしんのすけ。
その時、しんのすけの周りに電流が走り、
ストーンフリューゲルは失速して急降下していった。

「おぉ、絶景かな、絶景かな～っと。」
その頃、妙義山と同じ日本二百名山に登録され、上毛三山のうちの一つである、
榛名山（はるな）では一人の女性とアシスタントが山頂の榛名湖から風景写真を撮っていた。
女性はシャッターを切り続けていたが、
途中でフレームにアシスタントが入り込んでしまった。
「ちょ、ちょっと四郎！　何やってんのよ！　入ってるよ！」
その写真を撮っていた女性、
かつて、野原家に居候していたみさえの妹・小山むさえに叱られ、
以前、野原一家が住んでいたアパート、「またずれ荘」で
野原一家と出会い、今ではむさえのアシスタントとなっている四郎が焦る。
「すみません！」
「まったくもう…。」
不機嫌になったむさえは再びカメラを構えようとするが、ふとフレ

ームの外に目をやる。
「あれ？」
「あの、むさえさん？」
四郎の問いにむさえは明後日の方向を見たまま答える。
「今の見た？」
「え？」
「ＵＦＯだよ。」
「何言ってんですか？」
むさえの答えに四郎は少しイラつく。
「ちょっとＵＦＯ探しに行ってこよーっと。」
そう言ってむさえが歩き出し、
「ちょっとむさえさん！　まだ撮影中ですよ！」
四郎がその後を追う。
「もう、これだからむさえさんは…。」

フォートレスフリーダムではイラストレーターによって、ゴルゴレムの説明が行われていた。
「コードネーム・ゴルゴレムには別の位相に逃げ込む力。すなわち位相間移動能力が備わっています。」
イラストレーターの説明に石堀隊員が付け加える。
「ですが、メタフィールドには捕えられましたよね。」
和倉隊長が呟く。
「では…、ウルトラマンがいなければ…倒せないと？」
イラストレーターは笑って否定する。
「まさか。位相を跨いだ罠、クロスフェーズ・トラップを仕掛けます。」
「クロスフェーズ…トラップ？」
すると和倉隊長の前にミッションエリアを表したホログラムが現れ、イラストレーターが説明を始める。
「幸いゴルゴレムのビースト振動波は強力でロストする心配はあり

ません。
その進路上にスキャニングパルスの増幅施設を設け、攻撃に転用します。」
「スキャニングパルスって…。」
平木隊員の言葉に石堀隊員が続ける。
「普段はメタフィールドの位相を割り出す為に使われている走査波だよ。」
そんな2人の会話を聞いてイラストレーターが頷く。
「送電線を外した高圧鉄塔を増幅器に改造。
ここにメガキャノンチェスターからの最大出力のスキャニングパルスを照射します。
ゴルゴレムが別の位相にいてもこの鉄塔の間を通過すれば
その位相間移動制御器官を破壊できます。」
イラストレーターの説明を難しい顔で聞いていた平木隊員だったがやがて大きく手を叩いて叫んだ。
「あれだ！　電子レンジの中で生卵が爆発するみたいな感じだ！」
「その卵を破壊されて姿を現したゴルゴレムを…。」
石堀隊員が続けて、
「メガキャノンバニッシャーで…叩く！」
西条副隊長がシメる。
しかし、ここで和倉隊長が一つ疑問を呈する。
「ですが、ゴルゴレムが必ずしもこのトラップに引っ掛かるとは限らないのでは？」
その質問にイラストレーターは少し間を置いて答えた。
「餌…を用意します。」
「餌？　ですか…？」
和倉隊長の顔が曇るが、イラストレーターは説明を続ける。
「はい…。ビーストは人間を襲う。その性質を利用して罠を張ります。
まずミッションエリア内の全ての住民を避難させ、ゴルゴレムの進

路上、
クロスフェーズ・トラップの位置にＴＬＴ－Ｊの職員を配置します。」
「ＴＬＴ－Ｊの職員を？」
「はい。一般人を利用するわけにはいかないので、
我々自身が餌になるしかない…。つまり…。」
「失敗は…許されない…。」
イラストレーターの言葉を聞いて和倉隊長の額に汗が滲む。
「ただし、一つ懸念されるのはスキャニングパルスの放射限界時間です。」
「つまりはメタルジェネレーターのフルパワー運用の限界か…。」
石堀隊員の補足説明にイラストレーターは頷き、一言答えた。
「その限界時間は…１８０秒。」
その数値に平木隊員が驚く。
「たったの１８０秒！　３分間しか待ってくれないってこと!?」

「ＵＦＯ、この辺に落ちたと思ったんだけどな…。」
セミの鳴き声が聞こえ、ぼうぼうに伸びた草の中、
むさえはＵＦＯを探すが、そこに四郎がやって来てむさえの腕を掴んだ。
「むさえさん！　仕事中ですよ、仕事中！」
「いいじゃない、たまには。ＵＦＯなんて滅多に見るもんじゃないし…。」
その言葉に四郎の何かが切れた。
「ああ、もう！　むさえさんはいつだってそうですよ！
何かあったら、すぐに自分のやってたこと放り出して…。
そんなのだから…、見つけられないんじゃないですか!?　自分の撮りたい写真！」
「…そう言う四郎こそ、昨日の夜何言ったか覚えてる？
僕は写真家のアシスタントなんか本当はやりたくないって。」

「こんな写真家のアシスタントなんかやりたくないってことですよ！本当に自分が撮りたいものが分からない写真家のアシスタントなんて。」
「それは…。」
「ああ…、もう！」
と四郎は苛立ちながら草むらのほうに歩いていくが、その時、草むらの中で何かを発見した。
「む、むさえさん…、人が倒れてます！！」
急いで駆けつけるむさえ。
「大丈夫？」
そう言って倒れている人物の顔を見たむさえの顔色が変わった。
「え…？」
「ん？　あっ！」
倒れている人物を見て驚くむさえと四郎。
「し、しんのすけ！？」
「しんちゃん…！？」
そして二人は少し間を置き、
「もしかして…、知り合い？」
お互いにそのことを聞いた。
「ちょっと、昔に色々あって…。」
「そう、私も…ちょっと、昔に色々あって…。」
四郎の答えを聞き、むさえも同じように答える。
「でも、どうしてしんちゃんがこんなところに…。」
「とにかく今は旅館に運ばないと…。」
そして2人はしんのすけを担いで乗ってきた車に乗り、旅館に戻っていった。
そのすぐ近くでストーンフリューゲルが墜落していた事に2人は気づかなかった。

「都心の一部で停電が相次いでいます。」

その頃、ラーメン屋で根来がＴＶのニュースを見ていた。
ニュースの内容は群馬県の山々で送電線の事故があり、
その影響で都心の一部に停電が起きているというものだった。
「へい、お待ち。」
そこにラーメンが出され、根来は近くの箸入れから割り箸を手にとって食べ始める。
「なぁ、群馬県の山って言やぁ、うちの登山部の連中、
行こうとしてた山がなんか立ち入り禁止になってて、引き返したらしいぜ。」
「立ち入り禁止？　でも、なんで？
事故とか土砂崩れとかのニュースやってなかったぜ。」
「おかしいな…。」
「ちょっと、その話詳しく聞かせてくんねぇか？」
隣にいる学生二人の話に興味を持った根来は
その会話に強引に割り込み、妙義山の事を聞き出した。
「群馬県の妙義山か…。ありがとさん。おっちゃん、勘定！」
そう言って根来は勘定を置くとすぐさま店を出て、
駐車場に停めていた車に乗り、走り去ってしまった。
そんな根来を見て店の店主がため息を吐く。
「全く…、ロクに口もつけずに残しやがって…。随分前に来た、
うちの『ウルトラスーパージャンボラーメン』を３０分以内に食べきった奴らを見習えってんだ。」
店主の言葉に店員が驚いたように尋ねる。
「えぇ!?　いたんですか？　そんな人達が…。」
「あぁ…。前の店主の時にな…。」
そう言って今の店主は昔のことを少し感慨深そうに回顧し、
根来の残したラーメンをすすった。

フォートレスフリーダムの会議室では、
一人松永管理官が眼鏡を外し、目の周りを指で揉んでいた。

「お疲れのようですが…。官房長官との接見のせいですか？」
そこにイラストレーターのホログラムが現れ、
松永管理官は眼鏡をかけていつもの不敵な笑みを浮かべた。
「骨が折れましたよ。」
「ここまで大規模なミッションは初めてですからね。犠牲者情報の秘匿から、
電波管制を含むミッションエリア内の大規模な封鎖、それに必要な施設の貸与。」
「ミッションエリア内、ビーストの進路上にあえて避難勧告を行わない。
これも初めての事では？」
松永管理官の言葉にイラストレーターは間を置いてから答える。
「…ＴＬＴ－Ｊの職員全てをフォートレスフリーダムから移動させる事は出来ません。
ならば、より多くの人間を他から用意しなければならなくなる…。」
「それで人口２００人に満たない、
オフシーズンの温泉街にいる人間ならビーストの餌食になっても構わないと？」
「そうは言ってません…。ただ…。」
俯くイラストレーターを松永管理官はじっと見つめる。
「…ご苦労様でした。」
そう言ってイラストレーターは少し複雑な顔で逃げるように
松永管理官の前から消えていった。
松永管理官は消えたイラストレーターに向かって呟く。
「イラストレーター…。あなたは何故、自分の描いた未来に囚われているかのように、
自分の望んでもいない作戦を展開しようとする？
そして…、あなたの描いた未来を私は本当に信じてよいのでしょうか？」

しんのすけはむさえ達の泊まっている旅館で介抱されていたが、いまだ意識を取り戻していなかった。
むさえは缶ビールを飲みながらしんのすけの顔を感慨深げに見つめる。
そこに四郎が入ってきた。
「全然駄目ですよ。電話も携帯も繋がらないです。これじゃみさえさん達に連絡できませんよ。…具合どうですか？」
「まだ寝たままだよ。」
むさえは飲み干したビール缶を床に置き、そんなむさえに四郎が尋ねる。
「にしても、むさえさんもしんちゃんの…野原さん達の知り合いだったんですね。」
「う～ん…。まぁ、知り合いっていうか…。野原みさえは私の姉ちゃんなんだけどね。」
むさえの言葉に四郎は少し驚いた表情で尋ねた。
「え？　そうだったんですか？　じゃあ、『小山』って名字は独身っていう…。」
「それ以上言うな。」
むさえは四郎の口に手を当てて話を遮った。
苦笑いしながら謝る四郎を見ながら、むさえは少し間を空けると、思い立ったかのように四郎に自分の過去を話し始めた。
「…私さ…、昔どうしてもカメラマンになりたかったんだけど、その時の師匠に才能ないって言われて、夢を捨てて野原家に転がり込んだことがあるんだ。」
「…居候って奴ですか。」
四郎の問いにむさえが静かに答える。
「まぁ、そんな感じかな。…バカだよね。辛い現実から目を背けてもなんにもならないのに…。」
四郎は黙って話を聞く。
「そんなとき、九州からお父さんが来てね、

その時のいざこざで私は自分の心の中にある本当の気持ちと
真正面から向き合ったの。どうしても、カメラマンになりたいって
気持ちとね。
それから、私はカメラマンになった…。」
話し終えたむさえは自分のカメラを手に取って、
少し自嘲気味な笑みを浮かべて続けた。
「…でもさ…。」
再び話し始めたむさえを見る四郎。
「今の私もさ…。気づいたら…、いつのまにかその時の師匠みたい
になってる…。
自分がカメラマンとして撮りたい写真ってのが昔はあったんだろう
けど…。
それすらも分からない状態に…。
…あの時の師匠もそんな感じだったのかな…。…情けないよね。」
そう言ってむさえは再び缶ビールを飲む。
その姿に四郎は悲しみしか感じ取れなかった。その時、部屋の電気
が突然落ちた。

ＴＬＴ－Ｊの一般職員も配置されているミッションエリア。
ナイトレイダーはクロスフェーズ・トラップの準備を着々と進めて
いた。
ナイトレイダーの乗り込むメガキャノンチェスターの両脇に設置さ
れた、
パルス・トランスミッターは出力を上げ、蒸気と不気味な唸り声を
上げていく。
そこにゴルゴレムが近づいて来た。
「ゴルゴレム、８００ｍラインを通過！」
石堀隊員の報告を聞いて、
西条副隊長はフウッと一つ大きく息を吐いた。
「ゴルゴレム、５００ｍラインを通過！」

「まだだ。ギリギリまで引き付けるんだ。」
和倉隊長の指示に西条副隊長は黙って頷くが、
緊迫感のあまり大粒の汗が顔を流れていく。
「４００ｍラインを通過！」
「３００ｍラインを…。止まりました！
ゴルゴレム、３００ｍラインで止まっています！！」
石堀隊員の報告にナイトレイダー全員が驚く。
「まさか…、気づいた？」
さすがの西条副隊長も言葉に焦りが見え隠れしていた。

「プハッ！　うっまいっ！」
停電し、連絡も取れない中、ろうそくを点けてむさえ達はビールを飲んでいた。
「にしても、暑いなぁ。風も吹いてないし。」
そう言ってむさえが立ち上がって窓を開けた。その時。

「動き出しました！　コース変わらず！　速度上がってます！」
しばらくの静寂を破って石堀隊員が声を上げ、ナイトレイダーに再び緊張が走る。
「１００ｍラインを通過！」
迫るゴルゴレムに西条副隊長はボタンにかけた指を確認する。
「５０ｍです！」
「３０！」
「２０！」
「１０！」
「西条！」
「放射！」
和倉隊長の指示で西条副隊長はボタンを押した。
装置が低く大きな唸り声を上げ、
辺りに緩やかに振動が広まり、二つの増幅器の間が赤紫に光り輝く。

「クロスフェーズ・トラップ起動を確認。」
西条副隊長は限界時間を表示するパネルに目をやる。
「本当にいるの？」
一向に姿を見せないゴルゴレムに平木隊員が小声で呟く。
その時、空間を破ってゴルゴレムが姿を現した。

「何？」
旅館ではむさえが辺りに響く唸り声を聞いて周りを見回していた。
「何かの鳴き声…ですかね？」
唸り声を聞いて四郎が呟く。
むさえはしばらく周りを見回していたが、
窓から見える山の頂上が赤紫に光り輝いているのに気づいた。
赤紫に光り輝く山頂を見るむさえ。
（もしかしたら…、見つかるかも…私の撮りたい写真が…。）
そう思うと、むさえは自分のカメラバッグを持って部屋を飛び出していった。
「えっ！？　ちょ、むさえさん！」
しんのすけを気にしつつ、四郎も急いでその後を追った。

「ゴルゴレム、見えました！」
西条副隊長が叫び、それと同時に
ゴルゴレムが磁界に苦しみながら姿を現していく。
「まだ完全じゃない！」
和倉隊長は緊張を解かず、事態の行方を見守る。
限界時間を表示するパネルを見て石堀隊員が叫ぶ。
「限界まであと５０秒！」
装置に限界が迫り、おびただしい蒸気が辺りに充満していく。
「限界まであと２０秒！
１０秒、
９、

８、７、６、５、４、３、２、１…！」
その瞬間、ゴルゴレムの背中の結晶体が爆発し、
クロスフェーズ・トラップの装置も停止した。
「成功です！　位相間移動制御器官、破壊しました！」
石堀隊員の言葉を受けて和倉隊長が呟く。
「そうか…、背中の爆発した箇所が…。」
「ジェネレーター冷却開始！　バニッシャー発射可能温度まで約９０秒！」
石堀隊員の報告を聞いて平木隊員がトリガーに指をかける。
「来る！」
西条副隊長の言葉どおり、背中の結晶体を破壊されたゴルゴレムがメガキャノンチェスターに向かってゆっくりと前進してきた。
ゴルゴレムは体の至る所にある発光場所から光線を次々に撃つが、メガキャノンチェスターは急浮上してそれらをかわしていった。
「スパイダーミサイル、ファイア！」
西条副隊長はスパイダーミサイルを撃ってゴルゴレムを攻撃し、
平木隊員がメガキャノンバニッシャーを撃つまでの時間稼ぎをする。

「あれは…。」
そこにむさえがやって来る。
目の前に広がる空飛ぶ戦車と、
見た事の無い巨大な化け物との戦いにしばし呆然とするが、
すぐにバッグからカメラを取り出してその光景を次々にカメラに収

めていった。
そこに四郎が遅れてやって来る。
「怪獣？」
ゴルゴレムを見て四郎が呟く。
しばらくメガキャノンチェスターとゴルゴレム、
それらをカメラに収めるむさえを呆然と見ていたが、
ゴルゴレムが自分達の方に迫っている事に気づいて、
急いでむさえの所に駆け寄った。
「逃げなきゃ！　むさえさん！　逃げないと！」
しかし、むさえは自分を引き戻そうとする四郎を
力一杯に振り解こうとし、遂には四郎を突き飛ばした。
「邪魔しないで！」
「むさえさん…。」
その時、しんのすけは意識を取り戻して起き上がり、
自分の制服のズボンの中で明滅しているエボルトラスターを取り出
して部屋を飛び出した。

「四郎逃げて！」
怯えて気が動転している四郎に向かってそう告げると、
むさえは自分に迫るゴルゴレムの巨大な足音を聞き、顔に大粒の汗
が流れる。
四郎に背を向け、むさえは自分に迫るゴルゴレムの姿を見上げて写
真を撮り続けた。
「見つかるかもしれないの！
この写真を撮ることで…私の本当に撮りたい写真が…！」
「む、むさえさん…。」
次々に写真を撮っていくむさえを、四郎はただ見ることしか出来な
かった。

「ジェネレーター冷却完了！　撃てます！」

「了解！」
石堀隊員の報告を受けて平木隊員は照準を合わせようとするが、何かを見つけて叫ぶ。
「人がいます！」
「バカな。」
予想外の事態。和倉隊長が見ると、
写真を撮っているむさえに向かってゴルゴレムが迫っていた。
むさえは自分に迫ってくるゴルゴレムを次々に写真に撮っていく。

その頃、車に乗った根来がむさえ達が泊まっていた温泉街にやって来ていた。
たくさんの野次馬が、外に出て何かを見ているのに気づいた根来は、その視線の先に目をやり、遠くの山の頂上が赤紫に光り輝いているのを見つけた。
その時、野次馬をかき分け、しんのすけがむさえ達が泊まっていた旅館から飛び出してきた。
「おい！　しんのすけ！　おい！」
気づいた根来が車のクラクションを鳴らして呼びかけるが、しんのすけは気づかずに走り去っていった。
「このままじゃメガキャノンバニッシャーが撃てません！」
平木隊員の訴えに和倉隊長が指示を出す。
「ストライク・フォーメーションに移行。空からゴルゴレムを攻撃する。」
「了解！」
一方、ゴルゴレムの写真を撮っていたむさえは写真を撮り終えると、四郎を連れて急いでその場から離れようとするが、足がもつれて地面に転倒してしまう。
「む、むさえさん！」
そこにゴルゴレムの口吻が管のように伸びて迫り、
2人に向けてその醜い牙を向けた…！

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１７　要撃戦　－クロスフェーズトラップ－（後書き）

さて、今回の話では「ネクサス」原作での飯山連峰という架空の山域から、
群馬県の上毛三山として有名な山々を舞台としました。
Ｅｐｉｓｏｄｅ　１４でのあとがきに書いたように榛名山（はるな）、
そして妙義山も、どちらも某走り屋漫画に出てくる山のモデルとなった山です。
（ちなみにむさえ達の泊まっている旅館のある温泉街は、
実際の人口の問題から伊香保温泉街をイメージした架空の街にしています。）
根来がニュースを見ていたラーメン屋はクレしんの原作で野原家がラーメン代を無料にするためにジャンボラーメンの早食いに挑戦した店です。
（今回の話に登場した店主はその時の若い店員という設定。）
今回のゲストであるむさえは月日の経過により自分がかつて見つけた、
「本当に自分が撮りたい写真」が何だったのかを忘れ、
見失い、彷徨しているといった感じです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１８　追撃　－クロムチェスターδ－

自分達に管のように伸びて迫ってくるゴルゴレムの口吻（こうふん）を見て、
むさえと四郎は思わず顔を屈める。
しかし、何も起こらず、どうしたのかと顔を上げると、
二人の前には眩い光が溢れていて、
やがてその光の中から銀色の巨人、ウルトラマンが現れた。
ウルトラマンはゴルゴレムの口吻を掴んで必死に食い止めるが、
ゴルゴレムはそれを振り解いて口から火球を撃った。
火球はウルトラマンのエナジーコアの辺りに命中し、
凄まじい火傷を負わせ、ウルトラマンは地面に倒れ込んでしまった。
それを見たゴルゴレムは向きを変え、恐怖で動けなくなったむさえと四郎に迫るが、
何とか立ち上がったウルトラマンは、胸の痛みに苦しみながらもゴルゴレムを押さえつけた。
そんなウルトラマンをむさえと四郎は何とも言えない顔で見つめていた。
体力が限界に達し、遂にエナジーコアが点滅したウルトラマンは
最後の気力を振り絞ってゴルゴレムを投げ飛ばすが、地面に手を突いてしまう。
ウルトラマンが動けなくなったのを見たゴルゴレムは今度は街の方へ進んでいった。
街の方へ進むゴルゴレムを見てウルトラマンは
パーティクル・フェザーをゴルゴレムの口吻に向けて撃ち、口吻を切り落とした。
しかし、ウルトラマンは遂に力尽きてしまい、胸を押さえて光と共に消えてしまった。
「ゴルゴレムの進行方向に回り込む。」
「了解。」

和倉隊長の指示に従い、ストライクチェスターはゴルゴレムに対して先回りをするが、
そこで平木隊員は意外な状況を目にする。
「人です！　他にもまだ人が！」
「どういう事だ…！？」
温泉街。ゴルゴレムから逃げ惑う人々を見て戸惑うナイトレイダー。
そうこうしているうちに、遂にゴルゴレムは街に入り込んでしまった。
「止めろぉ！！」
「ストライクバニッシャー、シュート！」
和倉隊長が叫び、平木隊員がストライクバニッシャーを撃ってゴルゴレムを倒した。
しかし、その時、背中の結晶体が復元してゴルゴレムはそのまま姿を消してしまった。
「制御器官が…回復した…？」
驚く石堀隊員。そこにイラストレーターから通信が入る。
「ゴルゴレムは位相を移しました。…ミッションを立て直します。一旦、帰還してください。」
和倉隊長が険しい顔で質問する。
「その前に説明してください。
何故ミッションエリア内に人が残っていたんですか？　どうしてあれだけの人数…。」
しかし、イラストレーターは感情を押し殺したかのような声で和倉隊長の質問を遮る。
「…繰り返します。　…帰還してください。」
しかし、和倉隊長は引き下がらない。
「説明してください！　ＣＩＣ！」
しかし、イラストレーターは何も答えず、一方的に通信を切ってしまった。
それでも和倉隊長は何度もイラストレーターに問いかけ、

ナイトレイダーは逃げ惑う人々を複雑な顔で見やった。
一方、ＣＩＣのイラストレーターは和倉隊長の問いかけに俯いて頭を抱えていた。
しばらくして、ストライクチェスターはイラストレーターの指示通り帰還した。

朝焼けの中、しんのすけを追って森に入った根来が
木にもたれかかって休んでいると、そこに足音が聞こえてきた。
「しんのすけか！？」
と飛び起きるが、そこにいたのはむさえと四郎だった。
「しんのすけが…何か？」
驚くむさえと四郎。
根来はむさえが手に抱えているカメラに注目する。
森の中、苦しそうに胸を押さえながら歩いていたしんのすけが、
木々の向こう側に根来達を見つける。
根来はむさえのカメラのメモリーを見せてもらっていた。
「へぇ…。いやぁ、こんな化け物が本当にいるとはなぁ…。」
根来はむさえが撮った空飛ぶ戦車と
見た事の無い巨大な化け物との戦いの写真に見入っていた。
「うーん、参った。あっ、ちょっと戻して。もう一個。…はぁ…、すげぇわ。」
根来が見ている自分の撮ったゴルゴレムの写真を見て
昨日の自分を思い出し、複雑な表情をして一人呟くむさえ。
「私…、バカだよね…。」
「え？」
むさえの呟きに振り向く四郎。
「昨日、あの時の私はこの写真を撮ることで
自分の撮りたい写真が見つかると思っていた…。
でも…、もしかしたら…それを見つける前に死んでいたかもしれないのに…。

それで…、どれだけ多くの人に迷惑をかけるかも考えないで…。」
むさえは自分の震える手を見る。
「私…バカよ…、本当にバカ…。」
そう言うとむさえはその場に泣き崩れた。
一方、しんのすけもむさえ達の話を聞いていた。
「むさえちゃん…。」
脳裏にかつてのむさえを思い出すしんのすけ。
根来は少し俯いて一つため息を吐いた後、むさえのカメラを手に取った。
「ふ～ん、これが君のカメラかぁ。いや、良いカメラだねぇ。手入れも行き届いているしさ。こういうの欲しかったんだよなぁ、俺も。」
とカメラを褒めつつ、根来は何食わぬ顔してカメラからメモリーカードを抜き取った。
それを見た四郎が驚いて指摘する。
「あ、ちょ、ちょっと…。」
「わぁった、わぁったよ。返す返す。」
とメモリーカードを抜き取ったカメラを四郎に押し付ける。
四郎は根来が手にしたメモリーカードを指差し指摘するが
根来は四郎の腹に一発重いパンチを入れた。悶絶しその場にうずくまる四郎。
「心配するな！　お前さんの写真は俺が継いでやる！」
そう言って根来はむさえにハンカチを渡すと、一目散に走り去っていった。
四郎は急いで追いかけようとするが、痛みで立ち上がれず、むさえに助けられる。
「ど、泥棒…。」
と叫ぶも声が満足に出ない。そこに、
「たぶん、大丈夫だと思うゾ。」
と声がした。

むさえと四郎が振り返るとそこにはしんのすけがいた。
「…しんのすけ?」
むさえの呟きにしんのすけは黙って頷く。
「根来さんなら、あの写真をきっと公表して…。」
そう言った瞬間、しんのすけは胸を押さえてうずくまった。
胸を押さえて苦しむしんのすけの姿に
むさえは胸を押さえて苦しんでいたウルトラマンの姿を重ね合わせる。
「そうなんだ…、しんのすけ…。…あの時は本当にありがとう!」
むさえのお礼の意味を理解できない四郎は訳の分からないといった表情を浮かべるが、
理解したしんのすけはギクリとして、その場から逃げるように去っていった。
そんなしんのすけの後姿にむさえはもう一言声をかける。
「…頑張って…。しんのすけ。」
その言葉にしんのすけは心の中で答えた。
(…むさえちゃん…。絶対、自分の撮りたい写真見つけてよ…。
たぶん、思い出せば分かると思うから…。自分がカメラマンになったわけを…。)
そう思いながら、胸を苦しそうに押さえつつも歩くしんのすけ。
そしてむさえと四郎の姿が見えなくなる所まで来て、
しんのすけはストーンフリューゲルを呼んだ。
その後、ようやく街に帰って来たむさえと四郎を大原リーダー率いるM・Pが迎えた。
「お二人だけですか?」
大原リーダーの質問にむさえと四郎は顔を見合わせ黙って頷く。
「あなた達は何も見なかった。」
その言葉と共に大原リーダーはむさえ達に向けてメモレイサーを掲げた。

フォートレスフリーダムでは、
廊下を歩く松永管理官に追いすがって和倉隊長が問い詰めていた。
「どうして我々に人がいる事が伝えられなかったのか、その説明を求めているのです！」
「ビーストの進路を特定し、ミッションを成立させるには、あそこの人達が必要でした。」
「それではまるで…！」
「昨夜の経験を基に次のミッションは必ず成功させてください。そうすれば犠牲者の死も無駄にならなくて済む。」
「無駄だとか無駄でないとか！
人の死というのは、そうやって測れるものではないと私は考えます！」
和倉隊長の言葉を聞いた松永管理官は不意に立ち止まって一言述べた。
「最近は…感情的な発言が多いですね。」
その言葉に思わずハッとする和倉隊長を尻目に
松永管理官は少し嘲り笑った感じで去っていった。
そんな松永管理官を黙って見送り、和倉隊長は唇を噛み締めた。

一方、しんのすけは家の自分の部屋で一人、苦しそうに胸を押さえながら、
ストーンフリューゲルの中で傷を癒しても、
回復が思うように進まなかったことを思い出していた。
「オラの体に何が…？　もしかして…、オラの体に限界が来ていてそれで…。」
そう思い、頭を抱えるしんのすけ。
しかし、すぐに顔を上げて呟いた。
「…だとしても、オラにはやらなきゃいけない事があるんだゾ…！
皆を守るために…、オラは…戦う…！」
そう呟き、苦しみながらもしんのすけはエボルトラスターを握り締

める。
その時、
「しんのすけ。」
廊下からひろしの声と扉をノックする音が聞こえ、
慌ててしんのすけはエボルトラスターを机の引き出しにしまい、扉を開けた。
「お…、父ちゃん。どうしたの？」
「どうしたのじゃねぇよ。しんのすけ。
お前…、大丈夫か？　胸の怪我…。みさえから聞いたぞ。」
「だいじょぶ、だいじょぶ！　もう何ともないし。」
心配するひろしにしんのすけは自分の胸をパンと叩いて答える。
「そ、そうか…。」
「そう。オラは不死身の野原しんのすけだゾ！」
しんのすけはひろしに軽い口調で答え、
ひろしはそんなしんのすけを見て少し安堵したかのようなため息を吐いた。
「そうか…。でも、少しでもヤバいって思ったらすぐに言うんだぞ。」
「ほーい。」
そして、ひろしが扉を閉めて立ち去った後、しんのすけは再び苦しそうに胸を押さえた。
「黙っとかないと…。父ちゃんや母ちゃんに…、
余計な心配かけさせるわけには…いかないし…。」
一方、階段を降りて1階へと戻ったひろしは再び2階のしんのすけの部屋を見上げて思った。
（何か…、無理して元気に振舞っているような感じだったな…。
…あいつ、やっぱり俺達の知らないところで…何か…。）

フォートレスフリーダム。コマンドルームでは
イラストレーターがナイトレイダーに新型機の説明をしていた。

画面にはその新型機であるクロムチェスターδが映し出されていた。
「これが新型機、クロムチェスターδです。
新開発されたハイパージェネレーターを搭載しています。」
「ハイパージェネレーターというとメタルジェネレーターより強力な？」
石堀隊員の問いにイラストレーターが答える。
「はい。メタルジェネレーター搭載時より、
最高４００％のパフォーマンス・アップを実現しました。
それによってストライクチェスターでは不可能だった事、
つまり、スキャニングパルスを使った特定位相の割り出しとフェーズシンクロナイザーを使った位相間移動を同時に行えます。」
それを聞いた西条副隊長が立ち上がって力強く尋ねた。
「では、ゴルゴレムを追撃できるということですね！」
イラストレーターが頷いたのを見て、西条副隊長は和倉隊長に進言する。
「隊長！　私を乗せてください！」
「西条…。」
いつもと違い、何かを秘めた眼で答えた西条副隊長に対し、
他のナイトレイダーはしばし呆然と見ていた。
和倉隊長はしばらく考えた後、静かに決断した。
「…いいだろう。」
「ありがとうございます。」
直ちに始められた新たなミッション。
今までのチェスターα、β、γに続いて、
西条副隊長が乗り込むチェスターδの発進準備が行われる。
イラストレーターが状況の説明を行う。
「ゴルゴレムの現在位置はエリア４、ポイント８１５です。
進行方向ポイント８１８に対する避難勧告は混乱を避ける為に行いません。」
「混乱を避ける為に…ね。」

平木隊員がわざとらしく反応するが、他の隊員はあえて何も言わず、イラストレーターは少し表情を変えるも説明を続けた。
「チェスターα、β、γはメガキャノン・フォーメーションで待機。チェスターδは別位相でゴルゴレムを追撃。位相間移動制御器官を破壊。
先のミッションで判明したゴルゴレムの器官回復に有する時間は約４８０秒。
その間にメガキャノンバニッシャーで殲滅。以上がミッションの概要です。」
そしてチェスターα、β、γがそれぞれ発進。
チェスターδの発進準備を進める西条副隊長の脳裏に、
胸を押さえて苦しむしんのすけと昨日のウルトラマンの戦いが思い浮かぶ。
それらが思い浮かんだ後、
西条副隊長はメットのバイザーを下ろして、チェスターδを発進させた。

夜中、車の中から根来が電話をかけていた。
「おい！　明日の一面俺にくれ！
日本中、いや世界中がひっくり返る大スクープだ！　ん？　ん、分かった。そっち行く。」
電話を切り、根来は画面にむさえの撮った写真の映っている
ノートパソコンを閉じて車を発進させた。

ナイトレイダーが乗るチェスター４機が現場に到着する。
「セット！　イントゥ・メガキャノンチャスター！」
和倉隊長の号令の下、
チェスターα、β、γがメガキャノンチェスターに合体。地上に着地する。
「ゴルゴレム、追撃に入ります！」

そして西条副隊長はチェスターδを先行させる。
「スキャニングパルス放射！」
スキャニングパルスによってゴルゴレムが現在どの位相にいるか割り出す。
「ゴルゴレム確認。位相座標Ｅ２９。」
そして西条副隊長は一息吐いて叫ぶ。
「ハイパージェネレーター、フルドライブ！」
そしてチェスターδはゴルゴレムを追って別位相に突入した。
それを和倉隊長が見送る。
「頼むぞ…。」
位相を超えるチェスターδ。
「く…！　位相を移された。座標Ｅ５６…。フェーズシンクロナイザー作動！」
位相を超えるゴルゴレムを逃がさず追い続けるチェスターδ。
遂にゴルゴレムが現在いる位相に辿り着いた。
そこは辺りを緑色に不気味に光る岸壁が覆う、地の底を思わせる場所であった。
「！」
西条副隊長の目の前にいきなりゴルゴレムが現れた。
西条副隊長はチェスターδを急浮上させ一旦距離を置き、
ゴルゴレムはチェスターδに光線を放つが、西条副隊長はそれを避け、
「クアドラブラスター、ファイア！」
クアドラブラスターでゴルゴレムの背中の結晶体を破壊した。
ゴルゴレムは苦しみ、西条副隊長の前から姿を消した。
一方、待機していたメガキャノンチェスターの周りに
ゴルゴレムの苦しみの声が聞こえてきた。
「来る！」
平木隊員が言葉を発した直後、空間を破ってゴルゴレムが姿を現し、
それを追ってチェスターδも別位相から帰って来た。

「ゴルゴレム、制御器官回復まであと４００秒！」
西条副隊長の報告に平木隊員が答える。
「だいたい分かりました！　メガキャノンバニッシャー、シュート！！」
しかし、メガキャノンバニッシャーが命中する直前、ゴルゴレムの前方の空間が歪んだ。
爆炎の中からゴルゴレムが無事に姿を現した事にナイトレイダーが驚く。
「メガキャノンバニッシャーが効かないの？」
西条副隊長の疑問に石堀隊員が答える。
「奴の亜空間バリアで威力が半減されたんだ。」
平木隊員が指差して叫ぶ。
「見て！　制御器官が…！」
平木隊員の言葉通り、ゴルゴレムの背中の結晶体が次々と復活。
予想外の事態にイラストレーターも驚きを隠せない。
「そんな…、前回よりも回復が早い！？」
街に迫るゴルゴレム。
そんな事を知らずに街の人々は平和な一時を過ごしていた。
その時、西条副隊長のチェスターδの横をストーンフリューゲルが飛び抜けた。
「しんのすけ君？」
ストーンフリューゲルの中、しんのすけは苦しみながらもエボルトラスターを掲げた。
「うおおおぉぉぉ！！！」
ストーンフリューゲルから光が飛び立ち、
ウルトラマンはそのままジュネッスの姿になって着地した。
そしてゴルゴレムの前に立ち塞がり、ゆっくりと力強く構えを取る。
そんなウルトラマンのすぐ背後には街が、
何も知らず平和な一時を過ごす数多くの人々の光が灯っていた。

「やっと分かったかも…。」
「え?」
旅館。むさえの呟きにビールを飲んでいた四郎が振り向く。
むさえは話し出した。
「実は私がカメラマンになったのは、子供の笑顔が撮りたいって思ったからなんだ。」
「子供の笑顔…ですか?」
むさえが自分を見つめ直すかのように語りだす。
「うん…。私ね。昔、連図さんっていう
世界中の子供の笑顔を撮っているカメラマンに出会ったんだ…。
その時にその人が言ってたの。子供の笑顔って平和の象徴だって…。」
「平和の象徴…。」
「うん。子供達の笑顔のためにもこの平和を壊してはいけない、
世界中の子供の笑顔の写真を集めた写真集を発表して
世界平和を訴えたいっていう連図さんの想いに心を震わされた…。
その時に私、再びカメラマンの夢を追おうって決めたんだ…。
忘れていたけど思い出したよ。私がこの仕事始めたわけ。
そしてそれを思い出した時、やっと分かったの。私が本当に撮りたい写真が何なのか…。」
笑顔で答えるむさえを見た四郎も少し考えた末に笑顔で答えた。
「だったら僕も、むさえさんの撮りたい写真のために…頑張りますよ!」
四郎はガッツポーズをし、むさえも自分のカメラを構えて笑顔で答える。
「うん、頑張ろう!」

一方、ウルトラマンとゴルゴレムの戦いが続いていた。
胸の痛みに苦しみながらも一歩も引かずに戦い続けるウルトラマン。
遂に肩で息をし始めるが、ウルトラマンはメタフィールドを展開す

る。
メタフィールドに消えたウルトラマンとゴルゴレムを見送る西条副隊長に
和倉隊長から指示が入る。
「西条！　我々もメタフィールドに突入する。」
「隊長。」
既にメガキャノンチェスターからストライクチェスターへの変形が完了していた。
「ウルトラマンを援護する！」
「了解！」
和倉隊長の命令に、西条副隊長は力強く答える。
「ジェネレーター、フルドライブ！！」
和倉隊長の号令でストライクチェスターが、
西条副隊長の号令でチェスターδがメタフィールドに突入する。
「メタフィールド突入成功！」
2機がメタフィールドに突入すると、ウルトラマンは既にコアゲージが点滅していた。
ウルトラマンは苦しみつつも何とか構えを取るが、
次の瞬間、両膝を付き、地面に倒れ伏してしまった。
「ウルトラマン…！」
「…！」
驚くナイトレイダー、西条副隊長。
その時、ウルトラマンのコアゲージのひび割れが進み、
それに呼応してメタフィールドのあちらこちらに穴が開いてきた。
「外の世界が…！」
穴越しにメタフィールドから外の世界が目に入ってくる。
さらにメタフィールドの至る所で水泡が吹き上がりだした。
ゴルゴレムは穴から外の世界に出ようとするが、位相の壁に阻止されて出られない。
しかし、ゴルゴレムは何度も位相の壁にぶつかっていき、

少しずつメタフィールドを突破しようとした。
石堀隊員が状況を分析、説明する。
「ウルトラマンのバトルアビリティが著しく低下している。たぶん、そのせいでメタフィールドの維持能力も落ちているんだ。」
「じゃあ、この空間もいつまでもつか分からないってわけ？」
平木隊員の質問に石堀隊員は黙って頷き、和倉隊長が指示を出す。
「メタフィールドが維持されている間に我々がゴルゴレムを倒すんだ。
回り込んで奴を粉砕する！　西条、それまでウルトラマンを援護しろ！」
「了解！」
西条副隊長は再びクアドラブラスターを撃つが、先程に比べてダメージが少なくなっていた。
その間にストライクチェスターがゴルゴレムの横に回りこむ。
「ストライクバニッシャー、シュート！！」
平木隊員がストライクバニッシャーをゴルゴレムの横っ腹に撃ち、ゴルゴレムは大きな衝撃と共に倒れ込んだ。
「よし！」
平木隊員が倒れたゴルゴレムを見てガッツポーズをする。
しかし、その直後にゴルゴレムが起き上がってしまった。
「なんで！？　今度は直撃したのに！」
信じられない平木隊員。石堀隊員が分析する。
「ストライクバニッシャーでは威力が足りないんだ。
…ビーストは俺達の予想以上に進化しているっていうのか。」
起き上がったゴルゴレムは再び穴から外の世界に出ようとするが、クアドラブラスターとストライクバニッシャーで受けたダメージの為、その動きは弱まっていた。
「ゴルゴレムが外に…！」
西条副隊長が叫んだ時、
ウルトラマンが息絶え絶えながらも力を振り絞って立ち上がった。

コアゲージの点滅が早まり、ひび割れが進む中、ウルトラマンはセービングビュートを発して、
外の世界に出ようとするゴルゴレムを捕え、力の限り放り投げた。
次々と穴が開き、水泡が吹き上がり、崩壊進むメタフィールドの中、
ウルトラマンはゴルゴレムの前に立ち塞がり、オーバーレイ・シュトロームの構えを取った。
コアゲージのひび割れが進み、胸の痛みに苦しみつつも、
ウルトラマンは力を振り絞ってオーバーレイ・シュトロームを放った。
ゴルゴレムに命中した後もウルトラマンはオーバーレイ・シュトロームを撃ち続け、
遂にゴルゴレムは光の粒となった。
「やった…！」
ウルトラマンの勝利に和倉隊長は思わず声を上げた。
西条副隊長もウルトラマンの勝利にホッと一息つく。
そして、ナイトレイダーは無事メタフィールドから脱出した。

その頃、むさえはバッグの中からある写真を取り出して見つめていた。
四郎が見ると、そこにはかつて野原家に居候していた頃のむさえと野原家の皆が写っていた。
「うわぁ…、懐かしいな…。」
写真を見て、四郎が呟く。
「ちょっと、何勝手に見てんのよ。人の写真。」
「すみません。ちょっと、懐かしくなって…。」
写真を見つめ続けるむさえと四郎。
その目に5歳の頃のしんのすけが止まる。

その頃、コアゲージのひび割れが進み、
メタフィールドを解除することができなくなったウルトラマンは

崩壊進むメタフィールドの中で一人立ち尽くしていた。
コアゲージの点滅はさらに早くなり、ひび割れはコアゲージ全体に及んでいた。
そして遂に、鈍い音を立ててコアゲージは粉々に砕け散り、辺りにその破片が飛び散っていった。
ウルトラマンはゆっくりと崩れ落ち、全身のプロテクターが消えていき、
アンファンスの姿に戻って倒れ、メタフィールドもそれに伴って消滅していった。
夜、月が輝く満天の星空の下に戻ってきたしんのすけは一人荒野の中、地面に倒れ込んだ。
そんなしんのすけの背後には、平和な街の光が先程と何も変わらずに灯っていた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１８　追撃　－クロムチェスターδ－（後書き）

次回、遂にイラストレーターの正体が判明します。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１９　受難　－サクリファイス－

戦いで傷付き、地面に倒れ伏していたしんのすけは
ブラストショットを取り出してストーンフリューゲルを呼ぼうとするが、
そこに数台の車がやって来て、中から出てきたホワイトスイーパーが
倒れて動けないしんのすけの周りを取り囲んで武器を向けた。
「ポイント８３１到着。ターゲット確認。回収作業始めます。」
その言葉と共に一斉にホワイトスイーパーは
抵抗するしんのすけを押さえ込み、首にペン状の謎の装置を当てて
気絶させた。
そしてしんのすけ捕獲の報は、
イラストレーターには伝わらず、直接松永管理官に伝えられた。
「そうですか。では、ダムまで運んでください。くれぐれも、丁重にね。」
そう言って、携帯電話を閉じる自分の手が
震えているのを感じながらも松永管理官は笑みを浮かべた。
そしてナイトレイダーはそんな事も知らず、
いつもと同じようにフォートレスフリーダムに戻ってきていた。

毎朝スポーツ新聞社。一人の男が根来が差し出した、
ナイトレイダーとスペースビーストの写真を興味深そうに見ている。
「凄い…。こりゃ大スクープだよ、根来さん！」
「いやぁ、こっちだって感謝しているぜ。
他の所だったら上からの圧力がかかって握り潰されちまうからな。」
そう言って根来はポケットの中からメモリーカードを取り出し、
その男の手の中にしっかりと握らせた。
「じゃ！　後はよろしく頼むぜ！」
「あぁ、まかせておいてくれ！」

『謎の巨大生物と秘密組織の戦い』
翌日、全国で根来が持ち込んだナイトレイダーとスペースビーストの写真が踊っていた。
根来は財布から小銭を取り出しつつ、店に向かい、
自分が持ち込んだ写真が、
毎朝スポーツ新聞の一面を飾っている事に会心の笑みを浮かべた。
しかし、ふと目に入った他の新聞の一面にその笑みは消えた。
恐る恐る他の新聞を手に取り、買う根来。
そこには、
『漂着!!　首長恐竜の死体!?』
『衝撃!　都内にカッパ現る!』
と何も知らない一般人にはスペースビーストと同じように感じられる、
太古の首長竜やら未知の生物やらの記事が踊っていた。
「くっそぉ…。よりによって同じ日にこんな与太記事出しやがってぇ…!」
根来は怒りで手に持った全ての新聞を握り潰すが、すぐさまハッとして呟く。
「これも連中の情報操作か…!?」
「無駄だと分かったでしょう?」
その言葉に根来が顔を上げると、
そこには大原リーダー率いるM・Pがいた。
すぐさま根来は後ろを見るがそこにも三沢率いるM・Pが待ち構えていた。
「消すのか?　俺の記憶を…。」
ゆっくりと自分を取り囲むM・Pに向かって根来が問いかけ、大原リーダーが静かに答えた。
「一緒に来てもらえるかしら?」
しかし、根来は周りを見回して叫んだ。

「ここまで来て…、消されてたまるかぁ！！」
根来はＭ・Ｐの一人にタックルをかましてその場から一目散に走り去り、
Ｍ・Ｐは逃げる根来を追うものの、その速度はかなりゆっくりとしたものだった。
三沢が大原リーダーに問いかける。
「今までの調査からあの男は単独です。これ以上泳がせても何も得られないと思いますが？」
「えぇ…。でも、私達を出し抜いてビーストの写真を新聞一面に載せた男…。あの組織が興味を持つ可能性は十分にあるわ。」
「まだ泳がせるつもりですか？」
「…これが最後ね。今日一日様子を見て、何も無かったらあの男の記憶処理を施すわ。」
「分かりました。」
大原リーダーから許可を貰った三沢は部下達と共に根来の後を追った。

様々な計器やモニターが置かれている部屋にしんのすけは運ばれていた。
意識を取り戻したしんのすけは、自分を取り囲む白衣の人々、ケースの中に保管されているエボルトラスターとブラストショット、そして自分がベッドに拘束されていることを知った。
「オラの力の秘密を…調べるつもり…？」
その様子を別室からモニターで見ていた松永管理官は、手元にあるしんのすけの資料に目を通した。
「野原しんのすけ…。生年月日、１９９２年５月５日。出身地、埼玉県春日部市。
秘密結社『ブタのヒヅメ』のサイバーテロ未遂事件と、秘密結社『ＹＵＺＡＭＥ』の巨大ロボット事件、豪華客船乗員乗客

行方不明事件。
そして、『オトナ帝国事件』に家族と共に関わっている…。
『オトナ帝国事件』では、家族と共に各メディアに取り上げられた…。
そう言えば、一時期ニュースで何度か聞いた名前でしたね…、野原…。
にしても、結構な有名人だったんですね。
しかも、『オトナ帝国事件』以外にもこれだけ多くの事件に関わっていたとは…。驚きましたよ。」
しんのすけの資料を読み終えた松永管理官のところに、
しんのすけの身体検査の結果が送られてきた。
その結果を読んで松永管理官は驚愕して声を荒げた。
「この検査結果に間違いは無いのですか！？」
しかし、検査担当官は冷静に答えた。
「はい。間違いありません。」
「そんなバカな…！？」
「信じられないのも無理はありません。ですが、彼、野原しんのすけのＲ７性因子、
および免疫判定は常人の平均とほぼ同じ数値でした。」
松永管理官はしばらく結果報告書を見た後、眼鏡を直して努めて冷静に答えた。
「…なるほど、ウルトラマンは適能者（デュナミスト）をＲ７性因子や
免疫判定の高さで選んでいるというわけではなかった…という事ですか…。」
検査担当官が松永管理官に尋ねる。
「野原しんのすけの衰弱はその原因の一つにウルトラマンとの適応負荷があると思われます。
Ｒ７性因子、免疫判定が低い為、彼は本来の力を発揮することができなかったと…。
ただそう考えるとウルトラマンは適能者（デュナミスト）を一体何の基準で選んでい

るのでしょうか？
わざわざ自分の力を最大限に活用できない存在を適能者（デュナミスト）に選んだその理由は…。」
その質問に松永管理官は努めて冷静に答えた。
「少なくとも…、ウルトラマンは数値で選んではいないのでしょう。数値では測れない…私達には測れない何かを基準に、ね。」

一方、野原家ではしんのすけが行方不明になっているということで警察に捜索願を出していた。
ひろしはみさえの電話での受け答えを聞きながら、今朝の新聞に目を通した。
しかし、毎朝スポーツ新聞を見た瞬間、
そこに写るゴルゴレムの写真を見たひろしの脳裏に
かつて襲われたペドレオンの姿と以前聞いたノスフェルの声が思い浮かぶ。
そしてしんのすけの事も…。
「一体…、俺達の知らないところで何が起きているんだ？」

「よく考えれば、彼自身がどのような人物なのかはどうでも良い事。我々が知りたいのは彼の力の秘密です。
彼がいつ、どのようにあの力を得たのか…。それが分かれば…。」
松永管理官の言葉に検査担当官が一つの提案をした。
「電気刺激による脳のスキャニングを行ってみましょう。」
松永管理官は頷き、すぐさましんのすけにスキャニング装置が取り付けられていった。
付けられたヘッドギアから電気が流され、
脳に刺激が与えられたしんのすけは過去の様々な出来事を思い出していく。
『そうなんだ…、しんのすけ…。…あの時は本当にありがとう！』
『過去を変える事は出来ないけれど…、

未来は…変える事が出来るかもしれないから…。』
『オラはもう逃げたりなんかしない！　もう誰かを不幸にしないために、
憎しみも、悲しみも、全部背負ってく。それが…オラの出した答えだゾ！』
『あんたが…あんたがオラのことを呼んだの？』
『お前…逃げるのか？　お前偉いんだろ？
お前のせいで全部こうなったんだゾ！　…逃げるなんて許さないゾ！』
『オラ、大人になりたいから…。大人になって、
おねいさんみたいなきれいなおねいさんといっぱいお付き合いしたいから…！』
『父ちゃんに言わせりゃ、自分一人でデカくなった気でいる奴はデカくなる資格がない。』

しんのすけの脳裏に蘇っていく今までの様々な出来事。
松永管理官と検査担当官は装着したゴーグルでその映像を見ていた。
「脳への電気刺激によって過去の記憶がフラッシュバックしています。」
検査担当官の説明に松永管理官がそっけなく答える。
「重要なのは彼が力を得た時の記憶だけです。ん？」
松永管理官はしんのすけの記憶の中にあるジャングル、そこにある巨大な遺跡。
その中心に聳え立つ巨大な塔を見つけた。
しかし、その次の瞬間、別の記憶に切り替わってしまった。
「違う、違う…。あの続きが見たいんだ！」
しかし、そんな松永管理官の言葉も空しく、再び遺跡の映像が現れることはなかった。

その頃、コマンドルームでは

モニターにメタフィールドを出ようとするゴルゴレムの映像が映し出されていた。
「外部から一瞬観測されたデータからメタフィールドの組成が判明した。
それによるとメタフィールドとウルトラマンの体が同じ物質だったらしい。」
和倉隊長の説明にナイトレイダーが驚く。
「同じ物質って?」
平木隊員の疑問に石堀隊員が答える。
「正確には、自分の体が存在する確立を量子力学的に拡張し、
他の物質がそこに存在する可能性を奪い去る事であの空間が作られていたんだ。
ただ、この空間の維持には限界があって、
そのタイムリミットを知らせるのがこの胸にあるコア状のゲージなんだろう。
で、ウルトラマンがなんでメタフィールドを展開するかだが…。」
「えっ…と…。」
石堀隊員の説明を理解出来ない平木隊員。
その様子を見ていた西条副隊長がため息を一つ吐いて説明を始めた。
「いい? 詩織。つまり、メタフィールドはウルトラマンの体で出来てるって事よ。」
「ウルトラマンの体で?」
驚く平木隊員。
西条副隊長は黙って頷き、和倉隊長が重々しく口を開いた。
「そうだ…。ウルトラマン、いや、しんのすけ君はまさに自らの体で我々の世界を守っていたんだ…。」
しかし、今そのウルトラマン、しんのすけが松永管理官によって危機に陥っていることを、
コマンドルームにいるナイトレイダーは誰一人知らなかった。

しんのすけの記憶を見終えた松永管理官と検査担当官はゴーグルを外した。
「脳のスキャニングで分かるのはこのくらいです。」
「仕方が無い…。では次は、ビースト振動波照射テストを行いましょう。」
松永管理官の言葉に検査担当官が驚く。
「ビースト振動波を？　しかし、人間には危険です。」
「例え彼が普通の人間だったとしても
彼がその体内にウルトラマンの力を秘めている事は事実です。
ビースト振動波を照射すれば、
それに呼応してウルトラマンの力が引き出されるかもしれません。
それで彼の固有の振動波が分かればウルトラマンの破壊光線の波動成分分析が出来る…！」
「ですが、もし適能者（デュナミスト）を失う結果になれば…！」
「私が責任を取ります。」
「…分かりました。」
松永管理官に押し切られる形で、検査担当官はテストの準備に取り掛かった。
松永管理官がふとモニターを見ると、
しんのすけの隣にイラストレーターのホログラムが立っていた。
「イラストレーター…。」

「しんのすけ…。ごめん…。こんなことになってしまって…。」
テレパシーでイラストレーターはしんのすけに話しかける。
「ナイトレイダーに指示を送るイラストレーターってのは…。
やっぱり…、風間君だったんだ…。」
イラストレーターの姿を見たしんのすけはテレパシーで話す。
「うん…。しんのすけ、どうして…、どうしてそんなになってまでお前は戦うんだ…？」
「オラは戦わなくちゃいけないんだ…。皆を守るために…、

…独りになっても…。だから…オラは…。」
「……。」
しんのすけの答えにイラストレーターは悲しそうな顔をして姿を消した。

ミーティングが終わったコマンドルーム。
和倉隊長は一人パソコンを操作して、
かつて石堀隊員が集めたしんのすけの資料を再び見ていると、
そこに西条副隊長がやって来た。
「隊長…。」
「どうした？」
「私達がしんのすけ君にしてあげられる事は無いでしょうか？　ＴＬＴの組織で何か…。」
西条副隊長の質問に、和倉隊長はパソコンを操作する手を止めて答えた。
「西条…。しんのすけ君は組織という枠組みに囚われることを嫌うだろう…。」
「しかし…。」
「彼はどんなものにも囚われる事無く、自分の道を思うままに進んでいく…。
これまで彼と共に戦ってきて、俺は彼はそういう人間なんだと思うようになった。」
そう言って感慨にふける和倉隊長は
再びパソコンを操作するが、再びその手を止めて答えた。
「…だが、もし、彼に何かしてやれることがあるならば…。」
再び話し出した和倉隊長を西条副隊長は見る。
「彼にしてやれることがあるなら…、俺の思いとしてもＴＬＴという組織としてではなく、俺達として…、
共に戦ってきた者として…してやりたい。」
「共に戦ってきた者として…。」

西条副隊長は和倉隊長の言葉を再び呟いた。

一方、M・Pに追われた根来は夜の街を右往左往していた。
「えーい、しつこい連中だぜ。何とか振り切らねぇと…。」
その時、何者かが背後から肩を叩き、
驚いて根来が後ろを振り向くとそこには中年の男が立っていた。
「今、追われているんだろう？　かくまってあげようか？」
「あぁ？」
男は毎朝スポーツ新聞の根来の記事を取り出して尋ねた。
「あんたが、この記事、書いた根来さんだね？」
「あ、あぁ…。そうだが、お前…。」
戸惑う根来に対し、男は笑みを浮かべて話しかけてきた。
「どうする？　ちょっと、怪しい場所まで一緒に行く事になるけど…。
連中に捕まるのと、俺と一緒にその場所に来るのと、どっちがいい？」
男の問いに根来は少し考えて尋ねた。
「お前…、一体何者だ？」
根来の問いかけに男は笑みを浮かべて答えた。
「あんたと同じような存在ですよ。根来さん。」

「ビースト振動波、照射準備整いました。」
「分かりました。」
検査担当官の言葉を聞いた松永管理官は
しんのすけの前に取り付けられた装置、
かつて溝呂木が操った川口に付けていたペンダント、
ビースト振動波の擬似振動波を発する装置を見て呟いた。
「帰って来た溝呂木の置き土産…。まさかこんなところで役に立つとは…。」
そして検査担当官に向かって指示を出した。

「始めてください。」
「はい。」
松永管理官の指示で黒い結晶から冷たく青い光がしんのすけに向けて発せられた。
「共鳴周波数９．４２、スペクトル増幅率３０００。」
光は強さを増していき、しんのすけは苦しみ始めた。
心電図が異常な波形を示し始める。
松永管理官の指示で光はさらに強められていった。
「スペクトル増幅率４０００！」
さらに苦しむしんのすけ。
「危険です！　これ以上は！」
「いえ！　もっと！　もっと上げてください！！」
検査担当官の注意を押し切りさらに光を強めさせる松永管理官。
「増幅率５０００！」
さらに強められる光。苦しみ、しんのすけの体が激しく痙攣（けいれん）を起こす。そして、

ピー。

突如、しんのすけの全身から力が消え、
ビースト振動波にさらされていながら、しんのすけの体は指一本動かなくなった。
心電図は何の波形も示さず、部屋に無機質な音が鳴り響く。
松永管理官と検査担当官の顔色が変わり、ビースト振動波照射は中止され、
急いで治療チームがしんのすけの周りを取り囲む。

電気ショックが行われるがしんのすけの体には何の反応も無かった。
そこに扉を押し開け、松永管理官が入って来る。
「私に貸しなさい！」
そう言って電気ショックの装置を奪い取り、しんのすけの体に押し付ける。
「来い！！」
しかし、しんのすけは目を覚まさない。
「来てくれ！！　ウルトラマン！！！」
しかし、しんのすけは目を覚まさない。何の変化も起きない心電図。
辺りに絶望感が漂う。
そこにイラストレーターのホログラムが現れた。
「もう一度、ビースト振動波を照射してください。」
その言葉に驚く松永管理官。
「しかし…。」
「いいから、早く！」
今までに見たことのないイラストレーターの焦りを見て、松永管理官は少し戸惑うが、
他に方法は無く、再びしんのすけにビースト振動波が照射される事になった。
しかし、心電図には何の変化も現れなかった。
「波長を変えて！」
イラストレーターの指示でビースト振動波の波長が色々変えられ、
やがて今まで冷たい青色だった光が、暖かい赤色の光へと変わっていった。
「どこかから別の振動波が…？」
検査担当官の言葉を聞いて、
モニターを見た松永管理官は明滅するエボルトラスターを見た。
そしてその明滅に呼応するかのように、
しんのすけの体から赤い光が滲み出てきた。
「これが、彼の光…。」

松永管理官は安堵の笑みを浮かべる。
「波動を記録するんだ！」
「はい！」
心電図に変化が現れ、しんのすけの体に動きが見られ、
そしてしんのすけの全身を眩い光が覆った。

その頃、廊下に眩い赤い光が現れた。
それは光に包まれたしんのすけであった。
しんのすけは息遣いも荒く苦しそうな状態であった。
しんのすけが後ろを振り向くと、
そこにはイラストレーターのホログラムがいた。
「…しんのすけ、お前の体は…もう変身には耐えられない。
ダメージの蓄積は想像以上だったんだ。
今度変身したら…死ぬかもしれない…。」
イラストレーターの言葉にしんのすけは衝撃を受けるが、やがて一言答えた。
「…オラがやらなくて…誰がやるんだよ…。」
そう言って、しんのすけは苦しみの表情を浮かべたまま姿を消してしまった。
「しんのすけ…。」
そんなしんのすけを見送ったイラストレーターは悲しげな顔をして呟き、姿を消した。

「はい…、はい…。そうですか…。分かりました…。」
野原家。みさえが受話器を置く。
「警察は何だって？」
「現在捜索中だから自宅で待機していてくれって…。」
「冗談じゃねぇ！」
みさえの言葉を聞いたひろしは玄関へと向かった。
「あなた…。」

「やっぱり、俺達の知らないところでしんのすけは独りで苦しんでるんだ！
このままじっとしているなんて我慢できねぇ！　俺はしんのすけを捜すぜ！」
そう言ってひろしが靴を履こうとしたその時、居間にドスンと何かが落ちる音がした。
驚いたひろしとみさえが居間に向かうと、窓が開いていて、床には気を失ったしんのすけが倒れていた。
「しんのすけ！？」
ひろしとみさえ、ひまわりは急いでしんのすけに駆け寄り、ひろしが抱きかかえるが、
しんのすけは目を覚まさなかった。
「しんのすけ！　おい！　しんのすけ！！」

一方、松永管理官はもぬけの殻となった部屋をモニターから見ていた。
「もう一度ビースト振動波を照射すれば
彼が逃げる事まで、あなたには分かっていたのでは？　イラストレーター。」
松永管理官の問いかけにイラストレーターのホログラムが現れて答える。
「おかげで彼の光のデータが取れたじゃないですか。」
今度はいつも通りに冷静な口調で話すイラストレーターを見て、
松永管理官は再び戸惑いつつも笑みを浮かべて頷くが、その目は笑っていなかった。

翌日、ナイトレイダーは新たなフォーメーションの訓練を開始していた。
クロムチェスターα、β、γ、そしてδの４機が空中を進む。
西条副隊長に和倉隊長からの通信が入る。

「西条！　準備は良いか？」
「大丈夫です！」
「よし。各機、ハイパーストライク・フォーメーションに移行！」
「了解！」
西条副隊長が号令を下す。
「セット！　イントゥ・ハイパーストライクチェスター！！」
４機のクロムチェスターは合体、チェスター最強形態、ハイパーストライクチェスターとなった。

青空の下、街を一望できるビルの屋上に溝呂木がいた。
溝呂木は両手を広げて空を仰ぎ、宣言した。
「さぁ、始めようか。地獄の饗宴（きょうえん）を…！」
溝呂木の前方に黒い闇を思わせる暗雲が広がっていった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　１９　受難　－サクリファイス－（後書き）

この小説の「ネクサス」での姫矢編にあたるパート、
俺が便宜上“第一部”と呼んでいるパートが終盤に入ってきました。
Ｒ７性因子というのは原作の設定だと、当初は数値の高さが適能者（デュナミスト）の条件に
関わっているんじゃないかと言われていた、
ビーストに対する抗体のようなものらしいです。
（ファンタスティックコレクション　ウルトラマンネクサス　ＮＥＸＵＳＥＥＤより。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２０　安息　－キュア－

世界ＵＦＯ研究所。
Ｍ・Ｐに追われ、謎の中年の男に助けられた根来は
古びた小さい建物に連れて来られていた。
「大丈夫だ。あいつらなら、ちゃんと振り切ったからね。」
根来をかくまった４８歳の温厚そうな男性、山田太一郎が得意気に
話しかける。
「本当にそうなら嬉しいんだがね。」
ブラインドの隙間から辺りを伺いつつ根来が答えた。
「で、ここは何なんだ？」
根来の問いに山田が答える。
「世界のＵＦＯを研究しているんだよ、ここで。」
「帰らせてもらうわ。」
根来が即効で部屋を出ようとするのを
２１歳のラフな服装の男、広川武雄が止めた。
「まぁまぁまぁ。」
２３歳のスーツの男、青野康も立ち上がって根来を止める。
「そう仰らずに。」
「そうですよ、僕らは根来さんの事を尊敬してるんですよ。」
「尊敬？」
青野の言葉に半信半疑な根来。
広川はノートパソコンを開いて根来に見せた。
そこには毎朝スポーツ新聞の一面を飾った根来の記事が載っていた。
「この記事、ネットを通じて世界に配信させてもらいました。大反
響ですよ！」
「ん？　そ、そうなのか？」
広川の言葉に思わず顔がほころぶ根来。
「我々の仲間からも続々と情報が集まっているんだ。これを見てく

れ。」
そう言って青野が見せたファイルには様々な写真記事の切り抜きが収められていた。
『身長３０センチの宇宙人』
『伝説の類人猿発見』
「南米で発見された身長３０センチの宇宙人！　スマトラの伝説の類人猿！」
意気揚々と写真を見せる青野。そこに山田がやって来る。
「あなたの記事のおかげで、こいつらの信憑性が今、改めて問い直されている。」
しかし、根来はファイルを閉じ、怒りをあらわにした。
「ふざけんなよ…。俺の記事が信用されないのは、お前らみたいな連中がいるせいだろ！」
ファイルをテーブルに叩きつけ、根来は山田に掴みかかるが、掴みかかられた山田は平然と話し始めた。
「じゃあ、聞くがね、根来さん。あなたが撮ったこの化け物と私達のファイルに収められているこれらの未確認生物。その違いは何だというんですか？」
「違い？」
「違いなんてありませんよ。どちらも世間の大多数の人に存在を信じられていないという点では、ね。」
「そ…それは…、確かに…。」
根来が言葉に詰まったのを見て山田は笑みを浮かべて答えた。
「すぐには帰らずに話ぐらいはしていきましょうよ。それにあなたは今、迂闊に外に出られないはずだ。」

昨夜、しんのすけが意識不明の状態で家に帰ってきて、ひろし達はしんのすけを一晩中看病した。
そして夜が明けた頃にはしんのすけの熱も下がり、

安堵したひろしとみさえはうとうとと眠りに入った。
窓から差し込む朝日を顔に受けて目を覚ましたしんのすけは
辺りを見回し、眠るひろしとみさえを見つけ、
それぞれ水を染み込ませたタオルや体温計を手にしているのを見て、
みさえとひろしが自分を看病していた事を知り、
「ありがとう…。」
と呟くと、枕元に置かれているエボルトラスターとブラストショットを見つけ、
取ろうと体をひねるが、その時、ひろしが目を覚ました。
「お…、しんのすけ。目覚ましたか。」
「父ちゃん…。」
「良かった、無事で…。…心配かけさせんな！　おい、みさえ。」
ひろしはみさえを起こし、みさえはゆっくりと目を覚ます。
「しんのすけ…。昨日あんたどこ行ってたの!?　親にこれだけ心配かけさせて!」
しんのすけを叱るみさえ。しかし、その顔にはどこか少し安堵感が混じっていた。
「昨日大変だったんだから。お医者さん呼ぼうかどうか迷ったんだけど…。」
「ごめん…。」
「…そんな事よりしんのすけ、どうしてあそこでぶっ倒れてたんだ？」
ひろしの問いにしんのすけは少し考えてから答えた。
「たぶん…、頭の中に浮かんだんだと思う…。ここが…。」
「え？」

「俺が知ってる情報はぜーんぶ話した。
今度はあんたらだ。ま、期待してないが、聞くだけは聞いてやるよ。」
世界ＵＦＯ研究所。

根来の話を受け、青野が嬉しそうに話し始める。
「どれから話しましょうか。ロズウェル事件で軍に回収されたＵＦＯの話か…、
アメリカ政府のＵＦＯに関する機密文書であるＭＪ－１２文書の話…。」
広川もそれに続ける。
「ＵＦＯによる誘拐事件、エイリアン・アブダクションに関する話も…あったりなんかして。」
「あのなぁ…。」
思わず頭をかく根来。
すると、デスクに座っていた山田がおもむろに口を開き始めた。
「じゃあ…、与太話は止めて、あんたの撮った写真の化け物の話でもしましょうか？」
「え？」
山田の言葉に思わず身を乗り出す根来。
山田はそのまま話し始めた。
「この写真の化け物…。ＴＬＴのつけた名称で呼ぶならば、異生獣スペースビーストが
初めて地球に現れたのは、今から約１８年前、アメリカ、コロラド州でのことだった…。
そのビーストは一人の女性研究員を惨殺し、
その夫であり、同じく研究員だった男性も消息不明となった…。」
根来は山田の語りだした話に驚くが、その後に続けて広川が口を開いた。
「今から5年前に起こった新宿大災害…。
日本の首都である東京、新宿に巨大隕石が落下したと一般には言われていますが、
真実は違う。新宿大災害の真実…それは全長５０ｍもの巨大生物と人間との戦い。
そして、この戦いは今も一般人に知られる事なく続いている。

根来さん、あなたが撮ったこの写真がその証拠ですよ。」
そう言って広川は根来が毎朝スポーツ新聞に載せた写真を見せた。
戸惑う根来に山田が話しかけてくる。
「ＴＬＴがどれだけ真実を隠蔽しようとしたとしても、
必ずどこかから情報は漏れているものだ。
そういう情報がネットワークの中では無数に存在しているんだよ。
拾い上げるのは容易ではないがね…。」
青野が続ける。
「無秩序な情報ネットワークの中では適度な冗長度を持たせた方が
的確に伝わる。
いわゆるシャノンの情報理論って奴だ。先程のＵＦＯの話のような、
７０のデタラメな情報に３０の真実を上手く混ぜて話す。
真実だけなら、すぐ揉み消されて終わってしまうがね…。」
続いて広川が来て話しかける。
「あなたを追っている連中、ＴＬＴのＭ・Ｐが私達を見逃してくれ
ているのも、
私達が流すガセネタが隠蔽に役立つと思っているからなんですよ。
だから私達はその裏をかく!」
「あんたら…一体…。」
「言っただろう。あなたと同じく…ＴＬＴの存在を知って、
真実を明らかにしようとしている者だと…。」
驚き、戸惑いを隠せない根来を見て、山田は笑みを浮かべてそう答
えた。

その頃、コマンドルームでは和倉隊長が
ハイパーストライク・フォーメーションの訓練結果の報告をし、
続いて松永管理官がハイパーストライクチェスターについて説明を
始めた。
「ハイパーストライクチェスターには、ハイパージェネレーターに
よる

ハイパーストライクバニッシャーが装備されていましたが、今回はそれに加え、
ウルトラマンの破壊光線と同等の威力を持つバニッシャーが新たに搭載されました。
すなわち、ウルティメイトバニッシャーです！」
「すっごいわね！　ウルトラマンの破壊光線と同じ威力だなんて！」
驚きの声を上げる平木隊員。
石堀隊員が質問する。
「しかし、よくあの破壊光線のデータを得られましたね。」
その質問に松永管理官は不気味な笑いを浮かべて答えた。
「はい。今までの戦いのデータに加え、
この度、素晴らしいデータが手に入ったものでね。」
その言葉に和倉隊長はしんのすけの事を思い出した。
「…まさか！？」
「おや？　察しがいいですね、和倉隊長。
捕獲した野原しんのすけを実験して得たデータです。」
松永管理官の答えにナイトレイダーは驚く。
「しんのすけ君を実験？　どうしてそんな事をしたんですか！」
「西条！」
西条副隊長が立ち上がり松永管理官に詰め寄るが、
和倉隊長はそれを制し、代わりに自分が松永管理官を問い詰めた。
「松永管理官。…まさか上層部が野原しんのすけを捕えていたとは…思いもしませんでした。」
「そうですか、それは良かったですね。」
適当に流す松永管理官だったが、和倉隊長は意に介さず問い詰めた。
「管理官…。どうしてこのような事を…！」
「決まっているじゃないですか？　今回の件であなた方は強くなれる。
ウルトラマンの力が無ければ、我々人間はビーストに勝てない。滅ぼされてしまう！」

「我々はこれまで何度もウルトラマンに…、いえ、しんのすけ君に助けられています！
その事は管理官にも十分理解していただいていると思っていましたが！」
「もちろん理解していますよ。ただ…私は職務に忠実なだけですよ。人々を守るという…。あなたもそのはずだ、和倉隊長？」
和倉隊長が言葉に詰まったのを見て、
松永管理官は和倉隊長に向けて挑発的な笑みを浮かべるが、
和倉隊長は再び松永管理官の顔を睨み、口を開く。
「…管理官。あなたはウルトラマンを特別な存在だと思っているようですが、
そのウルトラマン、しんのすけ君も私達と同じ人間なんです！　それを…！」
「和倉隊長。前々から思っていましたが、
ウルトラマンのことになると感情的になりやすいですね。
一度助けられたくらいでそんなに思い入れができるものですかね。」
和倉隊長は再び言葉に詰まり、
松永管理官は自分を睨む西条副隊長達の顔を一通り見て、一人部屋を後にした。

ある地下共同溝を二人の作業員が歩いていた。
「聞いたか？　もう3人消えてるって。間違いなく何かいるんだ…。」
「ただの噂だって。いるわけないだろ？　人を喰う化け物なんて。」
「でもよく聞くじゃないか。ほら、5年位前だったっけ？
新宿の地下に化け物になった人間がいて…。」
すると、奥の方から呻き声が聞こえ、二人は思わず辺りを見回した。
その時、どこからか触手が伸びてきて、
一人の作業員を捕えて引きずりこんでいった。
「エリア1、ポイント723、地下共同溝にビースト振動波確認。」

イラストレーターの指示を受けてナイトレイダーが出撃準備を始める。
その時、イラストレーターの顔に驚きの表情が出た。
「待ってください！　…もう一ヶ所、ポイント２７４にも同じ振動波を確認…。」
その言葉にナイトレイダー達のプロテクターを付ける手が止まった。
「同じビーストが二ヶ所同時に？」
驚く和倉隊長。不思議そうに顔を見合わせる隊員達。
その後、ナイトレイダーは和倉隊長、石堀隊員によるＡ班と西条副隊長、平木隊員によるＢ班とに分けて出撃した。
一方、二ヶ所同時に現れたビースト振動波を分析したイラストレーターはある事を突き止めた。
「このビーストは特殊位相に隠れているのか。」

ポイント７２３に到着したＢ班の西条副隊長にＡ班の和倉隊長から通信が入る。
「西条、平木。そっちはどうだ？」
「ポイント７２３に到着しました。」
「了解。両ポイント共に都心に近い。ビーストを絶対に地上に出すな！」
「了解！」
通信が終わった後、西条副隊長は床に落ちている工具箱を見つけ、その先に時限の歪みから伸びた触手に捕えられている一人の作業員を見つけた。
「た、助けてくれ…。」
作業員は息も絶え絶えな様子だったが、人間が来た事を知って最後の力を振り絞って助けを呼んだ。
「あ！　た！　助けてくれ！　頼む！　たす…！！」
西条副隊長と平木隊員はすぐさまディバイトランチャーを撃ち、触手をちぎって作業員を解放。

そのまま次元の歪みに照準を合わせるも、次元の歪みは閉じてしまった。
「大丈夫ですか！」
平木隊員は作業員に駆け寄るが、
そこにイラストレーターから新たな指示が入る。
「ポイント５３１に新たなビースト振動波確認。
ポイント２７４と７２３のビースト振動波は既に消滅しています。
和倉隊長以下、全員でポイント５３１に向かってください。」
「了解しました…。一体どうなっているんだ？」
ビーストの行動に疑問を持ちながらも和倉隊長は移動を開始した。
そして地上にある作業場では次元の歪みから伸びた触手が作業員を次々に捕えていった。
西条副隊長と平木隊員も移動を開始しようとした時、
西条副隊長のパルスブレイガーにある言葉が送られてきた。
『黙示録の始まりだ、凪』
その言葉を見て、送り主が何者かにすぐ気づいた西条副隊長の顔に怒りが表れる。
「黙示録…。溝呂木、今度は何を企んでいるの！」

「…行くんだな。」
しんのすけはエボルトラスターを手に取り、玄関に向かうが、ひろしに呼び止められる。
隣にいたみさえが話す。
「私達にはあんたが抱えているものの重さは分からない…。
でも…、あんたには安息の場所が必要…。違う？」
しばらく間をおいた後、しんのすけは答えた。
「ごめん…。」
扉を開けて外に出るしんのすけ。
「なんでだよ…。」
ひろしは声を震わせて呟くと、扉を開けて走り去ろうとするしんの

すけに向けて叫んだ。
「しんのすけ、なんでだよ？　なんで、お前一人だけが行かなきゃいけねぇんだよ！？」
その言葉にしんのすけは一瞬立ち止まり、
そんなしんのすけにシロがまるで行くなと言っているかのように吼える。
「オラは…もう誰一人巻き込みたくない…。
だから…、オラは…独りで戦う…。戦わなくちゃいけないんだ…！」
ひろし達とシロにそう言い残して、しんのすけは走り去っていった。
それを呆然と見送るひろしとみさえとひまわりとシロ。その時、後から声がした。
「やはり、奴は間違っている。人を超えた力の使い方をな。」
その言葉に驚いた三人と一匹が振り返ると、背後に言葉の主、溝呂木がいた。

一方、家族のもとから走り去ってきたしんのすけは
幼稚園の頃、マサオ達と過ごした近くの河原に来ていた。
「ここは…。」
しんのすけの脳裏にこの河原での多くの思い出が蘇る。
そして、しんのすけはエボルトラスターの鞘を引き抜こうと構えるが、
脳裏にイラストレーターとひろしの言葉がよぎった。
『しんのすけ、お前の体はもう変身には耐えられない。
今度変身したら…死ぬかもしれない…。』
『しんのすけ、なんでだよ？　なんで、お前一人だけが行かなきゃいけねぇんだよ！？』
しかし、しんのすけはその言葉を振り切るかのように
エボルトラスターを鞘から引き抜き、ウルトラマンに変身した…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２０　安息　－キュア－（後書き）

ＵＦＯ研究所のメンバーが話すＵＦＯの話などは、一部原作と変更しています。
その際に、彩図社から発売されている「謎解き超常現象」と「謎解き超常現象？」を参考にしたんですけど、これは超常現象と呼ばれているものを客観的に見て調査、分析、真実を明らかにしているという内容の本でなかなか面白いです。
（俺のように少しだけ超常現象に興味がある人でも楽しめると思います。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２１　宿命　－サティスファクション－

家族のもとから走り去ってきたしんのすけは、
かつてマサオ達と過ごした思い出の河原でウルトラマンに変身、光となって飛び立った。
「離せぇ！！　離してくれぇ！！」
作業場では次元の歪みから伸びる触手に作業員が次々と捕らえられていった。
触手に引きずられながら一人の作業員が悲痛の叫びを上げる。
その時、天から巨大な光が地上に降り注ぎ、触手を砕いた。
触手から開放された作業員は驚いて辺りを見渡す。
その時、作業員のすぐ横で巨大な物体が大きな地響きと共に舞い降りた。
作業員が見上げると、それはウルトラマンの足であった。
「きょ…巨人？」
ウルトラマンは他の次元の歪み二ヶ所から
伸びている触手に捕えられた作業員を見て、パーティクル・フェザーで触手を切って、
セービングビュートで作業員を救出して安全な場所に移動させた。
そしてその巨体で驚く作業員達の上を駆け抜け、ウルトラマンは次元の歪みへと立ち向かった。
ウルトラマンはアンファンスからジュネッスにスタイルチェンジしてメタフィールドを展開しようとしたが、
メタフィールドはおろか、ジュネッスにもスタイルチェンジ出来なかった。
戸惑うウルトラマンに向かって次元の歪みから触手が伸び、ウルトラマンの両手と首を捕えた。
「しんのすけ…。」
ＣＩＣ。苦しむウルトラマンを見て、イラストレーターはやや涙目

で祈るかのように手を組んでいた。
そこにナイトレイダーのチェスターが到着。
ウルトラマンを見て、和倉隊長が指示を送る。
「各機、攻撃開始！　ウルトラマンを援護しろ！」
「了解！」
チェスターαとβの攻撃によってウルトラマンの首を捕えていた触手が
続くγとδの攻撃によって両手を捕えていた触手が切られた。
しかし、触手は今度はチェスター目掛けて迫ってきた。
それを見たウルトラマンはすぐさまパーティクル・フェザーを撃って触手を撃退。
触手は次元の歪みに逃げ込み、そのまま次元の歪みも閉じた。
「逃げたのか？」
和倉隊長の疑問に石堀隊員が答える。
「ビースト振動波ディクリーズ。安全レベルです。」
石堀隊員の後ろに座っている平木隊員が叫んだ。
「見て！　ウルトラマンが…！」
エナジーコアが点滅し、ウルトラマンはその場に膝をついてそのまま姿を消してしまった。
西条副隊長はそれを黙って見つめていた。
「大丈夫ですか？」
戦い終わり、ナイトレイダーは生き残った作業員に無事を確認していた。
「巨人が…！　巨人が私を助けてくれたんです！」
作業員の言葉を聞いて和倉隊長が答える。
「…分かっています。立てますか？　大丈夫ですね。」
そして作業員の無事を確認すると西条副隊長に小声で話しかけた。
「西条、しんのすけ君を探せ。まだこの近くにいるはずだ。」
和倉隊長の言葉を受け、西条副隊長は静かに頷いた。

森の中、しんのすけはフラフラになって歩いていたが、遂に力尽きて倒れてしまった。
「くっそ…。」
しんのすけは何とか立ち上がろうとするが再び地面に倒れ伏してしまった。
しんのすけが気がつくと、辺りは今までいた森の中から黒い海の中に浮かぶ灰色の島に変わっていた。
島の周りにはおぞましい異形な岩が生え、まるでこの世の終焉を表したかのような場所であった。
「ここは…？」
しんのすけは近くの岩に倒れている人達を見つけた。
「父ちゃん、母ちゃん、ひまわり、シロ！！」
その時、周りから闇が広がり、その闇はしんのすけに襲い掛かってきた。

「しんのすけ君！　しんのすけ君、しっかり！」
西条副隊長は気を失っているしんのすけを抱き起こして、何度も呼びかけ、やがてしんのすけは意識を取り戻した。
「西条副隊長…。」
「良かった。気がついて…。すぐ救急隊がくるから！」
「駄目だゾ。オラにはまだ…やらなくちゃいけない事が…。」
そう言ってしんのすけはフラフラながらも何とか立ち上がり、ストーンフリューゲルを呼んだ。
しかし、すぐさま力尽き両膝をついてしまった。その様子を見て西条副隊長が問う。
「どうしてそんなになってまで…？　一体何の為に？」
その問いにしんのすけはエボルトラスターを見て答えた。
「西条副隊長達の仕事って…、人々を…、この世界を守ることなんだよね…？」
そこにストーンフリューゲルが静かに舞い降りてきた。

「だから…オラも…。」
そう言うと、しんのすけは西条副隊長の所から離れ、
よろめきながらストーンフリューゲルへと向かっていく。
西条副隊長はそれを見て続けた。
「なら、一つだけ言わせてもらうけど…。
あなたはそのために、たった一人で全て抱え込むというの?」
西条副隊長の言葉にしんのすけは立ち止まる。
「…そんな体で戦えば、最悪の場合…あなたは死ぬわ…。本当にそれでいいの?」
「……。」
さらに問いかける西条副隊長の言葉に答えられないまま、
しんのすけはストーンフリューゲルに乗って、
空へ飛び立ち、西条副隊長はそれを黙って見送った。

その後のフォートレスフリーダムのコマンドルーム。
西条副隊長は静かにコーヒーを入れていた。
「隊長。どうして隊長はウルトラマンを信じたんですか?」
「え?」
「隊長はウルトラマン、しんのすけ君のことをどうして疑いもなく信じられたんですか?」
西条副隊長の質問に和倉隊長は少し考えてから答えた。
「それはたぶん…、俺が空自にいた頃、出会ったからだと思う…。
ウルトラマンに…。」
「え?」
驚いて振り向く西条副隊長。和倉隊長は静かに話し続けた。
「かなり、おぼろげな記憶なんだが、同僚と緊急警報を聞き、出撃した時だ。
俺の乗っていた機体はマシントラブルを起こして先に基地に帰投し、
同僚の乗っていた機体は確認された未確認飛行物体と衝突したんだ…。

そいつは奇跡的に生還を果たしたが、
その後、新宿に化け物が現れ、そいつは銀色の巨人となって、その化け物と戦った…。」
「新宿…。」
西条副隊長はその話に新宿大災害のことを思い出した。

「最近続発している行方不明事件…。
この街の真下で何かとんでもねぇ事が起きているのは確かだ。俺はそれを暴きたい！」
世界ＵＦＯ研究所。
根来の言葉に広川と青野が難色を示す。
「で、あの連中に見つからずに地下に侵入したいと？」
「どこもかしこも警戒厳重だね。入り込む隙も無い…。」
「どっか、秘密の入り口とか無いかな？　…そんな都合よくあるわけ無いか。」
根来が肩を落とした瞬間、山田が笑みを浮かべて答えた。
「あるよ。」
「え？」
「とっておきのやつがね…。」
山田が見せたパソコン画面に根来他皆が見入った。
「見たまえ、東京の地下には帝都防衛を目的に掘られた秘密の通路が無数に存在する。」

「今回のビースト、コードネーム・クトゥーラによる
連続失踪事件は決して無作為ではなく、ある明確な意思をもって行われていたんです。」
コマンドルームではイラストレーターによって、クトゥーラに対する説明が始まっていた。
「明確な…意思？」
「インクリプション…暗号です。

クトゥーラの現在までの出現ポイントは6ヶ所。そのポイントを示す全ての数値を
ゲマトリア解釈法で分析した結果、ある一文が導き出されました。」

「ゲマトリア…解釈法？」
世界ＵＦＯ研究所でも広川によってビーストに対する説明が行われていた。
「ゲマトリア解釈法。古代ギリシアなどで発達した一種の暗号解読法ですよ。
全ての数値をアルファベットに置き換える事で隠された文章を探る事が出来る。」
「隠された文章？」
根来に向かって、広川がパソコン画面を見せる。
無数の数値がアルファベットに変わり並び替えられていく。
『七つ目の封印が解かれし時、深夜０時、闇の扉は開き、終焉の地へと通じる』
「終焉の地？」
平木隊員の質問に和倉隊長が答える。
「黙示録などに記された最終決戦の場だ…。」
「さすがは和倉隊長。溝呂木と同じく、そういう方面に詳しいですね。」
イラストレーターの言葉に和倉隊長の顔が曇る。
「黙示録…。」
溝呂木の事を思い出した西条副隊長の呟きにイラストレーターが反応した。
「そう、西条副隊長へのメッセージは単なる脅し文句ではなく溝呂木からの重要なヒントだった。
奴は大胆にもビーストが潜む特殊位相のゲートが開く正確な時間と場所を僕らに伝えていた。」
イラストレーターの説明を聞いた和倉隊長が怒りを露にする

「そんな事の為に…大勢の人間を犠牲に…！」
熱い和倉隊長の横で冷静な石堀隊員がイラストレーターに尋ねる。
「それで、七つ目の封印が解かれる場所は？」
イラストレーターは画面に今まで現れたクトゥーラの出現ポイントを示した。
「今までクトゥーラが出現したポイントは皆、
黙示録に登場する七つの教会の位置と一致します。
そこから考えてクトゥーラが現れる七つ目の場所、つまり最後の一ヶ所は…。」
イラストレーターが画面上を示した最後のポイントを見て西条副隊長は驚いた。
「新宿中央公園…！？」

その新宿中央公園。エボルトラスターに導かれてしんのすけが姿を現した。
しんのすけはズボンのポケットからエボルトラスターを取り出して見つめる。
「オラがやらなくちゃいけないんだゾ…。オラが…。」
自分に言い聞かせるように呟くと、
しんのすけは一つ大きな深呼吸をして、新宿中央公園に入っていった。

「ゲート開放時刻、午前０時まで後１０分です！」
そして、深夜。ゲート解放時刻が迫る中、
フォートレスフリーダムではイラストレーターの指示の下、
クロムチェスターの発進準備が行われていた。
「クロムチェスター、テイクオフ！　そのままストライク・フォーメーションに移行！」
和倉隊長の指示で各チェスターが発進し、α、β、γはストライクチェスターに合体、

ストライクチェスターとδの二機で新宿中央公園に向かった。

一方、根来はその新宿中央公園地下に広がる通路を進んでいた。
「おかしい…。ここはさっき通った場所だ。ええい！　一体どうなっちまってんだ！」
根来が苛立たしく懐中電灯で地図を見ていると、奥の方から不気味な呻き声が響いてきた。
「何だ？　まさか…。」
その時、次元の歪みが現れ、中から伸びてきた触手が根来を捕まえて引きずった。
根来は近くにあった鉄筋にしがみつき、必死の抵抗をする。
「こんな所で死んでたまるかぁ！！」
しかし、触手の引きずる力に負け、鉄筋を離した根来は次元の歪みへ引きずり込まれていく。
その時、光弾が触手を断ち切り、根来は何とか九死に一生を得た。
驚いた根来が辺りを見回すと、階段の上、ブラストショットを構えたしんのすけがいた。
「しんのすけ…！？」
しかし、しんのすけは根来の言葉に答えずに警告した。
「根来さん。ここは危険だゾ。地上に戻ってください。」
「バカ言え！　俺だってジャーナリストの端くれだ。そう簡単に引き下がれるか。」
そう言って根来が再び先に進もうとすると、しんのすけは根来の足下にブラストショットを撃った。
「いいから、戻って！　この先に行ったら…死ぬだけだゾ！」
振り返り、しんのすけの顔を見る根来。
「……。」
「……。」
「……。」
「……。」

しんのすけの悲壮な決意を読み取り、根来が一つ尋ねた。
「しんのすけ…、お前は…、お前は一体…？」
その時、再び次元の歪みが開き、複数の触手がしんのすけと根来に向かってきた。
戦うべきビーストの姿を見たしんのすけは顔を上げ、自分に言い聞かせるように答えた。
「オラは…戦わないと…。皆を守るためにも…行かなくちゃいけないんだ！！」
その言葉と共にしんのすけはエボルトラスターを鞘から引き抜いて駆け出し、心の底から叫んだ。
「うおおおぉぉぉぉぉ！！！！」
エボルトラスターから放たれた光がしんのすけの全身を包み込み、根来の眼前にウルトラマンが姿を現した。
ウルトラマンとビーストの触手との戦いをカメラに収めていく根来。
やがて触手は次元の歪みに逃げ、
それを追ってウルトラマンも次元の歪みへと姿を消した。
それを見送った根来はカメラを握り締めて呟く。
「これが…、俺が追い求めていた真実…。」

眠っていたひろしが目を覚ますと、
辺りは今までいた世界とは全く違う異様な世界、終焉の地だった。
「どこだここは…？」
ひろしは辺りを見回し、近くで眠っていたみさえとひまわりを見つけた。
「おい、みさえ！　ひまわり！」
みさえとひまわり、そしてシロはひろしの声に目を覚ますと辺りを見渡した。
「ここは…？」
「これは悪い夢じゃないぜ。」
三人と一匹が声のする方を見ると、溝呂木が不敵に笑っていた。

「来たか。」
「え？」
みさえが溝呂木の見る灰色の雲の塊に目をやると、その中からウルトラマンが姿を現した。
「巨人？」
「あれだ…、みさえ！　あれがあの時、俺を助けてくれた銀色の巨人だ！」
驚くみさえとひろしとひまわりとシロの前にウルトラマンが終焉の地に降り立った。
「あれが野原しんのすけだ。」
溝呂木の言葉に驚く三人。
驚く三人を横目に見て、溝呂木が語りだした。
「遥か宇宙から飛来した光。
奴はその光に選ばれ銀色の巨人、ウルトラマンとなった。
だが奴はその光の価値を分かっちゃいない…。」
ウルトラマンの周りから闇が広がり、
その中から様々な海洋生物と苦痛や絶望に歪んだ人々の顔とが入り混じり、
溶け合い、侵食しあっているかのような姿をしたビースト・クトゥーラが姿を現した。
ウルトラマンはクトゥーラに立ち向かうが、クトゥーラは触手でウルトラマンを捕えると、
エナジーコア目掛けて執拗に攻撃してきた。
さらにクトゥーラはウルトラマンを思い切り放り投げ、全身に闇を吹き付けていった。
苦しむウルトラマンのエナジーコアが点滅を始める。
「しんのすけ…。しんのすけー！！」
しんのすけの危機に叫ぶみさえ。
その横で溝呂木があざ笑うように喋った。
「これでウルトラマンの戦いは終わる。野原しんのすけはその役目

を終えたのさ。」
笑う溝呂木。その横でひろしが怒りに拳を震わせながら叫んだ。
「ふざけるなよ…、てめぇ!!」
ひろしは溝呂木に殴りかかるが、いとも簡単に叩き伏せられてしまった。
そしてそんな溝呂木と三人と一匹の目の前で
ウルトラマンのエナジーコアが心臓の鼓動が止まるように点滅が止まり、光が消え、
ゆっくりと倒れたウルトラマンの瞳からも光が完全に消え失せた。

その頃、ナイトレイダーは新宿中央公園を目指し、夜空を突き進んでいた。
イラストレーターの見る画面のタイマーが0になる。
「開け、闇の扉。」
イラストレーターの言葉と共に、新宿中央公園の森に巨大な歪みが発生した。
「突入せよ!」
和倉隊長の指示の下、ストライクチェスターとδは次元の歪みに突入。
次元の歪みを突き進む二機に凄まじい衝撃が襲ってきた。
「重力波抵抗30。二時の方向、位相エネルギー収束ポイントを探知!」
石堀隊員の言葉を受けて和倉隊長が指示を出す。
「分かった。左5度旋回。」
やがて周りの世界が変わっていき、
西条副隊長はかつて通ったメタフィールドに通じる世界の事を思い出した。
そして前方に激しい光が現れ、
その中に突入した二機はウルトラマンと同じ灰色の雲の塊から現れた。

「ここが…終焉の地？」
驚いて辺りを見渡すナイトレイダー。
西条副隊長は島の周りに生えているおぞましい異形なる角らしき岩を見て、
幼少期に会った、母を殺害した男の肩から生えていた角を思い出した。
黒い海を進む二機はやがて灰色の島を見つけ、
その島で一番高い岩に、両手両足と首を蔦に巻かれ、
十字架状に捕えられているもの、ウルトラマンを見つけた。
「ウルトラマン！？」
「しんのすけ君！！」
「…！」
磔にされているウルトラマンを見て驚くナイトレイダー。
和倉隊長は十字架状に捕らわれているウルトラマンに向けて叫び、
西条副隊長は黙って捕らわれているウルトラマンを見た。

「ようこそ、終焉の地へ。」
その声に和倉隊長がモニターに目をやると、
そこには不敵な笑みを浮かべる溝呂木が映っていた。
「溝呂木ぃ！！」
「ウルトラマンの敗北はこれから始まる聖なる儀式のほんのプロローグに過ぎない。」
「あなただけは…絶対に許さない！！」
怒りを露わにする西条副隊長に対し、
溝呂木は捕えていたひろしを引きずり出してきた。
「撃てよ。」
「ひろしさん！？」
西条副隊長が驚いた瞬間、クトゥーラが闇から現れ、触手で二機を捕えた。
「このビーストが触手の本体か…！　フルパワーで脱出せよ！」

和倉隊長が指示を出すが、石堀隊員が答える。
「ジェネレーター出力低下！　脱出できない！」
「各機、発射可能な武器を全てビーストに集中せよ！」
「しかし、この状態での攻撃は…！」
「ビーストの気を逸らす！　それだけでいい！！」
和倉隊長の指示を受けて、
二機は発射可能な武器を次々にクトゥーラに向けて発射するが、
溝呂木はそれを見てあざ笑った。
「和倉、無駄な足掻きは見苦しいだけだ。」
一方、攻撃を受けたクトゥーラは二機を岩にぶつけようと触手を大きく振りかぶった。
それを見た溝呂木がまだ早いという感じで呟いた。
「待て。まだ殺すな。」
溝呂木の言葉を受けてクトゥーラが攻撃を止めた隙を和倉隊長は見逃さなかった。
「西条！　今だ！！」
「了解！」
西条副隊長操縦するδがストライクチェスターを捕えているクトゥーラの触手に照準を合わせ、クワドラブラスターを放った。
クワドラブラスターによって触手を切られ、ストライクチェスターは脱出。
今度は平木隊員操縦するストライクチェスターがδを捕えているクトゥーラの触手に照準を合わせ、ストライクバニッシャーを放った。
δも脱出し、和倉隊長が素早く指示を送る。
「西条、ハイパーストライク・フォーメーションだ！」
「了解！」
ストライクチェスターとδはハイパーストライクチェスターに合体。
そして、
「西条、ウルティメイトバニッシャー発射！」

「了解！　砕け散れぇ！！」
西条副隊長がウルティメイトバニッシャーを発射。
それを受けてクトゥーラは光の粒となった。
「今だ！」
溝呂木がナイトレイダーとクトゥーラの戦いを見ている隙に、ひろし達は溝呂木に突撃。
地面に倒れた溝呂木にみさえがグリグリ攻撃を仕掛けるが、
溝呂木はすぐさまみさえの手を払いのけダークエボルバーで反撃。
「みさえ！　…てめぇ！！」
みさえが倒されたのを見てひろしは靴を脱ぎ、立ち上がった溝呂木の口にその靴を当てるが、
逆にダークエボルバーで攻撃され、吹き飛んだ。
気絶したみさえとひろしに目をやり、口を拭ってむせた後、
溝呂木はハイパーストライクチェスターの方を見て再び不敵な笑みを浮かべた。

「やるねぇ。だがやはり無駄な足掻きだ。」
そう言って溝呂木はウルトラマンに向かって
ダークエボルバーを掲げ、大きく両手を広げた。
「冥府よ、動け！」
溝呂木の言葉と共に、ウルトラマンに巻きついていた蔦が伸び始め、
全身を覆い始めた。
「闇の波動…。この蔦がウルトラマンの全身を覆い尽くした時、
野原しんのすけの生命（いのち）の光は完全に消え失せる。
その瞬間、奴に同化していた光はこの終焉の地に解き放たれる。
俺はその光を奪い！　無敵の超人となって！
世界を思うがままに動かしてやる！
より高き者！　より強き者！　より完璧なる者として！
フフフフハハハハハアハハハハ！！！」

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２１　宿命　－サティスファクション－（後書き）

遂に“第一部”も残り１話となりました。
今回の話では、何故、和倉隊長が初期の話でウルトラマンに
肩入れしていたのかという部分の謎を消化し、
原作でも使われていたサブタイですけど、
そのサブタイ通りにしんのすけの行動は人々を守りたいと思っての
行動だけど、
その中で、大事なものを全部置き去りにしている
自己満足（サティスファクション）の部分もあるという描写を重点的に描きました。

で、ＵＦＯ研究所のメンバーのセリフ、
「帝都防衛を目的に掘られた秘密の通路」
はよく都市伝説系の話で聞く話ですけど、
展開上仕方がないので、変更せずに原作のままにしています。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２２　絆　－ネクサス－

終焉の地での溝呂木の高笑いと連動して、地上では次々と停電が起きていた。
それをコマンドルームのモニターで見ていた松永管理官に戦慄が走る。
「溝呂木の特殊振動波が地上にまで…。」
「溝呂木の儀式が本当に黙示録の実践だとしたら…。秩序は確実に崩壊するでしょう。」
松永管理官が振り向くとイラストレーターのホログラムが立っていた。
「でも…。」
「でも？」
「僕の見る未来はまだ混沌の中にある。光はまだ完全にその輝きを失ってはいません。」

その頃、傷付いたしんのすけは一人、闇の中に浮かんでいた。
しんのすけが力無く前を向いた時、闇の彼方から光が自分に向かって迫ってきた。

終焉の地ではナイトレイダーがチェスターから降りて溝呂木を取り囲んでいた。
「溝呂木…、ゲームは終わりだ。」
和倉隊長の言葉に溝呂木がバカにしたような口調で答える。
「どうかな？」
次の瞬間、溝呂木は天高く舞い上がり、
ナイトレイダーは溝呂木に向けてディバイトランチャーを構えるが、
溝呂木はダークエボルバーから闇の光弾を撃って、石堀、平木隊員を次々に倒していった。

「溝呂木ぃ！！」
和倉隊長がディバイトランチャーを撃とうとするが、
溝呂木は地上に降り立ち、
素早く懐に入り込んでダークエボルバーで和倉隊長を弾き飛ばした。
その直後、溝呂木にディバイトシューターが向けられ、
溝呂木もすぐさまダークエボルバーをその相手、西条副隊長に向けた。
互いに構え合う西条副隊長と溝呂木。
「腕を上げたな…。さすがは俺が見込んだ女だ…。」
「ふざけないで！　ビーストに成り果てた男が！」
「…もう一度だけ聞く。俺の仲間になる気は？」
「なら言うわ。死んだ方がマシよ！」
迷い無く毅然と答える西条副隊長に対し、
溝呂木はかすかにうろたえを滲ませていた。
「…だったら死ね。」
溝呂木はディバイトシューターを握る西条副隊長の腕を払いのけ、
ダークエボルバーを西条副隊長目掛け、振り下ろそうとするが、
その時、背中に衝撃を感じて体勢を崩した。
溝呂木が見ると、立ち上がった和倉隊長がディバイトランチャーを構えていた。
「ほぉ、やれよ和倉。この俺を倒せるものならな。」
そう言って溝呂木はダークエボルバーを構えた。
「俺はもう、お前や凪みたいな脆弱（ぜいじゃく）な人間とは違う…。メフィスト！」
ダークエボルバーを左右に引き抜き、溝呂木はメフィストに変身した。
「撃てぇー！！」
和倉隊長の指示の下、ナイトレイダーがメフィストに向けて
一斉にディバイトランチャーを撃つが効果が無い。
一方、西条副隊長はその間にみさえ達を救出しようとするが、

それに気づいたメフィストはダークレイフェザーを撃って妨害してきた。
状況を不利と見た和倉隊長が指示を出す。
「各員チェスターに搭乗！」
「了解！」
ナイトレイダーはハイパーストライクチェスターに搭乗。メフィストと対峙する。
「西条、ウルティメイトバニッシャーだ！」
「了解！」
西条副隊長はメフィストに向けてウルティメイトバニッシャーを撃つが、直撃しても効果が無く、逆にメフィストはダークレイフェザーをハイパーストライクチェスターに向けて撃ってきた。
ダメージを受けるハイパーストライクチェスター。
「まだだ…！」
呟く和倉隊長。西条副隊長はハイパーストライクチェスターから磔にされたウルトラマンを見ながら、操縦桿を強く握りしめた。

一方、しんのすけは自分に迫り、自分を包む光の中にダメージを受けても、
決して諦めることなくメフィストに立ち向かうナイトレイダーの姿を見た。
「皆…。ウルトラマンがいなくても…。」
しんのすけはそれを見た後、エボルトラスターを見て少し諦めを含んで呟いた。
「オラ…、こんなとこで…このまま…このまま死ぬのかな…？」
「しんちゃん…。」
その時、背後から自分を呼ぶ声が聞こえ、
その声のした方にしんのすけが振り返ると、そこにはつばきがいた。
「つばきちゃん…！？」

しんのすけはつばきを見ると、驚きつつも話しかけた。
「つばきちゃん…。本当に、本当にあの時の…つばきちゃんなの？」
「うん…。しんちゃん。私はあなたが忘れている一番大切な光を伝えに来たの…。」
「オラが忘れている…一番大切な光…？」
つばきはしんのすけの言葉に頷き、
それと同時にエボルトラスターが明滅を始め、
しんのすけの目の前ににストーンフリューゲルが降臨した。
つばきの頷きを受け、
しんのすけは初めての時と同じようにストーンフリューゲルに手を触れた。
そして、膨大な光と共にあるイメージが、辺り一面に解き放たれた。
「これって…。」
その光景に驚くしんのすけ。
しんのすけの見た光景。
それは、自分が今まで出会った人々、自分が今まで多くの事件で出会った人々であった。

ひろしやみさえやひまわり、シロというかけがえのない家族。
風間やマサオ、ネネやボーなどのかけがえのない親友。
ハイグレ魔王が異世界の地球に侵攻した時、
出会ったその世界のアクション仮面やブリブリ王国のスンノケシ王子。
吹雪丸。トッペマ・マペット。玉ゆら三兄弟達。
ぶりぶりざえもんと秘密組織、ＳＭＬの２人。
秘密組織、温泉Ｇメンの３人。
青空侍、井尻又兵衛由俊（いじりまたべえよしとし）。そして、つばき。
その他、自分が今まで出会った多くの人々が映し出された。

「オラが今まで出会った人達…。」

「そう、しんちゃんは今までこんなにたくさんの人達と出会ったの…。
その人達との思い出と絆を絶対に忘れないで…。」
「絆…。」
しんのすけの言葉と共に辺り一面に
再びひろし、みさえ、ひまわり、シロ、風間、マサオ、ネネ、ボーが映る。
「そうだ…。オラは一番大切な…忘れちゃいけないことを忘れてた…。
オラには、オラのことを想ってくれてるこんなに多くの人達がいるんだってことを…。」
そう呟きながら、新しくあいとナイトレイダーのメンバーも
映し出したそれらを見つめるしんのすけ。
「でも…、しんちゃんはその人達に
支えられていただけじゃなくてその人達を支えてもいたの…。」
つばきの言葉と共に周りに再び今までの事件で出会った人々が映し出されるが、
先程とは違い、それにはしんのすけも一緒に映っていた。
「これだけ多くの人達がしんちゃんの明るさに、
しんちゃんとの絆に…支えられていた…。
逆境の中にあって、挫けそうになりながらも、しんちゃんとの絆に支えられた人達が、
しんちゃんと出会った事で、変わることのできた人達がたくさんいることも忘れないで…。」
今までの事件で出会った人々。
その中には、しんのすけと出会ったことで呪いが解けたメモリ・ミモリ姫や
しんのすけを含めた野原一家と出会ったことで家族の絆に気づいたＳＭＬの２人。
オトナ帝国事件のケンとチャコ。

そして、あの時、しんのすけ達が未来を取り戻そうとしている姿を見た人々。
しんのすけと出会ったことによって自分の想いに気づいた廉姫（れんひめ）などがいた。
「そっか…、今まで、皆はオラと…そして、オラは皆と一緒に戦っていたのか…！」
呟くしんのすけに頷くつばき。
「しんちゃん…。私も…しんちゃんに支えられた人の一人…。」
「え？」
その言葉と同時に周りにしんのすけと一緒のつばきが映り、
つばきはそれを見て、かつての出来事を思い出しながら答える。
「映画の中で私は、ずっと独りぼっちだった…。
映画の中の太陽がずっと昇っていても、
独りぼっちだった私には周りの世界が暗く感じられたの…。
でも、しんちゃん達と出会えて…、しんちゃんと一緒に過ごせて…、
独りぼっちじゃなくなった私には…、初めて世界が明るく輝いて見えた…。
しんちゃんとの絆が私に光を与えてくれたの…。
だから、ウルトラマンはあなたを受け継がれてきた自らの光の継承者として選んだ…。
そして、私もその恩返しとして、あなたに光を手渡す役目を引き受けたの…。
それはウルトラマンの光だけじゃなくて…、人と人との絆っていう一番大切な光も…。」
「絆っていう光…。」
しんのすけの呟きに頷くつばきの姿は、だんだんと薄くなっていった。
しんのすけはつばきに近寄る。
「つばきちゃん…！」
「しんちゃんと出会えて本当に良かった…！

ありがとう…。守ってあげて、今までしんちゃんが出会った大切な人達を。
そして守って、私が生きたこの世界を、
しんちゃんが出会った人達の生きているこの世界を。その力で…。」
そしてつばきは完全に姿を消した。
つばきの言葉を受け、しんのすけは力強く頷き、答えた。
「オラは生きる…！　この世界を、
この世界に生きている皆を守るために…、オラは戦う…！」
しんのすけはエボルトラスターを地面に突き立て、
ゆっくりとその鞘を少しだけ抜いて、一言呟いた。
「金打…。」
再び鞘に収めたエボルトラスターから眩い光が溢れ出し、
しんのすけはその光に包まれた。

その頃、ナイトレイダーはハイパーストライクチェスターに乗ってメフィストと対峙していた。
「喰らえ！」
西条副隊長はメフィストに向けてウルティメイトバニッシャーを撃とうとするが、
その前にメフィストはダークレイフェザーを
ハイパーストライクチェスターに向けて撃ってきた。
再びダメージを受けるハイパーストライクチェスター。
その時、磔にされていたウルトラマンのエナジーコアが光り輝いた。
それに気づいたメフィストが振り返ると、ウルトラマンがゆっくりと動き始め、
全身を覆っていた蔦が一斉に火花を散らし、粉々に消え去った。
「何？」
驚くメフィストの前で闇の波動から解放されたウルトラマンが大地に降り立つ。
「ウルトラマンが…！」

「しんのすけ君！」
ウルトラマン復活に沸き立つナイトレイダー。
そして目を覚ましたひろし、みさえ、ひまわり、シロもウルトラマンの姿を見て安堵した。
しかし、ウルトラマンのエナジーコアと目に光はまだ完全に宿っていなかった。
何とか立ちながらもフラフラであるウルトラマンの首根っこをメフィストが掴む。
「力とは…他者を支配し、圧する為にある…。
それに気づけぬお前が…俺に勝てるはずが無い！」
そう叫んでメフィストはウルトラマンを殴りつけ、蹴り飛ばした。
力無く吹き飛ばされていくウルトラマン。
そこにハイパーストライクチェスターがやって来た。
「第２、第３エンジン復調！」
「ハイパーエネルギー充填！　…次の一撃が最後です！」
平木隊員と石堀隊員の報告を受けて、
西条副隊長がウルティメイトバニッシャー発射準備を進める。
「奴の弱点を見つけ、そこに撃ち込むしか勝機は無い！」
少し迷った後、和倉隊長がイラストレーターに尋ねた。
「ＣＩＣ、教えてくれ。最後の一発をどこに撃つべきかを！」
その問いにイラストレーターが静かに答える。
「ウルトラマンの胸にある…エナジーコアを撃ってください。」
「ウルトラマンを！？」
「まさか…！？」
イラストレーターの言葉に驚くナイトレイダー。
松永管理官も驚いてイラストレーターの顔を見るが、
イラストレーターは笑みを浮かべた顔で答えた。
「ウルティメイトバニッシャーは
ウルトラマンの破壊光線の光電子マトリクスを基に作られました。
組成データを修正すれば純粋なエネルギーとして還元できる。つま

り…。」

「ウルトラマンに力を与えられる…？」

「ただし狙いは正確に。少しでも中心を外せば意味がありません。」

イラストレーターの言葉に和倉隊長は覚悟を決めたように頷いた。

通信を受けて、ナイトレイダーはさっそくウルトラマン復活に向けて準備を始める。

「修正データ受信！」

「エネルギー変換完了！」

平木隊員と石堀隊員の報告を受けて、

西条副隊長は静かにエナジーコアに照準を合わせる。

（しんのすけ君…。私がかつてあなたに対して

犯した過ち…。それに今、私なりのケリをつけるわ…。）

そして、

「…立て！　ウルトラマン！！」

力強くトリガーが引かれ、西条副隊長によって撃たれた

ウルティメイトバニッシャーは真っ直ぐウルトラマンのエナジーコアに命中した。

予想外の事態に驚くメフィストとひろし達。

そしてウルトラマンはウルティメイトバニッシャーの威力に押されて吹き飛ばされてしまった。

倒れたウルトラマンを見てナイトレイダーに不安が駆け巡った。

「まさか…。」

西条副隊長が最悪の事態を心配したその時、ウルトラマンの全身から光が溢れ出て、

やがてエナジーコアと目に光が宿り、ゆっくりと、しかし力強く立ち上がった。

それを見てナイトレイダーは喜び、ひろし達はホッと胸を撫で下ろした。

ウルトラマンはアンファンスからジュネッスにスタイルチェンジし、

メフィストに向かって力強く構えを取った。
「馬鹿な!?　お前の光はもう完全に消えかけていたはずだ!」
動揺を隠せないメフィストはメフィストクローを展開し、
ハイパーメフィストショットを放つが、
ウルトラマンは左腕のアームドネクサスでハイパーメフィストショットの闇を受け止めた。
メフィストは攻撃を続けるがウルトラマンはそれら全ての攻撃を受け続けていく。
「この力は絶対に希望を捨てない人達の為にある!
それに気づけないお前が勝てるはずが無いゾ!」
そう言ってウルトラマンは受け止めた闇を光に変換、
スピルレイ・ジェネレードとしてメフィストに撃ち返した。

スピルレイ・ジェネレードの爆発の中からメフィストがゆっくりと姿を現す。
「希望…?　笑わせるな!」
終焉の地の大地に対峙するウルトラマンとメフィストを
上空で待機しているハイパーストライクチェスターが見守る。
「俺は無敵だ!!　断じて負けはしない!」
そう叫んでメフィストはウルトラマンに飛びかかり、
ウルトラマンとメフィストは激しい肉弾戦を繰り広げながら上空へと飛び上がっていった。
ウルトラマンはメフィストを殴り飛ばすと、
メフィスト目掛けて体当たりするが、蹴りで突き放され、地上に向けて蹴り落とされる。
メフィストは墜落していくウルトラマンから目を放し、
地上で心配そうに戦いを見守るひろし達に目を向け、
ひろし達目掛けて、ダークレイ・クラスターを放つ。
それに気づいたウルトラマンはダークレイ・クラスターの闇の光弾の前に立ち塞がるが、

闇の光弾は無数に分裂、ウルトラマンを避けてひろし達目掛けて降り注ぐ。
ウルトラマンはすぐさま方向転換、ひろし達の前に降り立ち、サークルシールドを展開してダークレイ・クラスターを防いだ。
そしてひろし達は守られるようにウルトラマンの背後に身を寄せた。
雨あられの攻撃を防ぎきり再び飛び立とうとするしんのすけにひろしが叫ぶ。
「しんのすけ！　俺はお前やみさえやひまわり、シロ、皆とこれからも一緒に元気で暮らすことが夢なんだ！
…だから、しんのすけ。絶対に…絶対に生きて帰って来い！！」
その言葉に立ち止まるしんのすけ。やがてひろしの方を振り向き、力強く頷いた。
そしてそれを見たひろし達も黙って頷き、しんのすけを見送った。
ひろしたちにしばしの別れを告げて再び戦いに飛び立つしんのすけ。
そんなしんのすけの前には、西条副隊長達の乗るハイパーストライクチェスターが見えた。
「ウルトラマンを援護する！　全ミサイル発射！」
「了解！」
ハイパーストライクチェスターは全ミサイルをメフィスト目掛けて撃つが、
メフィストはダークレイ・クラスターを撃ってミサイル全てを迎撃。
スパイダーミサイルの爆発の中から姿を現し、ナイトレイダーに向けて突撃してくる。
「西条！　来るぞ！！」
「了解！」
猛スピードで突撃してくるメフィストに対し、
西条副隊長はハイパーストライクチェスターをかわそうとするが、
そこに地上から猛スピードでウルトラマンが突っ込んできた。
ウルトラマンに殴り飛ばされたメフィストは、全身にエネルギーを溜め、

ウルトラマンもオーバーレイ・シュトロームの構えを取る。
そして、メフィストは最強の光線技・ダークレイ・シュトロームを放ち、
それと同時にウルトラマンもオーバーレイ・シュトロームを放った。
両者の光線が空中で激突。辺りを衝撃が襲う。
その隙をついて、ハイパーストライクチェスターは
地上にいるひろし達を救出、再び上空に飛び立った。
「あ、あなたは!?」
ナイトレイダーの制服を着ている西条副隊長を見てひろしが驚く。
「話は後でします！　とにかく今はここから離れないと。」
「そうね。…しんのすけ。」

ウルトラマンのオーバーレイ・シュトロームは
少しずつメフィストのダークレイ・シュトロームに競り勝ち始めていた。
「よし！　このまま押し切りさえすればいけるぞ！」
ハイパーストライクチェスターの中、ひろしが叫ぶが、
メフィストはそんな状況にありながらも余裕の笑みを浮かべた。
「これがお前の力か…。やはり脆弱だな。見せてやろう…、これが俺の力だ！」
その言葉と共にメフィストは全身に力を込め、ダークレイ・シュトロームは更に威力を増し、
一気にオーバーレイ・シュトロームを押し返すとそのままウルトラマンに命中した。
「しんのすけ君！」
「しんのすけ！」
ナイトレイダーとひろし達の叫び声が響く中、メフィストが勝利に高笑いする。
「終わりだ、野原しんのすけ。お前は今まで自分の命を省みなかった。

そんな奴が戦いに勝って生き延びられるわけがない。」
ダークレイ・シュトロームを受けて落下していくしんのすけに向かって溝呂木はそう呟いた。

コアゲージが点滅し、力無く落下していくウルトラマン。
やがてジュネッスからアンファンスに戻り、目とエナジーコアの光も弱くなっていった。
しかし、ウルトラマンの中にあるしんのすけの意識は死んではいなかった。
「オラはこんなところで終わったりしない…！
皆のためにも…、オラは負けられない…。絶対に…。」
その時、しんのすけの脳裏に今まで自分が出会った人達が映る。
「絶対に…諦めるか！！」
しんのすけが叫んだその時、ウルトラマンの目の光が再び強くなり、完全に光を取り戻したエナジーコアは、辺り全てを包むような眩い光を解き放っていった。
エナジーコアから発せられる光はウルトラマンの全身を包み込み、全身光輝くウルトラマンは落下を止め、上空のメフィストと向かいあった。
「ウルトラマンが…！？」
「しんのすけ君！！」
「しんのすけ…。」
ナイトレイダーとひろしたちが見守る中、
コアファイナルの状態になったウルトラマンはしんのすけの真のジュネッス形態、
青い巨人・ジュネッスブルーの姿へと真のスタイルチェンジを果たした。
「何！？」
驚くメフィストを見上げ、ジュネッスブルーの姿となったウルトラマンは

右腕に新たに装備されたアローアームドネクサスから
眩い光の弓・アローレイ・シュトロームを放った。
驚くメフィストは再びダークレイ・シュトロームを放つが、
ダークレイ・シュトロームはアローレイ・シュトロームに簡単に押し返されてしまった。
「バカな!!　俺は！　俺は…!!　俺は死…。」
アローレイ・シュトロームは高速でメフィストを貫き、背後にある岩を真っ二つに裂いた。
次の瞬間、メフィストは爆発の中に消えていった。

その直後、終焉の地全体を大きな揺れが襲い、至る所で崩壊が始まった。
「終焉の地が…壊れていく…？」
「直ちにこの世界から脱出せよ！」
ハイパーストライクチェスターは元来た灰色の雲の塊に向かうが、
既に終焉の地と地上とを結ぶ闇の扉が完全に閉ざされようとしていた。
「このままでは終焉の地に閉じ込められることに…！」
和倉隊長が叫んだその時、皆の目の前にウルトラマンが現れ、
閉ざされようとする闇の扉を全身で食い止め始めた。
しかし、それを阻むかのように終焉の地の至る所から爆発が起き、
その爆発と炎はウルトラマンとハイパーストライクチェスターを包み込まんとした。
「しんのすけ！」
「しんのすけ君！」
ひろし達とナイトレイダーが叫んだ時、
ウルトラマンはひろし達とナイトレイダーの方を見て頷いた。
「光は絆…。だから、大丈夫！　皆、オラを信じて待っててくれ！」
「しんのすけ!!」
ひろし達は脱出するハイパーストライクチェスターからしんのすけ

に向かって叫び、
しんのすけは光に包まれながらそれを見送った。
そして、新宿中央公園の次元のゲートからハイパーストライクチェスターが飛び出すと同時に
闇の扉は完全に閉ざされ、辺りに一際大きな衝撃が走り、やがて静寂が訪れた。
「しんのすけ君…。」
「しんのすけ…。しんのすけーーーーーー!!!」
既に閉じた闇の扉のあった場所を見て、ひろし達は叫び、
西条副隊長は一人呟き、和倉隊長は静かに敬礼をした。

その頃、根来は新宿中央公園地下に広がる通路を肩を落として歩いていた。
その時、背後で大きな衝撃が起きた。
「しんのすけが…。」
「根来さんだったかしら?」
その声に根来が振り返ると大原リーダーが現れた。
「前に何度か会ったわね。それに、何度か私達の事を覗き見していた。」
「えぇ?　そうだったっけなぁ…。」
とぼけて根来は大原リーダーから逃げようとするが他のM・Pが現れて周りを囲んでいた。
「くそぉ!　やっと最高の写真を撮ったってのによぉ!　やっと…真実に辿り着いたってのに!」
悔しがる根来に向かって大原リーダーが近づいていく。
「あなたの真実と私が守るべき真実はまったく別のものなの。」
「バカを言え!　いつの時代だってなぁ!　真実は一つだ!」
そう叫んで根来はM・Pを振り切って逃げようとするが、
そこに隠れていた他のM・Pが立ち塞がる。
根来はそのM・Pも振り切って逃げようとするが遂に捕らえられて

しまった。
「俺は諦めねぇぞ！　必ず真実を明らかにしてやる！　例え記憶を消されても…絶対にな！！」
そんな根来に向かって大原リーダーがメモレイサーを光らせた瞬間、根来も最後の抵抗でカメラのフラッシュを焚いた。
メモレイサーの光によって根来は気を失って倒れた。
しかし、
「大原リーダー？」
一人のM・Pが大原リーダーがメモレイサーを握ったまま固まってしまっている事に気づいた。
記録を残すカメラのフラッシュの光を浴びた大原リーダーはそのまま気を失って倒れてしまった。
「大原リーダー？　大原リーダー！　早く救急隊を！」

「…？　ここは…？」
そして、その後、しんのすけは光の水に包まれた空間で目を覚ました。
光の水を漂うしんのすけが辺りを見回すと、
目の前に銀色の巨人・ウルトラマンがおぼろげながら姿を現した。
「ウルトラマン…？」
ウルトラマンを見つめて呟くしんのすけ。
そんなしんのすけの脳裏にウルトラマンがテレパシーで語りかけてきた。
『野原しんのすけ…。私の使命のために君の体を傷付けてしまい、その上、こんなことになってしまって…すまない。』
謝るウルトラマンにしんのすけは笑顔で返す。
「いいって、いいって。オラも…あんたと出会って忘れてたことに気づいたから…。」
『忘れていたこと？』
「うん。皆との絆だゾ…。オラさ…、自分が頑張らなくちゃいけな

いんだって思って…。
知らないうちに一人で抱え込んでた…。
でも…、それが逆に父ちゃんや母ちゃん、ひまわりやシロ…。
皆を心配させてるってことにようやく気づいたんだ…。
オラは一人じゃなくて…皆と一緒に戦ってたんだってことに…。」
『……。』
しんのすけの話をウルトラマンは黙って聞いていたが、既にある事を決意していた。
「だから…。オラ…、あんたと出会ったこと…後悔なんてしてないゾ。」
軽い感じで答えるしんのすけ。そんなしんのすけを見てウルトラマンが尋ねる。
『野原しんのすけ…。本当に…後悔は…ないか?』
その問いにしんのすけはしばし黙り、顔を曇らせて答えた。
「うーん…。あんたと出会ったことは後悔してない…。でも…。」
『……。』
「でも…、オラ…皆にオラを信じて待っててって言っちゃったし…。
それにせっかく大切な事を思い出したのに…、
こんなところで終わるなんて…オラ、やっぱり嫌だゾ。」
ウルトラマンを真っ直ぐ見てそうしんのすけはそうはっきりと答え、そんなしんのすけにウルトラマンは頷いて答えた。
『野原しんのすけ…。』
「ん?」
『私も今、分かった…君を選んで正解だったと…。』
そして、ウルトラマンの姿は消え、しんのすけは膨大な光に包まれた。

数日後、しんのすけの思い出の河原にはかつてまたずれ荘の住人だった現・劇団四毛女優、役津栗優が座っ

ていた。
「あ、優ちゃん！」
声の聞こえた方向に優が振り返ると、
そこにはかつてのまたずれ荘の住人達が集まっていた。
「すみません。皆さん、色々と忙しいのに…。」
「いや、いいって、いいって。むさえさんの仕事が丁度休みだったし。」
四郎が笑顔で答え、続いて元ギャルママの靴底厚子が答える。
「あたしも今日は暇だったしね。」
再び四郎が口を開く。
「にしても、珍しいよな。優ちゃんが皆のこと呼ぶなんて。」
「ちょっと、野原さん達のことを話したくなって…。」
「野原さん達か…懐かしいなぁ…。」
元張り込みの刑事だった汚田急痔が感慨深そうに呟く。
その後、優はバッグの中からアルバムを取り出し、
またずれ荘にいた頃の自分達と野原一家が写っている写真を皆と一緒に見る。
「懐かしいな…またずれ荘…。」
四郎が呟き、優が頷く。
「あの頃って、なんだかんだ言って楽しかったですよね。もちろん、今も楽しいけど、
この頃…野原さん達と一緒にいた頃はなんだか不思議なくらい楽しかったなぁ…。」
「色々なトラブルが起きていましたしね、あの頃のまたずれ荘は。」
汚田が思いを馳せながら呟く。
「その主な原因になっていたのが…。」
四郎が呟き、
「しんちゃん。」
と皆同じことを同じタイミングで口に出してしまい、笑いがこぼれる。

「本当、しんちゃんには困らされたな…。」
「そうそう、僕なんか受験勉強の時に何度邪魔されたことか…。」
「でも、私なんかはしんちゃんのさりげない一言で
自分に本当に足りなかったものが分かって、それでオーディションに合格できたんです。」
「へぇ、そうだったんですか。」
汚田の言葉に優が頷く。
「そして、最近思うんです。しんちゃんのおかげで
今の自分があるんだなぁって…。感謝してるんです。」
「しんちゃん、今もあんな感じで元気にしているって思う?」
四郎の問いに優はアルバムを見ながら笑顔で答えた。
「はい。きっと…。」

そして、優達が話している河原の近くの道を
一人の少年が青いマウンテンバイクに乗って、勢い良く走り抜けていった…。

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２２　絆　－ネクサス－（後書き）

遂に“第一部”が終了しました。
今回の話では今までのクレしん映画とのリンクと、それを使った「絆」の物語。
ウルトラマンの復活と西条副隊長の過去へのけじめ、
野原家の皆やナイトレイダーのメンバーとの
「絆」によって、ジュネッスブルーへと真のスタイルチェンジを果たすウルトラマンなど、
原作の“燃える展開”をベースにしながら、
それを崩さないように肉付けをしていくということに力を注ぎました。
（その内容に合わせて、サブタイも原作の最終回のものに変更しました。）
それ以外にもしんのすけとつばきとのシーンを「ティガ&ダイナ」への、
最後のしんのすけとウルトラマンの会話のシーンも、
映画「ＵＬＴＲＡＭＡＮ」のラストシーンへのオマージュを込めて構成しました。

さて…、続く“第二部”は原作とキャラの立ち位置が結構変わる上に、
オリジナルキャラも2、3人登場するので、
原作とは少し雰囲気が変わったものになると思います。

が…、楽しみにしてくれている人には悪いんですけど、
今回を一区切りとしてしばらく更新にブランクを置こうと思います。
その理由の一つは“第二部”の話の中で1話、
再構成の必要があると思った話を手がけるため、

もう一つは“第一部”と“第二部”の間にある程度のブランクを置いたほうが、
ごく自然に読者が“第二部”に入れるんじゃないかと思ったからです。
「そんなのいらねぇ」と思う人もいるかもしれないけど、
あまりに更新のスピードが早いと次への楽しみが半減する部分もあると思うし。
（なるべく「ロング・グッドバイ」にならないようにしようとは思います。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２３　予兆　－プロフェシー－

その１７歳の少年が歩く道は闇の中にあった…。
『誰一人、僕の事を知らない場所に行ってしまえば、僕は…自分の未来を忘れていられる…。
そう思って、僕はあの日、ダラス・フォートワース空港発東京行きの飛行機に乗った…。
あの頃、皆と出会ったあの街は…とても居心地が良かった…。
今でも目を閉じれば、皆のことが思い浮かぶ…。
…僕は時々考える…。僕の命は…どこから来たんだろう…。
そして…僕の命は…どこへ行くんだろう…。
僕の命は…どこから来たんだろう…。僕の命は…どこへ行くんだろう…。』
少年は闇の中、重い足取りで歩いていく。
その時、闇の彼方から光がやってきて、その光は少年を含めた辺り全体を包み込んだ。

「新宿地下を中心に発生していた連続失踪事件は新種のウィルスが原因である事が分かりました。」
ニュース番組で女性アナウンサーが連続失踪事件について報道するが、
ウルトラマン、しんのすけとメフィスト、溝呂木の戦いが一般の人々に知らされる事は無かった。

９月１日。終焉の地での戦いから一ヶ月が経った日。
その日、フォートレスフリーダムではＴＬＴ－Ｊ緊急査問会が開かれていた。
査問会には和倉隊長と西条副隊長が出席。
机を挟んで、東郷らＴＬＴ幹部と向かい合っていた。

「西条副隊長。君が初めて野原しんのすけと接触したのはいつかね？」

東郷の質問に西条副隊長が答える。

「ペドレオン殲滅後のトンネルの中で。その後も彼は私達の前に姿を現し、ビーストや闇の巨人と戦い続けました。どんなに傷付いても…懸命に。」

西条副隊長の脳裏にしんのすけ、そして、今までのウルトラマンの戦いが思い浮かぶ。

「ですが、あなたは我々がウルトラマンの正体を知る前にも単独で彼と接触し、その特殊能力を目撃したはずです。隊員としての報告義務があったにも関わらずね。」

松永管理官の言葉に西条副隊長は少し険しい顔となる。

9月1日。その日はアクション高校の長い夏休みが終わり、新学期が始まった日でもあった。

その日、青いマウンテンバイクに跨った一人の少年が遊園地に続く道を疾走する。

澄んだ青空が気持ちのいい朝、郊外の遊園地では開園に向けて準備が進められていた。

段ボール箱の詰まれた台車を押すマサオがパラソルを広げているポニーテールが似合う、少し褐色肌のマサオ達の高校の先輩・高原明日香に声をかける。

「明日香さーん！　アイスクリームコーン、ここでいい？」

「うん、そこに置いといて。」

「はい。」

マサオと一緒に作業していた、しんのすけの幼稚園の頃からの友人・桜田ネネが明日香に話しかけた。

「あ、アイス、バニラとストロベリーが切れてるみたい。」

「大丈夫よ、あれは注文しておいたから。午後には届くみたい。…って！　もう開門まであと5分しかない！」
テーブルを拭くネネ。
食事の準備を進める明日香。
看板を出すマサオが不満を漏らす。
「遅いな。何やってんだろう？　1週間目にして早くも遅刻かな？」
明日香が答える。
「おかしいわね…。昨日、今日はいつものスイミン不足じゃないって言ってたんだけどなー。」
「そんなこと言ってて実は夜更かししてたりとかしてるんですよ。」
そこにネネが突っ込む。
「へぇー、そういうマサオ君もたまーに遅刻するよね？」
「え？　そ、それは…。」
「まったく、人のこと言えないでしょ。あ、ボーちゃん準備できた？」
それを聞き、メリーゴーランドの準備をしていたマサオやネネと同じ、
しんのすけの幼稚園の頃からの友人・ボーが答える。
「大丈夫…、準備オーケー。」
そこに一人遅れて青いマウンテンバイクに跨った少年・野原しんのすけが到着した。

「遅いよ、しんちゃん！」
到着したしんのすけを見たマサオはネネから逃げるように離れ、駆けてくるしんのすけに向かって文句を口にした。
「いやぁ、主役は遅れて登場するってね。それよりも！　皆見てよ、これ。」
しんのすけはバッグの中から、ペンシルバルーンで作られた物を取り出していった。
「ライオンに、トラに、チーター。ここまでは序盤だゾ。

アライグマに、リスに、ネコに、シャチに、オコジョ。そして…ジャーン！」

しんのすけが擬音付きで紹介した

白のペンシルバルーンを見て、明日香は感心したように答えた。

「へぇ…、マンモスかぁ…。」

「って、象だゾ象！　ゾーさん、ゾーさんって。アニマルシリーズだゾ。これ。」

テーブルに並べられた、アニマルシリーズのペンシルバルーンを見てマサオが尋ねる。

「って、これ全部しんちゃんが作ったわけ？」

「ピンポーン！　ほら、この間、迷子センターでずっと泣いてた女の子がいたじゃん。

こういうのあると、お母さんが来るまでの間、楽しく待っていられるってわけ。」

「なるほどねぇ…。にしてもしんちゃんって昔からこういうの得意だよね～。」

「それほどでも～。」

その話を聞いた明日香は頷きながら答えた。

「へぇ…、さっすがはしんのすけ君じゃない。でも…。」

コン！

明日香は先程まで食事の準備に使っていたおたまでしんのすけの頭を軽く叩いた。

「イタッ！　もう、何すんのよ？　明日香さん！」

「迷子の子の事も考えて風船アニマルを作ってきた事は偉いけど、遅刻は遅刻よ。」

「ホーイ…。イテテ…。」

そんなこんなで遊園地開園。

しんのすけとマサオはお揃いのクマグッズに身をかため、クマさんカステラを作り始めた。

「ねぇ、しんちゃん…。」
「んー？」
クマさんカステラをマイペースに焼いていくしんのすけにマサオが話しかける。
「…そのクマさんカステラ、なんか焦げてない？」
「マサオ君のが生焼けなんだゾ。こういうのはよーく焼いたほうがいいんだゾ。」
「生焼けって…。これで丁度良いの！」
そう言ってマサオは自分が焼いて、タッパに入れたクマさんカステラをしんのすけに見せた。
それを見たしんのすけはマサオの焼いたクマさんカステラを一つ取って食べてしまった。
「うん、やっぱり生焼けだゾ。」
「あ！？　あぁっ！！　ちょっと、何食べてんのさ！」
「毒見役だゾ。毒見役。」
さらにマサオの焼いたクマさんカステラを奪おうとするしんのすけをマサオが必死に妨害する。
そこに、
「クマさんカステラひとつください！」
と女の子の声が聞こえた。
二人が見ると、小さな女の子が笑顔でお金を差し出していた。
「い、いらっしゃいませ！」
しんのすけとマサオはぎこちないながらも瞬時に笑顔を作って応対した。

その後もしんのすけ達は動物の着ぐるみを被って、ペンシルバルーンの動物を子供達に配ってと大忙しであった。
「えいっ！」
「アイタっ！！」
そんな中、ウサギの着ぐるみを被ったネネの悲鳴が遊園地中に響き

渡った。
「あはははははぁ！！」
そのネネの足を踏んだ男の子は、思いっきり馬鹿にした顔で
思いっきり馬鹿にした笑い声を上げた。
「あんた、この私を馬鹿にしたわね！？」
怒りに震えるネネウサギは懐からウサギのぬいぐるみを取り出して
殴りつけようとするが、
それをしんのすけパンダが必死に抑える。
「駄目だって、ウサギさん！」
「放せぇー！　放しなさい！　パンダァー！」

その頃、フォートレスフリーダムではＴＬＴ－Ｊ緊急査問会がまだ
続いていた。
松永管理官が、西条副隊長に一つの質問を投げかける。
「西条副隊長。次の私の質問には思ったままを率直に答えてくださ
い。」
「…はい。」
「ウルトラマンとは…結局、何だったのだと思いますか？」
「え？」
予想外の質問に戸惑う西条副隊長。松永管理官は話を続けた。
「何故、野原しんのすけという人間に光の力を与えたのか？　…答
えてください。」
しばらく考えた末、西条副隊長は一言答えた。
「…分かりません。」
「分からない？」
西条副隊長の答えに不満を浮かべる松永管理官。
西条副隊長は何かを考えながら少しずつ話していった。
「その答えは…きっと彼も分からなかったんじゃないかと思います。
でも、自分が選ばれた理由は分からなくても…、
彼は人々を守るために必死でビーストと戦い続けた…。

…戦いの中で大切な者をなくし、絶望に囚われそうになりながらも、
彼はそれを乗り越えて、人々を…この世界を守るために戦い続けたんです…。」
質問に答える西条副隊長を和倉隊長が見つめる。
そして、彼女の話を聞いて松永管理官は最後にもう一つ質問を投げかけた。
「野原しんのすけは…最終的に答えを見つけられたと思いますか？」
その質問に西条副隊長は頷き、答えた。
「…はい。きっと。」
話を聞き、今度は東郷が同時に二人に質問をする。
「和倉隊長に西条副隊長。最後に質問するが、
ウルトラマンはメフィストと共に消滅した。彼は死んだと思うかね？」
「いいえ。」
東郷の問いに西条副隊長はすぐさま答え、
「私も西条と同意見です。」
和倉隊長もそれに続けて答えた。
「その根拠は？」
「あの時、しんのすけ君の声が聞こえたんです。
光は絆…。だから、大丈夫。オラを信じて待っててくれ…って。」
「絆？　野原しんのすけがそんなことを？」
現在。松永管理官の言葉に西条副隊長は静かに答えた。
「はい…。」

「ウーッ！　これだなー！！」
休憩時間、そのしんのすけは
遊園地内の原っぱで缶ジュースを一気に飲み干し、
寝転んで幸せな笑顔を浮かべていた。その目に映る青い空。
横を見ると勉強道具を広げて悪戦苦闘しているマサオに
ボーが勉強を教え、ネネは今度やる演劇部の劇についてのアイデア

をメモにまとめていた。
そんな皆を見て自然と笑顔になるしんのすけ。
（何で忘れてたんだろう…。皆との絆…。こんなに近くにあったのに…。）
心の中で呟くしんのすけの隣、マサオが勉強を終えて伸びをする。
「うーん…。あぁ～、やっと終わった…。」
思い切り伸びをするマサオにネネがメモを閉じて尋ねる。
「何をそんな必死に勉強してたの？」
「生物だよ。ニガテなところがあるから今のうちにやっておこうと思って…。」
「ホントはもうすぐ追試だからだよね～。マサオ君。」
そこにしんのすけが割り込む。
「ちょっ、しんちゃん！　そのことは言わないでってあれほど…。」
「おぉ！　そうだったそうだった。ごめんごめん。」
思い出したように答えるしんのすけにマサオが深いため息を吐いて呟く。
「昔っからこうなんだから…。」
一方、しんのすけは話を続ける。
「それよりも皆、そろそろ遊ばない？」
「そうね。私も演劇部のアイデアまとめて肩こっちゃったし、リフレッシュに丁度いいかも。」
「僕もやる。」
ネネの後にボーが答え、
「んー、じゃ、僕も。」
続けてマサオが答える。
それを見てしんのすけがポケットからボールを取り出して宣言した。
「それじゃ、思いっきり遊びますか！」
立ち上がったしんのすけに続いて皆も立ち上がり一緒に遊び始めた。
「しんちゃんは、何か将来の夢とかってないの？」

とボールを投げてマサオが尋ねる。
「うーん…。オラ、今はそんなのないゾ。」
とボールを受け取ってしんのすけが答える。
「それじゃ…、やりたいこととかは？」
としんのすけの投げたボールを受け取ってネネが問う。
「うーん…。ただ、自由に…遊んで暮らしたい！」
「やっぱり…。」
とネネの投げたボールを受け取ってボーが予想通りといった感じで呟く。
「はぁ…。しんちゃんに聞いた私がバカだったわ…。」
「ハハ…、ある意味しんちゃんらしいや…。」
とそれぞれ質問したネネとマサオが呆れたように呟き、
「だってオラ、今こうして、皆と一緒にいるだけで幸せだし。」
とマサオからのボールを受け取ってしんのすけは軽い感じで答えた。
そんなしんのすけの脳裏にウルトラマン、そしてナイトレイダーとの出会いが思い浮かぶ。
（ありがとう…ウルトラマン…。あんたのおかげで、また皆と一緒にいられるゾ…。）
そう、しんのすけは心の中で自分の命を救ってくれたウルトラマンに感謝を述べた。

そんな彼らを見ている者がいた。
その者、監視者は全身を黒いフードで包み、原っぱで遊ぶしんのすけをじっと見つめていた。
監視者がしんのすけを見ていると、
いきなり、監視者目掛けてボールが投げつけられた。
木に当たって地面に落ちるボール。
しんのすけが拾いに来るが、暗い木陰の中、そこには既に何も無かった。
辺りを見渡し、暗い顔になるしんのすけ。

そこに明るい日に照らされた原っぱからネネの能天気な声が聞こえてきた。
「どこ投げてんのよー！」
「いやぁ、手が滑っちゃって。」
ボールを手に取り、しんのすけは元気に駆け出した。
その後、ある暗闇に覆われた部屋の中、
一人の男がパソコンに向かってしんのすけのデータを打ち込んでいた。

ＴＬＴ－Ｊ緊急査問会は終了し、部屋には松永管理官と東郷だけが残った。
「光は絆…。確かにウルトラマンの素体と思われる光は、人から人へと受け継がれた。」
松永管理官の言葉に東郷の顔が険しくなる。
「どういう意味かね？」
「光に選ばれし人間、適能者（デュナミスト）…。野原しんのすけより前に、ウルトラマンになった人間がもう一人いたという話を聞いた事があります。
その銀色の巨人はザ・ネクストと呼ばれ、特務機関により厳重な監視下に置かれた。
そしてザ・ネクストに変身した男性は元空自のパイロットであり、正体不明の赤い発光体と遭遇した事により光の力を得たと…。」
「そのデータは既に消去済みだ！」
東郷は突然声を荒げて話を遮った、松永管理官は表情を変えずに続けた。
「忘却の海…レーテですか？」
少し間を置き、東郷は冷静さを装って話をした。
「一つ忠告するが、来訪者に関する情報はトップシークレットだ。
迂闊に口にするべきものじゃない！」
そう言い残して部屋を出て行った東郷を見送り、松永管理官は一人

呟いた。
「始まりの一つなのですよ、あの出来事は…。私にとってもね…。」
その頃、遊園地では昼になり4人はレストランの仕事に入っていた。
「作業員3名が死亡、うち一人が軽傷を負った
工事現場での陥没事故について、事故調査委員会の見解は…。」
レストランに設置されたTVで流れている事故のニュースを見て二
人の女性客が話す。
「ねぇ、もしかして怪物バンニップがまた出てきたんじゃない？」
「ただの事故よ事故。そんな怪物いるわけないじゃない。」
少し不安そうに呟く女性と冷静に答える女性。
そこにジュースを持ってきたしんのすけが割り込む。
「何々？　怪物バンニップって？」
「え？　えっと、バンニップっていうのは人間を喰っちゃう怪物の
事だよ。」
「人間を…喰う？」
（もしかして…、ビースト…？）
しんのすけが心の中で呟く。
「うん。一ヶ月くらい前まで、原因不明の爆発とか火事とか事故と
か多かったじゃない。
あれって本当は怪物バンニップが人間を喰っているんだって。」
真剣に話す女性を見て、もう一人の女性が呆れたように答える。
「ただの噂よ。この子、こういう噂とか何でもかんでも信じちゃう
タチなの。
この前も5年位前に新宿の地下に化け物がいたなんて噂を信じてた
し。」
「いるんだもん！　ネットにそう書いてあったんだから！」
「あのね…。」
信じていない女性客が再び口を開こうとすると、そこに
「しかも怪物バンニップは一つ目の鳥ってのを連れていて…、

バンニップが人間を喰うところを見た人間は…、一つ目の鳥に記憶を消されてしまうんだ…。」

と低く、ゆっくりとした声が聞こえ、しんのすけが見るとボーが来ていて話題に加わっていた。

信じている女性客が話を続ける。

「実際、変な事故の生存者って、記憶を無くしている人が多いんだって…。」

それらの話を聞いたしんのすけは顔を曇らせ、ＴＶで流れている事故のニュースを見る。

（もしかして、本当にビーストの仕業…？　でも、あの戦いで溝呂木を倒したんだから、

もうでかいビーストは出てこないはず…。じゃあ、ただの陥没事故かな…？　でも…。）

「信じないの！　一瞬で！」

その時、横からネネが割り込んできて、肩を叩く。

「え？　ウソ？」

「本当だもん！　こいつ信じてない！」

「こいつとは何よ！？」

信じている女性客に“こいつ”と呼ばれたことにネネが小さいウサギのぬいぐるみを取り出すが、

しんのすけはそんなネネを制して、信じている女性客に笑顔で応対した。

その後、仕事が一息ついたしんのすけがレストランの中に入ると、ＴＶの午後のワイドショーが始まっていた。

「ここが、昨日の陥没事故で３人の方が亡くなった起こった現場です。

既に事故の処理も終わった模様ですが、現場は立ち入り禁止になったままの状態です。」

（やっぱ、何か気になるゾ…。）

ＴＶのニュースに映し出される陥没事故が起きたという現場を見たしんのすけは
その日の仕事が終わると、すぐさま現場に向かった。
夕焼けの下、冷たい風が吹き抜ける中、辺りにボロボロになったフェンスの音が響く。
しんのすけはそんな現場一帯を見渡し、地面に落ちていた笑顔の家族の写真を手に取る。
近くには被害にあった作業員達に向けて手向けられたと思われる花束が置いてあり、
しんのすけはそれらを見て悔しげに唇を噛む。
ふと、しんのすけはポケットに手を入れるも、そこにエボルトラスターはない。
「もう少し…、サービス利かせてくれても良かったのに…。」
少し切ない感じで呟くしんのすけ。
そんなしんのすけを影から見ている者がいた。
「あいつは…！」
「三沢君。」
大原リーダーに呼ばれ、その場を離れた三沢は大原リーダーに報告した。
「大原リーダー、野原しんのすけが今…！」
報告を受けて驚く大原リーダーは
三沢としんのすけがいた場所に向かうが、そこには既に誰もいなかった。
「クソッ、遅かったか！」
悔しげに叫ぶ三沢に対して、大原リーダーは安堵したかのように呟いた。
「良かった…。無事だったのね…、しんちゃん…。」

一方、フォートレスフリーダムのＣＩＣでは、
イラストレーターがパソコンの画面から目を離し、一息つくと、

デスクの中に隠してあった、測定器のようなものを取り出してそれを腕につけた。
「マイナス…1．05…。」
測定器が示した数値を見たイラストレーターは深いため息を吐き、頭を抱える。
その時、パソコンの画面にビースト振動波が表示された。
すぐさまイラストレーターは指示を送る。
「エリア9、ポイント81にビースト振動波確認。ナイトレイダーにスクランブル要請。」
それと同時に、コマンドルームにスクランブルのサイレンが鳴り響いた。
「各員スタンバイ！」
和倉隊長の指示が飛び、ナイトレイダーは出撃準備を始め、やがてフォートレスフリーダムから4機のチェスターが発進した。
一方、イラストレーターは甲殻類型ビースト・グランテラの分析を始めていた。
「今までの巨大ビーストは溝呂木の力が絡んでいたけど今は違う…。何者の力も借りず、ビーストは自力で進化したんだ…巨大な姿に…。」

光の水の中におぼろげな姿で存在する青い巨人。
ジャングルの中にある遺跡とそこに聳える巨大な塔。
その深奥の回廊に存在する光の石柩…。
「！？　今のって…！」
ハッとして、しんのすけは家の近くの河原の土手で起き上がった。
川を流れる水の音を近くの鉄橋を通り過ぎる一両の電車が掻き消す。
バイトの帰り道。近くの道にマウンテンバイクを止めて、しんのすけはこの河原で寝転んでいた。
「今の夢…、もしかして…。」
しんのすけの脳裏に今さっき見た夢がフラッシュバックする。

そして、事故現場で見た笑顔の家族の写真。作業員達に向けて手向けられた花束。
それらが思い浮かんだ後、しんのすけは何かを思い立ったかのように、
あいから貰った翼の生えたぶりぶりざえもんを取り出し、見つめて呟いた。
「もし…。今の夢が…間違いじゃないんなら…。オラを…オラを呼んでる…。」
そう呟くと、しんのすけは何かを決意して立ち上がり、一つ深呼吸をした。
それと同時に辺りに一陣の風が吹き渡る。その風を全身に受けながらしんのすけは叫んだ。
「もし…、あの夢が間違いじゃないんなら…、
ウルトラマン！　オラは…オラはもう一度光が欲しい…！
もうこれ以上…誰かと誰かの絆を断ち切らせないために！！」
その時、流れる川の水が止まり、辺りを吹き抜ける風、鉄橋を走る電車も止まった。
そして、その言葉に応えるかのようにしんのすけの目の前に
膨大な光と共に光の石柩・ストーンフリューゲルが出現。
しんのすけはそれを見ると迷わずストーンフリューゲルに手を触れ、
それと同時に膨大な光がしんのすけの周りを包み込んでいく。
そして、自分の周りを包む膨大な光を見てしんのすけは宣言した。
「ウルトラマン！　オラはもう一度…戦いたい…！」
それと同時にしんのすけの体が光に包まれ、
エボルトラスターが現れ、それを掴み取ったしんのすけは光となって飛び立った。

一方、ナイトレイダーはグランテラと戦っていたが、
チェスターの攻撃はグランテラの硬い装甲の前に通じなかった。
その時、頭上に眩い光が見えた。

「あれは…！」
グランテラが両手にエネルギーを溜めて火球を撃ち出そうとするが、上空の光から光弾が撃ち込まれて火球は大爆発を起こした。
光の水の輪を抜け、銀色の巨人・ウルトラマンが砂塵を舞い上げて再び地上に光臨した。
「しんのすけ君…。帰ってきたのか…！」
和倉隊長が呟く。しかし、イラストレーターは冷静に答えた。
「分かっていたよ、しんのすけ…。お前は必ず戻ってくるって…。」
ウルトラマンは上空を飛ぶチェスターを見た後、
銀色のアンファンスからしんのすけの心を表すかのような
青い姿のジュネッスブルーへとスタイルチェンジ、グランテラに向けて力強く構えを取った。
ＣＩＣからそれを見ていたイラストレーターは呟いた。
「第三幕の扉が開かれた…。」
『オラは再び光を得て、ウルトラマンとして戦うことを選んだ。
でも、オラはもう忘れたりしない…。オラには一緒に戦う仲間が、
オラのことを想ってくれている人達がいる…。
その人達との絆がある限り…オラは負けたりしない…！』…野原しんのすけ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２３　予兆　－プロフェシー－（後書き）

連載再開。遂に“第二部”に突入しました。
“第二部”ではしんのすけがジュネッスブルー、この小説でのしんのすけの
真のジュネッス形態になったことに合わせて、
小説の背景色を従来の無色から青に変更しました。
（パソコン版のみ。）
今回の話ではマサオ以外のしんのすけの友達、
そして、オリジナルキャラである高原明日香を登場させたけど、適能者（デュナミスト）交代がなく、
後半への伏線としてしんのすけが一度光を失ったものの、
再び光を手にするという展開にしたかったので少し強引な部分が生じてしまいました。
（ペンシルバルーンの動物は「世界名作劇場」シリーズに出てくる動物達と
「仮面ライダーオーズ」のコンボの組み合わせの動物からいくつか選びました。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２４　再会　ーリユニオンー

『僕は、いつも傍観者じゃないといけない。決して当事者になってはいけない。
それが…今の僕の使命にとって、とても大切な事だから…。』
「分かっていたよ、しんのすけ。お前は必ず戻ってくるって…。」
銀色のアンファンスから青色のジュネッスブルーにスタイルチェンジしたウルトラマンを目撃し、イラストレーターは冷静に答えた。
ウルトラマンはフェーズシフトウェーブを発し、水のように波紋を発する光で位相を褶曲、メタフィールドを展開した。
それを見た和倉隊長が指示を飛ばす。
「各機、ハイパーストライク・フォーメーション！　追うぞ！」
「了解！」
ナイトレイダーがメタフィールドに入ると、既にウルトラマンとグランテラの戦いが始まっていた。
グランテラが頭部に付いている尾部を取り外して攻撃してくるが、ウルトラマンは素早い動きで攻撃をかわしつつ、パーティクル・フェザーを連射し、グランテラにダメージを与えた後、
飛び蹴りを浴びせ、戦いの主導権を握っていた。
「速い…。以前よりも確実に強くなっている…。」
ウルトラマンの戦いぶりを見て、イラストレーターは驚いた。
攻撃を受けて苛立つグランテラは、尾部の先端の穴から強力な火球を発射。
それを見たウルトラマンは右腕のアローアームドネクサスから光の剣・シュトロームソードを展開した。
５歳の頃、武蔵野剣太のもとで剣道を習い、絶対に強い剣士になる

と言われたしんのすけ。
それから月日が経った今でも、その腕は全く鈍っておらず、
グランテラの放つ強力火球を次々となぎ払い、グランテラに近づいていった。
しかし、休む事無く発し続けられる強力火球の前に段々とさばききれなくなり、
遂にまともに受けて吹き飛ばされてしまった。
それを見た和倉隊長は平木隊員に指示を出した。
「平木！　ウルティメイトバニッシャーだ！」
「了解！」
和倉隊長の指示を受け、平木隊員がウルティメイトバニッシャーの発射準備を進める。
「さぁて…、行くわよ！」
準備が完了し、気合を入れる平木隊員。
「ウルティメイトバニッシャーの破壊力なら一撃だ。決めろよ。」
と石堀隊員も檄(げき)を飛ばす。そして、
「任せなさい！　ウルティメイトバニッシャー、シュート！！」
しかし、平木隊員がトリガーを引いてもウルティメイトバニッシャーは発射されない。
何度トリガーを引いても無駄であった。
「え？　ちょ、何なの？　これぇ！？」
「どうした？」
「撃てないのよ！　ウルティメイトバニッシャーが！」
「何だって！？」
平木隊員の言葉に驚くナイトレイダー。
その隙を見て、グランテラはハイパーストライクチェスターに強力火球の狙いをつけた。
「ヤバッ！！」
ハイパーストライクチェスターは必死に逃げるが、
グランテラの狙いは外れず、遂に強力火球が放たれる。

その時、ウルトラマンが火球の前に立ちふさがり、
シュトロームソードで火球をなぎ払って、ハイパーストライクチェスターを守った。
そして、ウルトラマンはグランテラに向けてクロスレイ・シュトロームを撃とうとするが、
その時、メタフィールドの上空に巨大な闇が現れ、
その中から白い翼を有した存在が舞い降りてきた。
驚くウルトラマン、ナイトレイダー。
「天使…？」
呟く平木隊員。
「これは…。」
イラストレーターも事態に驚きつつも、解析を始める。
舞い降りた白い翼を有した存在は笑みを浮かべながら、
背中の白い羽根を辺りに振り撒き、自らとグランテラを覆い尽くすと、
再び上空の闇へと戻っていき、やがて闇もろとも消えてしまった。
それを見ながらも、戦い終わったウルトラマンはメタフィールドを解除、
光となって消え、辺りは元の普通の世界へと戻った。

「終わったか…。」
一息吐いて和倉隊長が呟く。
「全く、どういう事よ！　これ！　整備の奴ら、ちゃんと撃てるようにしとけっての！」
平木隊員が不満を爆発させる。
「ウルティメイトバニッシャーが撃てなかった…。単なる整備不良なのか、それとも…。」
石堀隊員が呟いたその時、イラストレーターからの通信が入る。
「ビースト、ウルトラマン、共にロストしたのでナイトレイダーは帰還してください。」

「待ってください。ＣＩＣ、ウルティメイトバニッシャーが撃てなくなった原因については？」
「現在、その原因を調査中です。一旦、まずは基地に帰還してください。」
「…分かりました。帰還する。」
しかし、イラストレーターと和倉隊長の帰還命令を無視して、
西条副隊長はδを着陸させ、森の中に消えてしまった。
「おい！　西条！　何をしている！　早く帰還しろ！」
和倉隊長が注意するが、西条副隊長からの返事は無かった。
「近くにいるはず…。」
森の中、しんのすけを探す西条副隊長は木々の向こう側で走っているしんのすけを見つけた。
朝。そのまましんのすけは遊園地の楽屋にある
自分の部屋に入っていき、西条副隊長も後を追った。
西条副隊長は少し部屋に入るのを躊躇するが、
やがて意を決して部屋に入ると、
その中ではしんのすけが誰かに携帯電話で電話をしていた。
「うん。だから、今日はこのままバイトに入るから。うん。じゃ、そういうことで～。」
電話をし終えたしんのすけは
携帯電話をしまおうとするが、その時、訪問者の存在に気づいた。
「ん？　おぉ！　西条副隊長！　お久しぶり！」
「え、えぇ…。帰ってきたのね…しんのすけ君…。」
「ほい。って、西条副隊長がここに来たってことは…、
ナイトレイダー辞めて、泥棒に鞍替えでもしたの？」
「えぇ。…って、そんなわけないでしょう！」
それを聞いたしんのすけが笑顔で答える。
「ナイスツッコミ！」
それを見て、西条副隊長は少し呆れたようなため息を吐くが、
その中には彼が無事だったことへの安堵も含まれているようだった。

一方、しんのすけは話を続ける。
「あとオラ、今この遊園地のアルバイトをしてるんだ。クマさんカステラも焼くし、ショーにも出るし、あと、あんなのも作るゾ。
今、動物以外の風船も作れるかどうか挑戦中～。」
しんのすけが指差す方を見ると、テーブルの上にペンシルバルーンで作られた、タカ、トラ、バッタ、クジャク、コンドル、シャチ、ウナギ、タコが置かれていた。
「へぇ…。」
感心しながらそれを見つめる西条副隊長にしんのすけは思い立ってあることを尋ねた。
「…そういえば、ここに入ったときに明日香さんに誰だって聞かれなかった?」
「…聞かれた…わ。」
それを聞いたしんのすけがイタズラっぽい笑みを浮かべて西条副隊長に近づいてくる。
「ひょっとして…、『姉です』とかって言った?」
「え…、い、言わないわよ! そんな…。」
しんのすけの言葉を慌てて否定しつつも、西条副隊長は珍しくも明らかに動揺していた。
それを見たしんのすけがさらに西条副隊長に近づいてくる。
「じゃあ、なんてったの?」
「……。」
「……。」
流れる沈黙。やがて西条副隊長がポツリと呟いた。
「…『従姉弟』…。」
西条副隊長も帰還したコマンドルーム。和倉隊長は西条副隊長の方を見た。
「西条、以後、勝手な行動は慎め。」

「…はい。」
「管理官。ウルティメイトバニッシャーが撃てなかった原因については何か？」
石堀隊員の質問に松永管理官の顔が強張る。
「残念ながら…原因不明です。ですが一刻も早く究明しなければなりません。
ウルティメイトバニッシャーは対ビースト戦における我々の切り札ですから。」
松永管理官は唇を一回噛み締めてコマンドルームを後にした。

ＣＩＣでは、イラストレーターが先の戦闘で出現したメタフィールドの上空に現れた闇と白い翼を有した存在、そして、ウルティメイトバニッシャーが撃てなくなった原因について調べていた。
その時、イラストレーターの背後から静かだがはっきりとした少女の声が聞こえてきた。
「トオル。」
その声を聞き、風間トオルが振り返ると、そこには一人の少女がいた。
「恵…。」
風間が驚いたように呟くと、その少女・春野恵は嬉しそうな表情で答えた。
「おはよう。久しぶりだね…トオル。」
「あ、あぁ…。久しぶり…恵…。」
風間は再会した恵の姿を見る。
腰まで伸びた長い髪と、細く長い手足、そして、真っ直ぐ濁りのない大きな瞳。
数年ぶりに見たであろう彼女の成長した姿に風間は少し感慨深いものを感じた。
一方、恵はＣＩＣ内部を興味深そうに見ている。

「へぇ…、ＣＩＣってこんな感じなんだ…。
ここに来る前からどんな感じなんだろうって思って想像していたの。
そしたら、その通りでなんだか嬉しいな～。」
恵が嬉しそうに話すのを見て、風間は少しため息を吐いた。
「…相変わらず空想することが好きだなぁ…。」
「うん。だって自分の想像が当たった時とか、何か嬉しくない？」
「まぁ…ね。それよりも恵、どうしてここに？」
風間の問いに恵が笑顔で答える。
「ほら、私って小説家になるのが夢って言ってたでしょ？
それで、今ＳＦ小説を書いてるんだけど、
その小説に出てくる秘密組織の司令室のモデルにＣＩＣを使わせてもらおうって思って！」
その恵の言葉を聞いた風間が疲れたようなため息を吐く。
「やれやれ…。」

夕方。遊園地ではしんのすけが仕事をしていた。
その時、背後に視線を感じて振り向くと、
そこには遊園地に不釣合いな異様な格好をした監視者がいた。
「あいつは…！」
しんのすけは急いでその監視者がいた場所に向かうが、既にそこには誰もいなかった。
「野原しんのすけ。」
その時、いきなり背後から声がかけられ、
しんのすけが振り向くとそこには声の主、監視者がいた。
「あんた…、誰なんだ？　どうして、オラを…。」
しかし、監視者はその問いに答えず、別のことを口にした。
「光に選ばれし人間…。適能者（デュナミスト）…。
だが、君はかつて光を失ったにも関わらず、自分の意思で再び力を手にした…。」
「え？」

思いもよらないことを言われたしんのすけは少し戸惑う。
「何故…、君に光は再び力を与えた？」
監視者はそう言うと、突如しんのすけの視界から姿を消した。
「！？」
驚いたしんのすけは辺りを探すが、監視者は見つからなかった。
「あいつ…、何者なんだろう…？」

その頃、コマンドルームでは先のウルトラマンとグランテラの戦いの分析が行われていた。
映像をバックに風間が説明を始める。
「問題はコードネーム・グランテラが消失時に現れた、この闇です。分析の結果、この闇はダークフィールドの一種であることが分かりました。」
「ダークフィールド？」
「待ってください。ダークフィールドを発生させるのは闇の巨人、つまりファウストやメフィストです。奴らは既にウルトラマンに倒されました。」
石堀隊員の言葉を聞き、風間は説明を始めた。
「はい。皆さんご存知のようにビーストは宇宙から地球に降り注いでいる
Xニュートリノが地球の生物に影響を及ぼすことで誕生しています。ダークフィールドはビーストがエネルギー源とするX粒子を増大させる働きを持っていますが、
今回のものはマイナスの褶曲率が今までとは全く異なり、X粒子を大幅に増大させる上、
ビーストを強化変身させるジェネレーターの効果も持っていることが分かりました。」
イラストレーターの話を聞いて和倉隊長の顔が曇る。
「新たなダークフィールド…。溝呂木に次ぐ、新たな敵が現れたという事か…。」

和倉隊長の言葉に西条副隊長の顔が少し険しくなった。
しばし沈黙が辺りを覆う。そんな中、平木隊員が口を開いた。
「じゃあ、あの白い翼を持った…、天使のような何か…。
あれが、このダークフィールドを展開した奴ってこと？」
平木隊員の話を聞き、風間が答える。
「いえ、この白い翼を持った存在は出現した闇の中から現れたことから、
このダークフィールドはこの白い翼を持った存在が展開したものとは考えにくい。
すなわち、闇の見えざる手・アンノウンハンドが、
外部から干渉して作り出したものと考えられます。」
「では、あの白い翼を有した存在は？」
西条副隊長の言葉に風間は白い翼を有した存在の映像を見て呟いた。
「おそらく、アンノウンハンドが遣わした、新たな闇の巨人でしょう。」
風間の言葉を聞いて、石堀隊員が口を開いた。
「闇の天使か…。堕天使…ルシフェル…。」
「堕天使…ルシフェル…。」
石堀隊員の命名したルシフェルという名前を聞いた皆は無意識にその名前を口にした。
一方、その風間はナイトレイダーの方を見ると今後の指示を出した。
「アンノウンハンドが展開した、新たなダークフィールドをダークフィールドＧ（Ｇｅｎｅｒａｔｅｒ）と呼称しますが、
今後もそれとルシフェルについて分析を進めていきたいと思います。
石堀隊員は、グランテラの分析を急いでください。では本日はこれで。」
そう言うと、風間はコマンドルームから姿を消した。

ミーティングが終わった後、ＣＩＣでは
風間が例の測定器を腕につけ、数値を見ていた。

「マイナス、２．０５…。」
測定器が示した数値を見た風間は
深いため息を吐き、頭を抱え、再びパソコン画面に目を向けた。
そこにはグループＰ．Ｐ．という名のデータが表示されていた。
画面を見る風間の瞳には諦め、憂い、悲しみ、絶望といった様々な
感情が宿っていた。
『僕に与えられたこの使命に大切なのは傍観者であること…。
でも、本当は僕自身が既に当事者であることを
誰にも知られてはいけなかった…。特に、彼には…。』…風間トオル

一方、野原家の２階のベランダではその彼、しんのすけが夜空を見
つめていた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２４　再会　－リユニオン－（後書き）

オリジナルキャラの二人目、春野恵登場。
名前については「ウルトラマンコスモス」の春野ムサシの「春野」と、
バンダイナムコゲームスの「ＴＨＥ　ＩＤＯＬＭ@ＳＴＥＲ」の登場人物の一人、
萩原雪歩の初期設定時の名前だった「恵」から名づけました。
（語呂的に丁度良かったからね。）
そして、敵キャラでは闇の見えざる手・アンノウンハンドとこの小説での第三の闇の巨人であり、
原作の「ネクサス」で未登場に終わった、ダークルシフェルを登場させました。
（イメージ的には「ウルトラマンガイア」の根源破滅天使ゾグの第一形態のような感じです。
当然身長や体重はウルトラマンと同じくらいですけどｗ）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２５　決戦　―フェアウェル―

翌日の遊園地。しんのすけが仕事をしているとマサオがやって来た。
「お、マサオ君！　どうだった？　新しいバイトの面接。
『チロル』とかってケーキ屋だったよね。」
「元気がないからダメだってさ…。」
くらーい顔で更衣室に入っていくマサオをしんのすけは肩をポンポンと叩いて慰めた。
「気にしなくていいゾ。マサオ君にはこの遊園地があるんだし。」
そしてしんのすけ達のバイト時間が終わり、代わりにマサオのバイト時間が始まった。
「マサオ君。似合ってないゾ！　涙なんて！」
その言葉を聞いて、ひきつりながら笑顔を作るマサオを見て、しんのすけは笑顔で遊園地内の舞台に向かっていった。
すると、そこには私服姿の西条副隊長がいた。

しんのすけは西条副隊長と一緒に舞台に上がった。
今はショーの時間ではなく、二人の他に人はいない。
「ところで、どうして私をここに呼んだの？」
西条副隊長の問いにしんのすけの表情が曇る。
「…調べてほしいんだ、イラストレーターのことを。」
「イラストレーターのことを？」
西条副隊長がしんのすけに問い、しんのすけはそれに頷いて答える。
「風間君は…オラの幼稚園の頃からの大親友なんだ。それで…。」
西条副隊長はしんのすけとイラストレーターが友人であったことに少し驚くが、しんのすけはそんな西条副隊長を見ながら話し続けた。
「どうして風間君がナイトレイダーに指示を与えるイラストレーターをしているのか…、
風間君に何があったのか…、オラ、どうしてもそれが知りたいんだ

…。」

「しんのすけ君…。」

話し終えて、舞台からの景色を見るしんのすけの顔はどこか、風間を心配しているようだった。

「やっぱり、これはグランテラの気門なんだ…。」

その後のコマンドルーム。石堀隊員がパソコンを操作しながら呟いた。

「気門？」

西条副隊長の疑問に石堀隊員がグランテラの映像を画面に表示した。

「見てください、この尾部のものと同じ威力のものが…。」

石堀隊員は続いて画面にグランテラの全身を解析した映像を映した。

それを見て、驚く西条副隊長。

「腹部に六つも…。」

「えぇ。このビーストが本気になって、全ての気門から一斉攻撃してきたら手の打ちようがない…。」

石堀隊員の答えを聞き、平木隊員が驚く。

「待ってよ…。じゃあ、この前は本気じゃ無かったってこと!?」

石堀隊員の頷きを受けて、西条副隊長が呟く。

「ビーストは試したのね…、ウルトラマンの新しい能力を…。」

「ビーストが試したのではない。試したのはその背後にいるアンノウンハンドと闇の巨人、ルシフェルだ。」

和倉隊長はそう答えると、画面を見て答えた。

「次は…、本当の戦いになる…。」

和倉隊長のその言葉に、西条副隊長はしんのすけのことを思い浮かべた。

「なるほど…。モニターとかはこんな感じ…。デスクは結構広い…っと。」

ＣＩＣ。風間はパソコンを操作し、

恵はお菓子を食べながらＣＩＣを見回してメモを取っていた。
そんな恵に風間がため息を吐き、椅子を回転させて恵の方を向いて話しかける。
「あのさぁ…。ここにいたって退屈じゃない？　そろそろ帰ったら？」
「ダメダメ。ここのこまかーい部分まで参考にさせてもらうつもりなんだから。
あ、別に私がいるからって気を遣わなくてもいいからね。」
そんな恵に風間がため息を吐く。
「やれやれ…。」
そして、風間はプラスチックのトレイに入った色の薄い食事とプラスチックのスプーンを取り出した。
「あれ？　もしかして…、それがトオルのお昼ご飯？」
「うん。」
風間が恵の質問に答える。
「なんだか、あまりおいしくなさそうね…。アカデミーの食事のほうがまだおいしそう…。」
「味より栄養を重視しているからね。必要なエネルギーが摂取できれば僕はそれでいいんだ。」
「あ、ちょっと待って！　…はい。」
風間がトレイに入った色の薄い食べ物を口に運ぼうとすると恵は慌ててておにぎりを手渡してきた。
「…これは？」
「私が作ったおにぎり。ほら、トオルの仕事ってこんなにハードな仕事だから、
もしかして、いつも味気ないもの食べてるんじゃないかなーって思って作ったの。どう？」
「…いらない。」
風間は少し考えた後おにぎりを押し返すが、恵も再びおにぎりを押し付けてくる。

「でも、もう何年も全く食べてないちゃんとした食べ物を食べたいって思わない？」
「ん…、…まぁ。」
恵の言葉を受けて風間はおにぎりを受け取って口に入れた。
「…しょっぱい。」
おにぎりを口にしてむせる風間。それを見て恵は不安になる。
「え？　ウソ…？」
「本当にしょっぱい。」
恵の問いに風間が顔を歪ませて答え、それを見た恵はため息を吐いた。
「はぁ…、どんな味になるか想像して作ったんだけどな…。」
気を落とす恵を見て、風間の顔に自然と笑みがこぼれた。

「ＴＬＴのデータベースからなら…。」
一方、部屋に帰った西条副隊長はパソコンを使って、
しんのすけから頼まれた風間の事を調べていた。しかし。
『ＡＣＣＥＳＳ　ＤＥＮＩＥＤ　ｇｒｏｕｐＰ．Ｐ．』
「アクセス拒否？　情報が全部シールドされている？」
パソコン画面をじっと見つめる西条副隊長。
「グループＰ．Ｐ．？　…グループＰ．Ｐ．とは何か…。」
『ＣＬＡＳＳＩＦＩＥＤ』
「機密事項…。ロックされてる。
…パスワードがいるのね。グループＰ．Ｐ．って一体…？」

「西条副隊長…、調べてくれてるかな…。」
夕方の遊園地。しんのすけはテーブルを拭きながら、西条副隊長のことを思っていた。
「西条って…、あの従姉弟の人？」
背後から声がして、振り向くとそこには明日香が立っていた。
「え！？　ほ、ほい！　そ、そうだけど…。」

「調べてくれてるかなって…、なんのこと？」
首をかしげる明日香にしんのすけは何とかゴマカそうとする。
「い、いや…、そ、そう！　宿題だゾ、宿題！」
「あ、宿題ね。でも、宿題だったら私に聞けばいいのに…。」
「え、あ…。ちょっと、明日香さんだと聞きにくいかなーって思って…。」
「ふーん…。」
妙に言葉に詰まるしんのすけを明日香は不思議に思うが、あまり気にしないで答えた。
「ま、なるべく自分でやるようにね。案外、勉強にもなるんだから。」
「ほ、ほい！」
立ち去る明日香を見て、しんのすけはホッと一息ついた。

その頃、コマンドルームでは、グランテラに対するミーティングが始まっていた。
「次にビーストが現れても、攻撃ミッションは行いません。」
風間の言葉にナイトレイダーは驚き、和倉隊長は風間に向かって疑問を呈した。
「どういう事ですか？」
「前回の戦いではアンノウンハンドとルシフェルがウルトラマンの新たな能力を試したのだと考えられます。
つまり、今度の戦いでは相手も全力。
アンノウンハンドもダークフィールドGを前面に展開してくるでしょう。
ダークフィールドGがチェスターにどんな影響を与えるか現状では予測不可能です。
対ラフレイア戦の事もありますしね。
このような状況でグランテラと戦い、無事に帰還できる確率は極めて低い…。」

「では戦闘はウルトラマンに任せて、我々はここでじっとしていろと？」
和倉隊長がやや皮肉交じりに尋ねる。
「そうは言っていません。今後の戦闘の為にも
僕らにはデータが必要です。δ機のみ、データの収集に出します。」
それを聞いた西条副隊長が答えた。
「私が出ます。」
西条副隊長を見た風間は和倉隊長の反応を伺った。
和倉隊長は西条副隊長を見ると、風間に向かって静かに頷いた。
それを見た風間が頷いて話す。
「このビーストも夜行性です。西条副隊長は日没前にスタンバイしてください。」
「了解。」
ミーティングが終わり、各自作戦の準備を進める中、
西条副隊長は風間にあることを尋ねた。
「イラストレーター…。グループP．P．って、何かご存知ないですか？」
西条副隊長の言葉を聞いた風間は驚き、表情を変える。
「イラストレーター？」
「…失礼。」
そう言うと、風間のホログラムは西条副隊長の言葉を無視して逃げるように消えてしまった。
「やはり…、何か関係があるのね…。彼と…。」
確信を持った目で西条副隊長は呟いた。

ミーティングが終わった後のＣＩＣ。
風間は西条副隊長がどうしてグループP．P．のことを知っているのかに
思いを馳せ、やがて、ある事に気づいた。
「まさか…、しんのすけが西条副隊長に僕のことを調べてくれって

頼んで…。」
それに気づくと、風間は俯いて頭を抱えた。

そして深夜。ある森の上空に怪しげに光るオーロラがかかった。
その時、ＣＩＣの風間が叫んだ。
「来た！」
野原家。エボルトラスターの明滅を知って、しんのすけが決意の眼差しを上げる。
一方、ビーストを捉えた風間がナイトレイダーに指示を送る。
「エリア８、ポイント１８６にビースト振動波、確認。」
それを聞いて西条副隊長がメットのバイザーを下ろす。
「クロムチェスターδ、テイク・オフ！」
出撃するδ。
オーロラが現れた森では天体観測に来ていた人々の前にグランテラが立ち塞がっていた。
目の前に化け物が現れ、人々は恐怖でその場に立ち尽くしていた。
そこに現場に到着したδがグランテラを攻撃する。
西条副隊長はグランテラから距離をとろうとするが、
グランテラは尾部の気門に強力火球のエネルギーを充填し、δに狙いを定めた。
その時、現場に到着したしんのすけはδの危機を知り、エボルトラスターを取り出した。
「うおおおぉっ！！」
エボルトラスターを天に掲げたしんのすけの体が光に包まれる。
遂に放たれたグランテラの強力火球がδに迫ったその時、
上空から降り立った光がグランテラの強力火球を掻き消し、δを救った。
そして光はそのまま地上に降り立ち、アンファンスの姿となった。
「しんのすけ君…。」
現れたウルトラマンを見て西条副隊長が呟く。

ウルトラマンはすぐさまジュネッスブルーにスタイルチェンジしてメタフィールドを展開するが、
その時、上空にアンノウンハンドの闇が現れ、
光溢れるメタフィールドを漆黒の闇で塗り込めていった。
「ダークフィールドG…発生。」
状況の分析を始める風間。
δはウルトラマンとグランテラを追ってダークフィールドGの中に入っていった。

ダークフィールドGの中。ウルトラマンとグランテラの戦いが繰り広げられる。
パワーで押すグランテラに対し、ウルトラマンはスピードで翻弄していく。
グランテラは尾部の気門から強力火球を次々に放ち、
ウルトラマンはシュトロームソードでそれらをいなしていくが、
連続攻撃の前に遂に吹き飛ばされてしまった。
「アビロックミサイル、ファイア！」
倒されたウルトラマンを見て、西条副隊長はすぐさまグランテラを攻撃した。
「副隊長！？」
西条副隊長が指示を破ってウルトラマンを援護したのを見て、
コマンドルームに残っているナイトレイダーは驚きを隠せなかった。
一方、攻撃を受けたグランテラは腹部の気門を展開、
そこからの強力火球をδ目掛けて放った。
何とかかわしていくδだったが、連続攻撃の前に遂に受けてしまう。
「だから撃つなって言われてたじゃん！」
それを見て平木隊員が突っ込む。
「ハイパージェネレーター損傷！　クアドラブラスター発射不能！」
どんどん高度を下げていくδ。
その先にはウルトラマンとグランテラが戦っていた。

「ブラストパワーカット！　回避します。」
何とか避けるδだったが、グランテラの格好の標的にされる。
グランテラがとどめの強力火球を撃とうとするが、
ウルトラマンは後ろからクロスレイ・シュトロームを放ち、
背中に受けたグランテラは全身から火花を散らして倒れた。

倒れたグランテラを見下ろすウルトラマンとδ。
その時、アンノウンハンドの闇を含んだルシフェルの白い羽根が降り注ぎ、
それを吸収したことによって、グランテラは復活した。
グランテラのデータを見て石堀隊員が叫ぶ。
「ビースト振動波上昇！　このフィールドがビーストのエネルギー値を高めている…。」
「何ですって！？」
「ダークフィールドGがビーストに力を与えているんだ！」
立ち上がったグランテラはより強力になったパワーでウルトラマンを圧倒。
西条副隊長とコマンドルームに残っていたナイトレイダーが心配して見る中、
ウルトラマンのコアゲージが点滅を始めた。
苦戦を強いられるウルトラマンを見る風間の顔に苦痛が浮かぶ。
「しんのすけ…。」
左手中指の「Ｐｙｒ」と刻印された銀の指輪に目をやり、風間は再び画面に目を向けた。
「しんのすけ…。頼む、僕のことには…。」

グランテラを白い羽根が覆い、更なる力が与えられていった。
尾部でウルトラマンを弾き飛ばし、距離をとった後、
グランテラは腹部にある六つの気門を開いてウルトラマンに狙いをつけた。

焦るウルトラマンだったがその時、右腕にあるアローアームドネクサスが目に入り、
息を大きく吸い、気合を入れるとシュトロームソードを展開、上空に飛び立った。
「無茶な！」
それを見てさすがの西条副隊長も叫ぶ。
それと同時にグランテラは腹部にある六つの気門から強力火球を次々に発射。
ウルトラマンは迫るグランテラの火球をダークフィールドG内を縦横無尽に飛び回り、シュトロームソードで次々と打ち払っていく。
そんなウルトラマンに対し、グランテラは全ての発射口から無数の強力火球を撃ち、
全方位からの攻撃で、ウルトラマンを爆発の中に沈めた。
グランテラは勝利に喜ぶが、
その時、爆炎をシュトロームソードで切り裂き、中から無傷の状態でウルトラマンが現れた。
驚くグランテラを見下ろしながら、ウルトラマンは胸にアローアームドネクサスを当て、
エナジーコアから現れた弓状の光はアローアームドネクサスに宿った。
グランテラはウルトラマンに対し、再び強力火球の狙いをつけるが、ウルトラマンはその前に終焉の地で見せた光の弓・アローレイ・シュトロームを放った。
強力な光の弓が高速でグランテラを貫き、背後にある岩を真っ二つに裂いた。
そしてグランテラはその場に倒れると爆発を起こし、光の粒となって消えた。
そして、アンノウンハンドの闇は消え、
戦いに勝利したウルトラマンはゆっくりと地面に降り立ち、

アローアームドネクサスに宿った光の弓をエナジーコアに当てると、光の弓はエナジーコアに還っていった。
ウルトラマンはメタフィールドを解除すると、そのまま光となって消えた。

戦い終わり、しんのすけはδがフォートレスフリーダムに帰るのを見届ける。
一方、西条副隊長搭乗のδは朝日に照らされながらフォートレスフリーダムに帰り、
恵はフォートレスフリーダムの外観で空を見上げていた。
『オラは…この時、既に風間君が…、
一人で過酷な運命と向き合っていたなんて…思ってもいなかった…。
オラは…風間君の一番大きな秘密を…、まだ知らなかったんだ…。』
…野原しんのすけ

そして、当事者の風間はパソコン画面を見ながら手を組み、俯いていた。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２５　決戦　―フェアウェル―（後書き）

グランテラとの決着編。しんのすけは剣道の経験があるので、今回の戦闘シーンにはシュトロームソードを有効に使った戦法を入れました。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２６　幽声　－コーリング－

ある夜、山中で若者達がキャンプをしていると、辺りを謎の声が響き渡った。
耳を澄まして周りを見回すと、山の向こうから巨大な白い蜘蛛がヌッとこちらを睨んでいた。
その蜘蛛型ビースト・バンピーラはキリキリと脳に突き刺さるような声を発すると
頭を抱えて倒れた若者達の中から一人を選び、口から糸を出して絡め捕った。
霧が辺りを包む中、他の若者達は皆、気を失ったままだった。

「それで、朝、霧が晴れて起きたら…皆…、
河原で寝ているんだ…。何が起きたか誰も覚えていない…。」
遊園地。ボーが一人の女の子に怪談話を聞かせていた。
「何も覚えていない…。記憶が…消えているってこと？」
「うん…。それで…、いなくなった人も…結局、
自分で山に入っちゃったんだろうって事になったんだ…。でも…、
本当はそれは…。」
ボーは声のトーンを落としてゆっくりと喋り出し、その長い髪の女の子も身を乗り出して聞く。
そこに、
「バンニップの仕業だったんでしょ？」
とジュースを持って来てしんのすけが話に割り込んできた。
「あ！　もう…。しんちゃん。またネタバレした…。」
興を削がれたボーが不満を漏らし、しんのすけも呆れながら注意する。
「ボーちゃん。注文取りに行ってからもう４分経ってるゾ。
こういう話になるといっつもこうなんだから…。」

しんのすけが手書きではない自分の本物の腕時計を見て呟く。
「え…、まぁ…。あ、この娘、春野恵ちゃんって言うんだって…。なんでも小説家になりたくて今書いてる小説の、アイデアを探してるんだって…。だから、僕のとっておきの話を…。」
とボーは笑顔で答える。
「ふーん…。」
ポーの話に相槌を打ち、しんのすけがちらりと恵の方を見た時、後ろから明日香の声がかかる。
「二人とも、そろそろ仕事再開してくれないかな～？」
「はーい。」
ボーが答えて自分仕事場に行く中、しんのすけも自分の仕事場に行こうとするが、
「あ、ちょっと…。」
「お？」
恵から呼び止められる。
「えっと…、野原しんのすけ君…だよね。」
それを聞いてしんのすけは驚く。
「え!?　どうしてオラの名前を？　もしかして…、ストーカー…？」
「違うって！　トオルから聞いたのよ。あなたのこと。」
「トオル…。ってことは風間君の友達かなんか？」
「うん。私、春野恵。よろしく♪」
恵は笑顔で改めて自己紹介をした。

ある山村。裏山の神社に通じるトンネル。
その入り口付近に一人の少女が寝そべっていた。
その少女、河村愛は目を閉じ、耳を地面に付けて何かを感じとろうとしていた。
「愛姉ちゃーん！　愛姉ちゃーん!!」

そこに男の子の声が聞こえてきて、
愛は目を開いて、ゆっくりと起き上がった。
その男の子、愛の弟である河村薫が駆けて来る。
「愛姉ちゃん、いいかげん、自分の名前覚えてよ。」
不満顔の薫に対し、愛は無表情で答える。
「呼んでるよ、薫。」
「またぁ？　学校終わったら真っ直ぐ家に帰らないと、おばさん、
また心配するよ。」
薫は道路に放って置かれた愛のランドセルを拾い、
中から一枚の画用紙を取り出した。
そこにはおどろおどろした世界の中で対峙する
銀の巨人と黒い巨人が描かれていた。
「またこれ？　見た事あるもの描けって言われたんでしょ？」
「…見たもん。」
愛は少し拗ねたように弟の言葉を否定し、
そんな姉に薫は次の言葉が出てこなかった。
そこに自転車のベルを鳴らして愛と薫の引き取り先の子供で、
しんのすけと同じふたば幼稚園の卒園生、
バラ組のチーターと呼ばれた、二人の義理の兄である高校生の河村
やすおがやって来た。
「愛ちゃん、薫君！」
やすおの呼びかけに薫は答えたが、愛はほとんど無反応だった。
「こんなとこで何してんだ？」
やすおの質問に薫は愛の方を見てやや呆れながら答えた。
「愛姉ちゃん、パパとママの声が聞こえるんだって。
パパとママは事故で死んじゃったっていくら言っても聞かないんだ。
」
それを聞いたやすおは悲しそうな表情を浮かべて答える。
「仕方ねぇよ、記憶が無いんだから…。」
「僕も覚えていないけど、愛姉ちゃん、しつこいんだよ。」

そう言って薫は愛を睨み、愛も苛立ちを含んだ目で薫を見返して答えた。
「事故じゃないもん…。パパとママは化け物になっちゃったの。」
「愛ちゃん…。」
心配するやすおの前、愛と薫はそのまま口を聞かず、家に帰って行った。

「ここ一ヶ月の間に7件。キャンプ場で人が失踪するという事件が起きている。」
その頃、コマンドルームでは和倉隊長が最近起きている連続失踪事件について説明していた。
「ビーストの可能性が高いが…生き残った人々は皆、襲われた時の記憶が無く、ビーストであるという確証が無い。」
西条副隊長が質問を挿む。
「記憶が…無いんですか？」
「そうだ…。」
そこに平木隊員も入り込む。
「でもビーストなら振動波をキャッチされるはずよね？」
石堀隊員が頷くと、そこに風間のホログラムが現れた。
「事件現場はいずれも深い霧に包まれていました。衛星からの観測データによると、
事件現場から半径５００ｍに渡って発生していた霧は自然現象とは考えられないようです。
よって、この霧がビースト振動波を妨害していた可能性があります。」
「霧の中に隠れているビーストか…。」
西条副隊長が呟く中、風間は説明を続けた。
「さらに…、これもまだ確証が持てませんけど…。
襲われた人々が記憶を失くす前、彼らを誘うような呼び声を聞いたという証言があります。」

「呼び声？」
平木隊員の問いかけに今まで黙っていた石堀隊員が口を開いた。
「捕食の為に人を誘う音波を発しているのかもな。」
「捕食…。ビーストが人間を…誘っている？」

その日の夜、薫が寝ている横で愛が机に向かって絵を描き続ける。
ピンクの醜悪なネズミ、銃を構える少年、
子供を捕える親、戦う銀と黒の巨人、姉を助けようとする弟…。
絵を描きながら愛は忌まわしいその時を思い返した。
そして、鏡を手に取り、そこに写る自分の顔を見て語りかける。
「愛…。愛…。あなたは愛よ…。愛よ…。」
繰り返し、鏡の中の自分に話しかける愛。
その時、家の外から声が響いてきた。
愛はカーテンを開け、窓を開け、声の響いてきた方、裏山を見て呟いた。
「パパ…、ママ…。」
冷たい風が家の中に入り込み、愛の描いた絵が部屋の中を飛び散る。
そして、その中の一枚、黒い巨人の絵が床に落ちた。

一方、村の入り口にかかる橋に一人の男、溝呂木眞也が現れた。
傷付いた体を引きずり、溝呂木は何かに呼び寄せられるように裏山に向かった。
「俺を…呼んでいるのか…？」

「溝呂木眞也が生きていた？」
翌朝のフォートレスフリーダム。大原リーダーからの報告に、さすがの松永管理官も驚きを隠せなかった。
「はい…。地元警察が職務質問しようとしたところを振り切って逃げたそうです。
問題は彼が現れたのが…ナイトレイダーのミッションエリアのすぐ

側だという事です。」
「もしかして…山に現れたビーストは溝呂木の仕業…。」
「それは違うと思いますよ。」
大原リーダーと松永管理官の前に風間が現れた。
「彼が力を使った気配は感じられませんでした。
ひょっとすると…、彼は力を失っているのかもしれない。」
「溝呂木が…？」
「あれだけの戦いの後ですからね…。
野原しんのすけも、一時、力を失っていたみたいですから…。」
それを聞いた松永管理官はこみ上げてくる笑いを抑えて指示を出した。
「フフ…。それなら結構。捕獲部隊を向けます。
周辺の街には万が一に備えてＭ・Ｐを待機させましょう。」
その指示を聞いた大原リーダーは無言で三沢を見て、
三沢は黙って頭を下げて部屋を出た。

静かな村には珍しいパトカーが行きかう中、
溝呂木はトンネルを抜けて裏山へと向かおうとした。
その時、胸の辺りに何か違和感を感じ、
溝呂木が服の内ポケットを探るとダークエボルバーが出てきた。
「これは…？」
溝呂木が自分の手に握られたダークエボルバーをじっと見つめると、
ダークエボルバーは不気味に明滅を始め、
それを見た溝呂木は全身がガタガタと震え、汗が噴き出してきた。
「う…うわぁぁぁぁぁっ！！！」
言い知れぬ恐怖に捕らわれ、
溝呂木はダークエボルバーを見えなくなるほど遠くへ思い切り放り投げた。
その時、サイレンが近づいてくるのに気づき、溝呂木はその場から急いで逃げ出す。

「なるほど…。」
その様子を遠くから監視者が哀れみを含んだ目で見つめていた。
「力を失った事さえ分からない…か。
だが、その分、君の方がいいかもしれないな…。
力を失っても、記憶を失わない…かつての栄光が頭に残されている私よりかは…。」
そう一人呟き、監視者はその場を立ち去った。

コマンドルームでは風間がバンピーラに対する作戦指示を行っていた。
「衛星からの観測でエリア８、ポイント５１０付近に濃霧が発生している事が分かりました。
霧の組成はビースト振動波を反射させると判明。
やはりビーストが中に隠れている可能性が高いと考えられます。」
「それじゃあ出動ね！」
勢いよく両手をパチンと鳴らす平木隊員だったが風間に制される。
「待ってください。まだどんな敵か分かりません。
まず和倉隊長、西条副隊長の二人で予備調査を行ってください。
石堀隊員と平木隊員はコマンドルームで現地からのデータ解析をお願いします。
そして和倉隊長。
万が一、霧の中でビーストと遭遇した場合は特殊光弾を撃ってください。
周辺の霧が晴れて振動波がキャッチできるはずです。」
西条副隊長が尋ねる。
「なら、霧を全て払ってしまう事は出来ないんですか？」
その質問に石堀隊員が答える。
「現場から約３ｋｍの所に街があって、多数の目撃者が出てしまう恐れがありますよ。」
和倉隊長も続ける。

「それに…霧と言う隠れ蓑を無くした場合、ビーストが街に向かう可能性も考えられる。」
二人の意見を聞いて西条副隊長は黙って頷いた。
風間が改めて指示を出す。
「とにかく、まずはターゲットの確認をお願いします。」

その頃、しんのすけはいつものように遊園地で仕事をしていた。
そんな中、ポケットのエボルトラスターが明滅を始めた。
「！」
「どうしたの？」
明日香がしんのすけの異変に気づき、尋ねてくる。
それを知った恵もそれを見る。
一方、しんのすけは何とかゴマかそうとする。
「え…、い、いや…。ちょっと…。」
「どうしても行かなきゃいけない急用があるんです！」
その時、しんのすけの横に恵が来て、しんのすけの代わりに弁解をする。
「え…？　そ、そうそう！　どうしても行かなきゃいけない急用があって…。」
しんのすけもそれに合わせて弁解する。
「ふーん。ま、ちゃんとした理由があるならいいけどね。」
そう言うと、明日香は去っていった。
「ふぅ…。」
何とかゴマカせたしんのすけはホッと一息つく。
「さ、早く急がないと！　人の命がかかってるんだから！」
恵がしんのすけを急かし、しんのすけはあることに気づく。
「…恵ちゃん…。もしかして、オラのこと…。」
恵はそれを見て頷き、しんのすけはそれを受けて、
「ありがとう！」
と言うとその場から走り出した。

学校の帰り道。愛は給食に出た夏みかんでお手玉しながらいつもの道を帰っていた。
裏山に通じるトンネルの入り口に来た時、
何かを感じて愛はトンネルを抜けて裏山の神社へと入っていった。
その神社のお堂の中では溝呂木が震える手で頭を抱え、苦悶していた。
「俺は…何故逃げている？　俺は一体…。」
その時、お堂の扉が開く音がして溝呂木はビクッと身を構えた。
愛が扉を開けてお堂の中に入っていく。
物陰から溝呂木がそれをじっと見つめる。
不意に溝呂木は近くに置いてあった木々を倒してしまい、お堂に音が響いた。
ハッと驚く溝呂木。
愛は音の聞こえた方に向かう。そして二人は対面した。
溝呂木は怯えた目で見上げ、愛は無表情で見下ろした。
震え、怯える目で自分を見る溝呂木を見た愛はしばらく考えた後、
ランドセルから先程の夏みかんを取り出して溝呂木に向かって差し出した。
「それを…俺に？」
溝呂木の問いに愛は黙って頷く。
溝呂木は愛と夏みかんとをしばらく見た後、
夏みかんを取って皮ごと貪り食った。それを見下ろす愛。

一方、和倉隊長、西条副隊長の二人はそれぞれチェスターに乗って現場に到着。
西条副隊長がチェスターδに残り、和倉隊長が降りて調査を開始した。
「西条、聞こえるか？チェスターから位置を追跡して、随時、こちらに報告してくれ。」

「了解。」
西条副隊長が答えた直後、
パルスブレイガーにノイズが走り、程なく通信不能に陥ってしまった。
「隊長！　隊長！」
西条副隊長は何度も呼びかけるが和倉隊長からの返事は無い。
そうしているうちにチェスターの周りを濃い霧が覆い始めた。
一方、霧の中を進む和倉隊長の背後にはバンピーラの赤い目が不気味に光っていた。

その頃、M・Pも麓の村に集結していた。
メンバーが集まったのを確認して現場指揮官の三沢が指示を出す。
「いいか。溝呂木が力を失ったかどうかははっきりとしていない。十分気をつけろ。各員、溝呂木を発見した場合はすぐに連絡するんだ。いいな？」
「はい。」
M・Pはそれぞれ散って溝呂木の行方を追い、三沢が一人、車に残った。
一方、フォートレスフリーダムのM・P室では大原リーダーが手にした自分のメモレイサーを見つめながら、ある出来事に思いを馳せていた。
「今回の事件の現場…。今…、あの子のいる村ね…。」
そう呟くと大原リーダーは天井を見上げて深いため息を吐いた。

その頃、愛がいなくなったことを知って、薫とやすおが辺りを探し回っていた。
「薫君！」
「どう？」
「公園にはいなかった…。そっちは？」
「姉ちゃんの学校の人に聞いたんだけど、皆知らないって。どこ行

っちゃったんだろう…。」
「…まさか。」
薫とやすおの視線が裏山へと向けられる。
すぐさま二人はトンネルを抜けて裏山の神社へと向かった。
お堂の扉が開いていたので中を調べてみると愛のランドセルが残されていた。
「これ…愛ちゃんのか？」
「うん…。愛姉ちゃん、悪い奴にさらわれちゃったのかな？」
「まさか…。」
やすおは否定するが、薫はランドセルを持って涙目になった。
「僕のせいだ…、僕が…姉ちゃんの言ってることまともに聞こうとしなかったから…。」
薫は涙を流すが、やすおは首を横に振って答えた。
「そんなことねぇよ！　お前のせいじゃないって。だから泣くなよ…。な？」
やすおの言葉に薫は涙をこらえて頷いた。

コマンドルームでは石堀隊員と平木隊員が現地から送られてくるデータをパソコンで解析していた。
二人は無言でパソコンを打ち続けていたが、ふいに石堀隊員が平木隊員に話しかけてきた。
「なぁ、どうして今回のビーストが目撃者の記憶を消すと思う？」
「何？　急に…。」
「たぶん…、学んだんだよ。メモリーポリスのやり方を…。」
「学んだ？」
「あぁ…。それが自分の存在を隠す一番の方法だと知ったんだろう…。
奴らは…人間との戦いを通じて確実に進化している…。」
石堀隊員はパソコン画面に送られてきたデータを見て呟いた。

深い霧が覆う森の中、手を繋ぎ、溝呂木と愛が共に歩む。
「記憶が無いのか…。」
溝呂木の言葉に愛は黙って頷く。
「同じだな…俺と…。」
その時、辺りに不気味な声が響き渡った。
「山から…、呼ぶ声がする…。」
溝呂木の言葉に愛は再び黙って頷いた。
周り全てが白い霧によって覆われる中、溝呂木と愛は手を繋いで道無き道を歩いていった。

一方、同じく現場にやって来ていたしんのすけは霧の中、背後から声が響いてきたのを聞いて振り返った。
「今の…、あいの声？」
しかし、当然そこにあいはおらず、代わりに現れたバンピーラが糸を吐いてきた。
しんのすけは間一髪避けて、すぐさまブラストショットを撃った。
しかし、バンピーラは怯んだだけで逆にしんのすけを糸で絡めとり、巨大な口で捕食しようとした。
「くっそ…！」
しんのすけはその瞬間、エボルトラスターを掲げて、ウルトラマンに変身。
バンピーラを弾き飛ばして巨大化し、構えを取った。
「ウルトラマン…。」
霧の中を歩いていた和倉隊長が、ウルトラマンを見上げる。
和倉隊長はすぐにバンピーラに向けて特殊光弾を放った。
霧が少し晴れて、風間の下にデータが送られてくる。
そして、和倉隊長が見守る中、ウルトラマンとバンピーラの戦いが始まった。

一進一退の攻防が続くウルトラマンとバンピーラの戦い。

そこに西条副隊長が操縦するδが加わり、バンピーラに攻撃を仕掛けた。
ウルトラマンはバンピーラが怯んだ隙を狙って、
ジュネッスブルーにスタイルチェンジしようとするが、
バンピーラは口から糸を吐いてウルトラマンを絡め取ってしまった。
身動きできないウルトラマンを手元に引き寄せ、
バンピーラはその鋭く尖った爪先でメッタザシにしていった。
「アビロックミサイル、ファイア！」
それを見た西条副隊長はδから無数のミサイルをバンピーラ目掛けて撃ち込む。
バンピーラは今度はδ目掛けて糸を吹きかけるが避けられ、
頭頂部にある器官から霧を辺りに吐きつけた。
周りの視界が悪くなっていき、電波撹乱の中、δは思うように動けなくなってしまった。
その時、ウルトラマンが立ち上がり、エナジーコアにエネルギーを溜めて
一斉に解き放ち、自分を縛っていた糸を完全に消し去ると、
クロスレイ・シュトロームでバンピーラの噴霧器官を爆破、完全に破壊した。
ウルトラマンはそのまま追い討ちをかけようとしたが、
バンピーラは地面を掘って姿を消してしまった。

バンピーラが地中で暴れ、山全体を大きな揺れが襲い、
その衝撃で愛は足を滑らせて坂から落ちそうになってしまった。
愛は必死に地面にしがみつき、溝呂木も必死に手を指し伸ばし、遂に二人の手が合わさった。
「大丈夫か？」
愛を引き上げた溝呂木が尋ねる。
「うん。」
素直に答える愛。溝呂木が愛を抱え降ろすと、そこに和倉隊長がや

って来た。
「み、溝呂木…!?　生きていたのか…。」
予想外の再会に和倉隊長が驚く。
その時、戦い終わったしんのすけがやって来た。
「溝呂木…!」
「しんのすけ君!」
和倉隊長が驚く。
しんのすけは溝呂木に近づこうとしたときに愛を見て、
かつて自分が犯した大きな過ちを思い出す。
「君は…。」
しかし、しんのすけの意識はすぐさま愛の隣にいる男、
憎むべき相手である溝呂木に向けられた。
「溝呂木!　その子を放せ!」
しんのすけが怒りの形相で詰め寄ってくるが、溝呂木は
「ミゾロギ?」
と不思議そうに自分の名前を言い返した。
「ミゾロギ…。一体誰だ?　教えてくれ…。俺は一体誰なんだ!!」
と震えながら尋ねてきた。
その様子に和倉隊長としんのすけは戸惑う。
「溝呂木…。お前、まさか記憶を…?」
和倉隊長からの問いに答えられず、ただ黙って震えるだけの溝呂木
を愛は静かに見ていたが、
しんのすけの顔を見て、目が合った瞬間、
かつてしんのすけが自分の両親を撃とうとした場面が脳裏に蘇った。
「いやぁぁぁぁっ!!!」
愛は頭を抱えて叫び、そのまま逃げるように走り出してしまった。
「お、おい…!?」
溝呂木が慌ててそれを追う。
「ちょ、待て!」
さらにそれをしんのすけが追う。

「しんのすけ君！　待て！　待つんだ！」
和倉隊長も追おうとしたが、
辺りを大きな衝撃が走って危険な状態になり、それは叶わなかった。

一方、薫とやすおは裏山の頂上に通じる山道を進んでいた。
「今、愛姉ちゃんの声が聞こえた…。」
「え？」
薫の言葉にやすおは戸惑ったが、
薫はすぐさま山の頂上目掛けて走り出した。
「あ！　薫君！」
やすおは慌てて後を追った。

しばらくして和倉隊長搭乗のβが、西条副隊長のδのもとに戻ってきた。
「ＣＩＣ。…山中に溝呂木眞也が現れました。」
「え！？」
和倉隊長の言葉に西条副隊長は驚きを隠せなかったが、風間は平然と答えた。
「溝呂木に対しては既に捕獲部隊が向かっています。」
その言葉に和倉隊長が不審に思う。
「…溝呂木の事を知っていたんですか？」
しかし、風間は変わらない口調で答えた。
「…詳細は後で松永管理官に聞いてください。今はビースト殲滅が最優先です。」
「…了解。」

森の中、しんのすけは溝呂木と愛を追いかけていたが見失ってしまった。
「溝呂木…。どこに行った？」
その頃、溝呂木はようやく愛に追いついた。

「おい、一体、どうしたというんだ？　あいつら一体何者なんだ？」
溝呂木が問いかけるが、愛は何も答えずに、ただ山道を駆け抜けていく。
地面の下ではバンピーラが暗闇の中、赤い目を不気味に光らせていた…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２６　幽声　－コーリング－（後書き）

ゲストとして「クレしん」原作での「バラ組のチーター」こと河村やすお登場。
ふたば幼稚園を卒園した後、
小学校の頃に今回の舞台の村に引っ越したという感じの設定です。
あと、監視者と大原リーダーについても今後の伏線を張っておきました。
（もし、後半のシーンで不快感を与えたらすみません。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２７　家族　－ファミリー－

愛と溝呂木、そしてバンピーラを見失ってしまったしんのすけ、ナイトレイダー。
やがて夜の闇が山を覆った。
薫とやすおは道路を歩き、愛を探していたが、その時、向こう側から足音が聞こえてきた。
やすおが手に持ったライトを向けると、その人物はしんのすけだった。
しんのすけは自分に照らされたライトに眩しそうにしながらもやすお達を見る。
その時、しんのすけはその中にいる薫を見て驚いた。
「！」
『この日、オラは意外な人達と再会した。山邑(やまむら)愛と山邑薫…。
この二人はかつてオラが犯した罪の犠牲者。
あの日、溝呂木によってあいを失ったオラはあいの仇を取ろうと、憎しみのままウルトラマンに変身して、溝呂木を倒そうとした。
でも、そんなオラの憎しみがこの子達をより深く傷付けてしまったんだ…。
憎しみに囚われちゃいけない…。あの時、オラはそれに気づいたはずだった。
でも、また溝呂木を見たオラは…。』

無人の小屋の中、焚き火を焚いて溝呂木と愛が暖を取っていた。
「唯一残っている記憶が…両親が化け物になった後の事だけか…。」
「…うん。」
愛が小さく頷く。焚き火の炎を見ながら溝呂木が続けた。
「…たぶん…、お父さんとお母さんは…化け物になる前に殺されたんだ…。」

その言葉に愛は今度は頷かなかった。
化け物に閉じ込められた自分。前から迫る強力な光。
しかし、化け物が身をよじり、光は額以外の部分を貫通して愛は九死に一生を得た。
『危ない！』
『愛…。』
「パパ…、ママ…。」
思わず声を漏らす愛。
溝呂木はそれに気づかず話を続けていた。
「しかし、酷い事をする奴がいたもんだ。まるで…悪魔だ…。」
愛も焚き火の炎を見ながら話し始めた。
「さっきの…詰め寄ってきた人…。お父さんを撃ったの…。」
その言葉に溝呂木は驚くが、愛は淡々と話し続けた。
「…でも、たぶん…、助けに来てくれたんだと思う…。」
愛の話を聞いて、溝呂木は昼間に会ったしんのすけの顔を思い描いた。
「奴は…俺を知っていた…。俺は一体…うっ！」
何かを思い出そうとすると再び頭痛が襲ってくる。
溝呂木が思い出す事を一旦止めると、愛が身を寄せてきた。
「寒い…。」
愛の体の震えが伝わってきて、溝呂木はごく自然に愛を抱き寄せた。

その頃、別の所ではしんのすけ達も焚き火を焚いて夜を過ごしていた。
無言でじっと焚き火を見つめる薫をやすおが説得する。
「薫君。救助隊の人が動いてくれてるみたいだからあの兄ちゃんの言うとおりに、街に戻って愛ちゃんを待とうな？」
その言葉に薫はしばらく考え、やがて無言で頷いた。
遠くから見つめていたしんのすけは薫の姿に過去の記憶を思い返していた。

そんなしんのすけを見た後、やすおは少し間を置いてしんのすけに話しかけた。
「しんのすけ。」
やすおの呼びかけにしんのすけが振り向いた。
「お…、えっと…。」
「河村だよ。チーター河村。ふたば幼稚園のバラ組の。」
「おぉ！　チーター！　あのいつもひまわり組を見下してる割に、いつも運動会とかで負けてたチーター河村！」
しんのすけのその言葉にやすおは少しムッとするも、気を取り直して冷静に話を始めた。
「実は…愛ちゃんのことについて話しておかなきゃいけないことがあるんだ。」
「え？」
やすおはしんのすけに愛の事を話した。
「愛ちゃんの記憶が…！？」
「あぁ。やがてもとに戻るみたいなんだけど、あの子のＲ７性因子はまだ異常状態が続いているみたいなんだ。今、あの子にまたメモレイサーを使う事になったらどうなるか…。だから絶対にビーストを目撃させちゃいけねぇんだよ！」
「愛ちゃんがそんな事になってたなんて…。」
自分が知らなかった愛の現状を知ってしんのすけはショックを受けたが、
同時に頭にある疑問も浮かんだ。
「あれ…？　そういえば、なんでチーターがそんなこと知ってんの？」
「それは…、うちの家族がＴＬＴのＭ・Ｐだからなんだ…。」
「え？」
しんのすけの疑問にやすおは答えた。
「愛ちゃんのＲ７性因子の異常で普通の親戚に二人を預けることが出来なくて、

それでうちの家族が…監視役として預かることになって…。」
「そっか…。」
そして、事情を知ったしんのすけはやすおの顔を見たが、
そこには家族として真に心配している様子が見て取れた。
それを見ると、しんのすけは頷き、やすおに答えた。
「愛ちゃんの事はオラに任せといてよ。泥舟に乗ったつもりで。」
「大船だろ。…相変わらずだな…。」
しんのすけと一緒に笑いながらも、やすおはその言葉に少し励まされた。
会話こそ聞こえなかったが、離れた所から薫はそのやり取りと、
やすおがしんのすけに連絡先を書いたメモを渡すのを見ていた。
すると、しんのすけは薫の所に歩み寄ってきて屈んで薫と目線を合わせて話をした。
「薫君のお姉ちゃんは…必ず助けるゾ！」
「…うん！」
しんのすけの力強い宣言を聞き、薫も力強く答えた。

そして山の夜が明けた。
小屋の中、愛が目を覚ますが、隣の溝呂木はまだ眠っていた。
愛は遠くから聞こえてくる自分を呼ぶ声を聞くと、一人で小屋の外へと出て行った。
その小屋の周りには三沢率いるホワイトスイーパーが既に潜んでいて、
愛が小屋から離れていくのを見送った。
「…行くぞ。」
小屋の中では何かを感じ取った溝呂木が目を覚ました。
溝呂木は周りを見て、愛がいなくなっている事に気づくが、
それについて考える間もなくホワイトスイーパーが次々に小屋の中に押し入ってきた。
ホワイトスイーパーは激しく抵抗する溝呂木を抑え込み、

かつてしんのすけを捕獲した時にも使ったペン状の装置を首筋に当てて気絶させた。
「よし、運び出せ。」
気絶して、ホワイトスイーパーに運び出される溝呂木を見送りながら、一言呟いた。
「無様なものだな…。力を失った悪党というのは…。」
一方、呼び声に引き寄せられていた愛だったが、
突然、何かに後ろ髪を引かれる感じがして急いで小屋へと戻った。
しかし、既に小屋の中には既に誰もいなかった。

コマンドルームでは石堀隊員と平木隊員がバンピーラの解析を続けていた。
石堀隊員のパソコンにバンピーラの声が再現される。
「なぁ、この声を分析したんだが、どうやら、
これまで他のビーストが捕食してきた人間達の声らしい。」
「人間達の声？」
「あぁ、M・Pからの連絡で、被害者の一人が
事故死した恋人の声を聞いたと証言していたと聞いて、もしかしたらと調べてみたんだが…。
この声を長時間聞いた人間は、脳に特異な刺激を受けて、結果、記憶喪失に陥るようだ。」
「ふーん、でもあのバンピーラってビーストは
どうやって他のビーストが襲った人間の声を知ったわけ？」
「ビースト振動波だよ。おそらくビーストは振動波で互いの情報を伝え合っているんだ。」
「何？　ビーストってそれぞれバラッバラに動いている
イメージがあったけど、繋がりがあったの？」
「進化の過程でコミュニケーション能力が発達していくのは当然だろう。
人間だって、言葉というコミュニケーション能力を手に入れたから

ここまで進化できたわけだし。」
「言われてみりゃそうかもねぇ。ねぇ、ビーストが人間と同じ道を歩んでいるっていうの？」
「…あぁ。」
「…ふーん。」

その頃、青空の下、地面を突き破ってバンピーラが姿を現した。
風間から指示を受けて石堀隊員と平木隊員が出動。
木々を倒し、バンピーラが進撃する。
「こいつ、街に向かう気か？」
和倉隊長の疑問に風間が説明する。
「ウルトラマンとの戦いで霧を分泌する器官が壊れたようです。自己再生を図る為、街に降りて一気に人間を襲うつもりでしょう。チェスターで上空から攻撃。街への侵入を阻止してください。」
「了解。西条、正面から攻撃だ。」
「了解。」
チェスターとバンピーラの戦いが始まった。

「愛ちゃん！」
三沢達がいなくなった後、バンピーラ出現を知って、小屋の近くにしんのすけがやって来た。
しんのすけの顔を見て愛の体が思わず震え出す。
しんのすけは小屋の中を見回して、溝呂木がいない事に気づいた。
「あいつは？」
「分かんない…。」
答えながらも愛は後ずさり、しんのすけから距離を取っていく。
それを見てしんのすけが話しかけた。
「覚えてるんだ…、オラの事を…。」
しんのすけの問いに愛は黙って頷く。
しんのすけは愛の所に歩み寄ってきて、

屈んで愛と目線を合わせて弁明をした。
「…でも、信じて。オラは愛ちゃん達を守ろうと…。」
と言いかけた時、しんのすけの脳裏にあの時の自分が蘇った。
『ビースト！　人間の振りなんかしても無駄だゾ！』
『くっそ…！』
『あいつが、昼間の…！』
それを思い出した時、しんのすけの目から涙がこぼれ出て、その場に崩れ去ってしまった。
「違う…。オラは…愛ちゃん達を守ろうと…。
でも…本当は…あいつが憎くて…。憎くて…殺してやりたくて…。
それで愛ちゃん達を傷付けてしまって…。
オラはあの時…何かを倒す為じゃなくて…、
何かを守る為に戦わなくちゃいけないってことを…、
憎しみのあまり忘れてた…。ごめん…。本当に…ごめん…。」
泣き崩れるしんのすけ。それを見た愛はそっとしんのすけに手を触れた。

そして、しんのすけは愛を連れて山を降りていき、
そこに連絡を受けたやすおがやって来た。
「愛ちゃん！　大丈夫か？　ケガはない？」
「うん。」
その時、しんのすけはエボルトラスターが明滅していることを知る。
「愛ちゃんのこと、頼んだゾ。じゃ、そういうことで。」
「え？　ちょ、おい！？」
しんのすけは愛をやすおに預けて、バンピーラが出現した場所へ走り去っていった。

一方、チェスターとバンピーラは一進一退の攻防を繰り広げていたが、
そこに石堀隊員の乗るαと平木隊員の乗るγが合流し、チェスター

全機が集結。
「よし。各機、ハイパーストライク・フォーメーションだ！」
「了解！」
しかし、バンピーラが口から糸を吐いてチェスターの合体を阻止する。
その時、しんのすけがその場に到着。チェスターの危機を知り、エボルトラスターを掲げた。
次の瞬間、光がバンピーラの前に降り立ち、ウルトラマンが現れた。

麓の村への道を降りていくやすおと愛だったが辺りを爆音と衝撃が襲った。
一方、愛は自分を呼ぶ声に気づき、
フラフラと引き寄せられるようにやすおから離れ、トンネルの中へ入っていった。
「愛ちゃん！？　ちょ、行くな！！」
気づいたやすおは必死に呼び止めるが、
愛は声に導かれるままバンピーラの方へと引き寄せられていった。
その時、バンピーラを蹴り飛ばしたウルトラマンは愛が近づいてきていることに気づいた。
「愛ちゃん！」
遂に愛はトンネル入り口までやって来てしまった。
しかし、やすおが見ると、既にそこには何も無かった。
やすおはしばらく何が起こったか理解できなかったが、
やがてメタフィールドの事を思い出して安堵した。
「しんのすけ…。」

「さ、愛ちゃん…。」
やすおは愛の手を引いて先を進もうとしたが、
愛はじっと一点を見つめたまま微動だにしなかった。
不思議に思ったやすおが愛の視線の先を見ると、

そこは先程までウルトラマンとバンピーラが戦っていた場所だった。
「そんな…、まさか…見えてるのか？」
愛の瞳に映るメタフィールドでの戦い。
ウルトラマンはバンピーラを圧倒していたが、
上空にアンノウンハンドの闇が現れてメタフィールドをダークフィールドGに変え、
さらにその闇を含んだルシフェルの白い羽根がバンピーラの分泌器官を復活させてしまった。
バンピーラは再生された分泌器官から噴霧した霧で自分の周りを覆い、姿を隠した。
霧に包まれたウルトラマンが辺りを見回すと、
バンピーラは今度は尻尾から糸を吐き出して、ウルトラマンの足を絡め取ってしまった。
足を取られ、成す術も無く引きずられていくウルトラマン。
そこにハイパーストライクチェスターが現れ、ウルトラマンの足を絡め取った糸を焼き切った。
脱出できたウルトラマンは立ち上がって、
距離をとり、決意と共にアローレイ・シュトロームの構えを取る。
「オラはあの子達の住む街を守る…。守るために…戦う！」
ハイパーストライクチェスターからハイパーストライクバニッシャーが撃たれ、
同時にウルトラマンもアローレイ・シュトロームを発射。
両者を同時に受けてバンピーラは爆発を起こし、光の粒となった。

戦いの一部始終全てを見ていた愛。
バンピーラに保存されていた人々の声が光の粒と共に解放されていく。
その中には愛の両親の声もあった。

『ようし、写真撮るぞ。そこ並んで。母さん、ほら！』

『愛。今度はお母さんと写そうね。』

『二人ともよく眠っている…。』

『薫、愛！　もっと近づいて。よし！　撮るぞ。』

『疲れてんだろ。』

『でも楽しかった…。また家族４人で来たいわね。』

『あぁ…。』

愛自身は失ってしまった家族との楽しい思い出。

「パパ…、ママ…。」

それを再び感じ、愛の目から一筋の涙が流れた。

和倉隊長のもとに松永管理官からの連絡が入る。

「無事、ビーストを倒したようですね、和倉隊長。さすがです。」

松永管理官から上辺だけの祝辞が送られる。

「ありがとうございます。ところで…溝呂木は?」

「はい。残念ながら逃げられてしまいました。また次の機会を待ちますよ。」

その答えに西条副隊長が反応を示す。

和倉隊長は少し眉を動かし、唇を噛み、間を置いてから答えた。

「分かりました…。その事については後ほど正式な報告を受けたいと思います。それでは…。」

そう言って和倉隊長は松永管理官からの連絡を一方的に切った。
戦い終わった後、しんのすけとやすおが愛を連れて河村家にやって来た。
「愛！！」
「愛姉ちゃん！！！」
家族皆が愛を出迎える。
愛はやや俯き、申し訳無さそうに口を開いた。
「ごめんなさ…。」
しかし、愛が全て言い終わる前に母親は愛を強く抱きしめ、
父親は愛の頭に優しく手をかけ、
薫は大声で泣きながら愛の腕にしがみつき、
やすおも笑顔で愛と薫の肩に手をやった。
「良かった…。無事で…。良かった…。」
母親の声を聞き、愛は静かに目を閉じ、再び一筋の涙を流した。
それを見るしんのすけも自然と笑顔になる。
父親はしんのすけを見て、深々と頭を下げてお礼を述べた。
「本当に…ありがとうございます！！」
「いやぁ、それほどでも…。」
そこに薫がやって来て照れるしんのすけに向かって言った。
「兄ちゃん、すっげーカッコイイ！　僕も兄ちゃんみたいになるよ！」
その言葉にしんのすけは一瞬複雑な表情を浮かべたが、すぐに笑みを浮かべて答えた。
「うん。頑張れよ。」
「うん！」
そしてしんのすけは河村家を後にするが、
ふと、しんのすけは振り返って愛達の様子をもう一度眺めた。
「家族の肖像…か。」
しんのすけは微笑んで呟いた。

翌日、いつものように愛はトンネルの入り口付近で寝そべり、目を閉じ、耳を地面に付けて何かを感じとろうとしていた。
「愛姉ちゃーん！」
そこに薫が駆けて来て、愛は目を開いて、ゆっくりと起き上がった。
「また聞こえるの？」
薫の質問に愛は首を横に振った。
「もう聞こえない。」
笑顔で返事する愛を見て薫も笑顔になる。
「じゃ、行こ！　愛姉ちゃん。今日は遊園地なんだから！」
「うん！」
手を繋いで楽しそうに歩き出す二人。
その時、自転車に乗ったやすおが後からやって来て、
薫が被っていた帽子を取ってしまった。
「早く来ないと置いてくぜ！」
「あ！　待ってよ、やすお兄ちゃん。てか、自転車ってズルイ！！」
自転車で逃げるやすおを薫は必死に走って追いかけ、愛はそれを見て笑った。

「さぁて、しんのすけ君。昨日の分とその前の日に途中でサボった分は今日ちゃーんと働いてね。」
笑顔ながらも腕を組み、圧倒的な威圧感でしんのすけに指示を出す明日香。
「えー！　ちゃんと理由があるんだったらいいって言ったじゃん！」
「私は細かいことは気にしないけど、それはどうだっていいことだけ。
だから、理由はどうだっていいけど、サボったらちゃんとツケは来るの。」
「まったく、しんちゃんがどっか行っちゃった後、私達がどんだけ頑張ったか分かる？

昨日とその前の日は私達がしんちゃんの分まで頑張ったんだから
今日はしんちゃんが私達の分まで頑張ってね！」
めちゃくちゃ偉そうなネネ。
「もう…、わがままだなぁ…。」
愚痴を言うしんのすけ。
「じゃあ、これ頼んだわよ。」
そう言って、しんのすけ、マサオ、ネネ、ボーに同じ仕事量を与える明日香。
「え？　あ、明日香さん。僕らの分、今日は減らしてって！」
「そ、そうですよ！　しんちゃんがサボってた分、私達はいっしょけんめ働いてたんだから…。」
しかし、二人の抗議を明日香は笑顔で返した。
「ごめんなさい、今日は皆フル回転で仕事してくれないと追いつけないの♪」
「そんなぁ～！」
「私、聞いてない！」
悲しみの悲鳴を上げるマサオ、ネネ。
ボーが一人呟いた。
「僕は、別に良いけどね。」
一方、しんのすけはさっそく仕事を始めていた。
「ほい！　風船。ネコだゾ、名前はミルク！」
としんのすけはある女の子、愛にペンシルバルーンを手渡す。
受け取った愛はしんのすけの顔をじっと見た。
ペンシルバルーンを手渡し、顔を見るとしんのすけはその子が愛であったことに気づいた。
「お、愛ちゃん！　今日、来てたんだ！」
そんなしんのすけを見て思い出されるメタフィールドの戦い。
そして愛はしんのすけの姿にウルトラマンの姿を重ね合わせた。
「お？」
不思議がるしんのすけに向かって愛は笑顔で答えた。

「ありがとう！」

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２７　家族　－ファミリー－（後書き）

原作での前回と今回の話にあたる話は孤門の話がメインで、
憐が突然現れてウルトラマンに変身するという流れでしたけど、
主人公が変身するこの小説では自然に一つにまとまる形となりました。
さて、次回は風間の出生の秘密が分かる話ですが、いつもより少し長くなります。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２８　監視者　－ウォッチャー－

『Ｅｎｔｅｒ　Ｔｈｅ　Ｐａｓｓｗｏｒｄ』
フォートレスフリーダム。西条副隊長は
自分の部屋でパスワード入力画面に向かっていくつかの候補を入力するが、
「ＣＬＡＳＳＦＩＥＤ」という表示になるだけであった。
西条副隊長はそれを見ると天井を見上げて、ため息を吐いた。
「パスワードを入れられるのは後１回…。
彼に関する情報はこのグループＰ．Ｐ．だけ…。
機密事項…Ｐ．Ｐ．…。パスワードが分かりさえすれば…。」
目を閉じてしばらく考え込む。
「どこかに手がかりは…。」
ＣＩＣ、イラストレーター、予知、作戦参謀…。
西条副隊長は風間に関係することを次々と脳裏に思い浮かべていった。
その時、風間の左手の中指にはめられていた、銀の指輪が脳裏に浮かび上がった。
ハッと目を開き、その指輪に刻印されていた「Ｐｙｒ」という文字を入力する。
すると、ＤＮＡを思わせる二重螺旋の円を炎が包み込んでいる画面が現れた。
中央には「ＰＲＯＭＥＴＨＥＵＳ　ＰＲＯＪＥＣＴ」と書かれている。
西条副隊長はそれを見て頷き、画面中央に書かれている文字に目を通した。
「プロメテウス…プロジェクト？」
画面が変わり、少年少女達の顔写真が次々に出てくる。
そして、その中には風間と恵もいた。

「彼は…、一体…。」
「…プロメテの子です。」
西条副隊長が振り返ると風間のホログラムが立っていた。
「Ｐｙｒはギリシャ語の炎…。ギリシャ神話に登場する、プロメテウスが人間に与えたという炎です。」
「イラストレーター…。」
「今のあなたなら…いずれ見つけると思っていました…。
僕はプロメテウス・プロジェクトによって生まれた子供です。
従って、僕には本当の両親、家族も存在しない…。
そういう意味ではプロメテの子は皆、天涯孤独です…。」
どこか寂しげに語る風間。西条副隊長が尋ねる。
「プロメテウス・プロジェクトとは一体…？」
「プロメテウス・プロジェクトとは、
ある医療研究アカデミーが進めた、実験的遺伝子プロジェクトです。
ハイパージェネティック理論に基づき、
登録された何種類もの優秀な遺伝子から特定の遺伝情報を持つ、
ＤＮＡフラグメントを選別して組み合わせ、人為的にハイブリットな新生児を誕生させる…。
アカデミーはＴＬＴの下部組織の一つで、無論、その存在は極秘です。
…最近になって実験工程に問題が発見されて、プロジェクトは一時凍結されていますが…。」
「その…生まれてきたあなた達プロメテの子供達は？」
「僕らはダラスにあるアカデミーの寄宿学校で養育され、
概ね１４歳辺りで大学卒業課程を終えます。」
風間から明かされた彼自身の出生の、
あまりに突飛な内容に西条副隊長は黙りこくってしまった。
一方の風間はしんのすけが一番知りたがっていた事、
自分が何故ＴＬＴ作戦参謀、イラストレーターの任についているのかについて話し始めた。

「僕はプロメテの子として備わった能力、予知能力を認められて、
ＴＬＴ北米本部の作戦参謀として就任することを予め決められていました。
ですが、５歳の頃、僕はアカデミーを抜け出してこの日本に来たんです。
日本に着いた後、自分を追ってきた、
アカデミーのハウスマザーとプロフェッサーに出会ったんですが、
二人は僕の考えていることを分かってくれて、
二人のもとで普通の５歳児として僕は生活を始めたんです。」
「その時に、しんのすけ君と…。」
西条副隊長の言葉に黙って頷く風間。
「その後、ＴＬＴが世界規模の対ビースト特務防衛機関になってから、
僕はこのＴＬＴ－Ｊでイラストレーターの任に就くことにしたんですけどね…。」
話を聞いた西条副隊長が再びパソコン画面に映っている風間の写真に目をやった後、
風間に視線を戻すと、既に風間のホログラムは消えてしまっていた。
「イラストレーター…。」

「ほい！　風船だゾ！　さぁ、君の風船を数えろ！」
遊園地。今日もしんのすけが元気に働いているところに私服姿の西条副隊長が訪ねてきた。
「お、あれは…。」
しんのすけは西条副隊長の姿を見ると笑顔で呼びかけた。
「西条副隊長！」
手を軽く挙げて答える西条副隊長だったが、
その時、店の中からしんのすけの声を聞いて明日香達が出てきた。
「あら？　西条さんじゃない。」
「あ…。」

明日香の言葉に西条はまずいといった感じの顔になった。
「へぇ…、この人がしんちゃんの従姉弟か…。」
ネネが物珍しげにじろじろと西条を見る。
西条はとにかく話題を変えようと強引に話を切り出した。
「今日は…遊園地日和ですね！」
「はい！　今日は朝から親子連れが一杯で！」
明日香が笑いながら喋る。そんな中でマサオはある事に気づき、西条に質問した。
「あ、そういえば、僕達、しんちゃんの親戚の人に昔からよく会った事あるけど、西条さんと会うのは初めてだよね。」
「あ…、遠くの親戚だから、あんまり滅多に行かないのよ。」
余裕で答える西条を見て、しんのすけが少し感心する。
「なるほど…。」
「でも、しんちゃんの親戚にこんな綺麗な人がいたとはね…。驚いたわ。」
マサオの後に続けて呟くネネ。
そして、しんのすけが口を開いた。
「ねぇ、西条さん。掃除手伝ってくれない？」
「え、えぇ…。」
そう言うとしんのすけは西条の袖を強引に引っ張っていった。
「ちゃんと裏道も掃いてよね！」
注意するネネにしんのすけが返す。
「ネネちゃーん！　たぶん、たこ焼き焦げてるゾー！」
「…あ！」
忠告を受けてマサオ、ネネ、ボー、明日香はハッとした。

ほうき片手にしんのすけと西条が歩く。
「プロメテの子？」
西条は風間について分かったことをしんのすけに話していた。
「えぇ、どうやらイラストレーターは

ＤＮＡフラグメントを選別して組み合わせて、
人為的に誕生したハイブリット新生児…みたい。」
「…ふーん。でも、風間君にはパパとママがいるゾ。」
しんのすけが疑問を口にする。
「それは、アカデミーを抜け出した彼を追ってきた、
アカデミーのハウスマザーとプロフェッサーが彼が日本に来た理由
を分かってくれて、
彼は普通の５歳児として生活を始めた…ということらしいわ。」
「…風間君はどうしてそのアカデミーを…？」
「その理由は…話してくれなかったわ…。」
「そっか…、でも風間君がなんでＴＬＴにいるのか分かって良かっ
たゾ！」
暗い顔の西条に対し、しんのすけは笑顔で答えた。
「そのことが分かればそれだけでいいや。
風間君がこれ以上言いたくないようなんだったら、もうこのことは
追求しないゾ。」
しんのすけがそう言った後、二人は歩くのを止め、近くにあったベ
ンチに腰掛けた。
前方に目をやると、原っぱではたくさんの親子連れが遊んでいた。
「こういうの見てるとさ…、なんかオラ達が
やってることって無駄じゃないんだなーって思わない？」
しんのすけが口を開き、西条がそれに答える。
「えぇ…、まぁ…。」
その答えに、しんのすけはあることを尋ねた。
「西条副隊長って、ビーストを…憎んでるんだよね…？」
その問いに西条は頷く。
「元々、ビーストを倒すために…、そのためにナイトレイダーに入
ったの？」
「えぇ…。でも、最近は…少し周りが見えるようになってきたわ…。
」

「それって…、ビーストを倒すためだけじゃなくて、人を守るためにも戦うようになったってこと？」
その質問に西条は少し間を置いて頷き、
それを見て、しんのすけは少し嬉しくなった。

その様子を監視者が少し離れた所から謎の機器に収めていた。
監視者が機器に今収めた映像を再生すると、
しんのすけの全身に様々な数値が示されていた。

掃除を終えたしんのすけと西条が店に戻ってきた。
「掃除終わって喉乾いたゾ。明日香さーん、ジュース飲んでいい？」
「いいわよ。はい。」
明日香からオレンジジュースを受け取ったしんのすけはそれを一気に飲み干した。
「プハーッ！　このために生きてんなぁーッ！！」
「オヤジみたいなこと言わないの。」
明日香の指摘にしんのすけは笑い、西条も少し笑顔になる。
そんな二人の近くの席では、ボーが恵に様々な話を聞かせていた。
「なるほど…。メモっとかないと…。」
「え？」
しんのすけが恵のほうを向き、恵もしんのすけのほうを見る。
「あ…！」
驚くしんのすけに恵は笑顔で挨拶をした。
「どうも。お久しぶり、しんのすけ君。」
「確か、風間君の友達の…。」
「しんのすけ君！」
恵のところに行こうとするしんのすけを西条が呼び止めた。
「彼女は？」
西条の問いにしんのすけが事情を説明し始めた。
「彼女、春野恵ちゃん。風間君の友達で、

オラが適能者（デュナミスト）、ウルトラマンだって事も知ってるゾ。」
しんのすけからの予想外の返答に西条は驚く。
「本当に？」
「うん。本当なんだから仕方が無い。」
西条にそう言うと、しんのすけはエプロンを外して恵の所に向かっていき、
西条もそんなしんのすけの後を追った。
「恵ちゃん！　この人、オラの従姉弟の西条さんだゾ！」
しんのすけの紹介を受け、恵は笑顔で西条に挨拶した。
「はじめまして。春野恵です。」
恵は西条に軽く頭を下げ、しんのすけはそんな恵やボーと話し始めた。
仲がよさそうに話すしんのすけとボー、恵を見て、西条は少し微笑むが、
その時、窓ガラス越しに彼方から視線を感じた。そこにしんのすけが断りを入れてくる。
「あ、西条さん。ここで少し恵ちゃんと二人で話しといてくれない？　オラ、そろそろここの仕事に入らないといけないみたいだし。」
しんのすけの言葉に、西条が抗議の声をあげた。
「嫌よ…。」
「え？」
西条から発せられた意外に低い声にしんのすけは驚いた。
拒否された事に恵は落ち込むが、西条は表情を変えずに話し続けた。
「二人もここに残る必要は無いわ。二人いれば…挟み撃ちに出来る。」
「西条さん、何の事？」
意味が分からずしんのすけが困惑する中、西条は答えを口にした。
「１１時の方向に…こっちを監視している奴がいる。」
「え？」
西条の言葉に恵は思わずその方向を見てしまった。

それを知り、監視者がその場を離れたのを見ると西条は急いで店を出て、駆け出した。
「ボーちゃん！　オラの分もここの仕事頼んだゾ！」
そう言い残すとしんのすけも店から出て、ブラストショットを取り出し、駆け出すと、
恵も自分のドジを反省しつつ慌ててその後を追った。
一人残されたボーは少し呆然とした感じで三人を見送った。

逃げる監視者を追うしんのすけ、西条、恵。
追跡の途中、しんのすけは先回りをする為に別方向へと一人駆け出した。
しばらく走るとショートカットに成功したのか、すぐ目の前に逃げる監視者が飛び込んできた。
しかし、次の瞬間、監視者は高くジャンプして遊園地内を走る汽車を悠々と飛び越えてしまった。
「え！？」
あまりの跳躍力にしんのすけは驚き、汽車に阻まれて追跡できなくなってしまった。
「くっそ！」

同じ頃、別な場所で恵も監視者を追っていた。
もう少しで追いつけそうな時、監視者は振り向いて近くの台車に手をかざした。
すると、荷物を載せた台車が勝手に動き出して坂道を猛スピードで下っていった。
恵が見ると、その先にアイスクリームを食べている子供がいた。
「危ない！」
恵はとっさに飛び出して子供を助け出した。
親が駆けつけてきて子供の無事を確認すると、恵にお礼を述べた。
恵は親子に言葉をかけると監視者がいた方を見たが、監視者の姿は

既に無かった。

そして同じ頃、西条も別の場所で監視者を追っていた。
宙を浮くように軽やかに逃げる監視者。
このままでは追いつけないと判断した西条は
手に持っていたバッグを監視者の足下めがけて投げつける。
バランスを崩した監視者はその場に転げ、フードからチップがこぼれた。
西条はすぐさま倒れた監視者に手をかけるが、
監視者は立ち上がって激しく抵抗する。
しかし、西条は蹴りで監視者を牽制し、手をとって投げ飛ばした。
「え?」
西条は投げ飛ばした監視者の首に手をかけるが、
不気味な黒い仮面を付けた顔に一瞬たじろいだ。
その隙に監視者が西条めがけて手をかざすと、
西条の体がいきなり吹き飛び、監視者はその場から逃げてしまった。
西条が起き上がると、そこに恵が駆けつけてきた。
手に付いた土を払う西条。
そこに遅れてしんのすけもやって来た。
「ごめんなさい。逃げられたわ。」
謝った後、西条がしんのすけに聞く。
「…ところで、さっきの奴に何か心当たりないの?」
「…無い…。でもあいつ、前からウロウロしてた。」
「前から?」
「終焉の地での戦いが終わって、オラがこの遊園地に来てすぐの頃から…。
あと…、オラのこの光に興味があるみたいだったゾ…。」
そう言って、しんのすけは西条にエボルトラスターを見せた。
「一体、誰が…。」
しんのすけ達が監視者が姿を消した方向を見ていると、

そこから呑気にマサオがやって来た。
「なんだ、ここにいたんだ。仕事が終わったら、明日香さんがご馳走するって。従姉弟と友達がW(ダブル)で来た…。」
と、言いかけたところでしんのすけ達のおかしい雰囲気に気づいた。
「あれ？　どうか…したの？」
「あ、今…。」
としんのすけが口を開きかけた瞬間、
それを遮るように西条が大きな声で喋り出した。
「ドングリを探していたの！　さて！　何だろうな？　明日香ちゃんのご馳走って！」
地面に落ちていたバッグを拾い、西条はその場を離れた。
西条の唐突な行動にしんのすけと恵は一瞬、呆気に取られたが、すぐさま調子を合わせ始めた。
「な、何だろうな？　ご馳走って！」
「な、何かな？」
「行ってみるゾ！」
「う、うん！」
大げさに振舞い、ぎこちない笑みを浮かべながら、
しんのすけと恵もその場を離れた。
「こんなところにドングリなんてあったかなぁ？」
一人残されたマサオが地面を見回すと、そこには監視者の落としたチップがあった。

その頃、フォートレスフリーダムのＣＩＣでは、
風間が手を組んで一連の状況について考えをまとめていた。
「僕と恵は“プロメテの子”…。
そのプロメテウス・プロジェクトを推進したのが“ＴＬＴ北米本部”…。
一方、プロジェクトの基盤となった、
ハイパージェネティック理論は“来訪者”によってもたらされた…。

そして、その来訪者によって造られた“忘却の海…レーテ”。
しんのすけが再び“適能者（デュナミスト）”に選ばれた理由は、光が彼の想いに応えたから…。
それだけでは理由として不十分すぎる…。
光が“しんのすけ”を再び適能者（デュナミスト）として選んだ理由…それは何だ？」
考える風間の周り、水槽の中ではクラゲが悠然と漂っていた。

その夜、一日の仕事が終わり、約束どおり、明日香がバーベキューを用意してくれた。
テーブルに置かれたラジオから音楽が流れ、肉や野菜が焼ける音に歓声が上がる。
「さぁ！　思う存分いただいちゃって！」
「いただきまーす！」
明日香の言葉にしんのすけ達が声を揃えて答える。
「いやぁ、豪華な割に手のかかって無い料理だゾ。」
「一言余計。」
としんのすけの皮肉に明日香が突っ込む。
「熱っ！　あ…つ…！」
突然上げられた大声に皆、一斉に恵の方を見た。
見ると恵は熱々の肉に悪戦苦闘していた。
「何やってんの？　恵ちゃん。」
呆れるしんのすけ。
「ね、猫舌でもいいじゃない…。」
と恵が顔を上げると、鼻の頭に赤いケチャップが付いていた。
それを見て皆必死に笑いをこらえる。
「付いてるゾ、ケチャップが…。」
しんのすけに指摘されて鼻に手をやる恵。事態を理解し、困ったあげく、
「あ！　な、何、あれ！！」
と大声を上げて上空を指差した。皆が夜空を見上げている隙に、

鼻に付いたケチャップを拭おうとするが、空しく、誰も引っ掛かっていなかった。
「信じらんない！！」
しんのすけ、マサオ、ネネ、ボーが大笑いする。
明日香も必死に笑いを堪え、西条がやれやれと言った感じで恵の鼻のケチャップを拭った。

しばらく食事と会話が続き、一息ついたところでネネはふと夜空を見上げて歓声を上げた。
「わぁ、星がいっぱい…。」
ネネにつられて他の皆も夜空を見上げる。
そこには満天の星空が広がっていた。
「知ってる？　こういう夜空を飛んで渡りをする鳥って結構いるんだよ…。」
そう言って恵は立ち上がり、近くの草原へと歩いていった。
しんのすけ、西条、マサオ、ボー、ネネも席を離れて後をついていく。
明日香もそんな皆を見送りながら、夜空を見て、
「私も行っちゃお！」
と、皆の後についていった。
そして、しんのすけ達は草原に並んで横になり、満天の星空を見上げた。
「鳥って鳥目でしょ？　夜はダメなんじゃないの？」
西条が恵に質問するが、恵は笑顔で答える。
「人間より目の良い鳥、たっくさんいるんですよ。
シギやチドリは昼は太陽、夜は月と星で位置を確かめて太平洋を越えるんです。」
「凄いなぁ…。」
しんのすけが素直に感想を漏らす。
「ムナグロなんか、本当にタフで、一度飛び立ったら、

ハワイからアラスカまでノンストップで飛行するんです。
彼らは夜も気流を読みながら北極星と星座を頼りに海の上を飛び続けるの。」
「へぇ…、恵ちゃん、鳥の事詳しいのね～。」
明日香が感心する。
「教えてもらったんです。」
何故か含み笑いをする恵。
「誰に？」
ボーが恵に尋ねる。しかし、
「秘密。」
と言って恵は相手を明かさなかった。それを聞いて、
「やーらしい。」
とネネはちょっと醒めた眼差しを向けた。
「どういう性格なんだよ…。」
そんなネネにしんのすけが呆れる。
すると、マサオが声を上げた。
「あ！　ねぇ、北極星あれ？」
聞かれて恵はマサオが指差す方向をじっと見た。
「うーんと…。うん、北斗七星の先のやつ。あれが北極星。」
そのやりとりの後、恵はふと風間のことを思い出した。
（トオル…。）
その後も7人は天に浮かぶ星々を見て他愛の無い会話を続けた。
『あの時…、あれは…不思議なほど幸せな時間だった…。
あの短い夜、オラ達は自分達の過去も、運命も、未来すらも忘れてた…。
でも、オラは心のどっかで思ってた…。
こんな時間は…長く続かないんじゃないかって…。』
その頃、ＣＩＣでは風間がパソコンに向かってデータを打ち込んでいた。

その作業を終えると、伸びをして一つ休憩を入れる。
風間はいつものトレイに入った色の薄い食事を取り出し、一人静かに食べ始めた。
食事をしながら、この前の恵の作ったあのしょっぱいおにぎりのことを思い出す。
（恵…。）
それと同時に、パソコン画面が無数のデータ表示から海を渡る二羽の鳥のイメージショットに変わる。
それを見た風間は机の引き出しを開け、ある一枚の貝殻を手に取った。

「ご馳走してくれてありがとう。明日香ちゃん。」
後片付けをしながら西条がお礼を述べる。
それに対して明日香が笑いながら答えた。
「いえ、今日はしんのすけ君が色々と手伝ってもらったみたいですし。」
そこにしんのすけが割って入る。
「こんなご馳走したら、西条さん、毎日手伝いに来ちゃうゾ！」
3人が話す中、マサオがやって来た。
「これ、ひょっとして西条さんの？　さっき、あの森の所に落ちてたけど。」
そう言ってマサオが渡したのは監視者が落としたチップだった。

「しんのすけ君を監視していた人物のメモリーチップ？」
コマンドルーム。
フォートレスフリーダムに戻ってきた西条は石堀隊員に件のチップを手渡した。
「たぶん、森で私と争っている時に落としたんだと思う。
こんな高度なメモリーチップ、一般人の物じゃないわ。」
「確かに…。でも随分破損してるな…。

それで、このメモリーチップの中身を見たいんですか？」
石堀隊員は西条から渡されたメモリーチップを眺めた。
「えぇ…。」
「再生できるかどうか分かりませんが…とにかくやってみるか。」
その後、石堀隊員はさっそく自分のパソコンにメモリーチップを入れて再生を始めた。
パソコン画面に様々なデータが表示される。
「風間トオル…。これ、イラストレーターのデータか…？」
「どうして、イラストレーターのデータが…。」
石堀隊員が作業を進めていくうちに、画面には大量の数字がいくつも表示された。
「何だ？　この数値。」
パソコン画面はデータ表示が終わって、
最後に「ラファエルはまだか？」という文章が表示された。
その瞬間、メモリーチップが完全に破損し、
パソコン画面のデータも文章も全て消えてしまった。
「ここまでか…、チップの方が限界だったんですよ。」
石堀隊員はパソコンからメモリーチップを取り出して西条に返す。
西条はパソコン画面に表示された最後の言葉が気になった。
「ラファエルは…まだか。最後の文章って一体…？」
西条の問いに石堀隊員が答える。
「ラファエル…。『旧約聖書』等に出てくる、
ミカエルやガブリエル、ウリエルと同じ四大天使のうちの一人の名前です。」
「四大天使…。」
石堀隊員の言葉を聞き、思い立った西条はコマンドルームを飛び出した。

その夜、しんのすけが部屋で寝ていると誰かが訪ねてきた。
「何だ…？」

「誰よ？　こんな夜中に…。」
目覚めたひろしとみさえは真夜中の突然の訪問客に警戒し、
同じく目を覚ましたしんのすけもブラストショットを構え、息を殺して
ひろしとみさえと共に玄関に向かった。すると、
「あの…、西条ですけど…。」
「西条副隊長？」
訪問客の意外な正体に驚くしんのすけとみさえとひろし。
「ちょ、ちょっと待ってて！」
急いでしんのすけはブラストショットを部屋の机に置いて、布団の片付けを始め、
パジャマから普段着に着替えた。
「何よ…、うるさいわねぇ…。」
ひまわりが目を擦りながら出てくるが、みさえは急いでひまわりを着替えさせ、
ひろしもパジャマから普段着に着替える。
「…よし！」
数分後、しんのすけが玄関を開けた。
「ごめんなさい。どうしても…伝えておきたい事があって。」
西条が遠慮がちに顔を覗かせる。
「だいじょぶ、だいじょぶ！」
「西条さん、お久しぶり。」
「どうも。」
としんのすけの後ろから、みさえとひろしが出てきて、西条が驚く。
「！？　お、覚えてるんですか？　私のこと…。」
しんのすけはそんな西条を見て頷いて答えた。
「どうしてか分かんないんだけどね。
もちろん、ウルトラマンやビーストのことも覚えてるゾ。」
「は、はぁ…。」
理解はしたが、納得できないまま西条は居間に入り、

出されたお茶に口を付けて一息つくと、一連のことをしんのすけに話した。
「…そっか、あのチップに風間君についてのことが…。」
「えぇ…。」
俯いて考え込むしんのすけ。
「しんのすけ、前も言ってたんです。オラを監視している奴がいるって…、それが…。」
みさえが答え、
「風間君についてのことがそのチップに入ってたなんて…。…そいつ、本当は風間君のこと調べてたんじゃないのか？」
ひろしも続けて答える。
「じゃあ、なんでお兄ちゃんのバイトしてる遊園地にいるのよ？」
続いてひまわりがひろしの言葉に答え、しんのすけが俯く。
西条が黙ってそれを見ていると、
その時、テーブルに置いてあったエボルトラスターが明滅を始めた。
しんのすけはそれを取ると立ち上がり、ひろし達の頷きに答えると、窓を開けて、庭に出て、エボルトラスターを掲げ、光となって飛び立った。
それと同時に西条のパルスブレイガーに出動命令が入った。

「エリア7、ポイント３４７にビースト振動波確認。ナイトレイダーにスクランブル要請。」
風間の指示を受けて今夜もナイトレイダーが出撃する。
山中ではトカゲ型のビースト・リザリアスが咆哮を上げていた。
ナイトレイダーが現場に到着すると、
そこに光が舞い降りてアンファンスの姿となった。
ウルトラマンはすぐさまリザリアスに向けてパーティクル・フェザーを発射。
付近にリザリアスの肉片が飛び散る。リザリアスが口から熱線を吐くが、

ウルトラマンは軽やかに避け、ジュネッスブルーにスタイルチェンジすると、
そのままメタフィールドを展開した。
メタフィールドに消えるウルトラマンとリザリアス、そしてチェスター。
それらの様子を監視者が謎の機器に逐一収めていた。
メタフィールドの中では既にウルトラマンとリザリアスの戦いが繰り広げられていた。
ウルトラマンはリザリアスの尻尾攻撃をかわし、口から吐かれる熱線もかわすと
上空からボードレイ・フェザーを放ち、それを受けて倒れたリザリアスが熱線を吐くが、
ウルトラマンはサークルシールドを展開し、それを防ぐと、
間髪入れず、ウルトラマンは擦れ違い様にシュトロームソードで一刀両断。
リザリアスは光の粒となって消滅。
西条は無言のままウルトラマンをじっと見ていた。
その後、ウルトラマンは姿を消し、メタフィールドも解かれた。
そして、ナイトレイダーが帰還した後、
現場ではホワイトスイーパーによる処理が行われていた。
「ポイント６２３。リザリアスの細胞収集終了。」
「了解。夜が明ける前にリザリアスの痕跡を全て消すんだ。」
「了解。」
ホワイトスイーパーによってリザリアスの肉片回収、
汚染物質の除去、区域の消毒が続けられる。
しかし、ホワイトスイーパーが把握する前に
既に一つの肉片が地面に現れた小さな闇の中に消えていった。
ＣＩＣでは風間がリザリアスとの戦闘データの分析をしていた。
その時、風間の横にしんのすけが現れた。

「風間君…。」
「しんのすけ…。」
驚き、しんのすけを見る風間。しんのすけも風間を見る。
『僕がふたば幼稚園に通っていたあの時…、あれは…不思議なほど幸せな時間だった…。
でも、僕は心のどこかで思っていた…。
こんな時間は…長くは続かないんだろうって…。
そして、今、僕にあるのは…変えられない…変えようの無い一つの未来だけ…。
しんのすけ…、恵…、僕は…ずっと皆と一緒にいられない…。』…
風間トオル

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２８　監視者　－ウォッチャー－（後書き）

しんのすけを監視していた監視者の持っていたチップに風間のデータが入っていたのは、一応伏線です。
あと、バーベキューでの会話シーンの一部を修正しました。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２９　鳥　－バード－

「イラストレーターは…監視者のデータにあったラファエルという言葉、
…何を意味しているのか知っているのね…。」
「…うん。間違いないゾ…。でも、風間君はその事は何も話してくれなかった…。」
昨日、皆とバーベキューをした河原で
しんのすけと西条が風間とラファエルについて話をしていた。
「西条副隊長。昨日言ったように風間君が嫌なら、
オラは無理に突き止めようって思わない…。
でも、もしこのことが…風間君を苦しめるものだったら…。」
そんなしんのすけを見る西条。
「ラファエルに…ルシフェル…か…。
天使と堕天使…。ただの偶然なのか…。それとも…。」
西条が空を見上げて呟いていると、影からその様子を何者かが見ていた…。

フォートレスフリーダム。
戻った西条が廊下を歩いていると、目の前に風間のホログラムが現れた。
「イラストレーター？」
しかし、風間はそれに答えず無言のままであった。
「イラストレーターはラファエルについて何か知っているんですよね？
…しんのすけ君が心配していました。もしこのことが…あなたを苦しめるものだったらと…。」
風間はただ黙って聞いていたが、目には気持ちの揺れが表れていた。
「これ以上、このことに触れない方がいい。」

「え？」
いきなり言葉を発した風間に驚く西条。
「しんのすけにそう伝えておいてください。
さもないと…、いずれ、お前自身が苦しむ事になるとも…。」
「どういう意…。」
西条が問いかけようとした時、風間の姿は既に無かった。

一方、別の廊下を歩く和倉隊長の前に、思いつめた顔の石堀隊員が立ち塞がった。
「隊長…。何故ウルティメイトバニッシャーが使えなくなったんですか？」
突然の質問に戸惑いつつも、和倉隊長は努めて冷静に答えた。
「あれが無くても我々にはハイパーストライクバニッシャーがある。」
しかし、横を通り過ぎようとする和倉隊長に向かって石堀隊員はさらに言葉を投げかけた。
「ウルティメイトバニッシャーが使えなくなったのは、
何者かによってデータが全て消去されたからだと！　…聞きました。」
「石堀…。」
その言葉に和倉隊長は驚き、石堀隊員の方を振り向いた。
石堀隊員も和倉隊長の方を向いて話を続ける。
「こういう噂は…止められません。
ＴＬＴ北米本部の考えは二つに分かれている。
そしてこの基地の中に裏切り者がいる可能性がある。この話は…本当ですか？」
睨みつける石堀隊員に対し、和倉隊長は少し考えて答えた。
「その話…、今後一切口にするな。」
そう言い残して和倉隊長はその場を足早に去っていった。
廊下の影では平木隊員がそれら一部始終を全て立ち聞きしていた。

一方、去る和倉隊長を見送り、立ち尽くす石堀隊員の背後を松永管理官が通りがかる。
その後、松永管理官はある部屋である人物と待ち合わせをしていた。
「遅くなりました。」
入室した松永管理官に対し、既に席についていたその人物は一言尋ねた。
「で、状況は？」

昼の遊園地。しんのすけは昨日、ウルトラマンとしての能力でＣＩＣに行った時のことを思い出していた。
昨日のＣＩＣ。突然しんのすけが横に現れ、驚く風間にしんのすけはある事を尋ねた。
「風間君…、ラファエルって言葉に思い当たること…ない？」
その言葉に風間は衝撃を受けるが、やがて一言答えた。
「ごめん…、今は…まだ…何も言えないんだ…。」
「風間君…。」
「ごめん…。」

そして、現在。しんのすけが恵の座っている席に目をやると、恵がポケットから何かを取り出してぼうっと眺めていた。
「恵ちゃん。」
しんのすけの呼びかけに、恵はハッとして振り向いた。
「あ、はい！　…って、しんのすけ君。」
その後、二人は並木道を歩き、やがて手すりにもたれるとしんのすけが話し出した。
「恵ちゃん…。一つ、聞いていい？」
しんのすけの質問に恵が頷く。
「もしかしてって思ったんだけど…恵ちゃんも…。」
恵はしんのすけのその言葉を聞くと、しんのすけのほうを見て答え

た。
「知ってたんだ…。トオルがプロメテの子だってこと…。」
「じゃあ…、やっぱり恵ちゃんも…。」
しんのすけの言葉に恵は頷いた。
「トオルと私はそれぞれ別々の遺伝子をベースに創られたプロメテの子で、
私が鳥のことに詳しいのも、アカデミーに一緒にいた頃、
トオルに教えてもらったからなの…。」
「ふーん…。あ、そういえば恵ちゃん、さっき何か見てたよね？」
しんのすけは話題を変え、恵は指摘されて少しドキッとする。
「う、うん…。」
「見せて。」
「い、いいけど…。はい。」
恵はしんのすけに先程見ていた何か、貝殻を使った翼を持った鳥のアクセサリーを見せた。
「ふーん…、でもなんで鳥なの？」
ストラップを見たしんのすけが恵に質問する。
「トオル、アカデミーにいた頃は鳥類学者になるのが夢だったから。
それは日本に旅立ったトオルのことを忘れないようにって思って私が作ったものなの…。」
「ふーん…。あ、そういえば風間君って、
ＴＬＴだと『イラストレーター』って呼ばれてるみたいだけどなんで？」
しんのすけは前々から疑問に思っていたことを恵に聞いた。
「イラストレーター…？　あ、そういう呼び名もあったな…。
昔は未来予知したことを絵に描いてたからそう呼ばれるようになったの。」
「ふーん…。…え？　未来予知！？」
恵の言葉にしんのすけは驚き、素っ頓狂な声を上げるが、恵は平然と答えた。

「うん。私達、プロメテの子は生まれつき何かしらの特殊能力を持っているの。
皆、テレポーテーションなんてお手のものって感じで、
その中でトオルだけが唯一、優れた未来予知の能力を持っているの。」
「ふ、ふーん…。風間君ってそんなことできたんだ…。」
恵から聞かされたプロメテの子についてのあまりに突飛な話にしんのすけは驚きを隠せない。
一方、恵は話を続ける。
「トオルってその能力のせいで色んなものが見えて、色んな事考えちゃうの…。
予知の結果に囚われて、自分の望んでもいないことをやろうとしたりとか…。」
恵は笑顔でしかしどこか照れくさそうに風間との事を話し始めた。

一方、風間は辛い顔で恵との事を思い出していた。
「ふーん。あなたって鳥ばかり見てるのね。」
13年前、アカデミーの教室。
窓から外を見ていた風間が自分を呼びかける声に振り向くと、そこには恵がいた。
「いつもその窓から飛んでいく鳥ばかり見てるよ。」
近づいてくる恵。風間は再び窓の外に目をやる。
「鳥は自由で良い…なんてつまらない事を考えているわけじゃないよ。
第一、鳥は自由なんかじゃない。飛ばなければ餌も取れないし渡りも出来ない…。
飛ばなきゃいけないから飛んでいるんだ。」
虚無感を含んだ目で飛んでいく鳥を見つめる風間。そこに明るい声が響いた。
「そう！　鳥は別に自由なんかじゃないの。

ただ飛んでるだけの鳥の中に勝手に自由を見ている。
…自分が自由になりたいから…。私はそうだよ。」
風間が隣を見ると、いつの間にか恵が来ていて、風間と同じように
飛んでいく鳥を見ていた。
それから数日後、明るく大きく美しい満月が出た夜。
男子寮で風間が一人で部屋で寝ていると窓から女子寮にいる恵が入
ってきた。
「恵!?　な、何で?　ここだん…。」
深夜の意外な訪問客に風間が驚く。
恵は口に指を当てて「シィー」とジェスチャーすると胸を張って風
間を誘った。
「ちっちゃな自由を試そうかなーって!」
見ると、恵は寝巻きではなく遠出用の格好をしていた。
「本気で抜け出す気なの?」
風間が驚きをもって尋ね、恵は自信をもって答える。
「森を抜ければルート４５に出るから、
ヒッチハイクをすれば夜明けまでには海に出られるよ。」
しかし、風間は目を閉じると静かに告げた。
「君と僕は…海まで辿り着けない…。僕達は見つかる。」
しかし、恵は笑顔を崩さない。
「それっていくつもある未来の一つなんでしょ?
今あなたが言った未来が一番ありうる未来かもしれないけれど、
その未来は十分変えられるから!」
そう言って恵がブラインドを開けると、月明かりがふんわりと部屋
の中に落ちてきた。
「…頭に思い浮かべてみて。海に辿り着いた時の潮風と、聞こえる
波の音を…。」
恵の頭に浮かぶ満月の下、月明かりに照らされる砂浜、
聞こえる波の音、そして…、貝殻。
月明かりに照らされながら、さめないゆめみたいに想像力を働かせ

る恵。
風間は部屋の影からそれをただ黙って見ていた。

「恵…。僕は…。」
現在、ＣＩＣで風間は一つ大きく深いため息を吐いた。

「本当に大丈夫なのかね？　あの若者達を放っておいて。」
ある部屋。ＴＬＴ－Ｊ最高幹部の一人である東郷が
向かいに座っている松永管理官に尋ねる。
「ご心配無く。大丈夫です。」
心配する東郷とは逆に松永管理官は不敵な笑みを浮かべて答えた。
野原家。しんのすけが何かを察知し、ポケットから明滅するエボル
トラスターを取り出す。
「彼らの日常は戦いの中にあります。」
ＣＩＣ。ビースト振動波を確認した風間が指示を送る。
「彼らが何を思い、何に迷ってもビーストは現れる…。」
コマンドルーム。プロテクターを着けてナイトレイダーが出撃する。
「彼らは戦わなければなりません。
一つの巨大な敵を前に、退く場所も無く、失敗も許されず…。」
恵も風間と共に画面を覗き込む。
「ですから、それぞれが例えどんな秘密を抱えていたとしても
決して、お互いを、裏切る事はありません…。」
出撃したチェスターが夜の闇の中に消えていく。
「それが結果的に、最もコントロールしやすいのです。」
松永管理官の話を聞き、東郷は無言で頷いた。

チェスターが現場に到着すると、
目が二つから六つに増え、肩から巨大な角が生えたリザリアス・グ
ローラーが待ち構えていた。
「あれは！？」

「リザリアスが変化してる！？」
倒したはずのリザリアスの復活と変化に平木隊員が驚く。
チェスターが攻撃を開始すると、リザリアス・グローラーも口から強力熱線を吐いて反撃する。
そこに光に包まれたウルトラマンが降り立ち、
ジュネッスブルーへとスタイルチェンジし、メタフィールドを展開。
しかし、すぐさま上空にアンノウンハンドの闇が現れて、
ダークフィールドGに変えられてしまった。
「やはりアンノウンハンドがリザリアスを再生、強化させたのか…。」
CIC。リザリアス・グローラーの分析をした風間が呟く。
「アンノウンハンド…。それがこのビーストをパワーアップさせたの？」
恵の呟きに風間が答える。
「あぁ。ダークフィールドGを展開し、ビーストを強化させ、第3の闇の巨人、ルシフェルを行使する存在…闇の見えざる手だ…。」
一方、チェスターα、β、γはストライクチェスターに合体して、δと2機、ダークフィールドGに突入する。
ダークフィールドGの中ではウルトラマンとリザリアス・グローラーの戦いが始まっていた。
「西条！　一気に叩くぞ！」
「了解！　ストライクバニッシャーシュート！！」
和倉隊長の指示を受けて西条がストライクバニッシャーを発射。
リザリアス・グローラーの鼻面に命中するが効果が無かった。
「なんて奴だ…。」
石堀隊員が急いでリザリアス・グローラーの情報収集を始める。
一方、ウルトラマンはスピードを武器に戦いを展開するが、
リザリアス・グローラーの圧倒的なパワーと強靭さに次第に追い詰められていった。

ウルトラマンは上空に飛んでボードレイ・フェザーを撃つが、
リザリアス・グローラーにあっさりと避けられてしまう。
「ウルトラマンの攻撃パターンを予測しているんだ！」
リザリアス・グローラーの情報を収集した石堀隊員が叫ぶ。
攻撃を避けられたウルトラマンは
リザリアス・グローラーの強力熱線をまともに受けてしまった。
「あのビーストはしんのすけの戦い方を学習している…！」
「え…！？」
分析結果を見て風間の顔に焦りが浮かぶ。
リザリアス・グローラーは倒れたウルトラマンを掴むと無理やり立たせ、
腹部に生まれた第二の口で腕を噛み、尻尾で思い切り吹き飛ばした。
大ダメージを負ったウルトラマンのコアゲージが点滅を始める。
さらにリザリアス・グローラーの周りをアンノウンハンドの闇を含んだ、
ルシフェルの大量の白い羽根が覆い、
全身にエネルギーが満ち溢れたリザリアス・グローラーは、それを二つの口に集中させた。
一方、何とか立ち上がったウルトラマンはフラフラながらもリザリアス・グローラーと向かい合った。
「読まれている！」
西条が叫ぶ。
「しんのすけ！　逃げろ！！」
「しんのすけ君！！」
風間と恵も思わず身を乗り出すが、
その時、リザリアス・グローラーの強力熱線がウルトラマンに向けて放たれた。
サークルシールドを張る暇もなく、
リザリアス・グローラーの強力熱線をもろに受け、大爆発に包まれるウルトラマン。

勝利に咆哮を上げるリザリアス・グローラー。
しかし、次の瞬間。その爆発の炎が次々と収束していった。
ウルトラマンはリザリアス・グローラーの放った強力熱線、ダークフィールドGの闇を吸収し、
光に転化して、アローアームドネクサスに集め、
スピルレイ・ジェネレードの強化版、ナックレイ・ジェネレードを放った。
ナックレイ・ジェネレードを受けたリザリアス・グローラーは爆発を起こし、光の粒となった。
ウルトラマンの勝利にナイトレイダーと風間、恵はホッと胸を撫で下ろした。

戦い終わったしんのすけは家の自分の部屋で、ある一枚の写真を机の中から取り出した。
それは、ふたば幼稚園に通ってた頃のしんのすけと風間、
そしてマサオ達が写っている写真であった。

ＣＩＣ。風間はいつもの測定器を腕に付けていた。
測定を終え、測定器をデスクの中に戻すと恵から渡された鳥のアクセサリーを見た。
「恵…。」
恵に思いを馳せると、風間はデスクの中から一枚の貝殻を取り出した。
『君と僕は…海まで辿り着けない…。僕達は見つかる。』
『それっていくつもある未来の一つなんでしょ？
今あなたが言った未来が一番ありうる未来かもしれないけれど、
その未来は十分変えられるから！』
１３年前、風間は恵の誘いに乗らず、恵一人が海を目指して旅立った。
そして翌日、風間は連れ戻された恵の姿を目撃した。

恵は大人達を振り切ると、風間の所に駆け寄ってきて手を差し出す。
追いかけてきた大人達がすぐさま恵を捕まえるが、
連れて行かれる恵は風間に向かって笑顔を見せた。
そんな恵を見送った風間は自分の手の中に何かを感じた。
手を開けてみると、そこには小さな一枚の白い貝殻があった。
『その未来は十分変えられるから！』
「恵…。」
しかし、風間の表情は暗かった。
それは、彼自身既に自分の変えられない未来を知っていたから…。
その後、風間は日本へ旅立ち、風間と恵はアカデミーで二度と顔を合わせる事は無かった。

現在。風間は貝殻をデスクの中に戻すと、
デスクの中から一枚の写真、しんのすけの持っているものと同じ写真を取り出した。
幼稚園の頃に思いを馳せる風間。
「あの頃はとても幸せだった…。でも、今は…。」
風間の脳裏に浮かぶ幼稚園の頃の仲間達、しんのすけ。
『その未来は十分変えられるから！』
そして、風間の脳裏に浮かぶ恵の言葉。
「しんのすけ、もうこのことには関わらないでくれ…。
…僕はお前の親友として、お前を傷付けたくはないんだ…。恵…君のことも…。」
そう呟く風間の目には涙が溜まっていた。

自分の部屋でしんのすけは写真を見た後、
それを大事に机の中にしまい、ベランダに出て星空を見上げた。
二羽の鳥が果てしない海を渡っていく…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　２９　鳥　－バード－（後書き）

今回の話では、風間が何故今まで犠牲者を出す可能性のあるような指示をナイトレイダーに送っていたのかという部分の謎を消化しました。
犠牲は出したくないものの、自分の見た未来では、それが一番被害を最小限に食い止める方法だと出て、しかも自分の予知の結果に囚われているため、そのような作戦を立案した…といった感じです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３０　詩織　－ロストメモリーズ－

学校が休みで遊園地のバイトも休みのしんのすけは、
マサオ達と一緒に街中のベンチに座って、アイスを食べていた。
「ウーッ、うまい！　やっぱ、チョコ味だよねぇ～。」
しみじみと味わうしんのすけだったが、ネネから話しかけられる。
「ねぇ、文化祭はもうやった？」
ネネの問いにしんのすけは少し考えて答えた。
「うーん…、オラ達のところはまだだけど…。」
ネネはそれを聞くと嬉しそうな顔で答えた。
「そう。うちの学校の演劇部はタカラヂカ歌劇団みたいなことをやったの。
女子は男装して、男子は女装して…、もう大絶賛だったんだから。」
「ふーん…、そのアイデア出したの、ネネちゃんでしょ。」
「ピンポーン！　どうして分かったの？」
しんのすけは昔を思い出して答える。
「ネネちゃん、昔からそういう歌劇団みたいなのに興味があったような感じだったからね～。」
「そうそう。」
マサオも続けて答える。
そんな会話をしている皆の前を一人の女性が通り過ぎ、
しんのすけはすぐさま立ち上がってその女性の後にピッタリ付いていった。
「あ、しんちゃん！」
マサオが呼び止めるが、しんのすけは意に介さずついていく。
そんなしんのすけにネネが少し呆れる。
「やれやれ…、相変わらずね…。」
一方、女性についていくしんのすけがフードをかぶった者とすれ違った時、

ポケットの中に入れていたエボルトラスターが一瞬だけ明滅した。
「おねいさ～ん。ボクと一緒にアイス食べなーい？」
女性に声をかけるしんのすけ。
しかし、その女性、私服姿の平木隊員は振り返ると笑顔でしんのすけをあっさりと切り捨てた。
「ごめんなさい。私、これからデートなの！」

「これ、詩織の？」
フォートレスフリーダムのコマンドルーム。
石堀隊員がテーブルの上に置いてあったマニキュアを手に取って見る。
「そう言えば塗ってたわね。何か凄く楽しそうだったわよ。」
ここ数日、ビースト事件が無かったせいか、機嫌の良い西条。
「久々の休暇だからな。友達と会うだとか言ってたぞ。」
「へぇ…。」
二人の言葉を聞きながら詩織のマニキュアを見つめる石堀隊員は、それをパソコンの横に置くと再びキーボードを叩き始めた。

「ここ一週間でこんなに行方不明者が…。ビーストの仕業じゃないとは思うけど…。」
あるバー。詩織は携帯電話のニュースを見ながら暇を持て余していた。
『大なり小なり、人はやせ我慢をしながら生きているんだと思う。どうしてかって？　私がそうだから。』
詩織がマニキュアの塗られた自分の爪を触りながら時間を潰していると、
後ろから声が響いてきた。
「ごめーん！　しおちゃん。待ったぁ？」
「ううん、全然。」
『嘘。十分は待った。この子は昔からそう。』

そんな本音は全く出さず、詩織は笑顔で振り向いた。
それを見て詩織の友達、表秋子も安堵の笑顔を浮かべる。
「で、何なの？　アコ。久しぶりに会おうだなんて。」
『聞かなくても分かってる。アコがこんな顔をする時は…。』
詩織の問いに秋子はモジモジしながらも幸せオーラ全開で答えた。
「実はね…。私…、汚田さんにやっとプロポーズされちゃった！！」
「良かったじゃない！　おめでとう！！」
詩織は笑顔で秋子の喜びを祝福した。
トイレ。流れる水。詩織は鏡に映る自分を見つめた。
『親友…だもんね。腐れ縁とも言うけれど…。
普通に…来るべき時が来ただけだし…。』
鏡の中の自分に向かって自嘲気味に笑いかける。
しばらくして詩織が席に戻ると何故か秋子の姿が無かった。
「あれ…？　アコ？　…何？　この…甘い匂い。」

地下道。フードを被った男が地面に一人の女性、秋子を降ろす。
フードの男は眠ったままの秋子の顔を覗き込み、首筋に自分の口を近づけていく。
「その人、どうするつもり？」
フードの男が顔を上げると、しんのすけが立っていた。
「一瞬だけど…。間違いなくこれが反応したゾ。」
しんのすけはポケットの中からエボルトラスターを取り出してフードの男に見せた。
フードの男はゆっくりと立ち上がるとしんのすけに向かって低い唸り声を上げる。
「ビースト？」
しんのすけが呟いた時、
「やっと見つけたわ！」
と反対側から詩織もやって来た。
「あれ？」

詩織を見て驚くしんのすけ。
「あ、しんのすけ君。確かさっき…。」
しんのすけを見て詩織も驚く。その隙を突いてフードの男が詩織に襲い掛かるが、
詩織はフードの男の腕を取って壁に叩きつけ、
首筋にパルスブレイガーを当てて電撃を放った。
「ごめんね。これ、世界最高のスタンガンなんだ。」
しかし、フードの男はひるむ事無く再び詩織に襲いかかる。
首を絞められながらも詩織は何とか二発目の電撃を放った。
さすがに苦しむフードの男。詩織はふと戦いで欠けた自分の爪を見た。
一方、しんのすけはブラストショットを取り出して
フードの男に向かって撃とうとするが、詩織が組み合っているため、
撃つことができない。
その時、フードの男が再び暴れ出し、
詩織を振り払い、しんのすけを突き飛ばして逃走を図った。
「待て！」
しかし、しんのすけが追いかけようにも既にフードの男は姿を消してしまっていた。
一方、詩織はいまだ目を覚まさない秋子を抱き起こして必死に呼びかけていた。
「アコ、アコ大丈夫？　アコ！　しっかりして！　アコォー！！」

「詩織から妙なデータが？」
「えぇ。急いで調べてほしいって言っていたわ。」
再びフォートレスフリーダム。石堀隊員の問いに西条が答える。
詩織から送られたデータを開いた石堀隊員が驚きの声を上げた。
「まるで…昆虫のクチクラだな。昆虫人間ってやつか？　しかもこいつ…。」
「ビースト振動波が出ている。どうやらビーストのようですね。し

かも、人間に擬態する。」
風間のホログラムが現れて石堀隊員の言葉に続いた。
「ビーストが人間に化けられるなんて…。」
驚く西条。石堀隊員も言葉を繋げる。
「確かに、今までのビーストの捕食行動と比べて高度すぎる。」
和倉隊長が呟く。
「進化しているという事か…。しかし、進化のスピードが早すぎる…。」

病院に運ばれた秋子。やや遅れて秋子の婚約者、汚田急痔が病室にやって来た。
「秋子は?」
焦る汚田に向かって、詩織が落ち着いて答える。
「大丈夫。眠っているだけ。」
「くっそぉ! どこのどいつがこんなマネを…。見つけたら絶対ぶん殴ってやる!!」
しんのすけはそんな汚田をじっと見ていたが、
汚田はしんのすけに気づくと、何か思いながら詩織に尋ねた。
「彼は?」
「あ、アコを助ける時に力を貸してくれたの。」
それを聞くと、汚田はしんのすけに近づいて質問した。
「失礼かもしれないけど…名前は?」
いきなりの質問だったがしんのすけはすぐに答えた。
「野原…しんのすけ。」
「やっぱり…。」
汚田は勘が当たって呟いた。
「やっぱりって…、汚田さん、彼と知り合いなの?」
「あぁ。昔、あるアパートで張り込みやってた時に出会ってな…。」
詩織に事情を説明した後、汚田は再びしんのすけの顔を見た。
「ありがとな、しんちゃん。」

「いや、それほどでも…。」
頭を下げ合う汚田、しんのすけ。

その後、再び心配そうに秋子を見つめる汚田の姿を見て詩織が心の中で呟く。
『ちょっと、気持ちは分かるけど、私には何か無いわけ？　お前は大丈夫かとか…。』
その時、汚田が振り向いて詩織に尋ねた。
「お前は大丈夫だったのか？」
「え？　う、うん。」
驚きながらも詩織は笑顔で答え、再び心の中で呟いた。
『この人は昔からそう。変わってない…。』

「しっかし、お前はなんていい同僚なんだ！
お前の友達にこんないい娘がいたなんてなぁー！！」
今日、詩織と秋子が待ち合わせをしたバー。
数ヶ月前、そのバーで詩織と秋子、それに汚田の３人が飲んでいた。
「もぉ！　汚田さんったらお世辞上手すぎ！」
そう言いながらもまんざらではない秋子。
酔っ払ってすっかり上機嫌の汚田が慌てて弁明する。
「お世辞なんかじゃなくてホントですよ！
あ！　詩織、見てみろよ！　秋子さんの爪、ピッカピカだぞぉ！」
そう言って汚田は秋子の手を取って詩織に見せた。
言われた詩織はまだマニキュアを塗った事の無い自分の爪と秋子の爪とを見比べる。
「あぁ。あったけぇ～。」
そのまま秋子の手に頬すりする酔っ払い汚田。
それを見た詩織の全身から凄まじい怒りと殺意のオーラが発せられた。
『この日からだっ！！！　私が酔っ払い嫌いになったのは！！！！

！』

「詩織！　お前、何か勘違いしてないか？」

その翌日、警察署。

廊下を進む制服に身を包んだ婦人警官詩織を汚田刑事が呼び止める。

汚田の言葉に詩織は歩みを止め、振り返って答えた。

「勘違いぃ？　何を？」

明らかに機嫌が悪い詩織に少しビビりながらも汚田は話を進める。

「俺は最初からお前と話すつもりだったんだ…。それをお前が彼女を連れてくるから…。」

「仕方ないじゃない。また彼氏と別れたってアコが泣きながら電話かけてきたんだから。」

「…いいか！　俺はな！　ずっと迷ってた事をあの日聞こうと思ってたんだよ！」

「聞くって…何を？」

話を進めるごとに2人の間に苛立たしい空気が漂う。

その空気をぶち破るかのように、向こうから掃除のおばちゃんが慌ててやってきた。

「お、汚田さん！　大変なのよ！」

興奮しながら話す掃除のおばちゃんに汚田はため息を吐いて対応する。

「あのね、おばちゃん。俺さ、

今、彼女にすっげー大事なこと話そうとしてるの。だから…、ゴメン！」

手を合わせて断る汚田を見て掃除のおばちゃんは頷き、

「分かったわ。じゃあ、平木さん。ちょっと来て！　もう大変なんだから！

来れば分かるから来て！　何だか分からないけどもうすっごいのよ！」

「え！？　あ、ちょ、ちょっと…。」

とそのまま詩織は掃除のおばちゃんに連れて行かれてしまった。
そんな二人を見送る汚田が呟く。
「それって…意味ないじゃん…。」

「また浮かれたネコとかじゃないんですか?」
駐車場。掃除のおばちゃんに連れて来られた詩織が
掃除のおばちゃんの示す方向にライトを向けて近づいていくと、
人間より大きい生き物がうずくまってボリボリと何かを貪り喰っていた。
「猫っていうか…熊!?」
その声に小型のビースト・アラクネアが振り返った。
「何!? こいつっ!」
突如、アラクネアが詩織に向かって襲いかかり、
詩織はギリギリそれをかわすが、掃除のおばちゃん共々衝撃で腰を抜かしてしまった。
「詩織っ!!」
そこに汚田がやって来て、腰を抜かした詩織を見ると、アラクネアに飛びかかる。
が、奮闘空しく逆に弾き飛ばされてしまった。
「汚田さん!」
叫ぶ詩織に向かってアラクネアが再び迫ってくる。
振り下ろされる鋭利な爪に詩織は思わず頭を抱えた。
その時、辺りに銃声が響き、アラクネアは光の粒となって消えた。
続いて戦闘服に身を包んだ3人、ナイトレイダーが姿を現した。
アラクネアをディバイトガンナーで倒したのは石堀隊員だった。
「状況終了。生存者の確保。」
「了解。」
和倉隊長の指示を受けて石堀隊員が汚田のもとに向かう。
状況は分からずとも、とりあえず危険は去った事を知り、
詩織も急いで汚田の所に向かった。

「何であんな無茶を…？」
涙ぐみながら尋ねる詩織に向かって汚田は照れたように笑って答えた。
「詩織…。お前にケガさせるわけにはいかないからな…。」
汚田の無事を確認した石堀隊員はどこか複雑な目で二人を見ながらその場を離れた。
「話…まだ終わってないだろう？　あの日、俺がお前に聞こうと思ったのは…、
お前が俺の事をどう思っているかだ…。」
汚田の言葉に、お互いを見つめ合ってしまう二人。
「何を…こんな時に…。」
戸惑う詩織。しかし、汚田は恥ずかしさを必死に押さえながら自分の想いをぶちまけた。
「けどそんな事は関係ない！　今、気づいた。俺は…お前の事が…好きだ…。」
「…！」
あまりに真っ直ぐな告白に言葉が出てこない詩織。
そこに、
「お話中のところ、失礼します。」
「！？」
いつの間にやら松永管理官が二人の真横に立っていた。
驚く詩織と汚田を無視して、松永管理官が話を始める。
「平木詩織さんですね？」
「…はい。」
「どうぞ、こちらへ。」
松永管理官の怪しさも手伝って、
詩織は後ろ髪を引かれる感じで汚田の元から離れていった。
そして、それと入れ違いに大原リーダーと三沢が汚田の所にやって来る。
「何なんだお前ら！？」

汚田の問いに大原リーダーが静かに答えた。
「あなたは知らなくていいわ。」
その直後、詩織の後方で激しい光が起きた。

「気絶したショックで何も覚えていないの？」
病院。お見舞いに来た秋子がリンゴの皮を剥きながら心配そうに尋ねる。
ベッドに座る汚田はどこか呆けた感じで答えた。
「うん…。なんか、すごく大切なことを誰かに…。」
「言ったの？」
秋子の問いに汚田はしばらく考えるが、やがて笑顔で言った。
「まぁ、大したことじゃないんだろう。」
その言葉に、開けられかけた病室の扉が
再び閉められたのを汚田も秋子も気づいていなかった。
病室の外。扉を開けられなかった詩織は花束を抱えたまま壁に身を預けた。
壁越しに病室の中の会話が聞こえてくる。
「どっちにしろ、毎日、見舞いに来てくれてありがとう。感謝している。」
「大した事出来ないけれど、汚田さんの側にいたいから…。」
「秋子さん…、俺…。」
「汚田さん…。」
『スペースビーストだとかナイトレイダーだとか、聞かされた話はどれもマンガじみていた。
…上等じゃない！　人知れず世の中の為に戦うナイトレイダーの仕事は、
子供の頃から婦人警官になりたかった私にしてみれば…天職以上ってもんよ…！』
フォートレスフリーダムの射撃場。
ナイトレイダーの制服に身を包んだ詩織が厳しい顔でディバイトシ

ューターを放った。

再び現在。

「どうした？」

昔に思いを巡らせていた詩織に向かって汚田が尋ねる。

「…うん、忙しい？」

しかし詩織は質問には答えず、逆に汚田に近況を尋ねた。

詩織の態度を不審に思いながらも、汚田は話を合わせた。

「あぁ、ここんところ、行方不明事件が立て続けで…。」

「そうなんだ。」

マニキュアを塗った爪をいじりながら相槌を打つ詩織。

そんな詩織を見て、ふと汚田の視線も詩織の爪へと注がれる。

汚田の視線に気づいた詩織はハッと顔を上げ、笑顔で口を開いた。

「おめでとう。」

「聞いたのか？　秋子に。」

「うん。」

笑顔を浮かべる詩織だったが、

それを見ていたしんのすけはそこから哀しみしか感じ取れなかった。

「平木隊員、あの刑事さんの事が好きなのか…。」

病室にいるのが気まずくなり、屋上にやって来たしんのすけが

あいから貰った翼の生えたぶりぶりざえもんを見て一人呟く。

その時、エボルトラスターが一瞬明滅し、しんのすけは急いで病室に戻った。

一方、秋子の病室の扉に何者かが手をかけようとしていた。

「なんか用？」

しんのすけの言葉にその何者か、フード男が振り向く。

「今度こそ！」

そう叫んでしんのすけはブラストショットを取り出し、フード男に向かっていった。

その頃、詩織は病院の外に出てパルスブレイガーで分析結果を聞いていた。
「平木、その男はビーストに間違いない。ＴＬＴが検知できない理由はＣＩＣで調査中だ。
この一週間でその街で起きた１６件の行方不明事件と合わせてな。」
「行方不明事件…。」
和倉隊長からの報告を受け、
詩織は先程汚田が言った行方不明事件の事を思い出す。
「汚田さん…。」
「俺がどうかしたか？」
「え？」
驚いた詩織が振り返ると汚田が自分の真後ろにいた。
「おい。急にどうしたんだ？」
「お、汚田さんこそ、どうしてここに？」
「いや、お前が…。」
その時、詩織の前を逃げるフード男とそれを追うしんのすけとが横切った。
「あ！　私、急用出来ちゃったから！　汚田さん！　アコの事よろしくね！」
そう言い残して詩織もしんのすけとフード男を追ってその場を走り出した。
「おい！　詩織！　…あいつ。」
それを見て汚田の目付きが変わる。
「フードの男が現れました！　現在、追跡中です！」
詩織からの連絡を受けて和倉隊長が立ち上がる。
「ＣＩＣ。例のビーストを捕捉しました。スクランブルの許可を！」
フード男を追いかけるしんのすけ。詩織も先回りしてフード男を追う。

そして二人はフード男が逃げ込んだ工場の入り口でバッタリ顔を合わせた。
「平木隊員！　どうしてここに？」
詩織が来ていた事にしんのすけが驚く。
「あんなに派手に追いかけてたら誰だって気づくわよ。」
そう言うと、詩織はパルスブレイガーをアタックモードにチェンジした。
そんな詩織をまじまじと見るしんのすけ。
「な、何？」
「いや、ＴＬＴには平木隊員みたいないい女が多いなって思って…。」
「い、いい女って…。」
詩織はしんのすけの言葉に少し顔を引きつらせる。
その時、辺りに物音が響いた。
二人が見ると、前方の物陰にフード男がうずくまっていた。
フード男を見つけてしんのすけと詩織が近づくが、そこにあるのはフードだけだった。
「あれ？」
中身の無いフードを不思議そうに見つめるしんのすけ。
その時、詩織のすぐ後ろにフードを外したフード男、昆虫人間が立っていた。
すぐさま詩織は振り向くが、昆虫人間は詩織めがけて口から甘い息を吐きかけた。
「そうか…これが…さっきの…。あ…。」
強烈な眠気に襲われ、詩織はそのまま意識を失ってしまった。

「平木隊員！」
倒れた詩織を見てしんのすけはブラストショットを昆虫人間に撃つが、
人間離れした動きにかわされてしまい、

ようやく当てた一撃もさほど効果が無かった。
しかし、怯んだことは怯んだので、隙を突いて、連続でブラストショットを撃つが、
硬い表皮に阻まれ、ダメージは与えられずにいた。
その時、昆虫人間の頭上にアンノウンハンドの闇が現れ、
闇から降り注いできた白い羽根に身を包まれた昆虫人間が次第に巨大な姿へと変わっていく。
それを見たしんのすけはエボルトラスターを取り出し、変身と同時にジュネッスブルーにスタイルチェンジ、自身も巨大化しつつ、すぐさまメタフィールドを展開した。

ダークフィールドGの中。
巨大化した昆虫人間が辺りを見渡すと、
上空からウルトラマンが現れて飛び蹴りを浴びせた。
着地したウルトラマンは倒れた巨大昆虫人間に近づくが、
巨大昆虫人間は隙を突いてウルトラマンの腕を掴み、左腕から電撃を放った。
「これって…さっきの!?」
電撃を受けたウルトラマンは詩織のパルスブレイガーの事を思い出す。
さらに巨大昆虫人間は苦しむウルトラマンに向かって甘い息を吐きかけた。
強烈な眠気で意識朦朧となっていくウルトラマンの背後から
巨大昆虫人間が忍び寄ってくる。
しかし、ウルトラマンは何とか眠気を吹き飛ばして意識をはっきりさせ、
近づく巨大昆虫人間に向かって振り向き様に
光を集中させたパンチ、ジェネレード・ナックルを叩き込んだ。
殴られた巨大昆虫人間は吹き飛ばされ、
ウルトラマンは止めを刺そうとクロスレイ・シュトロームの構えを

取るが、
その時、巨大昆虫人間の全身から炎が立ち上り、
内部から爆発を起こして光の粒になってしまった。相手の自滅にウルトラマンは呆気に取られる。
一方、ＣＩＣで風間は冷静に状況を分析していた。
「急激な進化による巨大化に体を維持できなかったのか…。」

その頃、外の世界ではチェスターが現場上空に到着していた。
「平木隊員のパルスブレイガーはエリア１、ポイント５５８から登録信号を出しています。」
風間の指示を受けて石堀隊員が必死に呼びかける。
「詩織！　詩織！　くそっ！　連絡が取れない！！」

「詩織！　おい！　詩織！」
現場では後をつけていた汚田が倒れた詩織を抱き起こしていた。
何度呼びかけても目を覚まさない詩織。
辺りにはパルスブレイガーの呼び出し信号が鳴り響いていた…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３０　詩織　－ロストメモリーズ－（後書き）

原作「ネクサス」でのＴＶ未放映、
ＤＶＤの第９巻に「Ｅｐｉｓｏｄｅ　ＥＸ」として収録された話にあたる話です。
今回はこの小説での詩織の元同僚を「クレしん」のまたずれ荘の住人の一人、汚田急痔に変更。
冒頭のシーンに小説内での時間の経過を表すために、文化祭について話をするシーンを入れました。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３１　告白　―コンフェッス―

「詩織！　詩織！！」
汚田が倒れた詩織を抱き起こして必死に呼びかけていると、
フード男が複数現れて周りを取り囲んできた。
「お前ら…。皆動くな！」
汚田はフード男達の異常さを感じ、すぐさま銃を取り出して構えるが、
フード男達は臆する事無く二人に近づいてくる。
「何だ！？　こいつら…！」
パニックに陥りかける汚田に詩織の声が聞こえてくる。
「逃げ…て…。」
「詩織！？　詩織！」
声を聞いた汚田は詩織の顔を覗き込んで再び呼びかける。
一方、フード男達はフードを外してその醜悪な素顔をさらした。
「逃げ…て…。」
「詩織…。くっそぉぉっ！！」
汚田は大声で叫ぶとフード男達に向かって銃を構えた。
その時、フード男の一体が光の粒となって消えた。
汚田が振り向くと、ナイトレイダー、和倉隊長、石堀隊員が駆けつけていた。
「掃討せよ！」
「了解！」
和倉隊長の指示を受け、石堀隊員がフード男達に向けてディバイトランチャーを放った。

「状況終了。」
等身大のビースト、フード男こと昆虫人間を一掃したナイトレイダー。

汚田は目の前で繰り広げられた現実離れした現実に呆気に取られていたが、
ふと近くにいたはずの詩織がいない事に気づいた。
「詩織…？　詩織！？　詩織！！」
それを見て石堀隊員がパルスブレイガーで詩織に呼びかける。
「詩織。詩織！　応答しろ！」
「どうした？」
「詩織が見当たりません！」
「何！？」
石堀隊員に指摘されて和倉隊長は急いで周りを見渡すが、詩織はどこにも見当たらなかった。
そこに汚田がやって来て抱いていた疑問をぶつけてきた。
「お前ら、何者だ！　何で詩織と知り合いなんだ！」
「お前は知らなくていい。」
呼びかける声に汚田が振り返ると、背後に三沢と大原リーダー、M・Pが来ていた。
「今度は何だ！」
汚田は三沢に詰め寄るが、M・Pの一人に腕を取られ、銃を奪われてしまう。
「何する！　離せ、この野郎！！」
汚田は激しく暴れて抵抗し、M・Pの腕を振り解くとその場から逃走した。
「ちっ！　すぐに捕獲しろ！」
三沢の指示を受けてM・Pも汚田の後を追う。
その時、和倉隊長に風間から指示が入る。
「平木隊員の位置は捕捉してあります。後は処理班に任せて帰還してください。
西条副隊長も、ビーストとウルトラマンは既にロストしているので一旦帰還を。作戦を練ります。」
「了解。」

上空に待機していた西条はチェスターを工場の敷地内に着陸させ、
和倉隊長達を回収した。

その頃、詩織は昆虫人間の一人に連れ去られていた。
昆虫人間は安全で人気のいない場所まで逃げると、抱えていた詩織
を地面に降ろし、
フードを外してまだ意識がはっきり戻らない詩織の顔を覗き込んだ。
「見つけたゾ！」
昆虫人間が顔を上げると、しんのすけがやって来ていた。
しんのすけはエボルトラスターの刃にあたる部分を
光の短剣・シャイニングスラッシュに変化させて、
昆虫人間に斬りかかるが、先程と同じくさほどダメージを与えられ
なかった。
「くっそ！　カントンメーン！」
昆虫人間の攻撃をかわすと、
しんのすけは昆虫人間目掛けて、シャイニングスラッシュで面を打
った。
それを受けると、昆虫人間は頭を抱えて苦しみ、そのまま光の粒と
なって消えてしまった。
「あいつ、頭が弱点だったのか…。」
勘が当たったしんのすけがホッとしていると、
意識を取り戻した詩織がゆっくりと体を起こしていた。
「あ、平木隊員、大丈夫？」
詩織が起き上がった事に気づいたしんのすけが駆けつけると、詩織
は笑顔を浮かべた。
「ありがと！　しんのすけ君！」
「あ、いやぁ、それほどでも…。」
お礼を言われたしんのすけは照れて頭を掻いた。
一方、ＣＩＣの風間もしんのすけにお礼を言っていた。
「なるほど、そういう事か。ありがとうしんのすけ。」

「おい！　いたか？」
「いや！　駄目です！」
「クソッ！　手間取らせやがって！」
部下の報告を受けて三沢は苦虫を噛み潰したような表情になる。
物陰から見ていた汚田はＭ・Ｐが近くから去ったのを見てホッと胸を撫で下ろした。
しかし、いきなり携帯電話が鳴って飛び上がって叫び声を上げるほど驚いた。
恐る恐る携帯電話に出ると、電話の向こう側から緊張した息づかいが聞こえてきた。
「お、汚田さん？」
「…詩織か？」
「汚田さん！　今、どこ？」
「無事だったか…。」
詩織の無事な声に汚田は安堵した。
「ねぇ！　今、どこなの？」
しかし、安心すると今度は逆に詩織に対する怒りが湧き上ってきた。
「そうやって俺を呼び出して始末する気か？」
「…！」
「お前、今、一体、どんな仕事やってんだよ！」
「……。」
「それにあの化け物ども、秋子をあんな目に遭わせたのは…、いや、この街で起きている行方不明事件は奴らの仕業なんだな！」
「…だとしたら、どうする気？」
「決まっている！　俺は警察官だ！」
汚田の言葉を聞いた詩織はしばらく押し黙ったが、やがて静かに口を開いた。
「…全部話すから来て…。場所は…。」

コマンドルームでは風間によって昆虫人間に対する説明が行われていた。
「分析の結果、このビーストはその体内で人間の意識を奪うフェロモンを生成していました。
それをマーカー代わりに同じ女性を狙っていたのだと考えられます。」
「マーカーに？」
「おそらくは獲物に逃げられた場合の保険でしょう。
擬態する知恵があるのなら、目撃者を生かしておくのが、危険だと理解していても不思議ではありません。
その上、ビースト振動波を頭部に有する特殊な共鳴腔で反響させ、僕達には検知できない波形に変換していました。」
「つまり、その共鳴腔を傷付けるとビースト振動波を検知できると？」
石堀隊員の言葉に風間は一旦頷くとそのまま話を続けた。
「さらにバグバズンと同タイプのビーストである事が判明しました。」
「バグバズンと？」
懐かしい名前に和倉隊長はおもわず過去の戦いを思い出した。
「はい。仮にこの昆虫人間をバグバズン・ブルードと呼称しますが、その擬態した体の構造から行動範囲を予測した結果、付近の山間部に奴らの巣がある事は確実です。」
「巣ということは…ブルードが他にまだいるということですか？」
西条の疑問に風間は頷くと衝撃の事実を告げた。
「ブルードだけではありません。巣には群を産み落とした存在が潜んでいる可能性が高い。」
「まさか…奴らの親が…？」
驚愕する和倉隊長。
風間は和倉隊長の言葉に頷くと顔を強張らせて説明を締めくくった。
「スペースビースト…。奴らはより強大に進化し、この地球の生態

系に溶け込もうとしている…。」

その頃、詩織と汚田はいつものバーで再会していた。

「俺が全く知らない所で…お前がそんな化け物と戦っていたなんてな…。」

衝撃の事実を告白され、汚田はショックを隠しきれなかった。

しかし、ふとある事に気づいた。

「しかし…、そんな化け物との戦い、よく隠しきれてるなぁ…。」

その言葉に詩織が目線を伏せたのを見て汚田は睨んで問いただした。

「まだ何か隠しているな？　全部話すと言ったのは嘘か！」

目が泳ぎながらも、詩織は観念して話し始めた。

「…私達の組織には…目撃者の記憶を消去するセクションがあるの…。」

「え？　…記憶を消去…、消去って…！？

マジか！？　冗談だろ？　だって、そんな、マンガみたいな…。」

詩織の言葉を信じられなかった汚田だったが、ふと脳裏にM・Pの存在がちらついた。

『お前は知らなくていい。』

先程投げかけられた三沢の言葉。

「これと同じような言葉…、確か前にも…。

俺は…前に一度あいつらに会っている？　じゃあ、あいつらに記憶を…奪われたのか？」

頭を抱え、汚田は必死に奥底にかすかに残る記憶の糸を手繰り寄せようとする。

『今、気づいた。俺は…お前の事が…。』

「まさか…、俺が失った大切なものって…。」

顔を上げ、汚田は詩織を見た。

詩織はマニキュアの塗られた爪をいじって何やら考えていた。

「なぁ…、詩織…。」

汚田はゆっくりと詩織に近づくが、詩織はいきなり立ち上がって叫

んだ。
「この甘い匂い！　汚田さん！　早くアコの所に戻らないと！」
詩織の言葉を聞いて汚田は
先程まで忘れていた自分の婚約者、秋子の存在を思い出した。
「あ、あぁ…、あぁ！」

（あいつ、また平木隊員の友達を襲うのかな…。）
街の喫茶店。しんのすけはそんなことを考えながら、
パフェを大量に食べ、さらにおかわりを要求していた。
「…まだ食べるの？」
同じ席に座っているマサオ達の中、ボーの隣に座っている明日香がしんのすけに尋ねる。
「今日、暑いじゃん。体が求めるんだよ、冷たくて甘いものを！
それに明日香さんの奢りだし！」
明日香の問いにしんのすけはクリームで汚れた口で軽い口調で答え、
その答えを聞いて明日香は少しため息を吐いた。
（はぁ…。彼氏にプロポーズされたからって、少し気前良すぎたかな…。少し後悔…。）
そう思いながら明日香は窓の外を見て、そんな明日香を見てマサオとネネが話す。
「今日の明日香さん。かなり気前いいね…。」
「間違いなく何かあったわね。きっと、彼氏にプロポーズされたとかよ。」
その会話を聞いて、明日香は少しギクリとするが、
直後、窓の外の異様な姿をした者を見て焦りは消えた。
「？　なんであの人、あんな格好してるんだろう…？　こんな暑い日に…。」
明日香が疑問を口にすると同時にしんのすけは突如、席から立ち上がり、
紙で口を拭いて皆に告げた。

「オラ、ちょっと急用を思い出した！」
そう言い残してしんのすけはすぐさま喫茶店を出て行ってしまった。
「あ！　ちょっと、しんちゃん！　…もう、どうするのよこれ…。」
ネネはしんのすけの席に置かれた空のグラスの山を見て呆れ、
（急用って…。あのしんのすけ君がこのパフェの山より用事を優先するなんて…。）
明日香はそんなしんのすけを少し不思議そうに見送った。

一方、店を出たしんのすけはポケットから明滅するエボルトラスターを取り出す。
「もう…、せっかくのパフェ天国だったのに…。やれやれ…。」
そう呟きながらしんのすけはフード男、バグバズン・ブルードを追った。

その頃、秋子が入院している病室の前にも別のバグバズン・ブルードが1体来ていた。
「止まりなさい！」
バグバズン・ブルードが扉に手をかけようとすると、隠れていた詩織と汚田が姿を現した。
バグバズン・ブルードは詩織に襲い掛かるが、突如、頭部に攻撃を受けて倒れ込んだ。
驚いた詩織が振り向くと、石堀隊員がディバイトシューターを構えていた。
「イッシー？」
「詩織、大丈夫か？」
「う、うん！」
石堀隊員の言葉に笑顔で答える詩織。
その時、バグバズン・ブルードは苦しみで暴れ、三人を押しのけて病院の外へと逃亡した。
詩織と汚田は急いで後を追おうとするが、石堀隊員がそれを制する。

「追うな。あいつを泳がせて巣を突き止める。
既に頭部の共鳴腔は破壊した。奴の位置は常にイラストレーターによって捕捉されている。」
しかし、汚田は石堀隊員の制止を振り払い、怒りをぶつける。
「ふざけんな！　あんな凶暴な奴、野放しに出来るか！」
しかし、そんな汚田を今度は詩織が制した。
「汚田さん！　…ここまでよ。」
「バカ野郎！　ここからが俺達の仕事だ！」
「え？」
「俺は警察官だ！」
そう叫ぶと汚田は詩織の腕を振り解いてバグバズン・ブルードの後を追いかけ、
しばらく悩んだ後、詩織と石堀隊員もその後を追った。

バグバズン・ブルードを追った詩織と汚田と石堀隊員は夕焼けの草原に辿り着いた。
見ると、無数のバグバズン・ブルードが異様な動きをしながら一箇所に集まっていた。
「あんなに街にいたのか…。」
ブルードの予想以上の数に怖気が走る汚田。
やがて、地面を破って巨大なバグバズンの頭部が現れた。
「何だ？　あれは！」
叫ぶ汚田。石堀隊員と詩織が答える。
「バグバズンだ。」
「あれが奴らの親…、ここが巣なのね。」
詩織達が見る中、巨大バグバズンは口から無数の触手を伸ばし集まったバグバズン・ブルードを次々に絡めとっては飲み込んでいった。
「うえぇっ！」
おぞましい光景に吐き気がする汚田。その隣で石堀隊員が冷静に状

況を分析していた。
「そうか…、擬態したブルードに人を喰わせて、
そいつらを喰う事であのバグバズンは捕食していたのか。」
「捕食!?　秋子はあんな奴らに餌にされかけたのかよ!」
「…そういう事になるな。」
憤る汚田に対し、石堀隊員は静かに返した。
その時、三人の後ろから唸り声が聞こえ、振り返るとバグバズン・ブルードが数体迫っていた。
石堀隊員がすぐさまディバイトシューターを取り出して構えるが、
汚田はそれを奪って前に飛び出し、バグバズン・ブルードに向けて構えた。
「お前らなんかにもう誰も喰わせるか!」
しかし、引き金をいくら引いても光弾は出ない。
焦る汚田。迫るバグバズン・ブルードにディバイトシューターを弾かれ、
自身も弾き飛ばされてしまった。
「汚田さん!」
「くそっ!」
石堀隊員はパルスブレイガーをアタックモードにすると光弾でバグバズン・ブルードを牽制し、
詩織はその隙にディバイトシューターを取り出し、
バグバズン・ブルードの頭部を撃って、一撃で倒した。
それを見てホッと一息つく詩織と石堀隊員。そこに怒った汚田がやって来た。
「何で撃てないんだよ!」
「この銃を撃つには指紋の認証登録が必要なの!
だから私達ナイトレイダー以外は撃てないってわけ!」
「先に言えよ!」
「そっちこそ勝手な事しないでよ!」
「2人とも落ち着け!」

石堀隊員が2人の間に入ると、その時、地面が揺れ、
大地を割って巨大バグバズンがその全身を現した。
以前に現れたバグバズンよりも毒々しい色彩の体表で
全身に多くの棘状器官を有し、両手は鋭い鎌になっていた。
「あんなでかいのとどうやって戦うんだよ！」
５０ｍにも及ぶ巨大バグバズンの全身を見て汚田が叫ぶ。
その時、上空から巨大バグバズンに向けてビーム攻撃が行われた。
三人が見上げると、和倉隊長、西条がそれぞれ操縦する2機のチェスターが到着した。
「皆…！」
仲間の救援に感激する詩織。
「バグバズンを市街地に入れるわけにはいかん！
合体してストライクバニッシャーで殲滅する！」
「了解！」
和倉隊長の指示を受け、石堀隊員はすぐさま着陸させていたγに搭乗。
石堀隊員の乗ったγを加えた3機のチェスターはストライクチェスターに合体した。
一方、風間はＣＩＣで巨大バグバズンの分析を進めた。
「バグバズン・グローラー。通常のバグバズンより進化している。
アンノウンハンドの力も無しに…。」

「あ！」
その時、バグバズン・ブルード最後の1体が詩織に不意打ちをかけ、
ディバイトシューターを弾き飛ばした。
「詩織！」
汚田がバグバズン・ブルードに飛びかかるが、逆に捕らわれてしまった。
「汚田さん！　…その人から離れろぉ！」
詩織が体当たりを食らわせるが通じず、逆に倒されて危機に陥る。

倒れた詩織にバグバズン・ブルードが襲い掛かるが、次の瞬間、詩織の前に倒れた。
驚く詩織が見上げると、木の棒を握り締めて汚田が立っていた。
「バカ野郎！　どうしてあんな無茶を！」
その時、汚田の脳裏に再びあの時の出来事が蘇る。
『何であんな無茶を…？』
「またか…、何だこれ？」
頭を抱えて考え込む汚田。そこにバグバズン・グローラーが迫ってくる。
「とにかく逃げないと！　アコの為にも
汚田さんにケガさせるわけにはいかないんだから！」
そう叫んで詩織は汚田を逃がそうとするが
汚田の頭の中にあるかすみは段々と晴れていった。
『詩織…。お前にケガさせるわけにはいかないからな…。』
「…そうだ！　俺はあの日…。」
『今、気づいた。俺は…お前の事が…好きだ…。』
「そうか…！　俺が奪われた記憶って…。」
汚田の言葉に詩織は固まる。
「思い…出したの？」
その問いに汚田は頷き、詩織の顔を見据えて話し出した。
「あぁ…。あの日、言ったよな。俺は…お前の事が…。」
しかし、詩織は汚田の言葉を強引に遮る。
「こんな時に…、今更こんな時に何言い出すのよ！」
そこにバグバズン・グローラーが襲い掛かる。
「ストライクバニッシャー、シュート！！」
西条がストライクバニッシャーを撃つが、
バグバズン・グローラーに命中しても効果は薄かった。
驚くナイトレイダー。風間が分析を進める。
「外殻の硬度が推定でも以前の３００％もアップしている。」

「なんか、ヤバいことになってる…！」
一方、バグバズン・ブルードを追って草原に辿り着いたしんのすけは
汚田と詩織に近づくバグバズン・グローラーを見て、エボルトラス
ターを掲げた。
詩織達目掛けてバグバズン・グローラーは右手の鎌を振り下ろし、
汚田はとっさに詩織を守ろうとする。
そこに光が現れ、バグバズン・グローラーを弾き飛ばした。
大地に姿を現すウルトラマンを見て詩織が叫ぶ。
「ウルトラマン！」
それを聞いて汚田が不思議そうに呟く。
「ウルトラ…マン？」
ウルトラマンは立ち上がると、汚田に向けてサムズアップをした。
「え？」
得体の知れない銀色の巨人がいきなり人間臭い仕草をしたことに汚
田は戸惑うが、
その時、立ち上がったバグバズン・グローラーがウルトラマンに突
撃する。
しかし、ウルトラマンは振り向きざまにジェネレード・ナックルを
浴びせ、
バグバズン・グローラーが倒れた隙に
ジュネッスブルーにスタイルチェンジし、メタフィールドを展開し
た。
「我々もメタフィールドに突入する！」
「了解！」
メタフィールドに突入するストライクチェスター。
その直後、アンノウンハンドの闇が現れてメタフィールドはダーク
フィールドGとなった。
ウルトラマンはクロスレイ・シュトロームをバグバズン・グローラ
ーに撃つが、
命中してもさほど効果は無く、

逆にバグバズン・グローラーは右手の鎌でウルトラマンを攻撃してきた。
「西条！　バニッシャーでウルトラマンを援護しろ！」
「了解！」
西条はストライクバニッシャーを撃ち、
ウルトラマンはバグバズン・グローラーから距離をとって、全身に力を込めた。
ウルトラマンはアローアームドネクサスにダークフィールドGの闇を集め、
光に転化し、アローアームドネクサスに手を添えて払うと、
アローアームドネクサスから拳にかけて、炎のような光が溜まった。
ウルトラマンは思い切り突撃し、バグバズン・グローラーに向けて、
光の炎を纏ったパンチ、ナックレイ・グレネイドを叩き込んだ。
それを受けた、バクバズン・グローラーは全身から光の炎を放出し、
光の粒となって消えた。
ダークフィールドGが消え、元の世界に戻ってきたウルトラマンは
汚田にサムズアップをした後、光となって消え、それを見た汚田は
詩織に呟いた。
「あいつ…、俺の代わりにぶん殴ってくれたんだ…。」
「え？」
「けど…俺は…。」
そう言って汚田は詩織の方を振り向き、
風が吹き渡る夕暮れの草原の中、二人は見つめ合った。

「本当に大丈夫か？」
夜の病院。汚田がリンゴの皮を剥きながら心配そうに尋ねる。
ベッドに座る秋子は少しはにかんで答えた。
「もう本当に平気。しおちゃんと会っている間に
気分が悪くなったなんてなんだか嘘みたい。」
「あぁ、俺も久しぶりに詩織に会いたかったなぁ。

アイツとはよく喧嘩したんだぜ。でも健気なところもあってなぁ…。
アイツのそういうとこ…なんだか好きだったなぁ。」
「そうなんだ。」
楽しげに話す二人。
汚田はふと病室の扉に目をやったが、扉が開く事は無かった。
病室の外では詩織が壁に身を預け、
壁越しに病室の中の二人の会話を聞いていた。
やがて詩織は二人に何も告げずに去っていった。
病室の中では汚田が何かに気づいたが、
しばし目を伏せた後、何事も無かったかのように秋子と話を続けた。
詩織が廊下を進むと、その先に大原リーダーとM・Pが待機していた。
無言で頭を下げ、その場を去る詩織。
それを受けて大原リーダーは無言で病室へと向かった。

その後、石堀隊員がコマンドルームに入ると、
ブレイクスペースで詩織がマニキュアを塗っていた。
「始末書、書き終わったのか？」
パソコンを机に置いて石堀隊員が尋ねるが、詩織からの返事は無い。
石堀隊員は詩織の所に近づき、もう一度尋ねようとするが、
「慣れてますから。始末書書くの。」
と詩織は背中越しに突き放すように答えた。
そしてマニキュアを塗り終わった爪を誇らしげに見せびらかす。
「どう？　きれいでしょ。」
「あぁ…、きれいだな…。」
しかし、二人の間には重苦しい空気が流れる。
しばらくして再び石堀隊員が口を開く。
「無理は…体に毒だぞ。」
「……。」
その言葉を聞いて詩織の動きが止まる。

やがてゆっくりと石堀隊員の方を向いた詩織の顔は堪えきれなくなった涙で濡れていた。
そんな詩織を石堀隊員は優しく受け止めた。
石堀隊員の胸の中で溢れ出る涙を流す詩織。
そして、そんな詩織を石堀隊員は優しく見つめる。

「うーん…、うまいうまい。」
翌日、しんのすけ達はベンチに座ってたい焼きを食べていた。
「なんか、今日涼しくない？」
吹いてきた風を感じたマサオが呟き、ネネが答える。
「本当ね…、昨日の暑さがウソみたい。」
ボーもそれに頷く。
一方、しんのすけはベンチの横の木から舞ってきた木の葉を見て呟いた。
「もうすぐ…、秋か…。」
その言葉にマサオ達もベンチの横の木を見上げ、
しんのすけも涼しい風を感じながら辺りに舞い散る木の葉を見た。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３１　告白　－コンフェッス－（後書き）

今回の話ではバクバズン・グローラーへのトドメ技にこの小説でのオリジナル技として、
ナックレイ・グレネイドという技をウルトラマンが使う展開にしました。
（元ネタの技は「ウルトラマンメビウス」のライトニング・カウンター・ゼロ、
名前は「仮面ライダーＷ」のジョーカー・グレネイドからです。）
そして、次回はこの小説でのオリジナルストーリーとなります。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３２　夢　－マイ・ドリーム－

ある夕暮れの遊園地。しんのすけ達はいつものように仕事をしていた。
「しんのすけ君、ちゃんと枯れ葉の掃除してよね。」
明日香がほうきを持って、並木道に向かうしんのすけに注意する。
「分かってるって。まったく明日香さん心配性なんだから…。」
「それはあなただから。」
「いやぁ…、そんな…。」
明日香に突っ込まれ、照れて笑うしんのすけ。
「ホメてないって…。」
呆れる明日香。
そして、しんのすけが枯れ葉の掃除に行こうとすると、
恵がテーブルで何かを書いているのが見えた。
「お、恵ちゃん。」
「え？　あ、しんのすけ君。」
呼びかけに振り向いた恵は慌ててテーブルの上の文章の書かれた紙を隠した。
「お？　何隠したの？」
しんのすけが見ようとするが、恵は
「ダメだって！　まだ、完成してないんだし…。」
と答える。
「完成？」
恵の言葉にしんのすけは疑問を持ち、恵はしまったと思ってドキリとした。
「しんのすけ君。女の子が隠れて書いてるものは詮索しないの。」
とそこに明日香がやってきて、
しんのすけを注意するが、恵を見ると手を合わせて頼んだ。
「お願い。何書いてるかちょっと見せてくれない？」

「何だ…、そう言う自分だって詮索してるじゃん…。」
しんのすけが文句を言うが、そこにマサオ達がやって来る。
「何々？　どうしたの？」
ネネが尋ね、恵は一つため息を吐いた後、テーブルの上の紙、原稿用紙を明日香に見せた。
原稿用紙を見た明日香が尋ねる。
「…これって、もしかして小説？」
明日香の質問に恵が少し照れながら答える。
「はい。私…、昔から小説家になるのが夢で、今、小説投稿サイトにそのＳＦ小説を投稿してるんです。」
「へぇ…。」
明日香はそう言うと、文章を読み、しんのすけ達もそれを覗き込む。
「ふーん。でも、なんでＳＦなの？」
文章を見たしんのすけの問いに恵が笑顔で答える。
「私、今までＳＦとかって書いたことなかったから、今回それに挑戦してみようかなーって思って。
今まで、ボーちゃんに聞いた話の要素も少し入ってるよ。」
それを聞いて、ボーが少し嬉しそうにする。
「読んでくれている人達が私の作品に『面白い』とかって感想をくれると本当に嬉しいんです。
その人達が自分の作品を本当に真剣に読んでくれてるんだなぁって分かって…。」
「へぇ…。恵ちゃん…。本当に真剣に小説家を目指しているのね…。」
明日香の言葉に恵が少し嬉しそうに笑顔で答えた。
「はい！」
その頃、フォートレスフリーダムのＣＩＣ。
風間がパソコンにデータを打ち終えて、休憩していた。
「うーん…。」

伸びをして、一息つくと、
風間はデスクの中からいつもの測定器を取り出して腕に付け、数値を見た。
「マイナス…7．05…。」
それを見た風間は頭を抱え、
パソコンのデスクトップに表示されている2羽の鳥が青空を飛んでいる画像を見た。
「……。」
しばらく画像を見つめ続ける風間。
そこに、
「トオル。」
と後ろから恵の声がして、風間は慌てて測定器をデスクに戻した。
恵は風間に近づいて話しかける。
「何してたの？　トオル。」
しかし、風間はそっけなく答える。
「別に…なんでもないよ…。」
「ふーん…。あ、そうだ、トオル。はい、これ。」
と言って、恵に風間は小説の原稿を手渡された。
「…これって？」
「前に言ってた小説の原稿。書き終わったから、
ＣＩＣを見せてくれたお礼に完成品を最初にトオルに見せようと思って。」
「そう…。」
そう答えて、風間は再びデスクトップの画像を見た。
恵もそんな風間の視線を追って鳥の画像を見る。
「…トオル、本当だったら…鳥類学者になるのが夢だったのよね…。」
恵が少し寂しそうに呟き、風間がゆっくりと頷く。
「うん…。でも、この仕事は…僕にしかできないことだから…。…仕方ないよ…。」

そう答える風間の目は言いようのない深い悲しみと諦めを宿していた。

翌日。遊園地。恵は貝殻で作った鳥のアクセサリーを取り出して見つめていた。

「恵ちゃん。」

そこに仕事中のしんのすけが話しかけてくる。

「あ、しんのすけ君…。」

「お？　それって、前に見せてくれた鳥のアクセサリーだよね？」

しんのすけの問いに恵は静かに答える。

「うん…。考えてたの…。どうしてトオルだけ…ああなんだろうって…。」

「え？」

しんのすけの疑問に恵が話し始める。

「昨日、ＣＩＣに…トオルのところに行った時、

トオルが寂しそうにパソコンの鳥の画像を見ているのを見て…、

私は昔からの夢を叶えようとしていて、他のプロメテの子達も夢を叶えられる状態にいるのに…。

どうしてトオルだけ…、それができない状態なんだろう…って…。」

「…風間君、ＴＬＴのイラストレーターだからね…。」

しんのすけのその呟きに恵が頷く。

「皆にはない、優れた予知能力を持って生まれたからって言っても…ひどいよね…。

元々アカデミーなんて限られた世界の中に束縛されているような感じだったのに…。

もっと、自由のないところに送られるなんて…。

それが嫌だったから…トオル、アカデミーを抜け出して日本に来たのかな…？」

寂しそうに呟く恵。そんな恵にしんのすけが重い空気を振り切るように明るく尋ねる。

「…お！　そういえば、なんで恵ちゃんって小説家になろうって思ったの？
なんか昔からの夢だって言ってたけど…。」
「え？　それは…、昔、アカデミーにいた時に…。」
そして、恵は自分の過去、かつてアカデミーにいた頃のことを話し始めた。

「では、今日はここまで。」
先生の言葉を受けて、教室がざわめき始める。
13年前。アカデミーの教室。
その日の講義が終わり、生徒が次々と教室から出て行く。
講義を受けていた生徒達の中には、昔の恵、そして、風間がいた。
「恵。今日も行くの？」
教科書などを鞄にしまっていた恵のところに他のプロメテの子達がやって来て話しかける。
「うん。なんだか、最低でも一日一回は読まないと気が済まないの。」
友達のコゼットの問いに恵が笑顔で答える。
「恵って本当に本が好きよねぇ…。私なんか読んでたら退屈して眠っちゃうくらいよ。」
続いて同じく友達のリナの言葉に恵が少し笑って答える。
「だって、小説とかだとその物語の中に自分が入り込んだような感覚になるし、
そこから先の展開を想像するのが楽しいんだもの。」
「フフッ。なんか、恵らしいわね。」
そんな会話をしている恵達の横を、教科書を抱えた風間が一人、通り過ぎていき、恵はそれに一瞬、気を取られる。
「恵？」
「あ、ううん。なんでもないよ。」

その後のアカデミーの図書室。
今日もやって来た恵を見て、図書館司書が話しかける。
「あ、今日も来たのね。恵ちゃん。」
「はい。やっぱり、一日一回は読まないと気が済まなくて。」
恵のその言葉に司書が笑顔で答える。
「そう…。恵ちゃん、本当に本が好きなのね…。じゃあ、今日もゆっくりしていって。」
「はい！」
司書の言葉に恵は笑顔で答え、本を探しに向かった。
「うーん…。今日は気分的に恋愛ものかな…。」
そう呟きながら今日読む本を探す恵。
すると、その目に一冊の本が止まる。
「…『2人の未来　―重なった想いの物語―』？」
その本を手に取る恵。椅子に座って本を開き、読む。
その瞬間、恵の頭の中に物語の内容がまるで一つの映像のように流れていき、
恵は物語の世界に完全に入り浸った。

「今思えば、その時だったのかな…。私が小説家を目指すようになったきっかけって…。
それから、しばらくしてトオルと話すようになったの。」
現在。話し終えた恵がしんのすけのほうを見ると、
しんのすけは椅子にもたれて気持ちよさそうに眠っていた。
「って！　人の話聞いてないし！」
そんなしんのすけを見て、恵は少し呆れたようなツッコミを入れた。

「えぇ。このことはイラストレーターには伝えずに、
直接私に伝えてください。では、本日はこれで…。」
その頃、フォートレスフリーダムではある部屋で松永管理官が何者かと電話をしていた。

「ウルティメイトバニッシャーはウルトラマンの破壊光線と同等の威力の兵器だった…。
ならば…、直接ウルトラマンそのものを兵器として運用すればいい…。」
そう言って、松永管理官はテーブルの上の資料を手にとって不気味な笑みを浮かべた。
「いよいよ…、本格始動の時が来ましたね…。」
資料の中の設計図を見て松永管理官が呟く。
「人造ウルトラマン計画…。」
一方、ある部屋では監視者がパソコン画面にしんのすけと風間のデータを表示していた。

夕方。夕焼けに照らされながら恵は遊園地から帰る道を歩いていた。
その途中、ふとバッグから貝殻で作った鳥のアクセサリーを取り出す。
それを見つめる恵の脳裏にかつて風間にアカデミーを抜け出して、海まで行く誘いをした時のことが蘇る。
「あの時…、トオルは私の誘いにのらなかった…。
なのに、どうして後になってアカデミーを…？」
呟く恵の鳥のアクセサリーが風になびく。
一方、ＣＩＣの風間もデスクから恵に貰った貝殻を取り出して見つめていた。
パソコンのデスクトップには2羽の鳥の画像が表示されている。
「もし…、僕が本来の予定通りに誕生していたら…、
ビーストとの戦いが終わった後、僕は…夢を叶えることができた…。
でも…、本当にそれで…幸せだったのかな…？
…他の誰とも別れて、最後は独りになる運命だったままで…。」
貝殻から目を離し、風間はデスクトップの画像を見る。
「“その時”が来たら…皆は…。」
風間の脳裏にその時が来た時に悲しむ恵、しんのすけ、

自分のことを想ってくれている人々が浮かんで、ため息と共に頭を抱える。そこに、

「トオル。」

と、恵がやって来る。

「恵…。」

恵を見つめる風間。

しかし、風間の脳裏には、その時が来た時の恵の悲しむ顔が浮かぶ。

一方の恵は風間に尋ねる。

「トオル…。アカデミーにいた頃、私の…アカデミーを抜け出して、海まで行こうって誘いにのらなかったよね？　…なのに、どうしてその後、

アカデミーを抜け出して日本に来たの？

やっぱり、イラストレーターの任に就きたくなくて…、自由を求めて…？」

その問いに風間はハッとする。

（恵が…僕の…僕の秘密に気づき始めてる…。なんとかしないと…なんとか…。）

心の中で呟く風間。

「ねぇ…、トオル…。」

そんな風間に近づこうとする恵。

しかし、風間は声を変えて静かに答えた。

「もう帰ってくれ…。」

「え？」

その時、風間は突然立ち上がって恵のほうを向いて叫んだ。

「もう帰ってくれって言ったんだよ！！　恵にはそんなことどうだっていいだろう！？」

そう叫んで、風間は恵の原稿を投げ返し、再び椅子に座って恵に背を向けた。

そして、地面にばら撒かれた自分の原稿を拾った恵は静かな声で答えた。

「ごめん…。トオル…。聞かれたくないようなこと聞いて…。…でも…、この原稿は読んでくれないかな…？　あなたに一番最初に読んで…。」
「何が原稿だよ…。小説家気取りもいいかげんにしろよ！」
「小説家気取りって…。」
恵が声を変えて呟いたのに気づかずに風間は続けた。
「そうだよ…。だから、早く帰って…。」
話しながら風間は再び恵のほうを見るが、先程とは違い、恵は原稿を手に俯いていた。
「私の夢を…。」
そんな恵を見つめる風間。
「私の夢を…バカにしないで！！」
そう叫んで、恵はＣＩＣから姿を消し、風間は一つため息を吐いて呟いた。
「これで…良かったんだよな…。これで…。」
そして、恵の家。暗い部屋の中、恵は一人ベッドの上に座って原稿を手に呟いた。
「トオルの…バカ…。」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３２　夢　－マイ・ドリーム－（後書き）

今回の話は風間と恵について描いた、この小説でのオリジナルストーリーです。
この小説での後半への伏線として松永の“人造ウルトラマン計画”についての何者かとの会話シーン、
風間が「自分が本来の予定通りに誕生していたら…」と一人呟くシーンを入れました。
（恵の回想シーンで彼女が手に取る本のタイトルは適当に考えましたｗ）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３３　春風　―マイ・フレンド―

翌日。しんのすけが遊園地に続く河原の近くの道を
青いマウンテンバイクに乗って疾走していた。
河原のほうの景色を見ながら自転車を走らせるしんのすけ。
「うーん…。空も澄み切ってて爽快、爽快。」
ふと、視線を河原の土手に移すと、そこには恵がいた。
「お？　あれって恵ちゃん？」
しかし、余所見をしていたため自転車が道を逸れて土手のほうに向かっていく。
「って、うわっ！？」
土手の斜面を滑って自転車としんのすけが転げ落ちる。
一方、恵は土手に座って自分の鳥のアクセサリーを見つめていた。
恵はしばらくアクセサリーを見つめていたが、
やがて立ち上がると川に向かってそれを投げ捨てようとする。
「やっぱり…、できないや…。」
しかし、捨てられずに再び手の中にあるアクセサリーを見つめる。
そこに、
「うわおおあぁっ！？」
と後ろから悲鳴が聞こえ、恵が振り向くと、
そこには自転車と一緒に地面に転んでいるしんのすけがいた。
「イッテェ…。」
痛がりながら起き上がるしんのすけに恵が呟く。
「し、しんのすけ君…？」
「ハハ…。恵ちゃん。おはよう…。」

「そっか…。昨日、風間君とそんなことが…。」
川の流れる水を見つめながら話す二人。
「うん…。私が…トオルにとって聞かれたくないようなことを

彼に聞いたのは悪いって分かってるけど…。でも…、私の夢をバカにするなんて…。」
その言葉を聞いて、しんのすけは脳裏に監視者のチップにあったという
風間のデータとラファエルの事を思い出す。
（もしかして…、昨日、恵ちゃんが聞いたことって…あれに関係のあることなのかな…？）
一方、恵は鳥のアクセサリーを見ながら話を続ける。
「それで…、ムカついてこのアクセサリーを捨てようって思ったんだけど…。
やっぱり…、できなかった…。…あ！」
恵がハッとしてしんのすけに謝る。
「ごめんなさい。しんのすけ君。バイトがあるのに、こんな話をして…。」
「ううん。別にいいって。まだ時間あるし。」
そう軽い感じで答えると、しんのすけは立ち上がって伸びをする。
「さーて、そろそろ行きますか。…あ、そうだ。恵ちゃんも来たら？」
「え？」
「遊園地に来たら少し気分も晴れるんじゃない？」
その答えに恵はしばし考えるが、やがて頷いて答えた。
「うん。じゃあ…、そうさせてもらおうかな…。」
「よし、じゃあ決まりね～。」
そして、しんのすけは自転車を押して、恵と一緒に遊園地に向かった。

遊園地。明日香達は既に仕事を始めていた。
「おーい。皆、おまたせー。」
そこにしんのすけがやって来て、それに気づいた明日香が呼びかける。

「遅いわよ、しんのすけ君！　これでもう3日連続。」
「いやぁ、ヒーローは遅れてやって来るってことで！」
「はぁ…。まったく、もう…。って、あれ？」
明日香は自転車を押すしんのすけの隣に恵がいることに気づいた。
「あら…、恵ちゃんも一緒だったの？」
「うん、ちょっと河原で会ってね～。」
その言葉の後に恵が答える。
「少し…、二人で河原で話していて…。しんのすけ君が私の話を聞いてくれて…。」
「聞いてくれたって…、何かあったの？」
明日香の問いに恵は首を横に振って答えた。
「あ、いえ、別に何も…。」

「あれで良かったんだよな…。あれで…。でも…。」
その頃、ＣＩＣでは風間がパソコンを操作する手を止めて、昨日の出来事を思い出していた。
「やっぱり…。やり過ぎだったかな…。」
風間はふと、デスクから恵の貝殻を取り出した。
「恵…。」
呟く風間の脳裏にアカデミーでの恵との日々が蘇る。
「へぇ…。恵って小説家になるのが夢なんだ。」
１３年前のアカデミーの教室。恵と風間が話していた。
「うん。私のこの想像力をフルに活用できるし。
それに、自分の手で一つの物語を完成させるのってなんだか、ゾクゾクってこない？」
「ゾクゾクって…。ちょっと、おおげさな気がするけど…。」
少し苦笑しながら答える風間に恵は首をかしげて答えた。
「そうかな？　でも、未来の自分について考える時とかってそうならない？」
「え…。」

恵のその言葉に風間は少し顔を曇らせて複雑な表情をするが、すぐさま元の表情に戻って答えた。
「…うん。そうだね…。」
そう答えた風間に恵が再び尋ねる。
「そういえば、トオルの夢って何なの？」
「え？　…うーん…。」
恵の問いに風間はしばし考え、やがて答えた。
「鳥類学者…かな。鳥のことに結構興味があるんだ。」
「へぇ…、鳥類学者かぁ…。そういえば、初めて話した時も鳥を見ていたわよね。」
「うん。…仲間と一緒に自由に翼を羽ばたかせて渡りをする…。前に恵が言ったように、そんな姿に…憧れているのかも…。」

現在。恵も遊園地の森でその出来事を思い出していた。
「仲間と一緒に…。」
そう呟く恵の脳裏にＣＩＣでいつも一人の風間が思い浮かぶ。
「トオル…。」
バッグから鳥のアクセサリーを取り出して呟く恵。
それを枯れ葉の掃除をしていたしんのすけが遠くから見つめる。
そんなしんのすけの脳裏に再びラファエルのことが思い浮かび、しんのすけは意を決すると恵に近づいて呼びかけた。
「恵ちゃん…。」
「あ、しんのすけ君…。」
しんのすけは恵を見ると、少し考えた後、話し出した。
「実は…風間君について…、気になることが…言っておかなきゃいけないことがあるんだ…。」
「え？」
その言葉に疑問を感じる恵。
そんな恵の様子を見ながら、しんのすけは少しずつ話し始めた。
「…前に、ここで変なカッコした奴に会ったよね？

その時に、そいつの持ってたチップがここに落ちてて、
西条さんが調べたら、それに風間君のデータが入ってたんだって…。
」
「え…？」
思いも寄らない話に恵は驚き、しんのすけは話を続ける。
「それで…、その中に『ラファエルはまだか？』っていう謎の言葉
も入ってたみたい…。
今までの様子から見て、もしかして知らないんじゃないかって思っ
て…。」
「ラファエルは…まだか…。」
恵の呟きに頷くしんのすけ。
「だから…、もしかしたら、風間君がアカデミーを抜け出して日本
に来たのも、
それに関係することなんじゃないかな？」
しんのすけの言葉に恵は再び鳥のアクセサリーを取り出して見つめ
る。
「きっと…、恵ちゃんの夢をバカにしたのも…。悪気があってじゃ
なくて…。
そのことで心配させないように恵ちゃんを自分から突き放すためだ
ったりするかも…。」
「トオル…。」
そう呟き、しばらく恵は鳥のアクセサリーを見つめていたが、やが
て指を閉じて、
両手でそれを優しく包むと、しんのすけのほうを見て尋ねた。
「…しんのすけ君…。私が…、私がトオルにしてあげられることっ
て…何かないかな？」
「え？」
その言葉にしんのすけは少し驚き、恵は少し俯いた後、しんのすけ
を見て続けた。
「トオル…。ずっとＣＩＣに一人きりで…。

それに、今しんのすけ君が言ったような事情も一人で抱え込んで…。
その事情も知らずに私…。だから、彼に何かしてあげたいの…。何か…。」
「恵ちゃん…。」
しんのすけに訴える恵の表情からは彼の行動の真意を知ったことによって、
風間に対する怒りは完全に消えていた。
それを見たしんのすけが少し考える。
「うーん…。何かって言ってもなぁ…。」
「何でもいいの…。私にできることだったら何でも…。」
「うーん…。お。そうだ。料理とかどう？　風間君にお弁当作ってあげるの。」
その言葉に恵は驚き、ドキリとする。
「え!?　お、お弁当って…。」
「そう。お弁当。恵ちゃん、料理上手そうだし。」
その言葉に恵が苦笑いしながら答える。
「あ、…ハハ…。それが全然ダメなの…。
前に色の薄い、味のなさそうなもの食べてるトオルにおにぎり作ってあげたんだけど…。しょっぱいって言われちゃって…。」
「そっか…。じゃあ…。」
考えるしんのすけの傍ら、恵は一人で寂しく食事をする風間を思い浮かべる。
「でも…、それが一番いい気がする…。」
「え?」
その言葉に振り向くしんのすけ。
「前に…本で読んだことがあるの…。
『食べるという字は人が良くなると書く』…。
実際に一人の食事から、二人で食べるようになっただけでも…、
心の不安や重荷がなくなったっていう人もいるみたいなの…。

だから…もしかしたらこれが一番かも…。でも…。」
その瞬間、恵はため息を吐いた。
「やっぱり下手だからなぁ…。」
ガクっと肩を落とす恵にしんのすけがひらめいたように答える。
「おぉ！　そうだ！　ボーちゃんに教えてもらったら？」
「え？」
「ボーちゃん。ああ見えて結構料理上手いんだゾ。自分の包丁も持ってるくらいだし。」
「そうなの？…」
「そうそう。」
しんのすけのその言葉を聞いた恵は鳥のアクセサリーを見つめた後、バッグにしまい、
「ありがとう！　しんのすけ君。」
と言うと、すぐさま走り出してしまった。
それを見送るしんのすけが呟く。
「やれやれ…。風間君にも困ったもんだゾ…。あんないい娘を心配させて…。」
そう言って、しんのすけはあいから貰った翼の生えたぶりぶりざえもんを取り出して見つめた。

「ボーちゃん。ごめんなさい。色々と忙しいのに…。」
店の中。キッチンを前にする恵。
「いいよ。恵ちゃん…。僕の話を…小説に載せてくれたみたいだし…。」
そう答えながら、ボーは冷蔵庫を開けた。
「ところで…恵ちゃんは何が作りたいの？」
「お弁当。なるべく…、色鮮やかでおいしそうなのを。」
「分かった…。じゃあ…。」
と言って、ボーは冷蔵庫の中から食材をいくつか選んでまな板に置いた。

さっそく包丁を入れようとする恵。
「待って。」
そこにボーが待ったを入れる。
「え？」
「恵ちゃん。野菜を洗うの、忘れてる…。」
「え？　あ！　そ、そうよね！　基本中の基本よね！　ハハ…。」
ハッとして、恵は水道から水を出して野菜を洗い、まな板に置いた。
「じゃあ改めて…！」
「その前に…。」
「え？」
再びボーが待ったを入れる。
「今度は何？」
興を削がれたような感じで恵がボーを見て尋ねる。
「恵ちゃん。料理をする時に…、覚えておいて欲しい大切なことがあるんだ…。」
「料理に…大切なこと…？」
恵の問いにボーが頷いて答える。
「うん…。料理は腕も必要だけど…一番大切なのは…、食べてくれる人のことを思って作ること。
これが抜けてたら、どんなにいい食材や…調味料を使っても、人を感動させられるものは…作れない…。」
「食べてくれる人のことを思う心…。」
ボーの言葉を再び呟き、恵は頭に風間のことを思い浮かべた。
「よし…！」
そして、今度こそ改めて恵は包丁を食材に入れた。

そして…、夕方。時間はかかったものの、
なんとか恵は一つのお弁当を完成させることができた。
「はぁ…。なんとか完成したぁ…。」
安堵と疲れからか一つため息を吐く恵。

「おめでとう…。恵ちゃん…。」
ボーの祝辞に恵が答える。
「ありがとう。ボーちゃん…。でも、問題はトオルがおいしいって言ってくれるかどうかよね…。」
「大丈夫…。きっと…。」
そのボーの言葉に恵は完成したお弁当にふたをして答える。
「だといいけどね…。」
恵はそのお弁当を自分のバッグとは別のカバンに入れて、店の扉を開けた。
「それじゃ、行ってくるよ。ボーちゃん。」
「頑張ってね…。恵ちゃん…。」
「うん。」
そして、恵は扉を閉めて、店から出て、ＣＩＣに向かった。

「恵…絶対にここに来てくれないだろうな…。」
ＣＩＣ。風間はパソコンを操作する手を止めて、昨日の出来事を思い出しながら、
デスクから恵の貝殻を取り出してため息混じりに呟いていた。
「トオル。」
そこに恵の声がして驚いて振り返る。
「恵…。」
恵を見つめる風間。
そして、恵も風間を見つめるが、やがて一つ息を吐くと、
手に持っていたカバンをデスクに置いた。
「これって…。」
「…お弁当。」
「お弁当…？」
「そう。トオル…いつもああいうの食べてるでしょ。
だから…、ボーちゃんに教わって作ってみたの…。」
「ボーちゃんに…。」

懐かしい友の名前が出てきたことに風間は少し驚くが、
脳裏に昨日の出来事が浮かび、すぐさまハッとして口を開いた。
「恵…。あのさ…。」
しかし。
「ごめんなさい。」
「え…？」
と、それよりも先に恵のほうが頭を下げて、風間は戸惑う。
「私…、トオルの事情…。何も分からなくてあんなこと聞いて…。
トオル…私を心配させないようにって、あの時、ワザと冷たく振る
まったんだよね？」
昨日の自分の行動の核心を突かれて風間は少し押し黙るが、すぐさ
まハッとして尋ねる。
「恵、事情って…まさか…。」
風間の脳裏に一番あってはならないと思っていた展開がよぎる。
「しんのすけ君から聞いたの…。『ラファエル』って言葉のことを
…。」
しかし、恵の答えを聞いて、その最悪の予想が頭から消えていく。
「…それだけ？」
「…うん。」
その答えに風間は安心してため息を吐くが、恵は静かに呟いた。
「でも…。私にそのこと…、もっと早く言って欲しかった…。」
「え…？」
風間が見ると、恵の目がわずかに潤んでいた。
「私…、トオルの思いに反するかも知れないけど…。
あなたの寂しさを…あなたの苦しみを…なんとかしたい…。
いつも…一人きりでここにいて…、それで…大きな事情も一人で抱
え込んで…。
そんなあなたの重圧を…少しでも軽くしたいの…。
…そう思って、そのお弁当を作ったの…。
せめて…、せめて食事だけでも一人にさせたくないって思って…。」

「恵…。」
そして、風間に恵は目に少し涙を浮かべながらも続けた。
「私…。トオルが…トオルがどんな事情を抱えてたとしても…、それを…受け入れられるから…。」
そう言って、口元に微かに笑みを浮かべる恵。
そんな恵を見て、風間もやりきれない表情となる。
「…ごめんね…。なんだか…重い空気になっちゃって…。」
そんな恵の言葉に風間は首を横に振る。
「ううん…。ありがとう…恵…。僕のために…そこまで…。」
「トオル…。」
そして、風間は恵に向けて頭を下げた。
「ごめん…。昨日…恵の夢をバカにして…。
それで…結果的に恵を傷付けてしまって…本当にごめん…！」
そんな風間を見て、恵は少し笑みを浮かべて頷き、指で涙を拭って告げた。
「…さぁ、早く食べてみて！　結構な自信作なんだから！」
再びいつものように明るく振るまう恵を見て風間も笑みを浮かべて頷く。
「うん…。」
そして、風間はバッグの中から、一つの包み、お弁当を取り出してふたを開けた。
そこには、形が悪く、お世辞にも上手とは言えないものの、
自分のために一生懸命作ってくれたであろう色とりどりのおかずと、
真ん中に赤い梅干がのっているご飯があった。
それを見て、風間の目に何か熱いものがこみ上げてくる。
「…いただきます。」
そう言って、風間はお弁当の卵焼きを口の中に入れた。
卵のふんわりとした食感と、まろやかな優しい味が口の中に広がる。
そして、卵焼きを飲み込んだ後、風間の口から自然に一つの言葉が呟かれた。

「…おいしい…。」
それを聞いて、恵がホッとした感じでため息を吐く。
そんな恵の顔を見て風間が話す。
「恵…。まだ…、僕のことは…全部は言えない…。
でも…、これだけは覚えておいて…。あんなことは…もう絶対にしないって…。」
その言葉に恵は一瞬、暗い表情となるがすぐに笑みを浮かべて頷いた。
「あと…、さ…。」
「ん？」
尋ねる恵に風間が少し恥ずかしそうに答える。
「これからも…お弁当…作ってきてくれないかな…？」
「え…？」
驚く恵に風間が少し頬を赤くしながら付け加える。
「か、勘違いはするなよ…。ただ…、いつもの味のない食事よりも…、
恵の作るお弁当の方が…かなりましだから…。」
その言葉に恵も少し頬を赤らめて答える。
「しょ、しょうがないわね！　そんなに作って欲しいって言うんだったら…、
作ってあげても…いいわよ…。」
少し恥ずかしそうに答える恵を見て風間の顔に自然と笑みが浮かび、
そんな風間を見て恵も自然と笑顔になった。

翌日。恵は遊園地で小説の加筆をしていた。
「お。恵ちゃん、どうだった？　昨日。」
「うん。大成功だったわよ。」
笑顔で答える恵。
それを聞いてしんのすけの隣にいたボーも、
「良かった…。」

と呟く。
「で、今、何やってるの？」
「小説の加筆。秘密組織の司令室の雰囲気をもっと明るいものにしようかなーって。」
しんのすけの問いに答えた恵は鼻歌を歌いながら筆を走らせていく。
「ふーん…。お、そうだ。これから恵ちゃんと風間君のこと、2人の名字に『春』と『風』があるから、『春風コンビ』って呼ぼうかなー？」
「うん…。それいいかも…。」
二人の会話を聞いて恵が少し苦笑しながら答える。
「は、『春風』って…。別にいいけど…。」
「よーし！　じゃあ、けってーい！」
人差し指を立てた手を高く掲げて宣言するしんのすけ。
それを聞いて少し照れる恵。
そんな恵の傍らには風間のことを忘れないために作った鳥のアクセサリーが、
そして、ＣＩＣの風間の傍らにも恵がくれた、
未来を変えられるという証明である貝殻があった。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３３　春風　―マイ・フレンド―（後書き）

前回と今回の話は実はこの小説で俺が一番書きたかった話だったりします。
「ラファエル」や「プロメテの子」など「ネクサス」原作で提示されたキーワードを
どうすればこの小説内で最大限に活かせるかと考えて、
なおかつ自分が描きたい“普通の”話を描くようにしたのがこの、
“ウルトラマンもビーストもナイトレイダーも登場しない、
ごくありふれた日常の話にそれらを絡ませて、少し恋愛要素も入れた話”でした。
（“第一部”から“第二部”に移行する際のブランクで修正したのも今回の２つの話です。）
遊園地のメンバーと風間だけで進めていくのが少しやりにくい感じでしたけど、
一番描きたかった、“『食』をキーワードとして、２人の絆が再び強く結ばれる展開”などが
修正時に俺自身にとって満足のいくものとなりました。

さて、次回もオリジナルストーリー。
「ネクサス」原作で登場しなかった“あの男”が登場します。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３４　流星　－ザ・ファースト－

「これがオラのデータ？」
ＣＩＣ。服を着ながらしんのすけが風間に問う。
パソコン画面を見ながら、風間がしんのすけに答える。
「うん。以前と比べてＲ７性因子のレベルが桁違いに高くなってる。このおかげで、ウルトラマンとの適応負荷、つまり戦闘後の疲労やメタフィールド展開による疲労が起きなくなっているんだ。」
「ふーん…。ところで、その…Ｒ７性因子って何？」
「ビースト因子と対消滅を起こす謎の因子のことさ。
一時期、適能者（デュナミスト）の条件にＲ７性因子の高さが関わっているんじゃないかって考えられていたんだけど…。」
「オラの人体実験の結果、違ってたって分かったわけね。」
以前、松永管理官に捕らえられた時の事を思い出し、呟くしんのすけ。
「でもその事は当たらずも遠からずでもあるんだ。」
「え？」
しんのすけの疑問に風間は再びパソコン画面を見て答えた。
「Ｒ７性因子は２万８千光年彼方のＭ８０さそり座球状星団で起こった、
超新星爆発と共に地球に降り注いだウルトラマンの光が関係していたんだ。」
「ウルトラマンの光が？」
しんのすけは驚くが、風間は淡々と続ける。
「うん、超新星爆発で地球に飛来したのは、
ビーストのＸニュートリノだけじゃなくウルトラマンの光もだった。
もっとも、ウルトラマン本人が地球に来たのはもっと後だったけどね。」
「どういう事？」

「超新星爆発で飛び散った星の残骸からはビーストのXニュートリノだけじゃなく、
ウルトラマンの光の情報も混じって降り注いできたってことさ。」
「なんかスケールのでかい話だゾ…。」
そう呟くしんのすけを見て、風間は少し笑って答える。
「にしても、最初聞いた時は驚いたよ。いきなりここに来て、
最近ウルトラマンとして戦っている時、なんか前と違う気がするから調べてくれなんて…。」
「まぁ、いいじゃん。風間君、暇そうだったし。」
「あのねぇ…。」
風間は少しため息をつくが、しんのすけはそんな風間に尋ねた。
「で、そのオラのR7性因子が高くなった理由って?」
「それは分からないけど、R7性因子の数値は普遍的なものじゃなくて、
なんらかのきっかけで個人でも数値が変動することは確かだと思う。
そして、しんのすけはR7性因子のレベルが高くなってこの姿になった。」
風間はそう言うとパソコン画面にウルトラマン、ジュネッスブルーの画像を表示させた。
「これか…。」
「うん。以前の赤い姿と違ってこの青い形態は、
しんのすけらしい戦いができるようになっている。光の剣を使えたりとかね。」
「じゃあ、その前の赤い姿は全然オラの個性が出てなかったってこと?」
「うん。あの赤い姿は…お前より前の適能者(デュナミスト)のとった姿に酷似しているんだ。」
「オラの前の適能者(デュナミスト)…?」
しんのすけの言葉に風間は頷いた。
風間の言葉を聞いたしんのすけの脳裏に、

かつてつばきの語った「受け継がれてきた光」という言葉が蘇る。
「オラの前にも適能者（デュナミスト）が…。」

「ほい！　風船だゾ。タカにクジャクにコンドル！」
遊園地。ＣＩＣから戻ってきたしんのすけは元気に働き、
マサオ達は忙しそうに店を切り盛りしていた。
「あー、疲れた。明日香さーん。少し休憩していい？」
「いいわよ～。」
少し休憩を挟んだしんのすけは、ベンチに腰掛け、伸びをする。
そんなしんのすけの脳裏にＣＩＣで風間から聞いた自分より前の適能者（デュナミスト）のことが浮かんだ。
（オラの前の適能者（デュナミスト）…か。）
エボルトラスターを取り出して、心の中で呟くしんのすけ。
（…風間君は5年前にこの光が
ビーストを追って地球にやって来たって言ってたけど、一体どこから来たんだろう…。
あと、オラより前の適能者（デュナミスト）って一人だけだったのかな…。）
エボルトラスターを見つめ、考えるしんのすけ。
そんなしんのすけを背後から監視者が見つめていた。
「光…。何故、私ではなく彼が…。」
そう呟き、監視者はしんのすけのデータを取った。

そして、夜。バイトが終わり、帰り道の思い出の河原。
しんのすけは青いマウンテンバイクを押して歩いていたが、
何かを思うと歩みを止め、自転車を停めて、
ポケットからエボルトラスターを取り出して天に浮かぶ星々を見上げた。
「この光…、この星空のどこから来たんだろう…。」
しんのすけはエボルトラスターを手に夜空の星々を見て、
光が辿ってきた果てしない銀河の旅に思いを馳せた。

「えぇ。既に北米本部の急進派であるクラウス氏の許可は取りました。
あとは…、ボディの建造と光のデータだけです。」
その頃、フォートレスフリーダムではある部屋で松永管理官が、以前話していた北米本部の急進派の一人・クラウスとは違う、別の誰かと電話をしていた。
電話口から相手の声が答える。
「では、データが揃えばもう計画は実行可能と…。」
「えぇ。…ですが、なるべく急いでください。
レーテの老朽化と来訪者のポテンシャルバリアの弱体化によって、このフォートレスフリーダムを中心とする関東地域にビーストが出現し続けています。
このままポテンシャルバリアが弱まれば…最悪の場合、世界規模でビーストの大量発生ということも…。」
松永管理官の懸念にその人物は焦りの入り混じった声で答えた。
「分かりました…。…なるべく、早めにサンプリングを終了します。」
「えぇ…。期待していますよ…。“海本君”。」
その返事に、その人物は舌打ちをして電話を切り、松永管理官は携帯電話を閉じる自分の手が震えているのを感じつつ、笑みを浮かべた。

翌日のアクション高校。
しんのすけは窓の外を見て、物思いにふけっていたが、そこにマサオがやって来る。
「どうしたの？　しんちゃん。珍しいね、そういうの。」
物思いにふけっているしんのすけを見て、マサオが尋ねる。
「いやぁ、最近バイトだらけでちょっと疲れちゃって。」
「ふーん。あ、6時間目は『聞かせて！　先輩』って行事だよ。」

しんのすけはそれを聞いて、マサオに尋ねた。
「？　何それ。」
「この学校の卒業生で、自分の夢を叶えた人達が来て、その人達の話を自分の進路の参考にするって行事。」
「ふーん…。じゃあ、それまで世間話とでも行こうかねぇ。」
マサオの話に相槌を打つと、しんのすけは冗談を言いながら、マサオと話を始めた。
そして、休み時間が終わり、６時間目。
「聞かせて！　先輩」が始まり、担任の先生が入ってきた。
「皆、先輩に失礼のないようにね。」
そう言うと、先生は外にいる男性に入室を促し、男性は教室の中に入ってきた。
「おぉ…。」
「意外とカッケーじゃん。」
男性の姿を見た生徒達が口々に言い、しんのすけもその男性の姿を見る。
男性は優しそうな雰囲気を纏いながらも同時に強さも感じさせ、皆の言うようになかなかカッコいい感じだった。
一方、男性は自分の名前を皆に紹介する。
「５６期生の、真木舜一です。」
「真木…舜一…。」
真木の名前を聞いた途端、しんのすけは思わずその名前を呟き、真木もそんなしんのすけと目を合わせる。その後、真木は話を始めた。
「俺は高校の頃、自分の夢と呼べるものは持っていたんだ。
でも、俺は…その夢を叶える事ができるかどうか、ものすごく不安だった。」
「真木さんの夢ってなんだったの？」
一人の生徒が真木に質問し、真木はすぐに答えた。
「戦闘機のパイロット。」

その瞬間、教室が少しざわめく。
「…まぁ、普通は誰もなろうなんて思わないかもな。
なろうと思ったとしても、大抵は子供の頃とかだけかもしれない。
でも、俺は…どうしてもその夢を叶えたかったんだ。」
「どうしてですか？」
もう一人生徒が質問し、真木は今度は少し考えて答えた。
「昔、子供の頃に夏休みに親戚の家に遊びに行った時に
俺は釣りに行く途中、従兄弟達とはぐれ、偶然航空自衛隊の基地の
近くに来てたんだ。
その時に、空に飛び立つ戦闘機を見たんだ…。
凄かったよ…、青空にまっすぐ飛んでいく翼が太陽にキラキラ輝いて
てた。
まるで…銀色の流星みたいに…。」
「銀色の流星…？」
真木の言葉にしんのすけは聞き返した。
「あぁ…。あの時の体験があったから、俺はどうしても夢を叶えよ
うって思ったんだ。」
そして、6時間目が終わった後も、
しんのすけは真木が言った「銀色の流星」という言葉が頭に引っか
かっていた。

放課後。しんのすけはマサオに先に帰っといてというと、真木を探
して校舎内を駆け巡った。
そして、遂に屋上で空を見上げている真木を発見した。
「真木さん！」
しんのすけの呼びかけに真木が振り向く。
「君は…。」
しんのすけは真木に近づくと、意を決して言った。
「真木さんのこと…、オラ、もっと詳しく知りたいんだ。」
「え？」

驚く真木にしんのすけは答えた。
「さっき、真木さんが言った『銀色の流星』って言葉が気になって…。」
「俺も…君のことが何故か気になっていた…。」
「え？」
真木の意外な返答に驚くしんのすけ。
「何か…。随分会っていなかった友と再会したような…。
君と会った時…、何故かそんな懐かしい感じがしたんだ…。」
真木の答えにしんのすけは少し不思議に思うが、その時、エボルトラスターが明滅を始めた。
「あ…。ちょっと、オラ…。」
そう言うとしんのすけは校舎内に戻ると、エボルトラスターを掲げて、
光となって飛び立ち、真木はそれを見て何かを思い出したかのように呟いた。
「銀色の…流星。」

「エリア７、ポイント３５４にビースト振動波確認。ナイトレイダーにスクランブル要請。」
ＣＩＣでは風間がビースト振動波を捉え、今日もナイトレイダーが出撃する。
チェスターが現場に到着すると、
そこにはかつてしんのすけが以前遺跡の夢で見たビースト・ガルベロスがいた。
「各機、攻撃開始。」
「了解。」
和倉隊長の指示を受け、各チェスターは散開して四方からガルベロスに攻撃。
爆発の煙が収まった後、そこにガルベロスはいなかった。
「消えた…。」

「じゃなくて木っ端微塵よ。」
呟く石堀隊員に平木隊員が答えるが、
次の瞬間、ガルベロスが先程とは別の場所に現れ、
平木隊員搭乗のγに火炎弾を吐いて攻撃した。
「何よこいつ!?」
驚く平木隊員はなんとか火炎弾をかわすが、ガルベロスはγに第二撃を加えようとする。
その時、そこに光が現れて、ガルベロスを弾き飛ばし、ウルトラマンが現れた。
「ウルトラマン!」
平木隊員が叫ぶ。
ガルベロスは火炎弾を吐くが、ウルトラマンはそれを全てアームドネクサスで迎撃、
ジュネッスブルーにスタイルチェンジしてメタフィールドを展開した。
「各機、ストライク・フォーメーション! メタフィールドに突入する!」
「了解!」
和倉隊長の指示を受けて、
α、β、γはストライクチェスターに合体。δと共にメタフィールドに突入した。
メタフィールド内ではウルトラマンがスピードを生かした戦法でガルベロスを圧倒。
飛び蹴りを浴びせた後、ウルトラマンはクロスレイ・シュトロームを撃とうと構えるが、
ガルベロスはそこにはおらず、ウルトラマンは辺りを見回し、警戒する。
その直後、背後にガルベロスが現れ、
ガルベロスが発した火炎弾をまともに受けてしまった。
ガルベロスは地面に倒れたウルトラマンを無理やり立たせて、殴り

飛ばす。
一方、西条は苦しむウルトラマンとガルベロスを見ると、
ガルベロスの目が赤く光っているのに気づき、ガルベロスの目に狙いをつけた。
「クワドラブラスター、ファイア！」
西条の撃ったクワドラブラスターはガルベロスの目にピンポイントで命中。
幻覚を発生できないようにした。
幻覚の出せないガルベロスにウルトラマンは蹴りを浴びせ、
バク転で距離を取ってクロスレイ・シュトロームを放った。
しかし、そこにアンノウンハンドの闇が現れ、
そこから降り注いだルシフェルの白い羽根が幕を作ってガルベロスを防御した。
驚くウルトラマン、ナイトレイダー。
やがては白い羽根はガルベロスを包んで共にアンノウンハンドの闇へと戻っていき、
ウルトラマンもメタフィールドを解いて、光となって消えた。

戦い終わって、しんのすけが学校に戻ると、真木が門の前で待っていた。
「真木さん…。」
しんのすけが戻ってきたのを見て真木が尋ねた。
「さっきの光…。あれ…、君なんだな？」
真木の言葉にしんのすけは驚くが、やがて頷いた。
「やっぱりな…。」
「ってことは…、真木さんも…。」
しんのすけの言葉に真木は少し間を置いて答えた。
「あぁ…、君の前の…ウルトラマンだ…。」
その返事に真木を見つめるしんのすけ。真木もしんのすけを感慨深そうに見つめる。

その頃、フォートレスフリーダムのＣＩＣでは風間がパソコン画面に映し出している
ジュネッスブルーの画像の隣にかつてしんのすけがなっていたものとは違う、
赤いジュネッスと思われるウルトラマンの画像を表示させていた。
「初代適能者（ファーストデュナミスト）…、真木…舜一。」
『この日…。風間君の言っていたオラより前の適能者（デュナミスト）、
真木舜一とオラは偶然にも出会った…。』…野原しんのすけ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３４　流星　－ザ・ファースト－（後書き）

映画「ＵＬＴＲＡＭＡＮ」からのキャラ、真木舜一登場。
しんのすけとマサオの高校の卒業生だったという設定です。
（今回の劇中での高校行事は俺の通っている高校の行事をモデルとしています。）
あと、この小説内での“５年前”の出来事とそれに関わったメンバーは
原作となる映画とほぼ同じですけど、若干違う設定にしています。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３５　継承者　－ザ・セカンド－

最初の適能者（デュナミスト）である真木舜一と出会ったしんのすけ。
『風間君の言っていた、オラより前のデュナミスト、真木舜一とオラは偶然にも出会った…。
でも、オラはまだこの時、知らなかったんだ…。
真木さんが関わった事件が今、どうなっているのかを…。』
真木を見つめるしんのすけ。真木もしんのすけを感慨深そうに見つめる。
「確か…、俺のことを教えてほしいって言っていたよな？」
真木はしんのすけに尋ね、しんのすけはそれを聞くと頷いた。
「分かった…。でも、すぐにってわけにはいかない。
俺自身…。ついさっきまで…その時の記憶が頭から抜け落ちてたような感じだったからな…。」
「記憶が…抜け落ちてた…？」
真木の言葉にしんのすけはＭ・Ｐのことを思い出す。
一方、真木は話を続ける。
「だから、俺に少し時間をくれないか？」
「別にいいゾ。オラも…制服のままだと少し窮屈だし。」
しんのすけの返答に真木は少し笑って答える。
「そうか…。じゃあ、ここで待ち合わせよう。」
「ありがとうございまーす！」
その答えにしんのすけはお礼を言い、家へと帰っていった。
それを感慨深い目で見送る真木。

その後、野原家。
しんのすけが帰ってきたのを知ってみさえが出迎える。
「おかえ…。」
しかし、しんのすけはそれを無視して部屋に入っていき、

私服に着替えるとすぐさま降りてきた。
「ちょっと、しんのすけ！　帰ってきたらただいまくらい言いなさい！」
「お、ごめん。ちょっと、オラの前のウルトラマンだったって人に会って…。」
「え？　そんな人がいたの？」
しんのすけの意外な返答にみさえは驚くが、しんのすけは話を続けた。
「うん。風間君から聞いたんだ。
で、今日、学校の行事でその人と偶然会ったの。
ちょっと、その人と話しに学校に行ってくるから！　じゃ、そういうことで！」
「あ、しんのすけ！　もう…。」
急ぐあまり、しんのすけはロクにみさえの話を聞かずに
青いマウンテンバイクに跨って、学校に向かった。

その頃、フォートレスフリーダムでの自室で
和倉隊長はある写真を手に取っていた。
その写真は航空自衛隊の制服を着た自分と真木が一緒に写っている写真だった。
「もし…、俺のおぼろげな記憶が正しいならば、真木は…あの時…。」
『真木、お前根っからのイーグルドライバーだろう？　退官の意志変わらんのか？』
『和倉！　すぐに帰投しろ！　アンコントロールになれば墜落だ！』
『あぁ…。俺は奴の親友だからな…。』
『真木ぃー！』
和倉隊長の脳裏に浮かぶおぼろげな記憶。
それらが思い浮かんだ後、
和倉隊長は今度は真木とその家族が写っている写真を手に取った。

「真木…。」

「和倉…。」

一方、真木も待ち合わせの時間まで時間を潰すために入った喫茶店で、

携帯電話に入っている和倉隊長のものと同じ写真を見ていた。

「どうして…今まであの記憶が…。」

写真を見ながら呟く真木の脳裏に“銀色の流星”にまつわる記憶が蘇る。

『俺はお前を…許さなぁぁい！！！』

『飛べる…。俺は…この空を飛べる…！』

『お前を倒すこと…。それが俺の…ラストミッションだ！！』

『真木ぃー！』

そして、それらが思い浮かんだ後、

真木は椅子にかけていた上着を羽織り、勘定を済ませて店を出た。

星空の下、待ち合わせ場所である学校に到着したしんのすけ。

まだ真木は来ておらず、しんのすけは自転車を降り、

壁にもたれかかって、ポケットからエボルトラスターを取り出した。

「真木さん…。いつ頃、ウルトラマンとして戦ってたんだろう…。

あと…なんか記憶が抜け落ちてたような感じって言ってたけど…。」

呟くしんのすけはエボルトラスターを見つめる。

「しんのすけ君！」

そこに声が聞こえ、しんのすけが声のしたほうに振り向くと、真木が来ていた。

「真木さん。」

到着した真木を見つめるしんのすけ。

その後、二人は先程の喫茶店・シリウスにやって来た。

店員が真木の注文したコーヒーとしんのすけの注文したサイダーをテーブルに置いて去っていく。

真木はコーヒーを一口飲んで一息つき、しんのすけはサイダーを一気に飲み干した。
「プハーッ！　このために生きてんなぁー！！」
そんなしんのすけを見て真木が笑う。
「君、オヤジみたいなこと言うんだね。」
「いやぁ、昔からの癖でして～。
あ、それで…真木さんはどうして光と出会ったの…？」
その質問に真木は少し考えて答えた。
「運命の出会い…って奴かな。」
「運命の出会い？」
「あぁ、今からちょうど5年前…。
俺が航空自衛隊に所属していた頃、同僚と緊急警報を聞いて出撃した時に
俺の乗っていた機体は飛来してきた赤い発光体と衝突したんだ。」
「赤い発光体…、じゃあそれが…。」
「あぁ…、それがウルトラマンだった。」
真木の話にしんのすけは少し驚く。
「じゃあ、真木さんは選ばれたとかじゃなくて、偶然…。」
頷いて答える真木を見て、しんのすけはポケットの中のエボルトラスターを触った。
「いきなり与えられた光の力に俺は戸惑った。
どうして俺なのか、どうして俺があんな化け物と戦わなきゃいけないのかと…。
そして、どうして俺が力を得たのか誰かにその答えを教えてほしかった…。」
真木の脳裏に蘇るかつての自分。
「だが、俺は家族を…大切なものを守るために戦うことを決意した…。
そして、ビーストと戦っている時にはっきりと分かったんだ。
家族との絆が…親友との絆が俺を支えている…。

俺は決して独りで戦っているんじゃないと…。
そして今、あの時、俺がビーストに勝てたのは
俺を想ってくれている多くの人達との絆があったからだと俺は思ってる。」
真木の言葉を聞いて、しんのすけはエボルトラスターを見つめた。
（そっか…、オラがあの時あの青い姿になって、溝呂木に勝てたのって、
もしかしたら忘れかけてた皆との絆を思い出したからなのかも…。）
しんのすけはエボルトラスターを見つめながら心の中で呟いた。

「エリア９、ポイント１８２にビースト振動波確認。ナイトレイダーにスクランブル要請。」
ＣＩＣ。風間がビースト振動波を確認しナイトレイダーに指示を送る。
指示を受けたナイトレイダーは出撃。
同じ頃、しんのすけのエボルトラスターも明滅していた。
エボルトラスターを取り出して真木を見るしんのすけ。真木もしんのすけを見て答えた。
「頑張れよ、後輩。」
真木の言葉に力強く頷くと、しんのすけは店を出て走り去っていった。
（守ってくれ…。君が得たその光と共に、君の大切な人達や
多くの人々の生きているこの世界の未来を…。野原しんのすけ君…。）
しんのすけを見送った真木は心の中でそう呟いた。

チェスターが現場に到着すると、そこにはガルベロスがいた。
「各機、一斉攻撃！」
「了解！」
和倉隊長の指示を受けて、チェスター各機はガルベロスに一斉攻撃。

そして、天から光が降り立ち、ウルトラマンが現れた。
ウルトラマンはガルベロスと向かいあい、
ジュネッスブルーにスタイルチェンジしてメタフィールドを展開する。
しかし、そこにアンノウンハンドの闇が現れた。
「ウルトラマンを援護する！　セット・イントゥ・ハイパーストライクチェスター！」
和倉隊長はそれを見てすぐさま指示を出し、
チェスター各機はハイパーストライクチェスターに合体、ダークフィールドGに突入した。

ダークフィールドG内部。ウルトラマンはガルベロスと互角の戦いを繰り広げていた。
そこにハイパーストライクチェスターが現れ、ウルトラマンを援護する。
しかし、ガルベロスの復活した目が赤く光り、
ガルベロスが一気に3体に増えた。
「また幻覚を…。」
ＣＩＣの風間が呟き、ウルトラマンは事態に驚きつつも構えを取る。
ガルベロスは一斉に火炎弾を発射。
ウルトラマンはサークルシールドで防ぐが、
残った火炎弾をアンノウンハンドの闇から現れた、
白い羽根が誘導、ウルトラマンの背中に命中してしまう。
「あの白い羽根には、誘導効果もあるのか…。」
風間が呟き、それと同時にウルトラマンは火炎弾の衝撃で地面に倒れてしまった。
続けて火炎弾を撃とうとするガルベロスだったが、
その時、ハイパーストライクチェスターがスパイダーミサイルでガルベロスを攻撃。
ミサイルは目に命中し、幻覚が全て消え去った。

それを見てウルトラマンは立ち上がると、
ガルベロスに突撃して飛び蹴りを浴びせ、シュトロームソードを展開。
上空に飛び立った後、急降下してガルベロスを一刀両断。
ガルベロスは光の粒となって消滅し、アンノウンハンドの闇も消え去った。
戦いに勝利したウルトラマンはハイパーストライクチェスターにサムズアップを送り、
西条がそれに頷くと、ウルトラマンは光となって消え、
ハイパーストライクチェスターもフォートレスフリーダムへと帰還していった。

戦い終わり、家に帰ったしんのすけは
自分の部屋で布団に寝転びながらエボルトラスターを見つめていた。
『オラは最初の適能者（デュナミスト）である、真木さんと一緒に戦ったこの光を受け継いだ者として、今までの自分の戦いを振り返ってみることにした。』

その頃、フォートレスフリーダムの地下の独房。
捕らわれ、幽閉された溝呂木が頭を抱えて一人呟いていた。
「俺は…誰なんだ…。」
そして、ある部屋。
松永管理官が人造ウルトラマン計画の資料を手に笑みを浮かべていた…。
『でも、オラはこの時、薄々と感じてた。
決戦の時が段々と近づいてきてるってことを…。』…野原しんのすけ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３５　継承者　－ザ・セカンド－（後書き）

今回の話でのしんのすけと真木の会話は「ダイナ」の「最終章？太陽系消滅」の
アスカとダイゴの会話シーンのイメージで描きました。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３６　堕天使　－ルシフェル－

『1年振りだな、凪。』
『黙示録という名の楽しい遊びをしている最中なのさ。』
『そいつはもういい。…消せ。』
『邪魔するなって。野暮な奴だ。』
『さぁ行けよ…正義の味方。』
『俺はあの夜、本当の自分と出会ったのさ…。』
『俺は力を得た。貴様ら人間なんてどうとでもできるほどの力を。』
『これでウルトラマンの戦いは終わる。』
『力とは…他者を支配し、圧する為にある！』
『俺は死…。』

「うわぁぁぁあああああっ！！！？？」

「お願いだ…もう止めてくれ…。何をされても俺は何も思い出せない…！」
ＴＬＴ隊員に両腕を掴まれた溝呂木が力無く廊下を引きずられていく。
先程、かつてしんのすけも受けたブレインスキャニングによって、
溝呂木は自分が失った忌まわしい過去の記憶を掘り起こされて見せ付けられたが、
それでも記憶を取り戻す事はなく、
ただ自分と同じ姿形をした存在の残虐非道な行為の数々を
目の前に突きつけられたにすぎなかった。
独房に押し込められ、ベッドに突き倒された溝呂木のすぐ横に松永管理官が腰掛けた。
「溝呂木眞也…。今は見る影も無いが、あなたは我々によって恐るべき脅威だった…。」

ベッドの隅で怯え、縮こまる溝呂木に向けて松永管理官は淡々と語りかけた。
「力による支配…。その歪んだ目的の為にあなたは多くの人間の心を利用し、命すら奪った…。
悪魔の力を得たあなたは終焉の地でウルトラマンに戦いを挑み、そして、全てを失った。
その記憶さえも…。しかし、我々は知る必要があるのです。
かつてあなたが手に入れた恐るべき力の秘密を…。」
「止めろぉ!!」
溝呂木は頭を抑え、あらん限りの力で叫び、松永管理官の話を強引に遮った。
「…もう…止めてくれ…。」
恐怖で震える溝呂木を見下ろし、松永管理官はゆっくりと席を立って独房を後にした。
「1時間後にブレインスキャニングを再開する。」
「ハッ!」
松永管理官とTLT隊員が去り、独房には溝呂木一人が残された。

「俺は…何者なんだ…?」
溝呂木が不安に恐れ戦いていると、どこかから声がかけられてきた。
『お前は…人形…。』
「誰だ?」
辺りを見回すが、誰もいない。
『思い出せ…。お前のやった残酷なゲームを…。』
溝呂木の脳裏に蘇るあの夜、ノスフェルを使ってあいの家族を惨殺し、
自らもディバイトランチャーであいを射殺したあの夜の記憶が蘇る。
あの夜、あいを撃ち殺した後、
溝呂木はヘルメットを外して目の前に横たわる自分の行為の結果を見つめた。

その時、背後の炎が勢いよく燃え上がり、その中から一人の謎の人物が姿を現した。
振り返ると、謎の人物はニヤリと邪悪な笑みを浮かべ、溝呂木に向けて一言告げた。
『お前は…人形…。』
「…？」
『ただの…道具だ！』
「…！」
謎の人物の言葉を聞いた溝呂木は恐怖と絶望、後悔に顔が歪んでいった。
「うわあああぁぁぁぁ！！」

現在。警報鳴る中、松永管理官がＴＬＴ隊員を率いて駆けつけると、警備の人間を倒して溝呂木が姿を現した。
「溝呂木…。」
松永管理官の声に溝呂木が振り向く。
それを見て松永管理官が指示を飛ばす。
「何をしている！　取り押さえろ！」
「ハッ！」
４人のＴＬＴ隊員が一斉に襲い掛かるが、溝呂木はそれらを難なく倒し、
一人から銃を奪い取って松永管理官に向けて構えた。
「記憶を取り戻したようですね。」
銃を突きつけられながらも松永管理官は余裕の表情を崩さずに溝呂木と対峙した。
「貴様らの望んだ事だ。」
そう言いながら、溝呂木は銃を構えたまま少しずつ松永管理官へと迫っていく。
「それは良かった。ではさっそく…我々の質問に答えてもらいましょう。」

松永管理官も銃を恐れず溝呂木へと向かっていく。
が、胸元に銃を当てられ、さすがに両手を上げて後退する。
「ふざけるな。俺はここを出る。邪魔をすれば容赦はしない。」
そう答えた溝呂木は松永管理官を壁まで押しやると、その場から立ち去ろうとしたが、
松永管理官はすぐさま後を追いかけた。
「待ちなさい。既にあなたのゲームは終わった。今更逃げたところで意味など無いはず。」
しかし、溝呂木は立ち止まって答える。
「黙れ。俺にはまだ…やるべき事がある。」
答えた時の溝呂木の様子を松永管理官が不思議に思っていると、背後から援護のＴＬＴ隊員達が駆けつけ、溝呂木に向けて銃を構えた。
「止まれぇ！」
しかし、溝呂木はＴＬＴ隊員の警告を無視して逃走を始めた。
「止めろぉ！！」
松永管理官の制止も空しく、ＴＬＴ隊員達から銃が放たれるが、溝呂木はそれらをかわして姿を消した。
「逃がすなぁ！　追えぇ！！」
逃げる溝呂木を追うＴＬＴ隊員達に向かって松永管理官が叫ぶ。
「撃つな！　生きたまま拘束するんだ！」

「一体…何が…。」
一方、大原リーダーは部屋から廊下に出て、鳴り出した警報に注意していたが、
すぐにミスによる誤報だったと伝えられると再び歩き始めた。
その時、
「騒ぐな…！」
「！？」
口を押さえ、銃を突きつけて溝呂木が凄む。

「警報と警戒を解かれて助かった…。保身が裏目に出たな、松永…。」

「トオル。お弁当持って…。」

ＣＩＣ。恵がやってくるが、風間はパソコンのキーボードを忙しそうに叩いていた。

「…あれ、なんだか…忙しそうね…？」

「あぁ、さっき明らかにおかしい警報が鳴って…。」

「おかしい警報？」

恵は風間の使っているパソコンの画面を覗き込む。

「あぁ、鳴った途端にすぐに止んだんだ。

ミスによる誤報って伝えられたけど、ちょっと気になってね…。」

そう言うと、風間は再びキーボードを叩き始めた。

「ふーん…。」

風間がキーボードを打ち終わるまで恵は風間のデスクの上に置いてある貝殻に視線を移す。

その時、風間が数分前の監視カメラの映像を捉え、それを画面に映し出した。

「やっぱり…。」

風間の呟きが気になり、恵が貝殻から目を離して再び画面を覗き込むと、

そこには溝呂木が銃を持って大原リーダーを連れて、

追跡してきた三沢率いるＭ・ＰとＴＬＴ隊員をなぎ倒して車を奪い、ダムから脱出している映像が映っていた。

「誤報じゃなかったのね…。」

「溝呂木を捕らえていたなんて…。ある程度予想していたけど…。」

その頃、その溝呂木は先程の銃撃で傷を負った部分を手で押さえながら、

大原リーダーを銃で脅して車を走らせていた。

「…一つ、聞いていいか？」
「何？」
厳しい態度と口調で大原リーダーが答える。
「お前…、今まで何人記憶を消してきた？」
「え？」
意外な質問に大原リーダーは少し戸惑いながらも答えた。
「…５４人よ。」
「覚えてるのか？」
「覚えておきたいから…。」
「……。」
大原リーダーの答えに溝呂木は黙り、今度は大原リーダーが聞く。
「何の為に…、あなたは逃げ延びようとしているの？」
当然の質問に少し迷いながらも、溝呂木は答えた。
「あの時も…俺は逃げていた。そしてあの女の子と出会ったんだ…。」
呟く溝呂木の脳裏に蘇る河村愛との出会い。
「その女の子…、河村愛…ね。」
大原リーダーの言葉に溝呂木が頷く。
「俺はあの子から幸せを奪った…。だから俺は…。」
溝呂木はそこで話を止めるが大原リーダーは続ける。
「…謝りたい？」
「許されるとは思わない…。
でも、俺はあの子の他にも数多くの人間を苦しめ、その命を奪ってきた…。
どれだけ多くの人間を傷付けてきたか…、もう記憶に無いほど…。
だからこそ、あの子には…。」
溝呂木のその答えに大原リーダーは少し考えた後、やがて決意と共に答えた。
「…私が、彼女に会わせるわ！　約束する…。」
その返答に溝呂木は戸惑いと疑問を感じた。

「何故だ？　過去に俺が何をしてきたかお前は知っているはずだ！」
「私も見届けないといけないの…私もあの子の幸せを奪った一人だから…。」
「……。」
溝呂木はそんな大原リーダーの言葉を聞くと、
再び黙り込み、大原リーダーはハンドルを強く握り締め、車を走らせ続けた。

その頃、フォートレスフリーダムの敷地内。
溝呂木に倒された三沢は口を拭って立ち上がった。
「おい、お前ら起きろ。」
三沢は倒れ伏しているＭ・ＰとＴＬＴ隊員に呼びかける。
しかし、気絶したままなかなか起きないＭ・ＰとＴＬＴ隊員に三沢は怒りを露にした。
「…起きろ！　貴様らぁ！！」
三沢の叫びに数人のＭ・ＰとＴＬＴ隊員が起き上がった。
「あの、三沢チーフ…。状況はどう…。」
一人のＴＬＴ隊員が三沢に尋ねようとするが、三沢はそんなＴＬＴ隊員を殴り飛ばした。
驚く他のＴＬＴ隊員とＭ・Ｐ。
「貴様らが不甲斐ないせいで、溝呂木を捕らえられなかっただろうが！！」
「し、しかし三沢チーフも…。」
ビビりながらも続けるＴＬＴ隊員の胸元を三沢は掴んで息を荒げた。
「黙れ！　俺は正義を貫いている！　だが、貴様らはなんだ！？
あんな松永とかいうジジイにペコペコしやがって！
これだから組織人間は気持ち悪い！　反吐が出る！！」
不満をぶちまけ、肩で息をする三沢を一人のＭ・Ｐは冷ややかな目で見ていた。
（この人、言ってることとやってることが違いすぎる上に、

自分の考えや意見を人に押し付けまくってヤバいんだよな。
なんかちょっとしたきっかけで道踏み外しそう…。）

その後、三沢はダムの中に入ろうとするが、背後に何者かの気配を感じて振り向く。
「！　お前は…！」
その何者かの姿を見た三沢は驚くが、次の瞬間、気を失って倒れてしまった。
そんな三沢の耳に微かだが溝呂木の聞いた声と同じ声が聞こえる。
『三沢広之…。お前に力を与えよう…。
お前の心の中にある望みを…叶えることのできる力を…。』
そして、謎の存在は姿を消し、
一人残された三沢の手にはダークエボルバーが握られていた。

その頃、遊園地ではしんのすけがテーブルを拭いていたが、
その時、エボルトラスターが明滅を始めた。
「あ！」
「どうしたの？　しんのすけ君？」
しんのすけが後ろを振り返ると明日香が来ていた。
「え！　えっと…、その…。」
しかし、そんなしんのすけより前に明日香が答えた。
「また急用？　いいけど、あとでツケは来るわよ。」
「ほ、ほい！　じゃあ、行ってくるゾ！」
そう言うと、しんのすけは現場に向かい、明日香はそんなしんのすけを黙って見送った。

「これは…。」
その頃、ＣＩＣでは、風間が画面に一つの反応を見つけていた。
その反応地点、愛のいる村の近くの山の山中に一つの光が現れていた。

やがて光が収まり、光の中から美しい白い翼を複数有する、光り輝く巨人が地上に舞い降りてきた。
その光り輝く者、ルシフェルは自分の姿を見て笑みを浮かべた。
「エリア８、ポイント５０８に闇の巨人、ルシフェルが出現。ナイトレイダーにスクランブル要請。」
風間がナイトレイダーに指示を送り、ナイトレイダーが出動。
それを確認後、風間は画面のルシフェルを見て呟いた。
「闇の巨人でありながら、光り輝く巨人…。だけど、その実態は…。」

一方、溝呂木と大原リーダーは愛のいる村に向かっていたが、その時、
「！」
溝呂木は何かを感じ、辺りを見回した。
「どうしたの？」
バックミラーでそれを知った大原リーダーが尋ねるが、溝呂木はそれとは別の返事を返した。
「頼む、山に向かってくれ。」
「え？」
大原リーダーの疑問に溝呂木はすぐさま答えた。
「闇の巨人がそこにいる。おそらく俺を狙って…。」
「でも…。」
そんな大原リーダーに溝呂木は更に頼んだ。
「いいから向かってくれ！　俺を狙っているんだとしたら、このままあの子のいる村に行ったらまずいことになる！」
「……。」
溝呂木の訴えに大原リーダーは車を方向転換させ、山に向かった。

その頃、現場に到着した各チェスターはルシフェルを発見。
「各機、攻撃開始。」

「了解。」
和倉隊長の指示を受けて、チェスターがルシフェルに向けて攻撃するが、
ルシフェルは白い羽根で幕を作って防御する。
「以前のガルベロス戦の時と同じものか…。」
石堀隊員が呟き、ルシフェルに攻撃しようとするが、
その時ルシフェルが白い羽根を辺りに振りまき、その中に入った瞬間、
電波錯乱が起こり、チェスターは思うように動けなくなってしまった。
そこにしんのすけがやって来て、チェスターの危機を知るとエボルトラスターを掲げて、
ウルトラマンに変身。ルシフェルと対峙する。
ルシフェルはウルトラマンを見ると、白い羽根が舞い散る中、笑みを浮かべた。
ウルトラマンはそんなルシフェルを見ながら、ジュネッスブルーにスタイルチェンジ、
メタフィールドを展開しようとするが、ルシフェルはその前に人差し指を前に向けて、
そこから放った光線でウルトラマンを捕らえ、宙に浮かせた。
ルシフェルはしばらく宙にウルトラマンを浮かせた後、
指をひょいと下にやって地面に落とす。
そして、背中の白い羽根を浮かせて一斉にウルトラマンに発射。
立ち上がったウルトラマンに命中した瞬間、白い羽根は爆発を起こし、
ウルトラマンは地面に倒れ込んでしまった。
「しんのすけ君！」
「しんのすけ！」
「しんのすけ君！」
それを見てナイトレイダーとＣＩＣの風間、恵が叫ぶ。

ルシフェルはそんなウルトラマンを見て笑い声を上げるが、
ウルトラマンはその隙を突いて、パーティクル・フェザーを撃ち、
ルシフェルが怯んだ隙にクロスレイ・シュトロームを発射した。
受けたルシフェルは吹き飛び、ウルトラマンを睨んだ後、白い羽根
を纏って退散し、
それと同時にチェスターを覆っていた白い羽根も消え、ウルトラマ
ンも光となって消えた。

「全機、帰還する！」
戦い終わり、和倉隊長の指示を聞いて各チェスターが帰還しようと
した時、
西条がふと下を見下ろすと表情が固まった。
「あれは…。」
「西条、どうした？」
「溝呂木…。」
「何？」
西条は溝呂木の姿を見て驚きを隠せなかった。
そして、西条は帰還命令を無視してそのまま現場に向かった。
「おい！　西条！　戻れ！」
和倉隊長が必死に呼び止めるが、西条の耳には届かない。
「溝呂木が…。」
突然の展開に戸惑う和倉隊長。石堀隊員も事情を尋ねる。
「隊長！　溝呂木って…。どうします？」
しばし考えた末、和倉隊長は重い口を開いた。
「西条には現場の調査を命じる。
石堀、平木、我々はフォートレスフリーダムに帰還し、松永管理官
に説明を求めよう。」
「了解。」

和倉隊長達が帰還する頃、

西条はδから降りて辺りを見渡すが、既に溝呂木の姿はどこにも無かった。
「溝呂木…。」

その溝呂木本人は傷を負った部分を手で押さえながら夕方の森の中を一人歩いていた。
「溝呂木！」
その時、後ろから聞こえてきた声に振り向くとそこにはしんのすけがいた。
「……。」
「溝呂木ぃ！」
しんのすけは溝呂木に詰め寄ろうとするが、その後ろからやって来た人物を見て驚いた。
「ななこ…おねいさん？」
しんのすけの呟きに大原リーダーはしんのすけを見た。
「しんちゃん…。」
見つめあう二人。
「ななこおねいさん…、どうして…ここに？」
「それは…。」
しんのすけの質問に大原リーダーは俯いて黙ってしまったが、しばしの沈黙の後、大原リーダーはしんのすけの質問には直接答えず、
溝呂木に向かって話しかけた。
「あなたがここにいるってバレたみたい。
すぐにＴＬＴが来るわ。河村愛に会うのなら、今のうちよ。」
「愛ちゃんに？」
驚くしんのすけ。
しかし、溝呂木は首を振る。
「いや、いい。」
「いいって…彼女に会わなくていいの？　会って謝りたいって…。」

「え…？」
大原リーダーの言葉を聞き、再び驚くしんのすけ。
問う大原リーダーに向かって溝呂木は静かに話し出した。
「あの子に会って…どうすればいい？
最初は…あの子に会って謝ろうとした…。謝っても許されるとは思わない。
罵倒されようが殴られようが…殺されても構わない…。
そう考えていた…。それだけの事をしてきたんだ…。
だが、あの子自身はどうなんだ？
俺と再び会って…俺の謝罪を受けたとしても…。それであの子は救われない…。
俺があの子と会っても…あの子を救う事にはならない…。むしろ…。」
「だから…会わないっていうの？」
大原リーダーの言葉に溝呂木が黙って頷くと、
それまで黙って聞いていたしんのすけが口を開いた。
「溝呂木、お前…記憶を取り戻したのか？」
しんのすけの問いを聞いて溝呂木が少し自嘲気味な笑みを浮かべて答える。
「あぁ…。俺はお前にしたこと…。俺が今まで多くの人にしてきたこと…。
全て償いたい…。そう思ってる…。だが、そんな俺の考えも、その考えをお前達に言っていることも所詮自己満足に過ぎない…。
結局、俺の成す事全てが俺自身の自己満足に過ぎないんだ…。」
「……。」
大原リーダーはそんな溝呂木を無言で見つめる。
「だが…、例え自己満足だとしても…、何をしないよりは…した方がいい…。」
そう呟くと、溝呂木は一人歩き出した。
「溝呂木…。」

それを見てしんのすけが呟き、
大原リーダーは溝呂木の後を追おうとするが、しんのすけの方を見て少し躊躇する。
しかし、しんのすけは小さく頷くと溝呂木の後を追い、大原リーダーも一緒に後を追った。

その頃、ルシフェルが現れた場所のすぐ近くのトンネル。
そこにダークエボルバーを持った三沢が姿を現した。
「ま…、力を試すのにはちょうど良かったな…。」
呟く三沢は手にしたダークエボルバーを見つめる。
「ビーストを自在に操る力…。闇の力…。
これさえあれば…、俺の望みは…叶う！　ハハハハハ！！！」
三沢は誇らしげに頭上にダークエボルバーを掲げ、辺りに三沢の笑い声が響き渡った。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３６　堕天使　－ルシフェル－（後書き）

溝呂木の贖罪編。三沢は原作ではほとんどその人物像について描写されていないので、
“自分の考えを絶対的に正しいものだと信じて、それを人に押し付ける傾向のある人物”という、
ある意味“堕天使”の力を与えられるにふさわしいキャラにしました。

…でも、描きようによってはもっとこのキャラを濃くできると思うんですよね～。
溝呂木の描写を優先して、あまりドラマのないキャラにしてしまった気がします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３７　影　－アンノウンハンド－

「溝呂木眞也が脱走したというのは本当ですか？」
コマンドルーム。
溝呂木を目撃したとの西条の報告を受けて和倉隊長が苛立たしく辺りを歩き回っていた松永管理官に目を向けた。
「管理官。溝呂木拘束、逃亡の事実が何故我々に知らされなかったのか今更問いません。しかし、事態は極めて危険かつ緊急を要します！　出動許可を！」
松永管理官は眼鏡を直すと仕方が無いと言った感じで息を一つ吐いた。
「分かりました。ただし、全員を出すわけにはいきません。」
和倉隊長が反論しようとすると、西条が立ち上がった。
「私が行きます。」
皆が振り向く中、西条を見て和倉隊長は一抹の不安を感じるも、しばし間を置いて了承した。
（また戦う事になるのか…、溝呂木と…。）

その頃、当の溝呂木はしんのすけ、大原リーダーと一緒に夜中の山道を歩いていた。
「何故わざわざ俺についてくる？　お前達が俺に付き合う義務も義理も無いはずだ。」
溝呂木の問いにしんのすけと大原リーダーは顔を見合わせる。
「言ったでしょう。私は見届けなければいけないの。」
少し笑って答える大原リーダーの隣でしんのすけが答える。
「ま、旅は靴擦れって言うじゃん。」
「それを言うなら道連れ。」
しんのすけの間違いに大原リーダーが指摘を入れ、しんのすけは
「そうとも言う～。」

と軽い感じで答えた。そんな2人を見て、溝呂木が少し笑う。
「変わった奴らだ…。」
そう呟き溝呂木は歩みを進めようとするが、その時、突然、腹部を押さえてうずくまった。
「どうしたの!?」
「近づくな!」
大原リーダーが心配して近づくが、溝呂木は銃を向けて牽制する。
しんのすけは腹部を押さえた溝呂木の手に赤い血が付いているのを見た。
「怪我してるゾ!」
「かすり傷だ。」
溝呂木は腹部を押さえたまま立ち上がるがその顔は激痛に歪んでいた。
「血が出てるわ…。少し休んだほうが…。」
「駄目だ。」
大原リーダーの提案を溝呂木は拒否するが、すぐさましんのすけが続ける。
「でも、行き倒れになればお前、捕まるゾ。」
「……。」
しんのすけと大原リーダーの話を聞き、溝呂木はしばし悩んだ。

一方、溝呂木がいる山中近くに三沢も姿を現した。
「ここにいるのか…、溝呂木眞也…。」
三沢は明滅するダークエボルバーを手に呟いた。
「俺は…人間を超えた…。」

山中の小さな小屋。
眠っている溝呂木を見た後、しんのすけは隣に座っている大原リーダーに尋ねた。
「…ななこおねいさん。さっき…、

見届けないとって言ってたけど…。どういうこと?」
しんのすけの問いになこは少し間を空けてから答えた。
「…河村愛の…愛ちゃんの記憶を消去して、
彼女にビーストに襲われた記憶だけを残してしまったのは…私なの。」
「え…?」
意外な答えにしんのすけは驚く。
「…私がM・Pに入ったのは、昔…、
好きな人が…ビーストに襲われて昏睡状態になったからなの…。
だから、私は自分と同じくビーストによって人生を一変させられた人々のために
ビーストに襲われた記憶を消去するこの仕事についたの…。」
「そうだったんだ…。」
なこの告白に驚くしんのすけはあいのことを思い出すが、
なこはそんなしんのすけを見て続けた。
「…でも、人の記憶を勝手に消すことが正しいことなのかどうか、
悩み続けたわ…。
その悩みで任務に支障が出ると思った私は、
メモレイサーを自分に浴びせて、その悩みを封印したの…。
その時に自分のやっていることは正しいんだって思うように記憶の改ざんもして…。
でも…、あるカメラマンの記憶を処理した時に、
その人が焚いたカメラのフラッシュが記憶を消すはずのメモレイサーの機能を
記憶を残すものにして、その時のメモレイサーの光が自分に返ってきて…、
恋人が襲われた記憶が…、そして、悩みが戻ってきてしまったの…。」
そう言うと、なこはしんのすけを見て答えた。
「だから、今も私は悩んでるわ…。

記憶を処理した人数を覚えてるし、愛ちゃんのことも…。
でも、私は任務のために…感情を抑えて…。」
そこまで言うとななこは俯いてしまい、しんのすけはそんななこを見て少し考えて答えた。
「…でも、オラはそれがどんな記憶でも…それを自分がその人と過ごした証として、
持っていたい…。どんなに辛い記憶でも、それはきっと乗り越えられると思うゾ…。」
あいのことを思い出しながらしんのすけが答え、
ななこはそんなしんのすけの答えを聞いて、一言呟いた。
「どんなに辛い記憶でも…。」
ななこの呟きを聞いて、しんのすけは力強く頷いた。

そして、朝。一羽の鳥が飛び立ち、
屋根の破れた部分から一枚の白い羽根が中に舞い落ちる。
中で眠っていた溝呂木は頬にその羽根が落ちて目を覚ました。
「！」
目を覚ました溝呂木は慌てて飛び起きると銃を構えて周りを見回す。
すると、しんのすけが火を起こして溝呂木を見ていた。
溝呂木はもう一度ゆっくりと周りを見回してななこがいない事に気づいた。
「あいつは…逃がしたのか？」
「包帯とか買いに山を下りてった。もうすぐ帰ってくると思うゾ。」
「逃げないんだな、…どうしても。」
「けじめをつけたいみたいだから。自分のやったことの…。」
「そうか…。強いな…。」
溝呂木が苦笑する。
その後、しんのすけがしばし炎をじっと見つめていると、溝呂木が尋ねてきた。
「…お前、どうして俺と行動を共にしている？」

溝呂木の問いにしんのすけは表情を変えた。
「あの時…、終焉の地での時も…お前はやろうと思えば、俺の命を奪うことだってできたはずだ…。
なのに、お前は…俺を殺さなかった…。…何故だ…？
俺を殺したい程、憎んでいるはずのお前が…何故…？」
溝呂木の言葉にしばし考えた後、しんのすけは溝呂木を真正面から見て答えた。
「溝呂木…。お前の言うように…、オラはお前が憎い…。
でも…お前の命を奪っても…、あいはもう帰ってこない…。それに…。」
しんのすけは焚き火の炎を見てかつての自分が犯した過ちに思いを馳せて答えた。
「しっかりと見届けないと…。オラも…、あの子の幸せを奪った一人だから…。」
「そうか…、お前も…強い奴だな…。」
苦笑しつつ答える溝呂木に今度はしんのすけが尋ねた。
「…一つ、聞いていい？」
「何だ？」
「…どうしてお前は人間を捨ててまで闇の力を得たんだ？」
しばしの沈黙の後、溝呂木はしんのすけの顔を見て答えた。
「…俺はガキの頃から常に恐怖につきまとわれていた。
だから力を得て恐怖を振り払おうとした…。
そして人間を超えた化け物に対抗する為に、
俺自身、人間を超えた化け物の力を得た。それでも満足せず、安心できず…。
恐怖を振り払う為に俺は更なる力を得ようと…。
ウルトラマンの力を得ようとファウストを使い、
自らメフィストになってお前と終焉の地で戦い…、結局は全てを失った…。
おそらくあの時、ウルトラマンの力を全て得たとしても、

俺はまた新たな恐怖を知り、新たな力を得ようとしただろう…。
どんなに力を得ても…俺は恐怖を完全に振り払う事は出来なかったんだ…。」
「そっか…。」
話を聞いたしんのすけは再び炎を見て、溝呂木も同じく炎を見た。

それから少し後、店で買い物をしたななこの姿が地元のM・Pに目撃され、
その報告を受けて西条がチェスターδで出動した。

日が昇り、溝呂木達は再びフォートレスフリーダムに向けて山道を進み出した。
しかし、すぐに溝呂木は傷を負った箇所を押さえて立ち止まってしまった。
「やっぱり、応急処置だけじゃ…。」
「いや、大丈夫だ。」
ななこが心配するのを振り払うかのように溝呂木は再び歩き出そうとした。
その時、
「凪…。」
目の前にディバイトシューターを構えた西条が立ちはだかった。
「2人を放しなさい。」
「違うんです！　私達…。」
ななこが駆け寄って事情を説明しようとすると、
突然、溝呂木はななこを捕まえて銃を突きつけた。
「!?」
「そこを退け…!」
「どうして…?」
溝呂木の突然の凶行に呆気に取られるしんのすけとななこ。
溝呂木はななこに向けて一言囁いた。

「すまない。」
直後、溝呂木はななこを西条から離れたところへと押し出すと、西条に銃を向けた。
しかし、一瞬早く西条のディバイトシューターの光弾が溝呂木の銃を弾いた。
「…さすがだ、凪。」
銃を撃ち落された自分の手を見て溝呂木が呟く。
西条がディバイトシューターを溝呂木に向けて告げた。
「投降しなさい。抵抗するなら…。」
それを聞いてななこが急いで止めに入る。
「待って！　西条副隊長！」
「放して！」
ディバイトシューターを取り合う二人。その時、
「もういい！　…もういい。」
溝呂木の声が二人の取り合いを止めた。
皆が見つめる中、溝呂木は空を見上げて呟いた。
「本当に…変わった奴らだ…。」

溝呂木が立ち上がって歩き出そうとした瞬間、
突然、何者かが闇の光弾で溝呂木を撃ち抜いた。
「!?」
更なる傷を負った溝呂木はゆっくりとその場に倒れた。
しんのすけ達が見たダークエボルバーの闇の光弾を撃った者は三沢だった。
「三沢…君…？」
予想外の人物の予想外の行動になななこは理解が追いつけなかったが、三沢はゆっくりと語り始めた。
「無様なものだな…。力を失った悪党というものは…。」
溝呂木を見下ろし、三沢は手にしていたダークエボルバーを誇示するかのように掲げた。

「それ…、前に溝呂木が持ってたのと同じ奴！」
「三沢君…あなた…。」
しんのすけとななこの言葉に三沢がその2人を見て答える。
「えぇ、大原リーダー。俺は力を得たんです。俺自身の望みを叶えることのできる力…、
この世界に真の平和をもたらすことのできる力を…！」
「真の平和をもたらすですって？」
西条の疑問に三沢が笑みを浮かべて答える。
「そうだ。この闇の力はビーストをも操ることができる。
つまり、俺自身が闇の巨人に変身してこの力を上手く使いこなせば、
この世界を覆っているビーストの脅威を取り除くことができる。」
「でも、本当にそんなことが…。」
「あぁ、可能だ。」
西条の言葉にさらりと答えると、
三沢は再びダークエボルバーを掲げ、皆を見渡して再び口を開いた。
「お前達も既に気づいていると思うが、今までの経緯から考えて、
闇の力の目的はウルトラマンを倒すことにある。
闇の巨人はただビーストを利用していただけに過ぎない。
なら簡単な話、地球人類全体が闇の力の側について、
皆で力を合わせてウルトラマンを倒す。
そうすれば、すぐにこの戦いを終結させられる！」
「できるわけないだろ！　そんなこと！」
三沢の話にしんのすけが叫ぶが、
三沢は掲げていたダークエボルバーをしんのすけに向けて続けた。
「野原しんのすけ。せっかく人を超えた力を得たというのに、
何故お前はもっとその力を有効に使おうとしない？　この力があれば、
世界各地で起きている戦争や紛争を鎮めることができるというのに。」
「戦争や紛争を？」

ななこの疑問に三沢は両腕を広げて皆を見渡す。
「今、この瞬間にも世界の各地で多くの人々が命を落としている。
その原因となっているのは同じ人間によって引き起こされた戦争や紛争だ。
人間の歴史を振り返ってみれば分かるが、
人は今まで何度も宗教上の違いや価値観の違いで争いを繰り返してきた。」
その話に呼応するかのように、三沢の手にしているダークエボルバーが怪しく光り始める。
「なら俺がこの力で全ての思想や宗教、言論、国や文化、人種といったものを
完全に一つにし、全ての人間を一つにまとめる。
そうすれば人と人との争いは未来永劫起きることはない！」
「え？」
三沢の答えになこは戸惑い、しんのすけが訴えた。
「それってただの世界支配じゃないか！」
「そうだ。人間に違いがあるから争いが起こる。この力による支配によってそれをなくし、
人間を完全に統一された存在にすれば、争いが起きることもない！」
「それのどこが平和な世界なんだ！」
「なら、お前は今の世界情勢を見てなんとも思わないのか？
空襲や地雷やテロで今日明日の命もない人達にとって必要なのは、
自由とか何とかより、まずは今を安心して生きられることじゃないのか！？」
「でも…！」
三沢の言葉にしんのすけが何か訴えようとするが、
三沢はそれを無視してダークエボルバーを構えて宣言した。
「世界全体の平和…。それこそが俺の望みだ…！
だが、お前達の存在はその望みを叶えるのに邪魔となる…。
世界の平和の為に…死んでもらう！」

宣告と共に三沢はダークエボルバーを左右に引き抜いた。
ダークエボルバーから溢れた邪悪な光と闇が
三沢を包みこみ、背中に白い翼を携えた巨人・ルシフェルへとその
姿を変えた。

「ルシフェル…。」
「三沢君…。」
しんのすけとななこが呟き、三沢は変身した自分の姿を見る。
「すばらしい…！　やはりこの姿は…まさに世界を救う神だ…！」
三沢は変身した自分の光り輝く姿を見て、
感嘆するとダークレイフェザーをしんのすけ達に向けて撃った。
「先に行って！」
逃げ惑う中、しんのすけの体を押して西条が告げる。
「でも！」
「彼女を守るのよ！　早く！」
西条の言葉にしんのすけは力強く答えた。
「分かったゾ…！　行くゾ、ななこおねいさん！」
そう叫んでしんのすけはななこの手を引き、走っていった。
残った西条はルシフェルに向けて、ディバイトシューターを撃つが
全く効果は無かった。
一方、しんのすけは西条から離れた位置まで来ると、
草むらに姿を隠してエボルトラスターを掲げた。
「…？　しんちゃん？」
気づいたななこが振り返ると林の中から光が飛び立った。
一方、攻撃が通じない西条にルシフェルが迫る。
そこに光が現れてルシフェルを弾き飛ばすと、アンファンスの姿と
なって地上に降り立った。
「ウルトラマン…。」
呟く西条。

「現れたな、ウルトラマン。おもしろい…、
どっちが本当に世界を救うものか…決着をつけてやる…！」
そう言うと、ルシフェルはウルトラマンに向けて構えを取るが、
その直後、
「…うぐっ！？　ううぅぅ…！」
ルシフェルは苦しみだし、背中の羽根は次々と落ちていき、
体から光が消え失せ、白く透き通った天使を思わせる美しい姿が
赤い血管が浮き出た黒く醜い悪魔を思わせる姿へと変貌し、
目にはぼんやりと赤い光が宿り、口から牙が生え、開口した。
ルシフェルの苦しみはさらに続き、両肩から二本の角が生えてきた。
それを見た西条の脳裏に忌まわしき幼い時の記憶が蘇る。
「あれは…、あの男と同じ…！」
苦しみの咆哮を上げるルシフェルの首筋の左側にファウスト、右側
にメフィストの顔が現れた。
ウルトラマンが驚く中、ルシフェルの両手の指が
異常に伸びて曲がり、鉤爪・ルシフェルタローンとなった。
「馬鹿な…。これは…、これは一体…！？」
そんな三沢の脳裏にルシフェルの声が響く。
『三沢広之…。お前の望みは私の本来の力を発揮するのに、
十分条件を満たしていた…。私はそれをただ利用させてもらっただ
けだ…。』
「これが俺の…、俺の望みの表れだというのか…！？　嘘だ…、嘘
だぁーーーーー！！！！！」
絶望の叫びをあげながら、ルシフェルはウルトラマンに向けて突進。
ルシフェルタローンで野獣のごとくウルトラマンを切り刻んだ。
防戦に陥ったウルトラマンは距離をとると、
すばやくジュネッスブルーにスタイルチェンジし、続けてメタフィ
ールドを展開しようとするが、
そこにルシフェルが光と闇が醜く混ざり合った
光線・カオスレイ・シュトロームを撃ち込んで妨害する。

ウルトラマンが上空に逃げると、ルシフェルはカオスレイ・シュトロームを次々と撃ち込み、
それらを避けるウルトラマンの動きが一瞬止まった隙を突いて、
今度はダークレイ・クラスターを強化した技・バーストクラスターを放つ。
バーストクラスターの闇の光弾は無数に分裂すると、四方八方からウルトラマンを襲った。
ウルトラマンは何とか避け続けるが、
その間にルシフェルは距離を詰めてルシフェルタローンで連続攻撃を仕掛ける。
ルシフェルの高速攻撃をウルトラマンも高速で避けるが、
遂に避けきれなくなり、攻撃を受けて地上に落とされてしまう。
さらにルシフェルは体を大きく反らして、
真上から蹴りを食らわしてウルトラマンを地面に叩き落とすと、
ルシフェルタローンで何度も斬り付けて崖に追い詰めた。
「フン…。力を有効に使えない愚か者めが…。その光…この俺が全て吸い取ってやる！」
ルシフェルはコアゲージに手を当てると、ウルトラマンの光を吸収し始めた。
苦しむウルトラマンに対し、ルシフェルは高笑いを上げた。

その光景を複雑な目で見ていた溝呂木は
握られた自分の手の中から光がこぼれているのに気づいた。
手を開くとそこには自分と西条とのドッグタグがあった。
「凪…。」
溝呂木がそのドッグタグを再び強く握り締めると、
中から溢れる光もどんどん強くなっていった。
その光はさらに強くなっていき、遂に溝呂木の全身を包み込んでいく。
「うおおおぉぉぉぉ！！！」

光が解き放たれ、ドッグタグと共に光となった溝呂木は天高く上っていった。

笑い声を上げながらウルトラマンから光を奪い続けるルシフェル。
そこに何者かが蹴りこんでルシフェルを弾き飛ばした。
「まさか…！？」
驚く西条の視線の先には、目に白い光を有したメフィストが立っていた。
「溝呂木…！？」
ウルトラマンも驚きと戸惑いの声を上げる。
メフィストはウルトラマンの前に立ち、ルシフェルを牽制する。
「馬鹿な！？　お前の力はもう完全に消えたはずだ…！　お前はもう…変身できないはず！」
そんな三沢に向かって溝呂木が語る。
「かつての俺、そして今のお前の力は絶望によって生まれる力。
それに気づけぬお前が勝てるはずがない！」
そう言うとメフィストはエネルギーを失ってうずくまるウルトラマンの方をちらりと見た。
「俺の力が絶望だと！？　ふざけるなぁ！！」
咆哮を上げて待ち構えるルシフェル。
そしてメフィストが駆け、両者の戦いが始まった。

ルシフェルは再びルシフェルタローンによる攻撃を繰り出し、
一方のメフィストはメフィストクローを使わずに自らの肉体のみで戦いを繰り広げた。
メフィストはルシフェルに蹴りを浴びせ、投げ飛ばし、有利に戦いを進めていた。
形勢不利と見たルシフェルは先程、傷を負わせた部分を狙って、
ルシフェルタローンで切り刻んできた。メフィストは傷を負っていた部分を押さえ、

この機を逃がすまいとルシフェルはさらに連続攻撃を仕掛け、形勢は完全に逆転した。
そして、ルシフェルはルシフェルタローンでメフィストを何度も切り刻み、最後にメフィストの腹部を貫いた。
「！」
衝撃を受ける皆。
「溝呂木！」
しんのすけが叫び、西条も体を貫かれたメフィストを見る。
笑い声を上げるルシフェル。
しかし、メフィストはウルトラマンを見ると、ルシフェルを羽交い絞めにした。
「何！？」
「今だ！　俺に構わず撃て！」
その言葉に衝撃を受けるウルトラマン。
「駄目だゾ！　そんなことをしたら…！」
「いいから早く撃て！」
「溝呂木…、お前…！」
しかし、メフィストは必死に訴えるウルトラマンに傷口から光が血のように溢れだしながらも続けた。
「何をしている…！？　それが光を得た…お前の…お前の役目だ！」
その言葉を聞き、ウルトラマンは意を決してアローレイ・シュトロームを放った。
「溝呂木…！」
「三沢君…！」
西条とななこが見つめる中、メフィストとルシフェルは光の粒となって辺りに拡散した。

日が沈み始めた頃。
地面に倒れていた三沢がピクリと動き、目を開けた。
「俺は…。」

うっすらと開けた目で辺りを見渡す。
現場には既にM・Pを始めとした処理班が来ていた。
「あれは…夢だったのか？」
「いいえ…。あなたは闇の力を手に入れて、
闇の巨人ルシフェルになって、敗れたの…。」
「そう…ですか…。やはり…。」
ななこから説明を受けた三沢はフッと力の無い微笑を浮かべた。
ななこが涙ながらに尋ねる。
「どうして、あなたは…闇の力を…？」
「世界を救いたかった…。でも…無理だった…。
本当は既に分かっていたんです…。人間は皆それぞれ違う。
それを完全に統一することは無理だ…って…。それでも俺は…。
…どこで道を間違えたのかな…。昔は…ただ純粋に…、
世界中の人々が幸せに…皆が笑顔で暮らせるようになればって思ってたのに…。
ＴＬＴに入って…そんな理想論だけじゃ到底無理だって分かってから…いつのまにか…、
自分の考えに酔いしれて…、自分の考えを批判されるのが怖くて、
それを人に押し付けるようになって…、
あげくの果てにこんな…。…本当…どうしようもないバカですよね…俺。」
そう告げると三沢は全ての荷が降りたような晴れやかな顔となった。
「最期…なんですよね…。…大原リーダー。俺、今回のことでようやく気づきました…。
本当の平和というのは誰かから与えられるものじゃない…。
人間が…自らの手で掴み取らなきゃならないものなんだ…って。
…きっと、この戦いを終わらせられる方法も…人間ひとりひとりが脅威と向き合って、
それを…乗り越えようとすることなんじゃないかな…。」
「人間ひとりひとりが…脅威と向き合う…？」

ななこの言葉に頷くと、三沢はゆっくりと目を閉じ、光の粒となって空へと消えた。
「三沢君…。」
ななこは涙を流しながら、ただ呆然とそれを見送る事しか出来なかった。

離れた場所から三沢の最期を見届けていたしんのすけはその場から離れると、
木にもたれかかった溝呂木とそれを見下ろす西条を見つけた。
しんのすけがそれをじっと見ていると、溝呂木が力無く呟いた。
「俺は…ただの操り人形だった…。あの三沢とかいう男も同じだ。奴に…心の闇を利用されただけだ…。闇の力を持つ…奴に…。」
「闇の力…アンノウンハンド…。」
「あぁ…。」
西条の呟きに溝呂木が答える。
「気をつけろ…奴はお前達のすぐ近くにいる…。あのかすみのかかった記憶…、その向こうにうっすらと見えたあいつは…。」
と、そこまで言いかけて溝呂木は咳き込み、口に当てた手にはべっとりと血がついていた。
凪はしゃがみこんで眞也の肩に手をかけた。
「どうして…わざと撃たれようとしたの？　あなたは昔…、私の目標だった…。
あなたの強さが私を支え、私はビーストと戦えた…。」
努めて冷静に喋ろうとするが、段々と様々な複雑な想いが凪にこもっていく。
「でもあなたは…闇の力に負けた…。
だから私はあなたを憎んだ。憎まなければ、ビーストと戦えなかったから…。」
少しずつその命が尽きていく眞也の目を見据えながら、

凪は今まで隠していた心情を吐露していく。
「なのに！　死んで罪を償うなんて！
最後だけ人間らしい顔をして…そんなの卑怯よ！！
罪を償うのなら生きて！　もう一度…人間として…。」
薄れいく意識の中で眞也は凪の言葉を繰り返す。
「もう一度…人間として…。」
何かを語ろうと眞也は凪に顔を近づけるが、
そこで遂に力尽き、そのまま凪の胸へと倒れこんだ。
自分の胸で眠りについた眞也を凪はしっかりと抱きかかえる。
「溝呂木…。」
呟くしんのすけ。
鳥が一斉に羽ばたき、空から無数の白い羽根と冬の到来を告げる雪が辺りに舞い降りる。
安らかな表情を浮かべて眠る眞也の体が、やがて光の粒となって空へと消えていき、
凪の手にはかつて交換し合った2人のドッグタグだけが残された。

その頃、どこかのある部屋では暗闇の中で、ある人物がパソコンに映ったしんのすけと西条のデータを見て、不気味な笑みを浮かべて呟いた。
「目覚めの時は…近い。」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３７　影　－アンノウンハンド－（後書き）

しんのすけと溝呂木の会話シーンで終焉の地での戦いの後、溝呂木が生きていたのは、
実はしんのすけが彼の命を奪わなかったから…ということが明かされますが、
このことと三沢が何故あんな性格になってしまったのかが彼の口から語られるシーンは、
今回の投稿直前に付け加えたものです。
前者についてはやっぱり、ウルトラマンが溝呂木を救った…というよりも、
かつて憎しみを乗り越えたしんのすけが自分の意思でやったことという展開にしたほうが
いいんじゃないかと思ったからです。
（ちなみにこの小説では溝呂木の記憶を消したのは、ウルトラマンで、
彼にやり直すチャンスのようなものを与えるためにそれをやった…という感じです。
裏設定的なものになってしまいましたけどｗ）
後者の三沢については溝呂木の描写を優先して他の場面に入れなかったものの、
やはり彼の性格が何故ああなってしまったのかが分かる場面が欲しかったので、
彼が死ぬ直前にそれを語る…というシーンとして入れました。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３８　忘却　－Ａ．Ｄ．２００４－

フォートレスフリーダムのＭ・Ｐ室。
ななこは三沢のことに思いを馳せ、大きく深いため息を吐くが、
同時にしんのすけの語った言葉が脳裏に思い浮かぶ。
『…でも、オラはそれがどんな記憶でも…それを自分がその人と過ごした証として、
持っていたい…。どんなに辛い記憶でも、それはきっと乗り越えられると思うゾ…。』
「どんなに辛い記憶でも…、それは乗り越えられる…。」

その頃、地下最深部に位置するＳＥＣＴＩＯＮ－０。
そこを目指して一つの禍々しい闇が突き進んでいた。
「！？　レーテが…！」
それを感じ取る風間。
しかし、その禍々しい闇はＳＥＣＴＩＯＮ－０に通じるゲートに到達すると、
何かの幕に弾かれて退却した。
それを知って、安堵の息を一つ吐いた後、風間はコマンドルームにホログラムを飛ばした。
コマンドルームでは警報鳴る中、ナイトレイダーが非常事態に驚き、戸惑っていた。
「どうした！？」
「侵入者があったようです！　場所は…基地最深部、ＳＥＣＴＩＯＮ－０への入り口…。」
「ＳＥＣＴＩＯＮ－０だと！」
「この基地のエネルギー施設があるっていう危険区域でしょ！？」
警報を止め、現れたホログラムの風間が静かに説明を始める。
「自動防御システムが働いて逃げていったようです。」

「一体何者が…？」
和倉隊長の質問に、風間より早く西条が答えた。
「アンノウン…ハンド。」
その答えに風間は無言で頷くと、ナイトレイダーに伝えた。
「一連の事件を受けて、まもなくこのフォートレスフリーダムに、ＴＬＴ北米本部より査察官が入ります。」
「北米本部から査察官が？」
「はい。敵の動きが加速しています…。」
呟く風間の言葉を聞きながら、西条の脳裏には溝呂木の言葉が蘇っていた。
『気をつけろ…奴はお前達のすぐ近くにいる…。』
（ＴＬＴの中に…アンノウンハンドが…。）

一方、遊園地ではしんのすけ達が仕事をして、
恵がテーブルに座って小説を書いていたが、そんな恵を遠くから見つめる人影があった。
その人影は意を決したように歩き出すと恵に声をかけた。
「君…名前は？」
「え？」
恵が顔を上げると一人の高校生が自分を見ていた。
しんのすけがそれを見ると、高校生がもう一度恵に話しかけた。
「名前。」
「恵…。春野恵…だけど…。」
戸惑いながら答える恵を見るとその高校生は一言、
「じゃ、デートしよっか。」
と告げた。
「え！？」
突然の告白に恵は思わず裏返った声で答え、
しんのすけも少し驚いてそれを見ていた。
戸惑う恵に瞬間移動のごとくネネ達が姿を現して尋ねる。

「ねぇ、誰々？」
「し、知らないわよ！」
ネネの問いに恵が慌てて答えると、明日香が呟く。
「ふーん…、『春風コンビ』ピンチってところねぇ…。」
「は、『春風コンビ』って…、…しんのすけ君！」
明日香の言葉に以前のことを思い出し、恵はしんのすけのほうを見る。
「ごめん、ごめん。つい口が滑っちゃって。」
「はぁ…、まったくもう…。」
軽く答えたしんのすけに恵は顔を赤くしながら少し呆れたため息を吐くが、
高校生はそんな恵を見て少し笑うと、肩を叩いて言った。
「じゃ、この場所に来てね。」
「あ、待って！　あなた名前は？」
待ち合わせ場所を書いたメモを渡して、
遊園地を後にしようとした高校生に恵が尋ね、高校生は笑顔で答えた。
「直人。松永直人。」

「プロメテウス・プロジェクト？」
フォートレスフリーダムでは呟く平木隊員の隣で石堀隊員がパソコンを操作して、プロメテウス・プロジェクトのページを見ていた。
「これ…、イラストレーターじゃん！」
並んでいる顔写真の中、風間の写真を見た平木隊員が驚く。
「なぁ、詩織。この組織についてどう思う？」
「どうしたの？　急に。」
いきなり質問してきた石堀隊員に平木隊員は尋ね返すが、
石堀隊員はパソコン画面を見つめたまま答える。
「情報操作に、被害者の記憶の操作。俺達の仕事も世間に公表でき

ない。」
「でも、ビーストによる被害があるんじゃ、こういう組織も必要でしょう？」
石堀隊員はパソコン画面をじっと見つめて答える。
「でも、もしＴＬＴが…俺達も騙しているとしたら…。」
「え？」

自宅に帰っていた松永管理官は、
自室のパソコンで新宿大災害に関する記事を見ていた。
『政府新宿市街地を公開』
『あれから四年』
『行方不明者　総数６７０名を越すか！？』
『突然の大惨事！　新宿に巨大隕石』
数ある記事の中でも松永管理官は「行方不明者　総数６７０名」の部分をじっと見つめる。
ふとパソコンの横に目をやると、立てかけてあった写真立てを手にとって、
その中に写っている一人の女性に向かって一言語りかける。
「おめでとう。」
その写真立てには松永管理官と妻、そして息子の写真が入れられていた。
そこに玄関のドアが開く音がして、若い男性の声が小さく辺りに響いた。
「ただいま。」
「お帰り、直人。」
松永管理官はいつもと違った少し明るい声で帰って来た息子、松永直人を迎えるが、
「ふーん、来てたんだ。」
と言う息子の答えにやや戸惑ってしまう。
「帰ってた…だろ？」

しかし、直人はそれについて何も語らず、父の方を一切見る事無く、買ってきた食料品を無造作に冷蔵庫の中へと入れ始めた。
「で、一体いつまでいるの？」
「すぐ行かなきゃいけないんだ。またしばらく戻れないと思う。」
「ふーん…。…なぁ、父さん。」
「何だい？」
今日初めて顔を合わせる二人。
しかし父には申し訳なさが、息子には非難の気持ちがそれぞれ表れていた。
「昨日、何の日か覚えてた？」
「……。」
「母さんの誕生日。」
それを告げて直人は再び顔を背けてその場を立ち去ろうとし、
松永管理官はそれを呼び止めようとするが、
そこにある人物からの携帯電話が入った。
「はい…。」
先程とは違った低い声、仕事の声で電話に出る父を冷ややかに見る直人。
「人造ウルトラマン計画について、現在順調にデータをサンプリング中です。
まもなく全てのデータ収集を終えるので、ご報告に。」
「そうですか…。分かりました…。」
電話を切り、もう一度息子の方に視線をやるが、既にそこには誰もいなかった。

「え！？　恵が…デート？」
ＣＩＣ。携帯電話で風間がしんのすけと通話していた。
「うん。なんか、松永とかっていう人だったゾ。」
「松永…。」
風間はしんのすけの言葉に松永管理官のこととともう一つあることを

思い浮かべるが、
しんのすけはいたずらそうな声で続けた。
「ちょっと、ヤバいんじゃない？　追いかけようか？」
「ちょ、な、なんでそんなことする必要があるんだよ？」
「あれ？　気にならないの？　恵ちゃんのこと。」
「……。」
しんのすけの言葉に風間は黙って電話を切り、そんな風間に遊園地のしんのすけは
「ホントは気になってるくせに。」
と独り言で呟くと、携帯電話をしまい、再び仕事を始めようとするが、
遠くにいる監視者が目に入り、しんのすけは急いで監視者のいる場所に向かい、
それを知った監視者は急いでその場を離れようとするが、突如地面に光弾が撃ちこまれ、
振り返ると、しんのすけがブラストショットを構えていた。
「もう逃げられないゾ。」
そう言って、しんのすけはブラストショットを構えたまま監視者に近づいていく。
「…あんた、誰なんだ？　どうしてオラを監視しているんだ？」
しんのすけの追求に監視者は諦めたかのようにため息を吐くと、
フードとマスクを取り、その正体を明かした。
監視者の正体。それは黒い髪の毛を一部白に染めた、屈強そうな男だった。

「ジャクリーン・フィーニー…。今日来る査察官なんだが、どんな人物かちょっと調べてみた。」
コマンドルーム。
石堀隊員はパソコンを開いて、ジャクリーン・フィーニー、
かつてしんのすけと共にバイオテクノロジーの権威、

アミーゴスズキの計画を阻止した女性の経歴の紹介を始めた。
「ジャクリーン・フィーニー、
かつて米軍内に設けられた対バイオテロ組織・ＢＣＳＴの
アミーゴスズキ特化部隊・ＳＲＩの隊員だった人物だ。」
「アミーゴスズキって…。」
平木隊員の言葉にコーヒーを飲んでいた和倉隊長が答える。
「昔、世界各地でバイオテロを起こしたという元国際指名手配犯だ。
」
和倉隊長の言葉を受けて石堀隊員が答える。
「あぁ。ＳＲＩの正式名称はそのアミーゴスズキに対しての皮肉を
込めて彼女が考えたものらしい。
で、彼女はその事件を解決した後、ＢＣＳＴ科学担当官になったと
ある。
お、ＢＣＳＴは5年前の新宿大災害の被害状況も担当しているぞ。」
「新宿大災害って…、新宿に巨大隕石が落ちて大災害になったって
いう、あの？」
平木隊員の質問に石堀隊員は頷いた。
そんな二人の会話を聞いて、和倉隊長の脳裏に自身のおぼろげな記
憶、
自分の親友である真木が銀色の巨人となってビーストと戦った記憶
が思い浮かんだ。

駅前。約束の場所にやって来た恵は店のウィンドウに映る自分の姿
を眺めていた。
「デートなんて初めて…。なんだか緊張するなぁ…。」
バッグを手に直人を待つ恵だったが、その時背後から肩を叩かれ、
驚いて振り返ると直人が笑って立っていた。
「あ！　お、お待たせ！」
「待ってないって。」
直人が冷静に突っ込む。

「あ、そうよね！　待ってたのって私のほうだし…って全然、待ってないから！」
慌てて首を横に振って否定する恵を見て直人は少し笑った。
「君、少し変わってるね。」
「え？　あ、私たまにそう言われるけど…。ハハ…。」
そんな恵を見て、少し笑いながら直人が言う。
「じゃ、行こうか！」
「う、うん！」
笑顔で歩き出す直人とそれに慌てて付いていく恵。
そして、風間はその初々しくも楽しそうな光景をプロメテの子の能力を使ってＣＩＣから見ていた。
「やっぱり直人だったんだ…恵を誘ったの…。」
風間は一人呟くが、ハッとそれに気づくと見るのをやめた。
「これって、ストーカーじゃないか。…何やってんだろう、僕…。」
自らの行為に戸惑いながらも、風間は再びその映像を脳裏に見た。

「あんたは…。」
一方、遊園地。しんのすけはブラストショットを構えながら監視者の正体を見て呟いていた。
そんなしんのすけの呟きを聞いて監視者が静かに語りだす。
「私は海本…。海本隼人…。」
監視者のその答えの後、辺りに風が吹き渡る。
しかし、監視者はフッと笑うとすぐにその言葉を否定した。
「と言いたいところだが、君が見ているこの海本という男の姿は本当の私ではなく、あくまで仮の姿に過ぎない。」
監視者の語った言葉にしんのすけは少し疑問を持った。
「どういうこと？」
しんのすけの疑問に監視者は再びフッと笑って答えた。
「私はあくまでこの男の体を借りているに過ぎない。本当の私はゼロという名の来訪者だ。」

「来訪者?」

その頃、フォートレスフリーダムではＴＬＴ－Ｊ緊急査問会が開かれていた。

「和倉隊長。こちら、ＴＬＴ北米本部からの査察官、ジャクリーン・フィーニーさん。」

松永管理官に紹介されてジャッキーは和倉隊長に頭を下げ、それを見て東郷が口を開いた。

「では、早速本題に入ろう。

溝呂木眞也の件とＴＬＴ－Ｊ内部に裏切り者がいる可能性。

これらの事態を受けて、北米本部はレーテの秘密を君に知ってもらおうと判断した。」

「レーテ…?」

和倉隊長が険しい顔をして問うとジャッキーは表情を変えずに答えた。

「えぇ。来訪者によって作られた忘却の海…。」

「来訪者ですって?」

和倉隊長の疑問に東郷が答える。

「今から２０年前、アメリカの砂漠地帯に謎の発光体群が墜落した。

駆けつけた米軍は数体の不定形生命体を捕獲した。」

ジャッキーが話を受けて続ける。

「捕獲した生命体のうち何体かは地球生物の形態を残し、環境に適応。

残った一体もその後、事故死した男の姿を借りて生存した。それが来訪者よ。

そして彼らを捕獲したアメリカ政府は知ったの。

来訪者は超新星爆発によって故郷の星を失い、

光量子情報体となって地球に飛来した宇宙の難民だという事をね。」

ジャッキーのその言葉を聞き、和倉隊長は驚きを隠せなかった。

「そんなことが…。」
一方、遊園地でもゼロによってしんのすけに来訪者の説明がされていた。
「私はかつてＴＬＴが来訪者との交信者を産み出すために進めたプロメテウス・プロジェクトに関わり、風間トオルの遺伝子のベースとなった、
このクラスＡの超能力者、海本隼人の体を借りて生き延びた。」
「風間君の…。」
しんのすけの呟きを聞いてゼロが頷く。

再びフォートレスフリーダム。東郷が話を続ける。
「来訪者を通じて我々は膨大な知識を得た。」
東郷の話を松永管理官が補足する。
「例えば、ＴＬＴが使用しているオプチカモフラージュシステム、メモレイサー等のオーバーテクノロジーの数々です。」
そこにジャッキーの厳しい声が切り込む。
「ただし、これらの使用に関して来訪者はある条件を付けた。
これらのテクノロジーはただある一つの目的の為だけに使う事…。」
「ある一つの目的？」
和倉隊長の質問にジャッキーが力強く答える。
「すなわち、来たるべきスペースビーストによる終焉を防ぐ事。」
「終焉…。」
「そう、地球の滅亡よ…。」

一方、恵と直人はある小高い丘のある公園へとやって来た。
高台に上って吹く風を感じる直人を見て恵が一つの疑問を口にする。
「どうして、あなたは私をデートに誘ってくれたの？」
「…うちの父さん、月に一度くらいしか家に戻ってこないんだ。
極秘の仕事とか言って何してんだか…。
それで、この前戻ってきた時にちょっと仕事での電話のやりとりを

聞いてしまって…。
その時に、『野原しんのすけ』って人と君の名前、
…あと、『プロメテの子』とかって言葉も聞いたんだ…。」
その返答に驚く恵に直人は続けた。
「その後、父さんの部屋にあった写真と資料から、
あの遊園地だって分かって時々行って見てたんだ。…気づかなかった？」
「…う、ううん、全然…。」
首を横に振りながら答える恵の顔を見て、直人が尋ねる。
「ねぇ、君って一体、何者？」
「な、何者って言われても…。」
戸惑う恵を見て、直人は笑顔になると高台から公園を見渡して答えた。
「それを探ってやろうと思って、デートに誘ったんだけど…。
何かもう、どうでもよくなっちゃったなぁ…。
恵ちゃんがどんな秘密を抱えているのか分からないけど、
少なくとも、悪い人じゃないって分かっただけでもいいや。
…今、幸せな恋もしてるみたいだし。」
その言葉に恵は驚くが、直人はいたずらそうな笑みを浮かべて続ける。
「俺、風間の中学の時の友達なんだよね。
俺、あいつがうらやましいよ。こんな可愛い娘が恋人なんてさ…。」
「ちょ、ちょっと、待ってよ！　私、そんなこと一言も…。」
顔を赤くして慌てて答える恵を見て直人はさらに続けた。
「言ったよね、時々見てたって。隠しても分かるよ。恵ちゃんが風間を好きだってこと。」
直人の言葉を受けて、恵は少し頬を赤らめる。
そんな恵を見て直人は少し笑みを浮かべると思い切り伸びをした。
「少なくとも！　恵ちゃんと風間が幸せな恋してるってことが分かっただけでも、

君をデートに誘った意味あり！　ってところかな！」
それを聞いて恵は思わず俯いてしまい、
ＣＩＣからそれを見ていた風間も俯いてしまう。
一方、直人の話は続いていた。
「うちの母さん…、５年前に事故で亡くなったんだ。覚えているよね？　新宿大災害…。」
「うん…。」
「ここさ、父さんと母さんがよくデートしていた公園なんだよね。母さんの誕生日はいつもここで…。」
公園を見渡しながら両親の思い出話を楽しそうに語る直人を恵は複雑な思いで眺めていた。

一方、コマンドルームではナイトレイダーがＴＬＴ北米本部について調べていた。
「バックドアから侵入成功。ファイヤーウォール突破！」
妙に楽しそうにパソコンを操作する石堀隊員。
平木隊員が尋ねる。
「いいの？　北米本部のサーバー、ハッキングしちゃって。」
それを聞いて西条が告げる。
「ＴＬＴの内部を調べなければアンノウンハンドの正体は分からない…。いいから続けて。」
それを聞いて石堀隊員は笑みを浮かべて言い切った。
「任せておけ！」
その瞬間、コマンドルームのモニター画面が警告を発して赤くなる。
「ヤバい…、気づかれた！」
「どうしたの？」
「クソッ！　パッチでバックドアを塞がれた！！　…ダウンロードできたのはコレだけです。」
そして、石堀隊員は一つのキーを押した。
『ＦＩＬＥ：Ａ．Ｄ．２００４』

次の瞬間、モニター画面に破壊されるビル、天空から地上に降り注ぐ光弾、爆発する炎、
そして炎の中からゆっくりと立ち上がる何かが映し出された。
その何かを見て平木隊員が驚きの声を上げる。
「これって…ウルトラマン？」
ナイトレイダーの眼前にビル街に佇む、
真木が変身した、ウルトラマン・ザ・ネクストの姿が映し出された。
破壊されていく街並みを見て石堀隊員も声を上げる。
「この街は…新宿だ！」
破壊される新宿の街中で繰り広げられるザ・ネクストと巨大な化け物の死闘。
その化け物、最初のスペースビースト・ザ・ワンの姿を見た西条の脳裏に
幼い頃の忌まわしい記憶が思い浮かんだ。

「じゃあ、５年前の新宿大災害は本当は真木さんとビーストの戦いだったの？」
遊園地。しんのすけが険しい表情でゼロに尋ねる。
一方、フォートレスフリーダムでも和倉隊長の問いにジャッキーが静かに答えた。
「えぇ…、それが真実よ。
５年前、新宿でウルトラマンとビーストとの最初の戦いがあった…。
『ウルトラマン』という名前もその時に付けられたの。…その戦いを見た子供達によってね。」
その言葉に松永管理官の表情が一瞬曇る。
「何故…？　何故人々から記憶を奪ったんだ！」
「その必要があったから…。ビーストの記憶が更なるビーストの災いを招いてしまう…。」
遊園地。ゼロが続ける。
「だから、私達は身を挺して世界中の記憶を封印した。」

そして、ゼロとジャッキーが同じタイミングで答える。
「それが忘却の海、レーテ…。」

直人と並んで歩く中、恵はバッグから2羽の鳥のアクセサリーを取り出して心の中で呟く。
（トオル…。）
一方、ＣＩＣ。風間は二人の会話を見て、辛そうな顔で恵から貰った貝殻を持って呟いていた。
「恵…。僕は…。」
「あんた、プロメテの子に関わってた海本って人の体借りてるって言ってたよね？
じゃあ…、風間君のことについても全部知ってるの？」
遊園地では、しんのすけがゼロに一番知りたかった事を尋ねていた。
しんのすけの問いにゼロは頷いてから答えた。
「元々風間トオルは永遠の命を体現する存在として、
確実に来訪者との交信者となるように他のプロメテの子とは違い、
この男の遺伝子をベースに創られた存在だった。
だが、遺伝子操作の段階で致命的なディフェクトが発生し、永遠の命はおろか、
通常の人間よりも寿命が短くなってしまい、彼は１７、８歳までしか生きられなくなってしまった。」
ゼロの言葉にしんのすけは衝撃を受ける。
「１７、８歳って…、そんな！　何か、特効薬みたいなのはないの！？」
「ラファエルという通常の人間と同じ寿命にするために作られた特効薬がある。」
ゼロの言葉にしんのすけは西条の言った言葉を思い出す。
「しかし…、その特効薬の開発は中止された…。」
ゼロの言葉にしんのすけは衝撃を受ける。
「どうして！？　どうしてそんな！？」

語気を荒げて問うしんのすけに対し、ゼロは静かに答えた。
「ビースト因子の研究を優先するために…中止されたんだ。」
「そんな…。じゃあ、風間君は見殺しって事!?」
しかし、必死に問うしんのすけに対し、ゼロは何も答えなかった。

その時、恵達のいる場所の空から不気味な音が辺りに響いた。
二人が空を見上げると、風吹く晴天に巨大な黒い穴が現れる。
ＣＩＣ。それを知って風間が画面を見ると、その周辺にビースト振動波が感知された。
「まさか…、ビーストが恵達のいる場所に!?」
それと同時に、その闇の中から巻貝の中に本体を隠したビースト・メガフラシが姿を現す。
恵はそれに気づくと呆然と見ている直人に早く逃げるよう訴えた。
コマンドルームでは警告ランプが鳴り響き、風間の指示が飛んでいた。
「エリア１２、ポイント４２８にビースト振動波を確認。ナイトレイダーにスクランブル要請。」
しかし、ＴＬＴが隠蔽していた真実を知ってしまったナイトレイダーはその場から動こうとせず、
居心地悪く、お互いに視線を泳がすだけであった。
街へと降下していくメガフラシ。
呆然と空を見上げる者、危険を察知して逃げる者。
メガフラシが現れたさいたま市のさいたま新都心では
得体の知れない化け物の出現に人々が様々な反応を示していた。
恵達がビーストから少しでも距離を置こうと逃げていると、
目の前になこの乗る車が止まった。
「急いで乗って!」
なこの声に恵は少し考えた後、車のドアを開けて直人を乗せ、続いて自分も乗り込んだ。
その時、メガフラシは貝の中から発光体を発し、人々を絡め取って

いった。
そこにしんのすけがストーンフリューゲルでやって来ると、
触手に絡めとられて死の恐怖に狂う人々、
叫び声を上げてその場から急いで逃げ出す人々、
平穏だったさいたま新都心が阿鼻叫喚の
地獄絵図へと変わっていく様が繰り広げられていた。
それを見て、しんのすけはエボルトラスターを掲げようとするが、
その時、一人泣いて佇む少年の姿が目に入った。そこに迫り来るメガフラシの触手。
しんのすけは急いで駆け出し、触手に絡めとられる寸前に少年を救出した。
そこに急いで恵がやってくる。
「しんのすけ君！　大丈夫！？」
「うん、恵ちゃん！　この子を頼むゾ！」
「しんのすけ君！」
少年を恵に預けてしんのすけは再び走り出し、エボルトラスターを掲げた。
さいたま新都心に巨大な光と共に銀色の巨人、ウルトラマンが光臨。
ウルトラマンは人々を絡めとっていくビーストの触手に向かって、
セービングビュートを発するが、触手に阻まれてしまい、
マッハムーブで空中のビーストに向かって超高速移動、
触手に絡めとられた人々を救出して地上に降り立った。
ウルトラマンは両手の中にいる人々をそっと地上に降ろす。
「だ、大丈夫か？」
「おい！」
「うわっ…！？」
「こ、これは…？」
自分達が助かった事を知り、自分達を助けてくれた存在、
目の前にいる銀色の巨人に視点が移り、人々は驚愕の眼差しを向けた。

「あれが…助けてくれたのか？」
「でけぇ…。」
他の人々も集まり、呆然と銀色の巨人を見上げる。
「銀色の…巨人！？」
人々が見上げる中、銀色の巨人は低く重い足音を市街地に響かせながら、
目の前に降下してきたメガフラシを見上げた。静かに対峙する両者。
その光景に息を呑む人々。恵、ななこ、直人。
人々が見守る中、遂に市街地にてウルトラマンとビーストの戦いが始まった…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３８　忘却　－Ａ．Ｄ．２００４－（後書き）

最終章突入。風間が誕生した理由である「永遠の命」についての話は、
「銀河鉄道９９９」を見たその時から、この小説でやろうと思っていた展開です。
（それに合わせてラファエルの設定も若干変更。）

監視者の正体は「ネクサス」で人間に憑依する来訪者が出てくる話が考えられていたようなので、そこから構想しました。
感想コメント欄に監視者の正体の謎を深める目的で、意図的に「監視者は“海本隼人”」と
「“”」つきで含みを持たせて書いたんですが…、うまくいったかな…。
（ちなみに彼の本名である「ゼロ」は「物語の全ての始まりが来訪者の地球到達」だったので、
そこから「ザ・ワン以前に地球に到達＝ゼロ」となりました。）

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３９　封鎖　－Ａ．Ｄ．２００９－

立ち並ぶビル群を越えて、銀色の巨人、ウルトラマンが巨大な姿を現し、
その視線の先、上空にメガフラシが不気味な声を響かせる。
一方、コマンドルームに走って入ってきた和倉隊長は呆然と立ち尽くすナイトレイダーを見た。
「何している？」
事情を聞こうとする和倉隊長の視線の先に、
ザ・ネクストの映像とザ・ワンの映像が映し出されたモニター画面が入った。
「まさか…お前達…！？」
和倉隊長の問いから顔を背ける隊員達。その反応が全てを物語る。
一方、さいたま新都心ではウルトラマンがジュネッスブルーにスタイルチェンジし、
メタフィールドを展開しようとフェーズシフトウェーブを放つが、
その直後にフェーズシフトウェーブは消滅してしまった。
「！？」
驚くウルトラマンだったが、その直後、メガフラシは赤い電撃を放って、
眼下に広がるビルを次々に破壊し始めた。

「隊長はご存知だったんですね？　私達も記憶処理を受けていた事を！」
コマンドルーム。平木隊員の追及を受けて和倉隊長が反論する。
「言いたい事は分かる！　だが！
今、この瞬間にも人々が倒れていく！　自分が今、何をなすべきか考えろ！」
その言葉に平木隊員はハッと我に返り、石堀隊員は横を向き、

西条は何かを決意したかのようにしばらく閉じていた目を開けると、一歩前に出て和倉隊長に敬礼をして頼んだ。
「後で説明をお願いします。」
その頼みに和倉隊長は黙って頷く。
そして、ナイトレイダーの操縦するチェスターがさいたま新都心へ向かうと、
メガフラシの電撃を受けて、ウルトラマンが弾き飛ばされ、建設中のビルに倒れ込んだ。
ウルトラマンは瓦礫の中から立ち上がって、再びメガフラシに構えを取るが、
風間の命があとわずかであることを思い出し、構えに戸惑いが現れていた。
「風間君の命が…あとわずかなんて…。」
そんなウルトラマンを見て、メガフラシが再び電撃を放とうとするが、
その時、ミサイルが撃ちこまれ、メガフラシは倒れ込み、
ウルトラマンが上空を見上げると、チェスターがメガフラシを攻撃していた。
「各機、ウルトラマンを援護する！」
「了解！」
和倉隊長の指示を受けて、チェスターは四方に散開、
それを見てウルトラマンは決意を新たにし、改めて構えを取った。
「クワドラブラスター、ファイア！」
西条がδのクワドラブラスターを放つが、その瞬間、ブラスターが消滅してしまった。
「ブラスターが消滅した！？」
驚く西条の耳に石堀隊員と平木隊員の報告が入る。
「この虹で一定以上のエネルギーは無効化されてしまう！」
「ビームは使い物になりません！」
事情を知った和倉隊長がすぐさま指示を出す。

「西条！　ミサイル攻撃に切り替えろ！」
指示を受けた西条がすぐさま答える。
「了解！　アビロックミサイル、ファイア！」
西条の放ったアビロックミサイルはメガフラシの背後に命中。
悲鳴を上げてメガフラシは地面に墜落。
ウルトラマンは倒れたメガフラシを見ると急いで上に乗り、
エネルギー量の少ないシュトロームソードを展開して、攻撃を加えようとするが、
その時、メガフラシが猛スピードで爆走、急停止して、
上に乗っていたウルトラマンは吹っ飛ばされ、ビルに突っ込み、
それを見てメガフラシは再び空中に浮遊、
空にポッカリと口を開けている闇の出入り口へと帰還していった。
ウルトラマンは瓦礫の中から立ち上がると、
そのまま光となって消え、時を同じくして闇の出入り口も消えた。

『市街地に隕石落下　一帯を全面立ち入り禁止区域に』
「隕石が落下したさいたま新都心一帯は依然、大規模な磁気異常に見舞われており、
さいたま新都心へ続く街道は全て封鎖されています。」
ＴＶでは女性アナウンサーがＴＬＴによって捻じ曲げられた真実を報道していた。
「本当にビースト情報の漏延は防げるのだな？」
現場に到着した松永管理官のもとに、フォートレスフリーダムの東郷から電話が入る。
「えぇ。これだけ大規模なリアルタイムでの情報操作は初めての事ですが、
既に辺り一帯の封鎖は完了しています。」
「君を信頼している。」
「恐れ入ります。では。」
松永管理官が東郷からの電話を切った直後、

今度はななこからの電話が入ってきた。
「はい…。…直人が!?」
思わず声を上げてしまう。
「ですが、既に我々の保護下にありますのでご安心を。」
「そうですか…。感謝します。」
努めて平静に、いつもと同じように答えたつもりの松永管理官だったが、
ななこはその声にホッとした安堵と親としての優しさを感じ取った。

さいたま新都心では生き残った人々が街から出ようと駆け出すも、
街の外に通じる全ての道はＴＬＴによって封鎖されていた。
街の外に逃げたい住人とそれを阻止するＴＬＴ隊員の間に小競り合いが起きるが、
ＴＬＴ隊員は空に向けて威嚇発砲をし、
それでも街の外に逃げようとする者には容赦なく銃を突きつけた。
人間が同じ人間に向かって武器を向ける光景。
封鎖された人々の恐怖と絶望は限界まで高まっていた。

戦い終わったしんのすけは恵が無事かどうか確認しにＭ・Ｐの車に向かった。
「恵ちゃん!」
しんのすけは車の中にいる恵に安否を尋ねた。
「しんのすけ君…。」
そう答えた恵の隣に座っている直人もしんのすけを見る。
「良かった、無事で…。」
しんのすけが二人の無事を知って安堵すると、そこに報告を終えたななこがやってくる。
「あまりお父様に心配をかけないようにね。」
忠告するするななこを見て、直人が尋ねた。
「父を知っているんですか?」

その問いになこはしばし間を空けて答えた。
「えぇ…、…立派な方よ。」
直人はその答えを聞くとなこに再び尋ねた。
「あの化け物や巨人と関係があるんですね？」
その問いになこは押し黙るが、直人はそんななこを見ながら話を続けた。
「俺、前にこんな話を聞いたことがあるんだ…。
新宿大災害は、化け物と巨人が現れて戦ったんだって…。
父さんの持っていた資料に新宿大災害のがあったけど…、もしかして…！」
「一つ言えることは…、あなたのお父様は…、
世界を守るために戦っていらっしゃるってことよ…。」
動揺する直人になこはそう答え、そんな二人をしんのすけと恵は黙って見つめていた。

フォートレスフリーダムのコマンドルームではジャッキーによって、ナイトレイダーへの新宿大災害の説明が行われていた。
石堀隊員がジャッキーに問う。
「査察官、ＴＬＴが消去したのは本当に新宿大災害の記憶だけなんですか？」
「そっか…、これだけとは限らないんだ。」
石堀隊員が尋ね、隣の席の平木隊員も同調する。
「それは無いわ。」
石堀隊員の問いをジャッキーはすぐに否定した。
「ＴＬＴに出来るのは人間の脳の神経回路網から、
特定のキーワードに関する記憶を検出し、それに繋がる神経インパルスを抑制する事だけ。」
「特定のキーワードとは？」
和倉隊長の質問にジャッキーが答える。
「つまり、ウルトラマンとビーストにまつわる記憶しか消せないの

よ。」
西条はそんなジャッキーに新たな質問を投げかける。
「査察官、あなたは5年前の記憶をお持ちなのですね？」
「えぇ…。5年前、確かに我々はこの世界に生きる全ての人間から、ウルトラマンとスペースビーストの記憶を奪い、あらゆるメディア上の記録やネットワーク上の情報を操作した。このフォートレスフリーダム最下層、SECTION－0にあるレーテの虚像（ファンタム）を使ってね…。」
「何の為にそこまで大規模な事を？」
ジャッキーは一つ間を置くと、今までとは違って口調を少し強めて西条の問いに答えた。
「スペースビースト…。奴らは恐怖を求め、それを捕食する生命体…。
それも高度な知性に生じる恐怖を…。人間を襲うのはその為よ。ビーストは恐怖が広まる事で出現のポテンシャルがさらに高まる。だから人々にビーストの存在を認識させてはいけない…。」
「それで記憶を消去しなければいけなかったんだ…。」
ジャッキーの話を聞き、平木、石堀隊員は納得は出来なくても一定の理解はした。
そんな中、西条はジャッキーの説明にあった「恐怖」という言葉に反応し、
脳裏に幼少時の忌まわしい記憶が蘇る。
「恐怖なんて…憎しみがあれば打ち勝てる…！」
その言葉を聞いた皆の中、一人ジャッキーだけが異議を唱える。
「それは違うわ。」
立ち上がったジャッキーを見上げる西条。
ジャッキーはザ・ネクストとザ・ワンの映像に目をやった。
「5年前、ザ・ワンと名づけられたスペースビーストに姿を変えたのは…私の婚約者。
そして、最初の適能者（デュナミスト）、真木舜一にザ・ワンの抹殺を依頼したのも

…この私。」
「婚約者を…！？」
ジャッキーの告白に平木隊員は受け入れがたい表情になった。
一方、西条は身を乗り出してジャッキーに詰め寄る。
「なら、あなたもビーストにより強い憎しみを抱いているはず！」
「確かに私はスペースビーストが憎い…。でも、憎しみで戦っても、得るものは何も無い。むしろ、大切なものを失ってしまう…。」
ジャッキーは西条の隣に来て答えた。
「憎しみだけでは今日まで戦ってこれなかった…。
恐怖を乗り越える為に必要な想い…。それは憎しみなんかじゃない…。」
かつての自分を見るように、ジャッキーは西条を見て告げた。
「それは…人を愛する心…。人を慈しむ眼差し…。
私はそれをウルトラマンから教わったの…。」

ＣＩＣでは、風間が少し息遣いを荒くしながらも、
メガフラシの発生させた虹の分析をしていた。
「ビーストが市街地に現れたのは…、
来訪者のポテンシャルバリアが…弱まっているからか…。」
その時、風間の全身に衝撃が走り、風間は胸を押さえてデスクに手をついてしまう。
「ついに来たのか…その時が…。」
苦しみながらも呟く風間。
「風間君！」
その背後にしんのすけが現れ、苦しんでいる風間を見ると急いで駆け寄った。
「しんのすけ…。」
風間を見つめるしんのすけ。
その時、画面にビースト振動波が現れ、
風間は苦しみながらもナイトレイダーに指示を送った。

「さいたま新都心に再び、コードネーム・メガフラシが姿を現しました…。
ナイトレイダーにスクランブルを要請します…。」

コマンドルーム。スクランブル要請を受けて、和倉隊長は隊員達に目を向けた。
頷く隊員達を見て和倉隊長も黙って頷く。迷い無く、ナイトレイダーは一斉に動き出した。
西条もジャッキーに一礼して準備に入る。
そんな中、さいたま新都心の空に再び闇の出入口が発生し、メガフラシが降下してきた。

「行ってくれ！　しんのすけ！　僕のことには構うな！」
苦しみながらも訴える風間にしんのすけは声を大きくして訴えた。
「でも、風間君の命は…！」
そんなしんのすけの言葉に風間が驚く。
「分かったんだ…。僕のこと…。」
しんのすけが頷き、風間はそんなしんのすけを見つめるが、
その時、画面にメガフラシがビル群を破壊している映像が表示され、
それを見て風間が訴えた。
「しんのすけ…、僕は僕のやるべきことをやる…。
だから、お前はお前のやるべきことをやってくれ…！」
「風間君…。」
しんのすけの呟きに弱々しくも笑みを浮かべて風間が頷き、
しんのすけはそんな風間の頷きを受けて、
エボルトラスターを引き抜き、光となってＣＩＣから消え、現場に向かった。

さいたま新都心。
メガフラシは再び触手を発しようとするが、そこに高速でウルトラ

マンが飛行してきた。
メガフラシはすぐさまその場から飛行して離れ、電撃でウルトラマンを攻撃するが、
ウルトラマンはサークルシールドでそれを防ぎ、
メガフラシの顔面目掛けて思い切り拳を振るった。
落下するメガフラシをウルトラマンが追い、
メガフラシは体勢を整えて、電撃で後方のウルトラマンを迎撃。
ウルトラマンは巧みに避けてメガフラシへと後一歩まで迫るが、
メガフラシは接近したウルトラマンに向かって、電撃をゼロ距離で放って追い払った。
しかし、ウルトラマンは一度は後退しながらも、
マッハムーブで再び急接近して遂にメガフラシを捕らえると、
そのまま肉弾戦を仕掛けて、メガフラシを人のいない空き地へと誘導落下させた。
そこにナイトレイダーのチェスターが到着する。
メガフラシはしがみつくウルトラマンを振り切ると、
ウルトラマンに全体重をかけて圧し掛かってきた。
「全機、一斉攻撃!!」
「了解!!」
チェスターのミサイル攻撃を受けてメガフラシは怯み、
その隙にウルトラマンは脱出してジュネッスブルーにスタイルチェンジ。
シュトロームソードを展開、力を込めて、
全身のシュトロームエネルギーをシュトロームソードに集め、
光の炎を纏った剣・プロミネンスソードでメガフラシを一刀両断し、
メガフラシは光の粒となって消滅した。

一方、街の外からさいたま新都心を見守る松永管理官の所に、
直人を乗せたM・Pの車が到着した。
車から降りる息子を優しい顔で迎える父。

「父さん…。」
「無事で良かった…。」
しばしの間を起き、父は申し訳なさそうに話を切り出した。
「直人…。この5年間、すまないと思っている。だが私は…。」
何かを説明しようにも言葉が続かない父を見て、息子は首を振って答えた。
「分かったから…、もういいって。」
父の顔を見て笑顔になる息子。
そんな息子を見て父も恥ずかしそうにぎこちない笑みを浮かべる。
「一つ、約束して…。」
「ん？」
「今度の、母さんの誕生日には…、一緒に行こう！　あの公園に…。」
息子からの頼みに父の胸に熱いものが込み上げてくる。
「あ、あぁ…。約束しよう。」
「忘れるなよ！」
長年のわだかまりが解け、満面の笑みを浮かべる息子。父も力強く頷く。
「あぁ…。私は決して忘れない、今日の事を…。」
しかし、直後、父の顔から笑みが消える。
ななこはそれを黙ってみていたが、やがて意を決して松永管理官に尋ねた。
「管理官…。」
そんななこに松永管理官はいつもの低い声で答える。
「…お願いします。」
許可を貰ったななこは俯きつつも、松永管理官に背を向けて直人を車の方へと促した。
「あとでね。」
そう言い残して連れて行かれる直人。
それを見た父は一瞬息子を呼び止めようとするが堪える。

立ち止まり、青空を見上げる松永管理官の視界の端で光が一つ瞬いた。

その頃、フォートレスフリーダムのある部屋ではパソコンを操作して、
ゼロが誰かとコンタクトをとっていた。
「ラファエルは間に合うの？」
後ろから聞こえてきた声にゼロが振り返るとそこにはジャッキーがいた。
それを見てジャッキーは話を始めた。
「あなたがここにやって来たのは本来は風間トオルの病状を監視するため。
そして、あなたはフォートレスフリーダムで密かに彼のデータを取り、
極秘に他のプロメテの子達とコンタクトを取って、ラファエルの開発を続けている。
彼の父親とも言える、海本隼人の意思を継いで…。」
その言葉にゼロは無言で頷き、それを見た後、ジャッキーは独り言のように続けた。
「…ＴＬＴがラファエルの開発を中止すると言った時…、私は何もできなかった…。
上層部は後任の作戦参謀がいるから大丈夫なんて言っていたけど、そういう問題じゃないわよね…。人為的に創られたとは言っても、理性も感情も持った一つの命が消えかかろうとしているんだから…。」

ＣＩＣでは、風間が床に倒れ伏して、苦しみながらも何とか身を起こし、膝を突いていた。
息遣いも荒い中、風間は恵から貰った貝殻を手に呟いた。
「恵…。」

その後、風間は何とか立ち上がろうとするが、
再び倒れ伏してしまい、恵に貰った貝殻が手から零れ落ちた。
そして、さいたま新都心では恵がそれを察知したかのように呟いた。
「トオル…！」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　３９　封鎖　－Ａ．Ｄ．２００９－（後書き）

今回は監視者こと、ゼロの持っていたメモリーチップに何故、風間のデータが入っていたのかという部分の謎を消化しました。あの時、地面に落ちたのは風間の病状監視のために使っていたチップだったという感じです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４０　反乱　－リボルト－

「地上部隊。ビーストは倒されましたが、
封鎖は継続してください。住民は街の東に退避させるように…。」
「了解。」
ウルトラマンとナイトレイダーによってメガフラシは倒されたが、
ウルトラマン、ビースト、ＴＬＴの存在を知ったさいたま新都心の
人々は
松永管理官の指示で街に閉じ込められたままであった。

「風間君…！」
戦いを終え、しんのすけは急いで風間のいるＣＩＣに向かおうとするが、
その時、いきなり気を失って地面に倒れてしまう。
気を失ったしんのすけの背後には、全身白尽くめの人間、ホワイトスイーパーの姿があった。

風間に何かが起こったことを感じ、
しんのすけと同じくＣＩＣに向かおうとする恵だったが、
その時、しんのすけがホワイトスイーパーに連れ去られるのを見つけた。
「しんのすけ君…！」
一方、ＣＩＣでは風間が何とか身を起こしていたが、
その時、デスクの上の携帯電話に着信が入り、
何とか取って出ると焦りが入り混じった恵の声が聞こえた。
「トオル！　しんのすけ君が松永管理官達に捕らえれた！」
それを聞いて風間は驚く。
「何だって…！？　また、しんのすけを実験するつもりなのか…。」
そう言うと風間は携帯電話を切り、少し間を置いた後、意を決して、

手元に落ちている恵から貰った貝殻を手に取ると、
扉を開けてＣＩＣの外、レーテの保管されているＳＥＣＴＩＯＮ－０の前に出て、
エレベータに乗り、上階へと向かっていった。

Ｋ２　１３ラボ。
以前捕らえられた時と同じ部屋に、しんのすけは再び運び込まれていた。
エボルトラスターとブラストショットはケースに保管され、
しんのすけ自身はベッドに拘束されて身動きが取れないようにされていた。
その様子を別室からモニターで見ていた松永管理官が呟く。
「あなたが光のデータをとってくれたおかげで、
人造ウルトラマン計画始動まで順調に進むことができましたよ。」
そう言って松永管理官が振り返るとそこにはゼロがいた。
「…彼を捕らえるとは聞いていませんでしたが。」
少し声を低くして問うゼロに松永管理官は不敵な笑みを浮かべて答えた。
「人造ウルトラマン計画は最終的にウルトラマンの適能者（デュナミスト）である
彼自身のデータを取ることによって、完全なる兵器としてのウルトラマンが誕生するのです。」
「しかし…。」
さらに追求するゼロを松永管理官は冷ややかな目で見て答えた。
「あなた達の星で起きた惨劇の原因となったのは、あなた達の造った
人造ウルトラマンの自己進化システムが暴走したからだそうじゃないですか。
それは人造ウルトラマンに適能者（デュナミスト）と呼べるものが存在しなかったからです。
しかし、私のやろうとしていることはあなた達とは違う。
あなたを人造ウルトラマンの適能者（デュナミスト）にしようと言ったのですよ？

かつて、自分の力を見せつけるために、
人々から賞賛されるために戦って光に見限られたというあなたをね…。」
松永管理官の話を聞いてゼロの表情が少し険しくなる。
そんなゼロを見て、松永管理官は笑みを浮かべて検査担当官に指示を出した。
「お願いします。」
検査担当官が頷き、以前と同じく、ビースト振動波の擬似振動波を発する装置から、
冷たく青い光、ビースト振動波がしんのすけに向けて照射された。
「う…！」
全身を突き刺すような痛みにしんのすけの顔が歪む。
「！　しんのすけ！？」
そのしんのすけの苦痛をよろよろと廊下を進む風間も感じ取る。
しかし、その息遣いは荒く、異常な汗が噴き出していた。
「イラストレーター！」
その時、背後から聞こえてきた声に風間が振り返ると、
フォートレスフリーダムに戻ったななこがいた。
「ななこさん…。」
そう呟きながら風間は駆け寄ってきたななこに支えられる。
「イラスト…いえ、風間君…。一体何が…。」
しかし、風間はななこが言い終わる前に事情を訴えた。
「ななこさん…、このままじゃしんのすけが…！」
「共鳴周波数９，４２、スペクトル増幅率３０００。」
「もっと上げてください…！」
苦しむしんのすけと実験を続ける松永管理官を見て、
ゼロは自分のやったことを後悔して青ざめる。
（…私は力を求めるあまり、大事なことを忘れていた…。このままではいけない…。
このままでは私達の星で起きた惨劇がこの星でも繰り返されてしま

う…。）

一方、コマンドルームではナイトレイダーが待機していたが、
その時、ななこと風間が入ってきて隊員達は皆、何事かと驚いた。
「この基地のどこかに…適能者（デュナミスト）の実験室があるはず…！」
「イラストレーター…。一体、どうしたんですか？」
石堀隊員の呼びかけに代わりになこが叫んで答える。
「しんちゃんが！　管理官達に捕まったの！」
それを聞いて和倉隊長と西条は顔を上げ、他の皆も二人の方に目をやる。
「何とかして…、実験を止めないと…。」
喋りながらも風間は必死に適能者（デュナミスト）の実験室を探すが、
その時、胸を押さえてうずくまってしまった。
「イラストレーター！」
西条は急いで駆け寄って風間を支え、
そんな風間を見て石堀隊員がパソコンを開いて調べる。
「実験室はおそらくＫ２ブロックの１３。…現在稼動中だ！」
それを聞いた西条は石堀隊員に向かって頷くと、
二人と共に急いでコマンドルームを出ようとしたが、
和倉隊長はその腕を掴んで止め、西条の顔を真っ直ぐに見て語りかけた。
「西条！　…事によってはＴＬＴに反旗を翻す事になる。その事は分かっているな？」
その問いに西条も和倉隊長の顔を真っ直ぐに見据えて答える。
「分かっています…！」
西条の覚悟を感じ取る和倉隊長。
「隊長！　万が一の場合は自分がここからバックアップします！」
「隊長！」
「和倉隊長…。」
石堀、平木隊員、ななこの確かな覚悟を感じ取り、和倉隊長は力強

く頷いて風間に答えた。
「私達は今まで共に戦ってきた仲間を…こんなところで見殺しにはしない…！」
その言葉を聞いて風間は苦しみながらも笑みを浮かべて頷いた。

Ｋ２　１３ラボではしんのすけへのビースト振動波照射が続けられていた。
「スペクトル増幅率５０００！」
「心電図に異常！　血圧低下しています！」
「危険です！」
「続けてください！」
検査担当官の忠告を無視し、松永管理官によって実験は強行に進められていく。
しかし、そんな松永管理官を見て、意を決してゼロが立ち上がって叫んだ。
「今すぐ実験を中止してください！」
「！？」
驚く松永管理官を見てゼロは息を荒げて答えた。
「確かにあなたの言う通り、私は心の中で力を求めていた…。
でも、そのあまり大切なことを忘れていた…。
このままでは以前と同じ過ちを繰り返すことになってしまう…！」
必死に実験中止を訴えるゼロを松永管理官は強引に突き飛ばし、実験を押し進めた。
一方、フォートレスフリーダムの廊下を和倉隊長を先頭に西条、平木隊員、風間とななこが進む。
そして、彼らがＫ２　１３ラボの扉の前まで来ると、
警備に当たっていたＴＬＴ隊員が彼らの前に立ちはだかる。
「ここは立ち入り禁止です！」
「管理官と話がしたい。」
和倉隊長の声を聞いて松永管理官はモニター越しにナイトレイダー

の面々を見た。
「ここはあなた方が来るべき場所ではありません。」
和倉隊長は松永管理官の声が聞こえてきた監視カメラを見て語りかけた。
「しんのすけ君の実験を今すぐ止めていただきたい。彼は我々の仲間です。」
その言葉に松永管理官は少し上ずった声で興奮気味に答える。
「どうして分からないのです!?　ウルトラマンの力を兵器として用いることこそが、
人類を破滅から救う唯一の道なのです!」
自分を睨むゼロに一瞬目をやった後、松永管理官は話を続けた。
「適能者（デュナミスト）は単なる器、光の入れ物に過ぎない。
あなた達も今まで共に戦ってきたなら分かるでしょう?」
しかし、和倉隊長は毅然と告げた。
「私は…、私達は戦場でウルトラマンと出会い、今まで共に戦ってきました。
私は、ウルトラマンを単なる力だとは思わなかった、思えなかった…。
彼は私達と同じ…人間だとはっきりと感じました…。」
そう語る和倉隊長の脳裏に真木の姿が思い浮かぶ。
「そして今、私は思います！　光を力に変えるのは人の意思だと…。
適能者（デュナミスト）が自らの意思で己の命を懸けて戦おうとするからこそ、光は力となる。
適能者（デュナミスト）は単なる光の器ではない！　光を！　人類が手に入れるべき兵器だとも思わない！
…単なる心を持たない兵器としてしか光を捉えられなくなった時、
その先に待っているのは自らにその力が返ってくるという結果だけ…。」
和倉隊長の言葉を聞いて、ゼロは自分達の造った人造ウルトラマンのことを思い出した。

一方、松永管理官はナイトレイダーに向かって冷たく言い放った。
「これ以上邪魔をするようなら…、
あなた方の記憶を…処理しなければなりません…。」
そして検査担当官に改めて指示する。
「スペクトル増幅率を上げてください！」
松永管理官の指示を受けてしんのすけに照射されるビースト振動波が強くなり、
Ｋ２　１３ラボの扉の向こう側からしんのすけの悲鳴が聞こえてくる。
それを聞いたななこはすぐさまＴＬＴ隊員二人を壁に押さえ込み、
平木隊員はパルスブレイガーのアタックモードで扉のロックを破壊した。
「我々はウルトラマンを解放する！」
そして和倉隊長の号令の下、ナイトレイダーはＫ２　１３ラボに突入した。

ラボの中にはしんのすけ以外誰もいなかった。
和倉隊長はビースト振動波照射装置をどかし、
西条はケースの中からエボルトラスターとブラストショットを取り出す。
そしてななこは拘束を外し、
意識が朦朧としているしんのすけに向かって必死に呼びかけた。
「しんちゃん！　しっかりして！」
その呼びかけにしんのすけの意識がハッキリしていった。
「しんのすけ君、大丈夫か？」
「何とか…。」
意識を取り戻したしんのすけは和倉隊長にそう答えると、
息遣いが荒く苦しそうな風間に目を向けた。
「風間君！」
「しんのすけ…、良かった…。」

風間はしんのすけを見てホッとすると、
しんのすけに支えられて、しんのすけも和倉隊長に支えられて西条と共に逃走。
平木隊員はそれを見て監視カメラにパルスブレイガーを向けた。
「ばぁい！」
次の瞬間、Ｋ２　１３ラボを映すモニター画面はノイズに変わった。
映らなくなったモニターを爪を立てて掴んで松永管理官が歯ぎしりする。
「ナイトレイダー！！」
一方、しんのすけを連れてフォートレスフリーダムを逃走するナイトレイダー達の前に武器を構えたＴＬＴ隊員が立ち塞がった。
「石堀！」
和倉隊長の言葉と共にコマンドルームに残っていた石堀隊員はパソコンを操作。
辺りの電源が落ちて真っ暗になった。
すぐに予備電源による非常灯が点いたが、既にナイトレイダー達は姿を消していた。
「どこ行った！？」
慌てて行方を追うＴＬＴ隊員。
「Ｄ１からＤ３通路に回ってください。」
「了解。」
警報鳴り響くフォートレスフリーダムの中をナイトレイダー達は石堀隊員の指示で移動していた。
モニターでナイトレイダー達の逃走を見る松永管理官は怒りに顔を震わせ声を荒げる。
「捕獲部隊！　反逆者達を決して、フォートレスフリーダムから出すな！　現在、Ｄ３通路に移動中…。」
しかし、その時、部屋にあるモニター画面全てがノイズに変わっていってしまった。

「こ、これは…！？」
あまりの事態に動揺を隠せない松永管理官。
その一方、石堀隊員はナイトレイダーを的確に誘導していく。
「詩織！　引き返せ！」
ナイトレイダーの進む通路の先には捕獲部隊が迫っていた。
「イッシー、どっちなの！？」
「ルートFからチェスターの格納庫に出ろ！」
「了解！」
「急げ！　ゲートを開ける！」
石堀隊員によってチェスターの発進ゲートが開いていく。
「管理システムが奪われました！　ゲートが開きます！」
検査担当官から報告を受けて、松永管理官は握り拳を思い切り机に振り下ろした。
「クソォ！！」
悔しげに叫ぶ松永管理官をゼロはフッと笑って見ていた。
「イッシー！　早く！」
「今行く！」
コマンドルームの石堀隊員は全ての操作を終えて席を立ち、チェスター搭乗口に通じるシューターに入っていった。
「ここからこういうふうに出撃するのはこれが最後かもな…。」
石堀隊員が感慨深げに呟いた後、石堀隊員を乗せたシューターは射出され、
直後、しんのすけとナイトレイダー、風間となながこを乗せたチェスター４機がフォートレスフリーダムから発進。
オプチカムフラージュシステムによって青空の中に姿を消した。

さいたま新都心。チェスターが着陸した森の中、チェスターから降りた西条達は、
横倒しになっている木にしんのすけと息遣いが荒く苦しそうな風間を座らせた。

「ごめん。オラが捕まったせいで…。」
「これは俺達の意思でやった事だ。…いいから少し休め。」
謝るしんのすけに和倉隊長が答えると風間の隣に恵がやって来た。
「トオル…。」
「恵…。」
見つめ合う2人。
「風間君…。」
そして、しんのすけの言葉に風間は無言で頷き、それを受けてしんのすけは恵に話しかけた。
「恵ちゃん…。風間君はもう…長くは生きられない…。」
その言葉を聞いて恵はショックを受ける。
恵がショックを受けているのを見ながらも、しんのすけは風間の状態を説明した。
「ラファエルは…風間君の体を治す特効薬の事だったんだ…。」
しんのすけの言葉を聞いて無言で恵を見る西条。
恵はショックが大きすぎて言葉が出ず、辺りを静寂が包む中、風間がようやく口を開いた。
「隠していてごめん…。」
「トオル…。」
それ以上口に出す言葉が今の恵には思い浮かばず、
しんのすけはそんな恵を見ながら風間に尋ねた。
「風間君…、どうしてアカデミーを…。」
風間は頭を抱えて俯きながら話し始めた。
「僕は…耐えられなかったんだ…。ただ人を心配させて、悲しませて、
出来る当ての無いラファエルを待ってる…。
それだけで僕と…僕のために時間をかけてくれる人達の時間は終わっていく…。
それが耐えられなかったんだ…。天使は…ラファエルは来ない…。
だから僕は…、どうせ短い時間なら、

誰も僕が死ぬって事を知らない場所へ行こうと思ったんだ…。
そうしたら…、皆に迷惑をかけることもないって思って…。」
風間の自嘲を含んだ告白を聞いて皆が押し黙る。
風間が恵を見ると俯き、長い髪で顔は隠れているが、目に涙が滲んでいる事は分かった。
「恵…。」
風間の呼びかけに恵は唇を噛み締め、震える声で叫んだ。
「トオルの…トオルのバカァ！！」
それに風間は驚き、その瞬間、恵の両目から大筋の涙が流れ出た。
「前に…言ったよね…？　私に…、私にもっと早く言って欲しかったって…。
私…トオルのどんな事情でも受け入れられるって言ったよね…。
なのに…なのに…、どうして、一番大切なことだけ今まで言ってくれなかったの！？」
そこまで言うと、恵は俯いて溢れる涙を流すだけになり、
そんな恵を見る風間にしんのすけが少し考えて言った。
「…風間君、皆に迷惑をかけないために、
秘密にして…黙って一人で抱え込んでも、
風間君のことを知っている人は皆、風間君のことを覚えてる…。
だから、皆本当に風間君のことを心配するんだ…。オラも…。」
しんのすけはかつての自分を思い出しながらそう答え、
それを聞いた風間は涙を流す恵に近寄って謝った。
「恵…、ごめん…本当にごめん…！」
「トオル…。」
指で涙を拭い、風間の顔を見る恵。
そんな2人を見るしんのすけとナイトレイダー、ななこ。
その時、しんのすけエボルトラスターが明滅を始めた。
それに気づいたしんのすけはエボルトラスターを取り出して見る。
「ビースト…。」

そう呟いたしんのすけを見て和倉隊長がためらいながらも尋ねる。
「チェスターで出ます。…イラストレーター…、ミッションの指示は…可能ですか？」
「はい。パルスブレイガーがあれば、一応指示は送れますから、大丈夫です！」
そう風間は力強く頷いてから答えると、恵に告げた。
「待っていてくれ…。恵…。」
その言葉に恵は涙ながらも頷いた。
そして、しんのすけはストーンフリューゲルを呼んでさいたま新都心に向かい、
風間もナイトレイダーと共にさいたま新都心に向かった。

日が沈み出したさいたま新都心。
住人はＴＬＴによって街の東側に集められていたが、
そこを狙ってリザリアスが迫ってきていた。
リザリアスの熱線によって街のあちらこちらから火の手が上がり、
消防等も来る事が出来ず、被害は放置され拡大し続けた。
そこにハイパーストライクチェスターが到着。
パルスブレイガーを持った風間を地上に降ろし、リザリアスと対峙する。
「リザリアスが…！？」
一度倒したリザリアスの出現にナイトレイダーは戸惑い、
誰もいない道路の中心にいる風間は呟いた。
「そうか…、アンノウンハンドは今までの戦いで、
倒されたビーストの情報を集めて保管していたのか…。」
ハイパーストライクチェスターはスパイダーミサイルを撃つが、
リザリアスの吐く熱線に相殺されてしまった。
風間は戦うチェスターを見上げるが、
そこにしんのすけのストーンフリューゲルが横切り、風間は頷く。
そして、ストーンフリューゲルの中、その頷きを感じ取ったかのよ

うに
しんのすけは決意の表情でエボルトラスターを掲げた。
太陽が沈んでいき、辺りが夕焼けに包まれる中、
眩いばかりの新たな光が地上に降り注ぎ、ウルトラマンが姿を現した。

目の前に現れたウルトラマンに向かってリザリアスが熱線を吐くが、
ウルトラマンは片手でサークルシールドを展開して
受け止めるとジュネッスブルーにスタイルチェンジ、
熱線に当たったサークルシールドをナックレイ・ジェネレードとして撃ち出した。
リザリアスが倒れている間にウルトラマンはメタフィールドを展開しようとするが、
その時、後ろから鉤爪が攻撃してきて妨害された。
「ノスフェル…！？」
驚く風間。見ると、アンノウンハンドの闇の中からノスフェルがその姿を現した。
迫るノスフェルに対し、ウルトラマンは立ち上がって構えようとするが、
先に立ち上がっていたリザリアスがウルトラマンの背後に熱線を浴びせてきた。
日が傾き、街が橙色の夕焼けに染められる中、
リザリアスとノスフェル、二体のビーストに囲まれたウルトラマンは防戦一方だった。
そこにハイパーストライクチェスターが援護をするが、
その時、巨大な影がハイパーストライクチェスターを覆った。
「カラドリアスまで…。」
西条が呟き、
見上げるとハイパーストライクチェスターより遥か高空をカラドリアスが飛行していた。

カラドリアスはハイパーストライクチェスターに鋭いクチバシで攻撃を仕掛け、
ハイパーストライクチェスターはダメージを受けて、苦戦するが、
その時、カラドリアスの首に光の帯が巻かれ、身動きの取れなくなったカラドリアスは
その光の帯、セービングビュートを発したウルトラマンに地面に思い切り叩きつけられた。
その隙にハイパーストライクチェスターは
ハイパーストライクバニッシャーをノスフェルとカラドリアスに向けて撃ち、
二体は光の粒となり、それを見てウルトラマンは残ったリザリアスに向かって疾走。
リザリアスはウルトラマンに向けて熱線を撃つが、ウルトラマンは前転で軽くかわし、
背後のハイパーストライクチェスターも分離してかわし、すぐさま全バニッシャーで攻撃。
そして、リザリアスが怯んだ隙にウルトラマンはシュトロームソードを展開、
すれ違いざまに一刀両断した。
次の瞬間、リザリアスは倒れ、光の粒となった。
「よし！」
それを見て、風間が思わずガッツポーズをし、西条も力強く頷く。
そして、ウルトラマンはハイパーストライクチェスターにサムズアップをすると、
光となって消えていった。

フォートレスフリーダムの廊下。部下の一人がジャッキーに尋ねる。
「本当に北米本部に戻られるのですか？」
ジャッキーは部下への質問に答えた。
「確信できたの。」

「え？」
「かつて、最初の適能者（デュナミスト）である真木舜一が、
自分に託された想いに応えてこの世界を守り抜いてくれたように…。」
ジャッキーの脳裏に夕焼けの中、ザ・ワンを倒したザ・ネクストの
雄姿が蘇る。
「野原しんのすけ…。今の適能者（デュナミスト）にも、あなたを始め、多くの人が
想いを託し、
彼は仲間との深い絆と共に戦っている。いかにアンノウンハンドが
強大な敵でも、
その想いと絆を断ち切る事など、出来はしない…！」
そう語るジャッキーはかつてアミーゴスズキの事件の時のものと同
じ、
サンバホイッスルを取り出して、心の中で呟いた。
（しんのすけ…、私はあなたならきっと守り抜いてくれると信じて
いる…。
サンバに一番大切なものを私に教えてくれたあなたなら…きっと。）
心の中で呟くジャッキーの脳裏にかつての出来事が蘇った。

その後、アンノウンハンドの闇は倒されたビーストの光の粒が消滅
する前に飲み込み、
その闇の中で光の粒は一つとなり、かつて新宿大災害時に現れた、
ザ・ワンの最終形態、ベルゼブア・コローネと酷似した姿となって、
さらに他の光の粒もそこへと集まり、
それらが一つとなってザ・ワンとは違う、巨大な黒い翼を携えた何
かとなった…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４０　反乱　―リボルト―（後書き）

「ネクサス」の本編では描かれずに終わった、来訪者の星の惨劇の原因となった、
人造ウルトラマンの暴走について会話シーンで触れるという形で描きました。
同時にゼロがしんのすけを監視していた理由についても消化。
かつて、彼はウルトラマンが来訪者の星を訪れた時に、
その力を得た適能者（デュナミスト）だったという設定です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４１　想い　―レゾリューション―

夜の闇に覆われたさいたま新都心。反逆の罪に問われている、風間、西条、和倉隊長、平木隊員、石堀隊員、ななこの６人は、ＴＬＴ上層部の判断が決定するまではフォートレスフリーダムへの帰還は認められず、
そのままさいたま新都心にて待機する事となった。

「何ですって!?　人造ウルトラマン計画に関するデータが全て消去されている…!?」
その頃、フォートレスフリーダムのコマンドルームでは、
松永管理官が検査担当官から衝撃の報告を受けていた。
「はい…。野原しんのすけを実験して得たデータと、今まで集められたデータ、
そしてそのバックアップまでも含めた全てのデータが完全に消去されていました…。」
「そんな…バカな…。一体誰が…。」
報告を受けた松永管理官はしばし考え込み、やがてある事に気づいた。
「あの時…、反乱を起こしたメンバーの中で基地のシステムを全て操作できたのは…。」
そう呟き、松永管理官は石堀隊員が座っていたテーブルに目を向けた。

さいたま新都心。チェスターが停められている公園内のサッカースタジアムに、
街の様子を見に行っていた西条が帰って来た。
「どうだった?」
和倉隊長の質問に西条は首を横に振って答える。

「街の封鎖は解かれていません。
住民は皆、街の東側に避難させられている状態です。」
「そうか…。」
西条の報告を受けた後、和倉隊長はしんのすけ達のいる場所に向かった。

チェスターが停められているスタジアムに隣接している施設の中。
風間は毛布をかけられ、横になってしんのすけとナイトレイダーに話していた。
「アンノウンハンドの闇の中で…、ビーストの波形が異常な振幅を示している…。
おそらく、何かが成長しています…。」
風間がパルスブレイガーを見てしんのすけ達に答える。
「何かって…。」
しんのすけが呟き、風間がそれに答えた。
「それは分からない…。
アンノウンハンドは時を置かずに何かを仕掛けてくる…。
しかも闇の中にはメガフラシの発生させた虹と同じ反応がある…。」
「つまり次の戦いではしんのすけ君はメタフィールドを張れないと…。」
和倉隊長の懸念に風間が頷いて答える。
「はい…。次は未曾有のビーストを相手に市街地で戦う事になります…。」
風間の言葉を聞いたしんのすけ達の間に緊迫した空気が流れる。

話が終わった後、皆と入れ違いに恵が部屋に入ってきた。
しんのすけはそれを見送った後、観客席のベンチに座って星空を眺める。
すると、そこになこがやって来た。
「なこおねいさん…。」

「しんちゃん…、前に私にこう言ったよね？
どんなに辛い記憶でも…、それはきっと乗り越えられるって…。」
「うん…。」
ななこはそれを聞くとしばし間を置いた後、メモレイサーを取り出してしんのすけに手渡した。
「これって…。」
しんのすけの呟きにななこが頷く。
「信じてみようと思うの…。あなたの言葉を…。だから、これはあなたが預かっておいて…。」
「ななこおねいさん…。」
頷くななこを見て、しんのすけはメモレイサーをポケットにしまい、再び星空を眺めた。
（あなたの言葉が本当なら…、きっともう必要ないはずだから…、それは…。）

その後、しんのすけはメモレイサーを部屋に置いた後で、風間や皆、そして自分のために何か食べ物を買いに、街のコンビニに向かった。
街は封鎖されているため当然のごとく無人で、明かりもなくまるでゴーストタウンのようだった。
「やっぱ、やってないか…。」
コンビニについたしんのすけは予想通りにコンビニが営業していないことを知り、
急いで帰ろうとするが、そこに、
「おい、お前…。」
と声がかけられる。
「え…？」
しんのすけは声のした方向に振り返るが声の主が見えないまま困惑する。
その時、いきなり目の前が明るくなり、しんのすけはそれに目を逸らすが、

目が慣れてくるとそこには以前見たことのある人物が立っていた。
「…根来さん？」
しんのすけのその言葉にそのライトを向けた人物、根来は笑って答える。
「よぉ、しんのすけ。久しぶりだな。つい懐かしくなって脅かしたくなっちまってな。」
「根来さん、どうしてここに？」
しんのすけの疑問に根来は笑みを浮かべて答えた。
「前に、新宿の地下でお前に会った後、
M・Pに記憶処理されたんだが、どういうわけか記憶が消えてなくってな。
もしかしたら、あいつらがあの携帯使う時にカメラのフラッシュ焚いたからかもしんないけどな。」
根来の言葉にしんのすけはななこが前に言ってたことを思い出す。
（ななこおねいさんが言ってたカメラマンってやっぱ根来さんだったんだ。）
しんのすけは心の中で呟き、そんなしんのすけに根来が続ける。
「で、その後も独自に調査してここまで来たってわけよ。
あ、あと、お前に会いたいって奴らを連れてきたぜ。」
その言葉のあと、根来がライトを振ると、ひろし達が出てきた。
「父ちゃん、母ちゃんにひまわり、シロ！」
思わぬ展開に驚くしんのすけにみさえが答える。
「ＴＶで隕石がさいたま新都心に落下したってやってて、
それでもしかしてビーストじゃないかって思ってやって来たの。」
ひろしも続ける。
「市街地にビーストが現れるなんておかしいからな。
何かが起ころうとしてるんじゃないかって思って、心配になって来たってわけだ。」
「そうだったんだ…。」
しんのすけが呟くと、ひろしがためらいつつもしんのすけに尋ねる。

「しんのすけ…。風間君のことは…。」
しんのすけはその問いにしばし考えた後、分かった真実を全て話した。
「そうか…。そんなことが…。」
ひろしが呟き、みさえが続ける。
「でも、それじゃ風間君が可哀想よ…！　恵ちゃんだって…。」
「永遠の命か…。ちょっと憧れるちゃうかもしれないけど…。」
しかし、そのひまわりの言葉の後、根来は一つ息を吐いて答えた。
「バカ言ってんじゃねぇよ！　永遠の命ねぇ…。
そんなこともやってたなんてＴＬＴって本当に胡散臭い組織だな…。」
「え？」
根来はしんのすけの顔を見て答えた。
「永遠の命っていうけどよ、人の命ってのは、限りがあるからこそ頑張れるし、
限りがあるからこそその中で精一杯生きようとする。だから、美しいし尊いんじゃねぇか。」
そうさらりと答えた根来にしんのすけは驚く。
「俺はそう思うがね。」
そう言うと、根来は手にした缶ビールをぐいっと飲み干した。
根来の言葉にしんのすけは少し考えるが、そんなしんのすけにひろしが尋ねる。
「で、ここに来たってことは何か買いに来たんだろ？」
「皆、昼間から何も食べてないからハラへってると思って食べ物を買いに来たんだゾ。」
「ま…、腹が減っては戦はできぬっていうからな…。ほれ。」
そう言うと、根来はしんのすけに一つの袋を渡した。
「これって？」
「俺がこの街に潜伏していた時の食料だ。まだ結構ある。」
しんのすけは袋を受け取ると笑ってお礼を言った。

「ありがとう。」
そして、しんのすけはひろし達に手を振ると公園に戻っていった。

その頃、部屋では恵が風間の額の汗を拭っていた。
汗を拭った後、風間と偶然目と目が逢ってしまう。
無言のまま見つめ合う2人。重苦しい空気が辺りを覆う。
やがて、意を決した恵が搾り出すように自分の想いを告げ始めた。
「私は…トオルが好き…。
トオルの未来がどんなものであったとしても、
私の気持ちは変わらない。…ずっと変わらない。」
そこに戻ってきたしんのすけが扉を開けるが、
2人の雰囲気を察し、根来から貰った食料を置くとそのまま退散した。
それには気づかず、2人は再び黙り込んだ。
「……。」
「……。」
「……。」
「……。」
「……。」
「……。」
「……。」
天井を見上げる風間。俯く恵。恵の告白に答える事が出来ない風間。
風間の返事を聞く事が出来ない恵。すぐ近くにいながらも、
2人の間には目に見えない巨大な何かが存在しているかのようだった。
「ごめん…。　いきなり…、こんなこと言って…。」
そう言うと、恵は部屋から逃げるように出て行ってしまった。
それを見送った後、風間は激しい後悔の念に襲われた。
「僕は…馬鹿だ！　…僕じゃ、恵に何もしてやれないのに…！」

目前に迫った自分の死。それが恵に、皆に何をもたらすのか。
「皆が僕のことを忘れてくれたなら…、皆は悲しい思いなんてしなくて済むはずなのに…！」
頭を抱え込む風間だったが、
その時、しんのすけが置いていったななこのメモレイサーが目に入る。
それを見た風間は段々と無表情になっていった。
（メモレイサーはウルトラマンとビーストにまつわる記憶を消すもの…。
ってことは、ビースト事件に直接関わっている、
ナイトレイダーに指示を送るイラストレーターのことも忘れる…？）

外でブランコに座ってしんのすけが星空を眺めていると、
和倉隊長がやってきて、隣に腰掛けた。
「オラには…あの2人に何もしてやれない…。
それが辛いんだ…。代わってやれるものなら…。」
しんのすけの嘆きを聞いて和倉隊長が話す。
「人の人生は肩代わりできない…。
家族でも、恋人でも、友達でも…、どんなに大切な人間であっても…。
だからこそ…、人は心を尽くして、人と絆を結ぼうとする…。」
「絆…。」
和倉隊長の言葉にしんのすけはつぶきの「絆っていう一番大切な光」という言葉を思い出す。
そんなしんのすけの目を和倉隊長は真っ直ぐ見て告げた。
「お前は…、お前に、お前としてできることを…、
あの2人にやってやれ…。共に絆を結んだ…友として…。」

「ごめん…、トオル…。急に出て行ったりして…。」
その後、風間の所に恵が戻ってきた。

「あ、こんなところに食べ物がある…。何か温かいもの作るね。」
わざとらしい反応ながらも恵はしんのすけが根来から貰ったインスタントスープを作り始めた。
それを見て、風間は一回瞬きをすると、恵に見えないようにポケットからななこのメモレイサーを取り出した。
「できたよ。」
笑顔で風間にインスタントスープを持ってくる恵。
その時、風間はいきなり立ち上がり、恵に向けてメモレイサーをかざした。
突如、目の前にメモレイサーの画面が突きつけられた恵はすぐさま状況を察し、
すぐさま両手でメモレイサーを押さえて自分の顔から引き離した。
メモレイサーを奪い合う2人。
風間は何とかメモレイサーを発動させようとするが、
恵は風間の手から力尽くでメモレイサーを奪い取って床に投げつけた。
そして、風間に向かってあらん限りの声で叫んだ。
「ふざけないで！　皆忘れてしまえっていうの!?
トオルの事！　顔も！　名前も！　トオルがこの世にいたって事も!!!
全部忘れてしまえっていうの!?　冗談じゃないわよ!!!
一緒にいた時間がどれだけ大事か、分からないの!!!　どうしてそれが…分からないの…。」
想いの丈を全てぶちまけると恵の両目から大粒の涙が溢れ出した。
それを見た風間は自分のやったことを深く後悔し、とめどなく涙を流す恵を抱きしめた。
「ごめん…ごめん…。恵…。」
窓から差し込む月明かりが、テーブルの上に置いてある
風間の貝殻と恵の鳥のアクセサリーを照らしていた。

そんな2人のやりとりを扉越しに聞いていたしんのすけは外に出ると、

和倉隊長の言葉を思い出して、エボルトラスターを取り出した。

「オラとしてできること…。

オラは…2人を…、2人の『未来』を守るために…戦う…！」

しんのすけはエボルトラスターを見つめ、決意を新たにして呟いた。

そして、それぞれが様々な想いを抱く中、夜は更けていった…。

To be continued

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４１　想い　―レゾリューション―（後書き）

根来の再登板となるなこがしんのすけにメモレイサーを託すシーン、「永遠の命」と「限りある命」の話と、風間と恵の繋がる想い。色々と展開を盛り込んだら１話分使う形になりました。根来が「永遠の命」と「限りある命」について語るシーンは、最も描きたかった部分なので、特に力を入れたつもりです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４２　未来　―ゲット・マイ・フューチャー―

フォートレスフリーダム。あの後、ゼロは部屋のパソコンを通して、アメリカにいるプロメテの子達と連絡を取り合っていた。
そして、遂に待ち望んでいた返事を手に入れた。
「プロメテの子達が…ラファエルを完成させた！
現在、医療スタッフが、ラファエルと共に日本に向かっている！
風間トオルは…助かる！」
そう言うとゼロは急いで椅子から立ち上がって駆け出した。

夜が明け、風間が街外れの見晴らしのいい丘の上に腰掛けて、朝日が昇るのを眺めていると、しんのすけがやって来て隣に腰掛けた。
「しんのすけ…。」
「ん？」
「僕のことを全部知ったのなら…。
僕が元々永遠の命を体現する存在として創られたってことも知ったんだよね…？」
「うん…。」
その答えを受けて風間が話し始める。
「考えてたんだ…。永遠の命と限りある命…、どっちが本当にいいんだろうって…。」
その言葉を聞いてしんのすけは根来の言葉を思い出し、何かを考えながら話し始めた。
「…オラは、限りある方がいいな。」
「え？」
意外な答えに風間は驚くが、しんのすけは朝日を見つめたまま話し出した。
「前に…聞いた言葉なんだけど、人の命ってのは、限りがあるから

こそ頑張れるし、
だからその中で精一杯生きようとする。だから、美しいし尊いんだって。
…オラも限りがあるからこそ、心を尽くして人は人と絆を結ぼうとするんだと思う。」
「絆…。」
風間の呟きにしんのすけはエボルトラスターを取り出して答えた。
「風間君…、もしかしたら絆ってのは人に託された光…希望なのかも…。
だからあの時、皆との絆を思い出したオラは溝呂木を倒せたし、もしかしたら、ウルトラマンがオラの想いに応えて、光を再び託してくれたのも…。
風間君に…絆って光を…、希望を伝えるためだったのかも…。」
「光は…絆は人に託された希望…？」
言葉と共にしんのすけと風間は昇りきった朝日を眩しく見つめた。

その時、さいたま新都心に不気味な唸り声が鳴り響いた。
しんのすけと風間が視線を上げると、青空に真っ黒なアンノウンハンドの闇が現れた。
「トオル！」
「恵…。」
そこに風間を心配した恵がやって来る。
それと同時に、アンノウンハンドの闇の中から最強のビーストが現れた。
その姿はガルベロスを中心にペドレオン、バグバズン、ラフレイア、ノスフェル、カラドリアス、ゴルゴレム、グランテラ、バンピーラ、リザリアス、メガフラシ…、
今まで現れた全ての巨大ビーストの頭部や、
特徴的な器官が混沌に混ざり合い、かつて新宿大災害時に現れた、ザ・ワン・ベルゼブア・コローネのシルエットを思わせる姿であっ

た。
最強ビーストは目の前の建物を次々と破壊、口から発する超強力熱線で街を焼き尽くし、
街の東側に避難させられている人々の所へと足を向けた。
そこに、ゼロからの通信が風間のパルスブレイガーに入る。
「プロメテの子達がラファエルを完成させた！
現在医療スタッフが、ラファエルと共に城南大学病院に向かっている！」
「本当に！？　風間君、今すぐ病院に向かうんだ！」
しんのすけの訴えに、風間は他のプロメテの子達に思いを馳せて呟いた。
「皆が…。」
しかし、視界に最強ビーストによって破壊される街が映り、
風間は通信を切って、自分の腕を握る恵の手を離し、決意を込めた表情で答えた。
「しんのすけ…、恵…、僕は僕の使命を全うする…！」
「トオル…。」
心配そうに見つめる恵に風間はゆっくり頷いて約束する。
「…必ず戻る。」
その言葉に恵は力強く頷いて答えた。
そして、しんのすけを見て互いに力強く頷くと、二人は一気に駆け出した。
「オラにできることを…オラとしてできることを…！」
その想いと共にしんのすけはエボルトラスターを鞘から一気に引き抜いてウルトラマンに変身。
風間はパルスブレイガーでナイトレイダーに指示を送り、イズマエルの分析を始めた。
対峙するウルトラマンと最強ビースト。それを見守る風間。
ウルトラマンはジュネッスブルーにスタイルチェンジして、

駆け出し、さいたま新都心を舞台に両者が激突。
その衝撃で砂塵が舞い上がり、周りの高層ビルの窓に振動が響き渡る。
最強ビーストが圧倒的なパワーを繰り出していくのに対し、
ウルトラマンは持ち前のスピードで対抗していった。
そこに４機のチェスターが到着して最強ビーストを攻撃。
援護を受けて優勢になったウルトラマンが攻め立てるが、
最強ビーストはラフレイアの花冠から可燃性ガスを噴射し、
ウルトラマンが怯んだところをノスフェルの鉤爪で斬りつけてきた。
攻撃を受けてウルトラマンはビルに向かって弾き飛ばされ、
そんなウルトラマンに最強ビーストは、メガフラシの電撃を放って攻撃してきた。
ウルトラマンはシュトロームソードを展開してそれを弾くと、
隙のできた最強ビーストに攻め立てた。しかし、最強ビーストはゴルゴレムの口吻（こうふん）で背中を攻撃し、バグバズンの鎌で殴り飛ばしてきた。
ウルトラマンを追い詰める最強ビーストを分析した風間が呟く。
「あいつは…おそらく、過去のあらゆるビーストの能力を備えていると思われます。
最強のビースト、コードネーム・イズマエル…。」

「おいおい、ヤベぇんじゃないのか？」
「しんのすけ…。」
苦戦するウルトラマンを見て根来とひろし達が心配する。
そして、街を見渡せる丘から恵が二人を心配そうに見守っていると、
そこになこがやってきて肩に手をかけた。
「ななこさん…。」
「信じるのよ、恵ちゃん…。」
「え？」
「しんちゃんや風間君達だけじゃなく、

私達自身の力を信じるのよ…。私達にできることを…。」
「私達にできること…。」
その言葉に恵はかつて風間に渡した貝殻と自分の鳥のアクセサリーを取り出して、
両手で握り締めて、風間の無事を祈り、
ななこも戦うウルトラマンを見つめて、しんのすけの無事を祈った。

イズマエルは超強力熱線を放って、
ウルトラマンはそれをシュトロームソードで弾こうとする。
しかし、逆にシュトロームソードが砕け散り、
驚くウルトラマンは超強力熱線を受けて倒れ込んでしまった。
そこにチェスターが四方向から同時にイズマエルを攻撃するが、
メガフラシの虹の効果で、全てのバニッシャー・レーザー攻撃が無効化されてしまった。
さらにイズマエルは全身に備わっている各ビーストの口から次々に光線、光弾を発射し、
石堀隊員操縦するβと平木隊員の操縦するγを撃墜した。
和倉隊長は撃墜されたβとγに視線を送りながら、イズマエルに攻撃した。
しかし、αの攻撃ではイズマエルにダメージを与える事は出来ず、
逆にイズマエルの攻撃を受けて墜落してしまった。
「く…！」
最後に残った西条がイズマエルを怒りの視線で睨みつけ、アビロックミサイルを放つが、
イズマエルの放った超強力熱線によってミサイルは溶かされ、
そのままδもダメージを受けて墜落してしまった。
ナイトレイダー全滅に驚く人々を前にイズマエルは背中のカラドリアスの巨大な翼を展開した。
そして、
「所詮、人間ナドコノ程度カ。」

イズマエルの口から人間の言葉が発せられた。
「ビーストが…喋った?」
驚く人々。風間も驚く。
「俺ハアラユル生命ヲ喰ライ、進化シ、ヤガテコノ宇宙ノ絶対的覇者トナル存在。
以前ハウルトラマンニ阻止サレタガ…。」
その話を聞いて風間が気づく。
「そうか…。今までのビーストは全てザ・ワンの飛び散った細胞片から誕生していたのか…。」
「俺ハアンノウンハンドニヨッテ誕生シタ存在。
ダガ、今ノ俺ハ、奴ノ影響ナド受ケハシナイ! 俺ハ宣言スル…。
コノ全宇宙ノ覇者トナリ、全テノ生態系ヲ俺自身ノ物ニ変エテヤル!
貴様ラ他ノ生物ト同ジク…生キ残ルタメニナ…。」
そう言うと、イズマエルはウルトラマンに近づき、
コアゲージからエネルギーを吸い取り始めた。
高笑いするイズマエル。苦しむウルトラマン。
「しんのすけ!」
そんなしんのすけに風間が叫ぶが、その時、全身に衝撃が走って、
胸を押さえて倒れ込んでしまった。
「まだ…、まだ…僕は…。」
風間は何とか最後の力を振り絞って、
立ち上がろうとするも全身に力が入らず、遂に地面に倒れ伏してしまった。

そして、イズマエルはウルトラマンのエネルギーを吸い取った後、
カラドリアスの翼で飛び上がり、
街の東側に集められていた人々に向けて、超強力熱線を発射する。
ウルトラマンは間一髪サークルシールドを展開し、それを防ぐが、
連続で放たれる超強力熱線に、遂にサークルシールドが破壊され、
さらにイズマエルは各ビーストの頭部から様々な光線、光弾を一斉

に発射した。
エネルギーを吸い取られた上に、激しい攻撃を受けたウルトラマンはコアゲージが点滅。
風間と同じく地面に倒れ伏してしまった。
それを見て着地し、イズマエルは勝ち誇ったかのような咆哮を上げた。

『その未来は十分変えられるから…！』
『絆ってのは人に託された光…希望なのかも…。』
『人の命ってのは、限りがあるからこそその中で精一杯生きようとする。』
倒れている風間の脳裏にしんのすけと恵の、
共に自分と深い絆を結んだ者達の様々な言葉が浮かんでいった。
「絆…光…。」
呟く風間。
一方、しんのすけも風間のことを思い出し、拳を握り締める。
そして、共にフラフラだったしんのすけと風間の全身に力と気合が蘇っていく。
風間は最後の力を振り絞り、しんのすけと共にゆっくりと力強く立ち上がっていく。
「絆は…人に託された光…。僕は戦う…！　僕は生きる…！
生きて！　しんのすけから貰った絆を…この光を繋ぐ…！」
そして、それと同時にウルトラマンは力強くイズマエルに構えを取り、
その瞬間、あの時と同じようにエナジーコアから辺り全てを包むような眩い光が解き放たれた。
エナジーコアが光り輝くウルトラマンに向けて迫るイズマエル。
コアファイナルの状態になったウルトラマンもイズマエルに向けて駆け出す。
イズマエルが口から超強力熱線を吐くと、ウルトラマンは高くジャ

ンプしてかわし、
空高くから、しんのすけと風間、二人の絆がもたらした、
光の炎の弓矢・オーバーアローレイ・シュトロームを気合と共に放った。
眩い光の炎の弓矢がイズマエルの全身を包み、
地面に着地したウルトラマンの背後、イズマエルは大爆発を起こした。
「しんのすけ…。」
戦いを終えたウルトラマンは光となって消え、
その戦いを最後まで見届けた風間はゆっくりと地面に倒れ伏した…。

風間の脳裏に次々と浮かんでは消えていく恵とのかけがえのない大切な思い出。
それらがまるで走馬灯のように風間の脳裏を駆け巡っていく…。
「トオル！　トオル！　目開けて！！　トオル！　トオル！
目開けて！！　トオル！　お願い！　トオル！！」
ストレッチャーで運ばれる風間に恵は何度もその名前を呼びかけるが、
必死の訴えも空しく、何も返ってこなかった。
しんのすけとななこ、ナイトレイダーがやって来るが、
そんな恵と風間に向かって誰も呼びかけられなかった。
救急車の手前でストレッチャーが止まり、
恵は風間の顔にゆっくりと自分の顔を近づけた。
木々の間から降り注ぐ光。
口付けの後、恵は涙ながらに風間を見る。
「トオル！　トオル！！」
うっすらと目を開けた風間を見て、恵は安堵と共に涙ながらに抱きつく。
そして、恵はしんのすけ達に深々と頭を下げると、
風間を乗せたストレッチャーと共に救急車の中に乗り、

扉が閉められ、走り出す救急車をしんのすけ達は無言で見送った。
『風間君は生きる…！　…オラ達はそう信じた。』…野原しんのすけ
風間の生存を強く確信するしんのすけ。
彼は見たからだ。恵が風間に口付けをした後、
「Ｐｙｒ」の指輪を付けた風間の左手が、
しんのすけ達に向かって勝利のＶサインをしたのを…。

Ｎｅｘｔ　Ｔｈｅ　Ｆｉｎａｌ　Ｅｐｉｓｏｄｅ

Ｅｐｉｓｏｄｅ　４２　未来　－ゲット・マイ・フューチャー－（後書き）

“第二部”完結。今回のサブタイトルは「ビーストウォーズ？」のＯＰに使われていた、
Ｃｙｂｅｒ　Ｎａｔｉｏｎ　Ｎｅｔｗｏｒｋの「ＧＥＴ　ＭＹ　ＦＵＴＵＲＥ」からとりました。
話の流れとしては冒頭で根来から受け取った言葉をしんのすけが風間に、
自分の言葉も交えながら伝えるシーンで、“絆の連鎖”のようなものを描き、
中盤でのしんのすけと風間の戦いを見守る恵やなな子達、
後半の自分と“絆”を結んだ者達の言葉で生きることを決意する風間、
風間と共に立ち上がり彼との“絆”によってイズマエルを倒すウルトラマンなど、
これもＥｐｉｓｏｄｅ　２２と同じく、原作の“燃える展開”を崩さないように肉付けしていきました。

さて、次回はついにＦｉｎａｌ　Ｅｐｉｓｏｄｅ。３部構成でいきます。

The Final Episode Part1 ―殺戮者、復活―

『風間君は生きる…！　オラ達はそう信じた…。
でも、あの時、オラ達は一緒に戦ってきた仲間の中に、
裏切り者がいたなんて思ってもいなかった…。
そして、それによって引き起こされる恐ろしい出来事も…。』

しんのすけは河原で流れる水を見ながら、エボルトラスターを見つめて、
自分にとってのこの1年を振り返っていた。
「この光と出会ってから、色々なことがあったな…。悲しいこともあったけど…、
でも、それ以上に忘れていた大切な事を思い出したり、多くの人にも出会えた…。」
しんのすけはそう呟くと、あいから貰った翼の生えたぶりぶりざえもんを取り出して、見つめた。
「あいとの思い出…。これからも大切にしていくゾ…。」
その後、しんのすけは青いマウンテンバイクに跨って風間のことに思いを馳せた。
「風間君…。」
あの戦いの後の風間に思いを馳せながら、
しんのすけはバイト先の遊園地に向かっていった。

遊園地。やって来たしんのすけを明日香が迎える。
「遅いわよ、しんのすけ君。」
「いやぁ、主役は遅れてくるってね。
それより皆！　風間君と恵ちゃん、正式に恋人になったんだゾ！」
「え！　本当に！？」
しんのすけの言葉に真っ先にネネが食いつき、続いてマサオ達もや

って来る。
「へぇ…。やったわね、恵ちゃん！」
明日香が呟き、ネネも興奮しながら尋ねる。
「ねぇ！　キスは？　キスはしたって！？」
「うん。しかも、唇と唇を重ね合わせて…。」
「キャーーー！！！」
しんのすけの言葉にネネが興奮し、明日香も笑顔を見せるが、
マサオは完全に蚊帳の外だった。
「女の子ってこういう話好きだよね…。」
呟くマサオだったが、そこにボーが話に加わる。
「ちょっと、話変わるけど…、僕、ネットでこんなの見つけたんだ…。」
そう言ってボーは先日の戦いでのイズマエルが写った写真を皆に見せた。
それを見て、しんのすけの顔が少し曇る。
「えぇ！？　何これ！」
「ネットでの話によると、ニュースでさいたま新都心に隕石が落ちたって言ってたのは、
本当はこの化け物と、青い巨人との戦いだったんだって。」
そう言って、ボーはネネ達に次はウルトラマン、ジュネッスブルーを撮った写真を見せた。
「へぇ…。でも、合成写真の可能性もあるんじゃない？」
明日香の問いにボーが答える。
「合成写真にしては、合成した痕跡が全くなかったり、
実際に見たっていう人も多い。だから、本物の可能性が高いんだって…。」
「へぇ…。」
そんな皆をしんのすけは話に加わらずに黙って見つめていた。
（あそこまで派手な戦いじゃ。…撮られてないほうがおかしいか…。）

「レーテ起動３０秒前…。」
その頃、フォートレスフリーダムのＴＬＴ－Ｊ・中央コントロールルームから、
ＳＥＣＴＩＯＮ－０のレーテに向けてアナウンスが入った。
「先の戦いで、３万人以上もの人間がビーストの存在を認識してしまった。
さらに、ネットワーク上にも多数の情報が流れているようです…。
このままではビーストは世界各地に…！」
「レーテを起動し、ネットワーク上の全ての情報を消去するしかない…。」
松永管理官の隣の席に腰掛けている東郷は、
そう答えると切迫した眼差しでレーテを見つめた。

一方、自分の使命を終え、部屋で荷物をまとめていたゼロは、
レーテ起動に気がつくと、荷物をまとめる手を止めた。
「レーテを…動かしたのか。」
ゼロがそう呟いた瞬間、ある記憶が脳裏に蘇った。
『海本君。来訪者の意思を伝えるんだ。』
周り一面をクラゲが漂う水槽に囲まれた幼少期の海本は、
ある男の指示を受けてゆっくりと語り始めた。
『我々は自らの手で故郷の星を爆破した。』
「！？」
その記憶が浮かんだことに驚くゼロ。
「何故…、立ち入らないようにしているはずの海本隼人の記憶が…。」

「おかえりんごジュース。」
「しんのすけ、ちょっと来てくれ！」
朝だけのバイトを終え、家に帰ってきたしんのすけはひろしに呼ば

れて、
居間に入って一緒にＴＶを見る。
そこには、
『ネットで話題の巨人と化け物の写真』
というニュースがやっていた。
「先日のさいたま新都心の隕石落下災害は本当は、
この巨人と化け物の戦いであったという話がネット上でなされていて、
超常現象研究家の間では、多数の議論がなされています。」
女性アナウンサーによって、先の戦いでのウルトラマンとイズマエルを写した写真が紹介される。
「ニュースになる程に取り上げられてるわけか…。」
「写真とか撮ってない人の方が珍しいでしょうしね…。」
ひろしとみさえが口々に呟き、しんのすけが話す。
「遊園地でもボーちゃんがこの写真見せてた。」
「マジで？」
ひまわりの言葉にしんのすけは頷くが、同時にあることに気づいた。
「もしかしたら…、レーテを動かそうとしてるかも…。」
「レーテ？」
みさえの疑問にしんのすけが答える。
「うん。５年前の新宿大災害は、
本当はウルトラマンとビーストとの戦いで、その記憶を消去したマシン。」
「ってことは、もしそれを動かそうとしてるんだとしたら俺達の記憶も…。」
ひろしの言葉にひまわりが顔を曇らせて答える。
「このままじゃ消される…。」
しばしの沈黙。その時、しんのすけが口を開く。
「とにかく…今はダムに行くしかないゾ。」
「ダム？」

「うん。神奈川県のフォートレスフリーダム。
そこがナイトレイダーの基地でレーテもある。」
「善は急げってか…。」
ひろしの呟きにしんのすけが答える。
「オラのウルトラマンとしての能力を使えば、皆すぐに行けるゾ。」
「よし、じゃあ急ごう！」
そして、野原家の皆はしんのすけのウルトラマンとしての能力で、
フォートレスフリーダムに向かった。

再びフォートレスフリーダム。
コマンドルームでは石堀隊員が和倉隊長に今後のことについて尋ねていた。
「隊長。我々に対する処分について今のところ待機ということですが…。」
石堀隊員の質問に和倉隊長は一つ息を吐いてから答えた。
「あぁ、だが基地内の移動に制限は無い。実質、不問といったところだな。」
「えぇ、Bユニットが始動したばかりですし、我々を当てにせざるを得ないというわけですね。」
「そうなるな。現在、Cユニットも設立に向けて動き出したようだが、
それまでは我々とCユニットでやっていくしかないからな。」
そのやりとりの後、石堀隊員は再びパソコンに表示されている、
しんのすけと西条の何かのデータを見て、ニヤリと不気味な笑みを浮かべた。
「どうしたのイッシー、仕事中に変なの見てるんじゃないでしょうね。」
そう言ってコーヒーを持ってくる平木隊員を見ると、
石堀隊員は平木隊員に向けてディバイトシューターを構えた。
「お疲れさん…。」

それを見た平木隊員は一瞬驚くも冗談と受け取って笑顔を返した。
「やぁだ！」

ドン

次の瞬間、平木隊員の体が衝撃で吹き飛ばされた。
「！？」
突然の事態に西条と和倉隊長は驚き、石堀隊員はゆっくりと椅子から立ち上がると、
和倉隊長に向けてディバイトシューターを構えた。
「お前の存在ももう俺にとっては不要だ。…死ね。」
そう言って石堀隊員が弾を撃ち、和倉隊長は何とか避けたが、
石堀隊員は再びディバイトシューターを撃ち、
その1発目でコーヒーメーカーが、2発目でブレイクスペースに置かれている
NRのロゴが入ったテーブルが破壊されてしまった。
「石堀！　止めろ！！」
和倉隊長の制止にも耳を貸さず、
「何故…。」
と自分の足下で倒れている平木隊員の事も全く意に介さず歩き続けた。
石堀隊員は再び辺りにディバイトシューターを撃ち、
ガンキャビネットに収納されているディバイトランチャーがいくつか破壊された。
そして、再び和倉隊長に向けてディバイトシューターを構えた瞬間、
突如、真横から光弾が撃ち込まれ、石堀隊員のディバイトシューターを撃ち落した。
石堀隊員が光弾が撃ちこまれた方向を見ると、

そこにはブラストショットを構えるしんのすけとひろし達が立っていた。
「しんのすけ君！　野原さん！　どうしてここに？」
西条が叫ぶ。
「ニュースでビーストやウルトラマンの写真がネットで話題になってるってやってたから、
もしかしてレーテを動かそうとしているかもって思って…。」
そう答えながらしんのすけはブラストショットの構えを外さない。
「やはり来たか…。待っていたぞ。…ウルトラマン。」
ディバイトシューターを撃ち落された手を見ながら呟いた後、
石堀隊員は笑みを消し、不気味な呼吸音と共に背後に闇を出現させた。
「その闇は…アンノウンハンド！？」
それを見て驚きを隠せない和倉隊長。
「あなただったの、裏切り者は…。」
石堀隊員の背中を睨みつけて問う西条。
「…はい。」
西条の方を向き、再び不気味な笑みを浮かべて答える石堀隊員。
「今までずっと…騙してきたわけ！！」
西条はその言葉と共に石堀隊員に無事だったディバイトランチャーを撃つが、
石堀隊員はそれを目の前に出現させた幕で弾くと、
背後にあるアンノウンハンドの闇の中に弾を消し、次の瞬間、西条に撃ち返した。
「！」
西条は辛くも避けるが、
石堀隊員は皆を一通り見やった後、扉を開けてコマンドルームを後にした。
唇を噛み締めてそれを見送るしんのすけ達。
「石堀が…。」

地下最深部、ＳＥＣＴＩＯＮ－０に通じるゲートの前に石堀隊員が姿を現した。
石堀隊員がゲートに手をかざすと、
ポテンシャルバリアが発動してゲートが赤く光り、赤い電流が石堀隊員目掛けて放たれた。
しかし、石堀隊員は気合を込めた右手で赤い電流を簡単に受け止めてしまった。
「来訪者…。所詮お前達の力では俺は止められない。」
石堀隊員の目が赤く光ると、ゲートを覆っていたポテンシャルバリアは消滅し、ゲートも開いていった。
「最終幕の扉が開かれた…。」
そう言いつつ、ゲートを開けた石堀隊員はＳＥＣＴＩＯＮ－０、レーテの近くに辿り着いた。
「６００秒後にレーテの虚像（ファンタム）を世界各地に…。」
アナウンスを聞いた石堀隊員は満足げな笑みを浮かべてレーテを見た。
「もっと恐怖を吸い込め…。」
そこにゼロが現れて背後からディバイトシューターを撃つも、石堀隊員は素早く反転してその光弾を片手で受け止めた。
「お前は…誰だ？」
ゼロの問いに石堀隊員は少し考えて答えた。
「ウルティノイド…ザギ。」
その時、ゼロの脳裏に自分の過去の記憶と、海本の過去の記憶が蘇った。
『人造巨人…ウルティノイド・ザギ。
進化していくビーストに合わせて、自己進化システムを備えてある。』
全身銀色のボディのウルティノイド・ザギを見上げる昔のゼロ。
『一体何が起こったんだ！？』

暴走を起こし、漆黒のボディに赤いラインが走り、
来訪者の星を破壊し、燃え盛る紅蓮の炎の中に佇むウルティノイド・
ザギ。
『ザギが飛来し、復活した時、この星も滅亡する。』
幼少期の海本の言葉を聞き、一人の人物が驚愕の表情を浮かべた。
『滅亡！？』
目を見開いて絶望と恐怖に震える石堀隊員と瓜二つの人物。
そして数日後、森を歩いていたその人物は禍々しい闇に取り憑かれ、
目に赤い光を宿した。

「まさか…、お前が私達の星を滅ぼした…。あの人造ウルトラマン…！？
しかも…関係者全員の記憶をも改ざんしたというのか…！？」
全てを知って驚くゼロに石堀隊員は笑みを浮かべて平然と答える。
「別に大した事じゃない。お前達、来訪者のテクノロジーの粋である俺には容易い事だ。」
「そこまでよ！」
そこにやって来た西条はディバイトランチャーを構え、石堀隊員に問いかけた。
「どうしてナイトレイダーに潜入したの？　答えなさい！」
そこにしんのすけとひろし達、和倉隊長もやって来る。
自分に向かって武器を向けるかつての仲間達を見て、石堀隊員はフッと笑って話を始めた。
「ＴＬＴは世界規模でビーストを発生させないための幕、
ポテンシャルバリアが保たれているうちにビーストを発生させない抗体の開発を進めた。
その為に風間トオルはビーストとの戦いを管理し、調整しようとしてきた。
俺のやってきたのも似たようなものさ。
…俺は、野原しんのすけが光を受け継ぎ、西条凪と深い絆を結ぶこ

とを予知していた。」
「え…？」
ひろし達が驚きで声を失い、
しんのすけと西条がお互いを見合う中、石堀隊員は雄弁と話を続けた。
「ファウストやメフィスト、ルシフェルをつくってぶつけたのは光の力を強化させる為。
酢乙女あいや溝呂木眞也、三沢広之を利用したのはお前達の心に闇を植えつける為。
ナイトレイダーにいたのは単に都合が良かったのさ。」
「何？」
石堀隊員の言葉に和倉隊長は怒りの表情となる。
そして、石堀隊員はレーテをバックに腕を広げて高らかに宣言した。
「全ては俺が元の姿を取り戻す為の…道具だ！」
次の瞬間、起動したレーテの虚像（ファンタム）が世界各地に現れ、
人々からビーストに関する記憶と恐怖を吸い取ってレーテ本体へと送り込んでいった。

不気味な鳴動を上げて世界各地の恐怖を吸収していくレーテ。
目が赤く光り、石堀隊員の体がゆっくりと宙に浮き上がっていった。
「ふざけるなぁ！！」
それを見て和倉隊長が怒りと共にディバイトランチャーを放ち、
しんのすけもブラストショットを撃つが、
石堀隊員は全ての攻撃を弾き、逆に腕を開いて発した衝撃波で皆は吹き飛ばされ、
西条と和倉隊長のディバイトランチャーは壁に激突して破損してしまった。
石堀隊員は倒れた皆の中、西条を冷たい目で見下ろして告げた。
「俺は…１８年前のあの夜からずぅっとこの時を待っていた。」
石堀隊員を見上げた西条の脳裏に１８年前の忌まわしい記憶が蘇る。

霧の濃い、月明かりも無い真っ暗闇な夜。
ぬいぐるみを抱いた少女時代の西条が不安と恐怖の中、森を駆ける。
『ママはどこ?』
少女時代の西条の声に木の陰から一人の男が姿を現した。
次の瞬間、木の上から落ちてきたものを見て少女時代の西条はあっと息を呑んだ。
『俺が殺った…。』
その男は地面に落ちたそれ、西条の母親の死体を踏みつけて告げた。
『お前の憎しみが光を闇に変えるその時の為に…。』
その人物、幼少期の海本の言葉に狼狽していた人物、
石堀隊員と瓜二つの男に少女時代の西条は涙ながらに訴えた。
『どうして? どうしてなの? パパ!』
全てを思い出してハッとする西条。
「そんな…。」
石堀隊員の顔を信じられないように見つめる。
「思い出したか…。我が娘よ。」
「どうして…?」
「お前の父親、西条一は来訪者が予知した滅亡の未来に恐怖した。
俺はお前の父親に取り憑き、お前の母親を殺し、お前の記憶を操作した。
いや、お前だけじゃない。
この男に関する全てのデータを俺は改ざんし、石堀光彦として生きる事にした。」
「そんな…。」
驚愕の事実に肩を落とす西条だったが、石堀隊員は不気味な笑みを浮かべて話を続けた。
「お前の父親であるこの男の体は、かつて溝呂木眞也がやったように、
生きた人形として利用し、必要なところでだけ意識を俺が乗っ取って利用していた。

そして、レーテが起動した瞬間に俺がこの男を完全に乗っ取ると同時に肉体を再構成した。
つまり、この男の体は今は完全に俺のものだ。良かったな、親殺しにはならない…。」
ニヤッと不気味に笑う石堀隊員の顔を見て西条の怒りと憎しみが爆発した。
「貴様ぁ!!」
その時、レーテから発せられた黒い闇の触手がしんのすけの体に巻きついた。
「え!?」
突然のことに驚く皆に石堀は平然と告げた。
「レーテに蓄積された恐怖がお前の憎しみにシンクロした。
結果、お前と深い絆を結んでいた野原しんのすけの光は闇に変換される。」
石堀隊員の言葉と共にレーテのエナジーコア状の物体が光り、捕らえているしんのすけから光を吸収し始めた。
しんのすけは苦しみ、何とか脱出しようと抵抗するが、
やがて、光を完全に吸い取られ、気を失って倒れ込んでしまう。
「しんのすけ!!」
「しんのすけ君!!」
ひろし達はレーテの触手から開放されたしんのすけに急いで駆け寄る。
一方、光を吸収したレーテのエナジーコア状の物体は闇に染まっていった。
それを見届けた石堀隊員はゆっくりと両腕を広げる。
「…来い。」
その言葉と共にレーテから大量の闇が石堀隊員に注ぎ込まれていく。
注ぎ込まれる大量の闇に石堀隊員の体が震え、苦しみとも歓喜ともつかない声が漏れる。
やがて全ての闇を吸収し終えた石堀隊員は全身を闇に包まれ、目に

赤い光を宿していた。
そして、
「遂に…、復活の時だぁ！！！」
咆哮と共に辺りを猛烈な衝撃波が襲った。
やがて衝撃波が収まり、皆が閉じていたまぶたを開けると、
眼前に漆黒の巨人、ダークザギがその姿を現していた。
「これが…アンノウンハンドの正体…。」
呆然とダークザギを見上げる和倉隊長。
西条は力無く気を失っているしんのすけを見る。
ダークザギは復活した自分の姿を見ると、
手から放つ光弾・ザギシュートをレーテに放って、破壊した。
「これで世界中のビースト因子が活性化を始める…！」
歓喜と共にダークザギは一つ咆哮を上げると、闇となって地上へと
飛び出した。
それと同時にレーテが火花を噴き、その影響でＳＥＣＴＩＯＮ－０
そのものが崩壊を始める。
「早く逃げるぞ！」
和倉隊長は気を失っているしんのすけと、
自分の憎しみのもたらした結果に愕然とする西条を連れてひろし達
と共にＳＥＣＴＩＯＮ－０を脱出。
次の瞬間、レーテが大爆発を起こして、完全に沈黙した。

かつて野原家が訪れた異世界での侵略者の拠点であり、
ザ・ネクストとザ・ワンが戦った場所、
新宿に巨大な闇の塊が落下し黒い巨人、ダークザギへと姿を変えた。
「新宿に黒い巨人が出現！」
オペレーターの報告と共にＴＬＴ－Ｊ・中央コントロールルームの
モニターに
街を破壊する暗黒破壊神・ダークザギの姿が映し出された。
「何という事だ！」

思わず立ち上がって驚きの声を上げる東郷の横、
ザギの両拳から発せられる光線・グラビティ・ザギによって破壊される新宿を見て、
松永管理官はかつての新宿大災害の悲劇を思い出さずにはいられなかった。
「北米本部より入電！　アメリカ全土でビースト因子の活性化を確認！！」
「オーストラリア支部が情報を求めています！！
ポテンシャルバリアの効果はどうなっているんだと…！」
「ヨーロッパ支部、アフリカ支部より同様の報告が！！」
「分かりません！　もう一度言ってください！！」
「シベリア全域で大規模な火災発生！」
「北米本部よりコードレッド！！　ニューヨーク！　ワシントン！
サンフランシスコでXニュートリノの活性化を確認！」
「ロサンゼルスが昆虫型ビースト3万匹に襲われています！！」
「ニューデリー、シンガポール、ＳＯＳを繰り返しています！」
世界各地から中央コントロールルームに寄せられる情報を前に松永管理官は驚愕した。
「ザギの狂気が…世界各地に影響を…。」
「お、恐ろしい…！！」
その隣にいた東郷はがっくりと肘を突いて崩れ去り、
そのまま現実から目を逸らすように俯いて目を閉じ、ただ震えた。
崩れていく建物、泣き叫ぶ人々、至る所で起きる爆発。
平穏が終わりを告げ、ダークザギが世界を恐怖と絶望に塗りこめていった…。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

The Final Episode Part1 ―殺戮者、復活―（後書き）

最終三部作突入。
今回は主にザギの語りが大部分を占める形となりました。

「しんのすけ!!　しんのすけ!!」
ひろし達の必死の呼びかけに、光を奪われ、気を失っていたしんのすけが意識を取り戻した。
「皆…、オラは…？」
しんのすけの問いにひろしが答える。
「あの黒い巨人に光を奪われて…。」
その言葉に、しんのすけがポケットの中のエボルトラスターを取り出すと、
エボルトラスターは完全に光を失っていた。
「光が…！」
光を失ったエボルトラスターを見て、しんのすけは悔しげに呟く。
「くそっ…！」
「しんのすけ君…。」
呟く和倉隊長。しんのすけは周りを見回して西条がいないことに気づいた。
「西条副隊長は？」
「出撃した…。俺も行こうとしたんだが…、一人で行かせてくれと…。」
「え…？」

その頃、新宿ではダークザギが破壊の限りを尽くしていた。
街には異常事態を伝えようといくつかのメディアが出ていた。
「見た事も無い戦闘機が現れ、黒い巨人を攻撃しています！」
女性キャスターがレポートをしていると、逃げる人々のすぐ上、ナイトレイダーBユニットのチェスター4機がダークザギを攻撃するが、
全く効果がなく、逆にザギがザギシュートを撃って反撃してきた。

そこに西条のδが現れ、アビロックミサイルを撃つ。
しかし、ザギリフレクションによって防がれ、逆にダメージを受けてしまった。
西条はδの被弾を知りながらも、ザギに突っ込んでいく。
（これがしんのすけ君へのせめてもの罪滅ぼし…。
溝呂木…。今ならあの時のあなたの気持ちが分かる気がする…。）

レーテが破壊され、世界各地に恐怖が拡散し、多大な影響を及ぼしていた。
「くそっ、何なんだこの化け物どもは…！」
ニューヨークの街中、現れたビーストに対抗する人々の中に、かつてしんのすけ達、野原一家と「ブタのヒヅメ」の計画を阻止した、
秘密組織ＳＭＬの二人、お色気と筋肉がいた。
「お色気！　こいつら、とてつもなくタフだぜ…。」
ペドレオンに弾を撃ち込む筋肉が呟く。
「えぇ。全く下品な化け物…。」
お色気も下品で嫌いな銃を仕方なく使いながらペドレオンと交戦していた。

「王子！　ここは私達に任せて逃げてください！」
かつて野原一家が訪れたブリブリ王国。
王国の親衛隊が小型の昆虫型ビースト・ビーセクターと交戦していた。
その中の少佐、ルル・ル・ルルが叫ぶ。
「王子！　早く！」
その王子、しんのすけと瓜二つなスンノケシ王子は、
ビーストと戦うルルを見ながら、部下と一緒に避難した。

「こんな化け物がいたら温泉が汚れるって！」

日本のある場所。野原一家と「ＹＵＺＡＭＥ」の計画を阻止した、政府直属の秘密組織「温泉Ｇメン」のメンバーが小型のバグバズンの群れと交戦していた。
「弾が切れた…。」
「こっちも…！」
「君達、無駄に撃ちすぎだよ。いくら相手が化け物であっても…。」
呟いた女性、後生掛と指宿に隊長である草津が答えた。
一方、ＴＬＴ北米本部にいるジャッキーも仲間達と共に、ペドレオンの群れと交戦していた。

その頃、まだバイトしていたマサオ達を助けるため、遊園地に向かったしんのすけと和倉隊長とひろし達は遊園地に到着すると、
ペドレオンの群れに襲われるマサオ達を発見した。
「マサオ君！　皆！」
「しんちゃん！」
しんのすけの必死の呼びかけにマサオが答え、皆の無事を確認した後、
和倉隊長が無事だったディバイトランチャーを使ってペドレオンの群れを全て倒した。
「皆！　大丈夫！？」
「何とか…。」
しんのすけの呼びかけにネネが答え、続けてマサオが答える。
「大丈夫…。それより、しんちゃん！　なんなのさ、あの化け物は！？」
「そうよ！　しんちゃん、何か隠しているわね！？」
マサオの追求の後、ネネも尋ね、しんのすけ達は答えに迷うが、
その時、明日香がボーがネットで拾ったと言っていた、
ウルトラマンとイズマエルの写真を持ってきて呟く。
「この巨人や化け物と関係があるんでしょう。」

「え！？」
驚くマサオ達にしんのすけは全ての事情を掻い摘んで話した。
「そうだったんだ…。」
「でも…、なんで内緒にしてたのよ！　そんなこと！」
「黙ってるつもりはなかったんだ…。皆にもいつか言うつもりだったんだけど…。」
明日香はそう答えるしんのすけを少し感慨深そうに見つめる。
（今までの急用ってのも…、全てそのために必要なことだったのね…。
何か秘密があるって薄々感ずいてたけど…。しんのすけ君…。）

一方、迫り来るビーストの群れに各地の人々は段々追い詰められつつあった。
「くそっ…、ここまでか…。」
銃弾を何発受けても前進を止めないペドレオンの群れに筋肉が諦めを含んで嘆く。
その時、
『諦めないで…。』
と声が聞こえる。
「今…、声が…。」
「あなたも聞こえたの？」
お色気が尋ね、筋肉が驚く。
「お前も聞こえたのか？」
「えぇ…。」
同じ頃、ブリブリ王国のルルやスンノケシ王子、温泉Gメンのメンバー、ジャッキー、
その他、しんのすけ達と関わった多くの人々も同じ声を聞いていた。
「何、今の声…？」
「何？」
「何だ…？」

「今のは…。」
皆が驚く中、声は静かに続ける。
『思い出して…、あの時、どんな逆境の中でも諦めなかった自分を…。』
その時、お色気と筋肉、ルルとスンノケシ王子、温泉Gメンのメンバー、ジャッキーの脳裏に
かつて野原家の皆と共に関わった事件の中で、どんな逆境にも挫けなかった自分と、
自分達が野原家との、しんのすけとの絆に支えられていたことを思い出した。
「あなた、一体誰なの？」
お色気の問いに声が答える。
『私は…、昔、しんちゃんに絆という名の光を貰った者です…。』
「しんのすけ君に光を…？」
呟くルル、スンノケシ王子。
『しんちゃん達は今、この状況を何とかしようと…必死に頑張っています…。』
「しんちゃん達が…。」
呟く指宿。
『だから皆さんも…しんちゃん達との絆を、あの時の自分を思い出して、
どんな絶望の中でも…絶対に諦めないでください…。』
「絆…諦めない…。しんのすけ…。」
呟くジャッキー。
しんのすけと出会った人々はその「諦めない」という言葉に、
野原家のこととともう一つある事を思い出した。
そして、他の人々もレーテが破壊されたことによって、
蘇ったビーストの記憶の他にもう一つ、しんのすけと出会った人々と同じ事を思い出した。

その頃、コマンドルームに入ってきた松永管理官は
石堀隊員によって破壊された部屋を見渡し、モニターに映し出されている、
ナイトレイダーBユニットのチェスターとδに乗ってザギと戦う西条の姿を見た。
δは攻撃を受けながらもザギに突っ込んでいく。
それを見てある事に気づく松永管理官。
「まさか…。」
一方、遊園地にいる和倉隊長のパルスブレイガーに松永管理官からの通信が入る。
「和倉です。」
「松永です。ナイトレイダーBユニットと西条副隊長がザギに苦戦しています…。
西条副隊長は…おそらく捨て身でザギに突っ込むつもりです…。」
「何だって！」
「西条副隊長が！？」
「え！？」
通信を聞いて驚く皆。
「早く行かないと！　このままじゃ西条副隊長が…！」
しんのすけの言葉に和倉隊長とひろし達が頷き、
共に新宿に向かおうとするが、その時、明日香が進言する。
「私も一緒に行かせてください！」
「え…？」
明日香を見る皆。
「西条さんは私にとっても仲間みたいなものですから。」
「なら、私も。」
「僕も。」
ネネ、ボーと次々に進言していき、やがてマサオだけが残った。
「じゃあ…、僕はここで留守番でも…。」
そう呟くマサオにネネが怒りの表情でウサギのぬいぐるみを見せて

尋ねる。
「行、く、わ、よ、ね…？」
ネネに睨みつけられ、ビビりながらもマサオは仕方なく了承する。
「はい…。」

ビル街に衝撃波を巻き起こしながら西条が搭乗するδがザギに捨て身で突撃する。
δの放ったクワドラブラスターをザギはザギリフレクションで防ぎ、δにグラビティ・ザギを撃って、ダメージを受けたδは高層ビルに突っ込んでしまった。
そこにしんのすけ達の乗った車が到着する。
「西条副隊長！」
「西条！」
ビルに突っ込んでいるδを見てしんのすけと和倉隊長は叫び、明日香達もその事態に驚く。
一方、ビルに刺さったδの中では西条が幼少期の記憶を思い出しながら、自分に迫るザギを見つめていた。
（私は今まで父と母を殺したビーストを憎む事で生きてきた…。でも、それももう終わった…。私には…もう…戦う力は…残っていない…。）
と、生きる事を諦め、西条は静かに目をつむった。
「西条副隊長！」
その時、ザギがグラビティ・ザギをδの刺さっているビルに向けて撃つ。
「！」
それを見て、しんのすけは西条に心の底から叫んだ。
「あなたはまだ戦える…！　諦めるな！！！」
その叫びを感じて、西条は目を開けた。
「…しんのすけ君？」
その時、しんのすけの体から光が溢れ出し、

それと同時に世界中のしんのすけと絆を結んだ全ての人々のことが脳裏に浮かび、
その光を受けてエボルトラスターが復活、光が溢れ出した。
その瞬間、グラビティ・ザギを受けて、δの刺さっていたビルは爆発を起こして倒壊した。
「西条!!」
「西条さん!!」
叫ぶ皆。
しかし、その時、ビルの爆炎の中から眩い光と共に巨大な何かが姿を現した。
「あれは…!」
それを見て驚く皆。
爆炎の中からしんのすけと皆の決して諦めない心が、
しんのすけと西条との、皆との絆という光が一つになって、
復活した銀色の巨人・ウルトラマンネクサスが眩い光と共にその姿を現した。
その瞬間、世界中にいたビーストが全て消滅。
何が起こったか分からない人々がＴＶを見ると、そこには復活したウルトラマンが映っていた。
「…しんのすけ君。」
「しんちゃん…?」
「しんのすけ…君?」
ＴＶを見たお色気と筋肉、ルルとスンノケシ王子、温泉Ｇメンのメンバー、
しんのすけと絆を結んだ人々がウルトラマンをしんのすけだと感じ取った。
そして、ウルトラマンは手の中にあるδをそっと地上に降ろす。
「ウルトラマン…!　しんのすけ君…。」
復活したウルトラマンの姿を見た西条が言い、
ひろし達や明日香達、和倉隊長もウルトラマンを見つめる。

離れたところからも声の主、光に包まれたつばきがウルトラマンを見守っていた。

「ありがとう…しんちゃん…。」

そう言って、つばきは光と共に姿を消した。

ウルトラマンは飛び上がるとザギの前に降り立ち、その姿を現した。

咆哮するザギ。構えを取るウルトラマン。

松永管理官もコマンドルームのモニターからそれを見守っていた。

「もしこの戦いでウルトラマンが勝利したなら…。」

後ろから聞こえてきた声に松永管理官が振り向くと、

負傷しながらも扉を開けてゼロが入ってきた。

松永管理官はそれを支え、支えられたゼロは画面に映るウルトラマンの姿を見て再び口を開く。

「もしこの戦いでウルトラマンが勝利したなら…。運命を変えられるかもしれない…。」

再び新宿の地に降り立った、光の巨人・ウルトラマンと闇の巨人・ダークザギ。

全世界の人々が見守る中、しんのすけの最後の戦いの火蓋が切って落とされた…！

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ

The Final Episode Part2 ―最後の希望―（後書き）

次回、遂に完結！　すべてに決着がつきます。

The Final Episode Part3 ―未来へ…―

地球の命運をかけて、戦うウルトラマンとザギ。世界中の人々がそれを見守る。
ウルトラマンはザギの放ったザギシュートをサークルシールドで受け止めながら前進するが、
やがて耐え切れなくなってビルに吹き飛ばされてしまった。
しかし、ウルトラマンは拳を握り締めて瓦礫の中から立ち上がる。
その時、しんのすけの脳裏にザ・ネクストの戦いとかつて出会った真木の言葉が蘇る。
『頑張れよ…後輩。』
それを感じて、ウルトラマンは真木から受け継いだ赤いジュネッスへとスタイルチェンジした。
ウルトラマンの変化に驚くザギ。
ウルトラマンはオーバーレイ・シュトロームを放ち、ザギはそれを真正面から受け止める。
さらに力を込めるウルトラマンだったが、
ザギも全ての力を使ってオーバーレイ・シュトロームを掻き消した。
両者は距離を詰めて、肉弾戦を展開。
互角の戦いを繰り広げるも、ウルトラマンはザギの攻撃に翻弄される。
その時、
『負けないで…しんのすけ君。
あなた達のおかげで私達は家族の絆に気づくことができた…。』
お色気と筋肉の声が聞こえ、
『負けないでしんのすけ。あなたのおかげで、私はサンバに本当に大切なものは
自分らしく踊ることだと分かって、父との絆を取り戻すことができた…！』

ジャッキーの声が、さらに地上からひろし達の声援が聞こえ、
同時に脳裏に自分が光を得てから、終焉の地での戦いまでの出来事
が蘇る。
それらを受けて、ウルトラマンはエナジーコアを光り輝かせ、
しんのすけ自身の青いジュネッス、ジュネッスブルーへとスタイル
チェンジした。
ウルトラマンはシュトロームソードを展開、ザギをすばやい動きで
翻弄し、
シュトロームソードで斬りかかるが、ザギに受け止められてしまう。
その時、
『頑張って！　しんちゃん！　しんちゃんと協力できたから、
僕は王国に平和を取り戻すことができた…。』
スンノケシ王子の声が聞こえ、さらに、
『負けるな！　しんのすけ！　お前との絆が俺に大切な人と国を守
る時間をくれた…！』
又兵衛の声が聞こえ、続けて地上からマサオ達の声援が、そして、
『負けるな！　しんのすけ！
しんのすけとの絆が僕に生きる希望を…未来を与えてくれた…！』
風間の声も聞こえ、同時に再び光を掴み取ってから、
さいたま新都心での戦いまでのことまでが思い浮かび、
ウルトラマンがザギから距離をとり、気合を込めると、
再びエナジーコアが光り輝き、光の炎の弓矢がアローアームドネク
サスに宿った。
この1年でしんのすけが感じ取った絆を体現するかのように段々と
強くなっていくウルトラマン。
そして、ウルトラマンは気合と共に、
以前よりも強化されたオーバーアローレイ・シュトロームを放った。
しかし、ザギは叫び声と共にオーバーアローレイ・シュトロームを
も片手で弾き返してしまった。
それを見て驚くウルトラマン。戦いを見守っていた和倉隊長が呟く。

「今までのウルトラマンの必殺技も通用しないのか？」
「しんのすけ…。」
ひろし達も心配そうに呟くが、
そこにチェスターから降りた西条がやって来て、しっかりとウルトラマンを見て答えた。
「大丈夫…。ウルトラマンは負けません！」
「西条…。」
呟く和倉隊長を見て力強く頷く西条。
その時、
「そうだよ！　前にも新宿で悪い怪獣をやっつけてくれたもん！」
その言葉に西条達が振り向くと、そこには一人の少年が立っていた。
「私も覚えてる…。守ってもらった…。」
「ウルトラマンは俺達の為に戦ってくれた…。」
少年の後に続けて周りの人々もウルトラマンのことを口にする。
それと同時に各地でしんのすけのウルトラマンに救われた人々も、
ウルトラマンのことを思い出していた。
「思い出したよ、しんのすけ…。あんたに…あんたに守ってもらったことを…。」
「しんちゃん…。」
またずれ荘ではむさえと四郎、
その他、かつての住人達が集まって、ＴＶに映るウルトラマンの雄姿を見つめていた。
ウルトラマンのことを思い出す人々を見てその場にいたななこが微笑んで呟く。
「遂に来たのね…。三沢君…。待ち望んでいた未来が…。」
ザギが今度はグラビティ・ザギを放ち、ウルトラマンはそれをサークルシールドで受け止める。
（オラは…負けない…！　皆との絆が…皆の想いが…、
オラの力になってる…。だから…オラは負けない…負けたりしない！）

グラビティ・ザギに押されそうになるも、
決して諦めず、グラビティ・ザギをサークルシールドで受け止め続けるウルトラマンの脳裏に、
自分が今まで、そしてこの1年で出会った数多くの人々が思い浮かんでいく。

両者の戦いが続く中、人々が集まってきて、ウルトラマンを見守り、言葉を送った。

「ウルトラマン…！」

「…ウルトラマン。」

「ウルトラ…マン？」

「ウルトラマン！」

「ウルトラマン。」

そして少年が駆け出して叫ぶ。
「頑張れぇーーー！！！」
その声を聞いたウルトラマンは、グラビティ・ザギを弾き返した。
その時、ウルトラマンのエナジーコアが激しく光り輝き、コアファイナルが発動。
全身から眩い光が解き放たれ、それと同時にウルトラマンを応援する人々から、
しんのすけと絆を結んだ人々から光が溢れ出てきた。

「光…？」
ひろしやみさえ、ひまわり、シロ、マサオ、ネネ、ボー、和倉隊長や西条、明日香、ななこ。
その場にいる者達だけでなく、フォートレスフリーダムにいるゼロや松永管理官、
世界各地にいるお色気、筋肉、ルル、スンノケシ王子、温泉Gメンのメンバー、ジャッキー、
さらに時空、次元を超えて、リング・スノー・ストームやメモリミモリ姫、マタ・タミ、
その他大勢の希望を持った、しんのすけと絆を結んだ人々から光が溢れ出てくる。
蘇ったウルトラマンと人々との絆、しんのすけと人々との絆によって、
人々の希望という名の、絆という名の光が次々にウルトラマンへと集まっていく。
「バカな…！　こんなことが…！？」
事態に驚くザギを見てしんのすけが叫ぶ。
「これがオラ達の絆…オラ達の光だゾ！！！」
そして、ウルトラマンは眩い光と共に、翼を有する、
全身銀色の、胸に深紅のエナジーコアが輝く、白銀の巨人にその姿を変えた。
「あれは…。」
翼を有する白銀の巨人を見つめる人々。希望の翼、ノアイージスを背に、
ウルトラマンの究極最終形態（ウルティメイト・ファイナル・スタイル）であり、
その真の姿である・ウルトラマンノアが全世界にその姿を現した。
ノアを目の当たりにしたザギはしばらく何が起こったか理解できなかったが、
やがて事態を理解するとあらん限りの声を発してノアを睨みつけた。
絆を信じ続け、決して最後まで諦めなかった者と

絆と信頼を裏切って都合の良いように利用した者、両者の戦いが始まった。

ザギはノアに向かって駆け出すが、
ノアはそれを受け止めると、逆にザギを蹴り飛ばした。
蹴り飛ばされたザギにノアは悠然と近づいていく。
荒々しいザギの攻撃を悠然と受け止めたノアは光を込めた攻撃を繰り出し、
続いてザギに接触して、両手から放つ超光刃・ノアスパークを放った。
そして、ノアは右拳にエネルギーを溜め込み、
拳から超高熱の火炎・ノアインフェルノをザギに打ち込んだ。
ノアインフェルノを受けて、ザギは遥か上空に飛ばされ、
雲を突き抜け、大気圏を越え、遂には宇宙空間まで追いやられてしまった。
ここまで来てようやくノアインフェルノを掻き消し、
体勢を立て直して止まれたザギはノアのいる地球を睨み付けた。
そして、ザギは地球目掛けて超絶必殺光線・ライトニング・ザギを放ち、
それを察知したノアも超絶必殺光線・ライトニング・ノアを放った。
ぶつかる両光線。ライトニング・ノアがライトニング・ザギに押されそうになるが、
ノアはさらに全身に力を込め、
遂に人々との絆の力によって威力が増したライトニング・ノアがライトニング・ザギを押し返した。
「!?　うわあああああぁぁぁぁぁぁ!!!」
ザギはライトニング・ザギを押し返したライトニング・ノアの大爆発の中に消えていった。
ノアのいる地上に差す光。
『私…信じてた。しん様なら、きっと守り抜いてくれるって…。』

ノア、しんのすけの脳裏に浮かぶあいの言葉。
宇宙空間で大爆発が起こり、ザギは宇宙の塵と化した。
「しんのすけ…。」
ひろし達はウルトラマンとしての戦いを終えたしんのすけを見つめる。
そして、他の人々も目の前にいる世界を救った銀色の巨人を見つめた。
その瞳には銀色の巨人から授かった勇気と希望が宿っていた…。

エピローグ

1年後…。
レーテの崩壊によってビースト、ＴＬＴの存在は全世界に知られる事となった。
超法規的権限を持ち、人々の記憶処理まで行っていたＴＬＴの実態に批判が集まったものの、
人々はウルトラマンを希望の象徴として恐怖と向き合い、
ビーストの脅威を乗り越えることを選択したため、記憶処理の必要はなくなり、
遂にはそのことによってビースト因子そのものが消滅。
平和が戻り、それを受けてＴＬＴは解散し、それぞれが元の場所へと帰っていった。

内閣情報調査室。
ＴＬＴ－Ｊの管理官では無くなった松永は書類整理に追われていた。
「全く…、ＴＬＴ－Ｊにいた頃は書類に追われる日々などなかったというのに…。
これも適能者（デュナミスト）の人体実験をした報いですか…。」
愚痴を言いながら松永次長補佐は書類整理をするが、
その時、松永次長補佐の携帯電話に着信が入る。
「もしもし…、直人か。あぁ、覚えてるよ。今日が母さんの誕生日だってこと。
うん。大丈夫。なるべく早めに戻る。１年前の約束を果たしに行こう。」
そう答える松永次長補佐の机には家族の写真が、
自分と妻と息子が笑顔で写っている写真が誇らしげに置いてあった。
ある晴れた清々しい日。真木は家族を連れて釣りに来ていた。

ふと、真木が空を見上げると、青い空の中を銀色の流星が進んでいた。
「銀色の流星…。」

「根来さん！　この記事大評判だよ！」
東都日報新聞社。
根来がデスクに座っている編集長に褒められていた。
「いやぁ、それほどでもってね。あ、あと忘れないでくださいよ。俺がウルトラマンとビーストの写真を初めて新聞に載せた男だって。」
「分かってるよ。」
編集長の言葉に根来は笑みを浮かべた。

「清和！」
ある病院。意識を取り戻した恋人・清和にななこが抱きつく。
「お、おい…。一体、どうしたんだ？」
清和は不思議そうな顔をして呟くがななこは目に涙を浮かべて呟いた。
「良かった…本当に…。」
そんななこを清和は優しく受け止め、
そんな2人を部屋の外から涙ながらにななこの父・大原四十郎が見守っていた。

青い海が広がる砂浜にしんのすけと同じ青いマウンテンバイクに乗って、
一人の少年がやって来た。
自転車から降りて砂浜を歩き、足に海の感触を感じる。
足下の貝殻を拾い、目の前に広がる海を見てその少年は思いっきり伸びをした。
「トオル。」

後ろから聞こえてきた声に少年、風間が振り返ると、
恵が風間の貝殻と自分の鳥のアクセサリーを持ってやって来た。
「やっと叶えられたね…。2人で海に行くってこと…。」
そんな恵を見て風間が笑顔で答える。
「うん…。」
共に海を見つめる2人。広がる青い地図に自分達だけの未来を今、
2人は描き始めようとしていた。

航空自衛隊、百里基地。
和倉隊長が今度は教官として、部下を鍛えていた。
「さて、今日は戦闘機の操縦訓練だ!
お前達は特に成績が悪いからな。今日はその根性を叩きなおしてやる!」
和倉教官の言葉にその場にいる部下全員の顔が青ざめた。

平木隊員は再び婦人警官としての日々を送っていた。
「なぁ、詩織。お前なんであんなに射撃の腕があるんだ?」
再び同僚となった汚田が聞いてくる。
「あったり前でしょ! ナイトレイダーで射撃の腕が一番高かったんだから。
男のハートも撃ち抜くって言われてたのよ!」
詩織の言葉に汚田は少し笑って答える。
「嘘だな。第一、お前がそんなにモテるわけないし…。」
「ふーん…、とか言いながら私に好きだって告白してたわよね…。」
詩織の指摘に汚田は焦り、詩織はそんな汚田を見て笑顔になった。

西条は自分自身を見つめ直すかのように世界各地を巡る旅をしていた。
カナダの大地を踏みしめ、風になびく髪を押さえて、
西条が自分の心に光を与えてくれたかつての仲間に思いを馳せる。

「しんのすけ君…。」

そのしんのすけはあいやマサオ達と過ごした、
春日部森林公園でベンチに座って昨年の出来事を振り返っていた。
『オラ達は生きている…。もし昨日までの平和を失って、恐ろしい現実に直面しても…。』
しんのすけの頭にビーストの脅威が思い浮かぶ。
『大切なものをなくして、心引き裂かれても…。』
頭にあいのことが思い出される。
『思いもよらない悪意に立ちすくんだとしても…。』
頭に浮かぶ、溝呂木、ビースト、石堀隊員のこと。
『オラ達は生きる！　何度傷付いても、何度も立ち上がって、オラ達は生きる…。』
絶望の淵から立ち上がり、自分を想ってくれている人達の大切さに気づいた自分。
そして、生きる希望を見出した風間のことが頭に思い浮かぶ。
『オラ達は独りじゃないから…。誰だって…独りじゃないから…。』
野原家の皆、風間達、共に戦ったナイトレイダーのメンバーが頭に思い浮かび、
１年前の経験を経て、一歩大人へと成長したしんのすけはベンチから立ち上がると、
無限の明日へと続いている青い空の下、自らの道を歩いていった…。

ＥＮＤ.

あとがき

「クレヨンしんちゃん　絆ーＮＥＸＵＳ－」遂に完結しました。
「クレしん」と「ネクサス」という全くベクトルの違う作品同士をクロスオーバーさせた
この小説はこれで終了という形になりますが、どうでしたか？
両作品に“人と人との「絆」を描いているという共通の要素がある”ことを見出してから、
本気でこの小説を書こうと思うようになり、何度も加筆修正を経て、高１（２０１０年）の春休みにラストまで書き終え、その後も修正を行いながら、
処女作として、今年（２０１１年）の１月にこのサイトに投稿しました。

この小説を書くにあたって、“ナイトレイダーの別ユニットの存在”や“ルシフェルの登場”、
“来訪者とザギの関係”など、放映短縮の影響により、
「ネクサス」の本編で描かれずに終わった設定を独自に補完することを考え、
同時に“主人公がウルトラマンに変身するという状態で「絆」を描く”ことや、
“真木の登場”、“ウルトラマンもビーストもナイトレイダーも登場しない話”や、
“永遠の命と限りある命の話”など自分が描きたい要素も盛り込んで、
なるべく“それぞれの作品の世界観やキャラの性格”を崩壊させないように描きました。
その結果「クレしん」ファンと「ネクサス」ファン、
両方のファンに喜んでもらえるものとなっていたなら、

どちらか片方の作品を知らない人が「観てみようかな」と思うきっかけになったなら、
この作品の作者として嬉しい限りです。

次回作については構想だけで現在全く手をつけていませんが、
いつか、俺がその構想を形にした時、再びそこで会いましょう。

そして最後に読んでくれた全ての読者に対しての感謝を込めて…。

ご愛読ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8630p/

クレヨンしんちゃん　絆－NEXUS－

2011年10月8日14時08分発行